一寸の間ロマショーフは非常に判然した確かな意識に返つた。今彼は幾人かの女が誰にでもかまはず自分の身體と愛嬌と自分の戀の大きな祕密とを任せる所へ行くのだ。金のために？　一寸の間？　いや、どうせ同じことぢやないか！　あゝ女よ！　女よ！　とロマショーフの心の中で或る甘い、猛烈な、抑へ難い聲が叫んだ。そしてその叫び聲の中にはシューロチカについての思ひが、ちやうど遠く隔つて、聞えるか聞えないくらゐの音のやうに、微かに入り交つてゐた。が、この混合には、少しも卑しい侮辱されたやうな感じはなかつた。却つて心を慰め、波立せるやうな、或る期待されたものがあつて、それがために心が靜かに快く搖られるやうな氣持がした。

今彼は娼妓といふまだ一度も見たこともなく遇つたこともない、妙に不思議な、人を迷はすやうなものの所へ行くのだ！　そして祕密な空想が俄に現實となつて、彼は娼妓を見たり、その手を取つたり、その優しい笑ひと歌とを聽いたりすることが出來る。そしてそれがこの世に、たつた一人の女シューロチカを熱烈に渴望してゐるロマショーフにとつては、不思議な喜ばしい慰藉となるであらう！　然し彼の頭にはかうと定つた肉慾的の目的はなかつた。唯一人の女に素氣なく退けられた反動で、彼はこの明けつぴろげた露き出しの單調な戀の世界へ惹き付けられたのだ。恰も冷たい夜に疲れた、凍えた渡り鳥が、燈臺の光に惹き付けられるやうに。たゞそれだけのことであつた。

馬は右へ振向いた。彈機の軋り、車輪の音が俄かにぱつたり止んだ。馬車は轍と凹みの上で強く輕く搖ぎながら急に小山の下に降つた。ロマショーフは眼を開けた。彼の足下のずつと低い底の方に、小さな火影が幾つとなく廣く不秩序に散ばつてゐた。火影は樹木や闇に沒した家の蔭に隱れたり、又現れたりした。それがちやうど提灯を持つた、とある幻の行列か、又はばら〳〵になつた大きな群が、彼處の谷に沿うて彷徨うてゐるやうに見えた。一寸の間苦悩の香が何處からともなく暖かく匂つて來た。大きな黑い樹枝が頭上にさら〳〵と鳴つた。そしてちやうど古い穴倉の中の空氣のやうな濕つぽい冷氣を吹き送つた。

「我々はどこへ行くのです？」とロマショーフは又訊ねた。

「ザワリエへ行くのさ！」と、すぐ前に坐つてゐた男が叫んだ。で、ロマショーフは驚いて、『おや、これはエピファーノフ中尉ぢやないか。』と考へた。「我々はシュレイフエルシヤへ行つてるんだ。君は一度も行つたことがないのか？」

「どこへでもお出でなさい！」とロマショーフは叫んだ。

が、エピファーノフ中尉は笑ひながら言つた。

「どうだ、ロマショーフ君、君さへよかつたら、君は生れて始めての經驗だと言つてやらう？　彼女等はそれが好きなんだよ。どうだ、さうしたつて構はんぢやないか。」

またロマショーフの意識は深い見透されない眞の暗に蔽はれた。ふと彼は自分が四壁に沿うてウィン式の椅子のある、嵌床の附いた、大きな廣間の中にゐるのに氣が付いた。入口の戸と、薄暗い部屋々々へ通つてゐる他の三つの戸の上には黃色い花束で取卷かれた赤い長い刺繍のカーテンが掛つてゐた。屋外の黑い闇に開け放たれた窓の上にも、やはり同じやうなカーテンがそよ〳〵と風に吹かれて搖れてゐた。あたりの壁にはラムプが點つて、室の中は明るく、煙かつた。猶太風の厨房の臭ひが鋭く鼻を衝いた。が、時時窓から濕つた綠葉と、白いアカシヤと、春の空氣の爽かな香りが傳つて來た。

將校達は約十人も來た。皆が同時に歌つたり、叫んだり、笑つたりしてゐるやうに思はれた。ロマショーフは嬉しげに無邪氣に笑ひながら、まるでみんなに初めて出會つたかのやうに吃驚して、ベーク・アガマーロフ、ルボーフ、ウェーツキン、エピファーノフ、アルチャコーフスキイ、オリザール等、これらの人々を一人々々見別けながら、彼は面白さうに歩き廻つた。二等大尉レシチェンコも來てゐた。彼はいつものやうに穩かな悲しげな表情をして窓の傍に坐つてゐた。食卓の上には——一體今晚は何もかもさうであつたが——ひとりでに降つて來るやうに麥酒壜や櫻んぼうを浸けた濃い酒の壜が、次から次と出た。ロマショーフは誰かと飮んだり、酒杯をかち合せたり、接吻したりした。そして手や唇がねば〳〵して甘つたるくなつたやうに感じた。

そこには五六人の女がゐた。その中の見たところ十四ぐらゐの年恰好で足に薔薇色の毛布をまき付けて、帶をした娘が、ベーク・アガマーロフの膝に坐つてその肩章の總を弄つてゐた。もう一人の大きなブロンドの赤い絹織の表衣に黑い袴を着けた、顏の太い、美しい厚化粧をした、眉の濃く、太く、圓い女が、ロマショーフにつか〳〵と近づいた。

「もしあなた、どうしてそんなにお退屈さうなの？　部屋へ參りませうか。」と彼女は小聲で言つた。

彼女は卓子の上に橫向きに足を組み合せて、だらしなく坐つてゐた。ロマショーフは彼女のまんまるく太つた强さうな腿が着物の下に滑々と落着いてゐるのを見た。彼は手がぶる〳〵震へて、口が冷たくなつた。そして悸々しながら訊ねた。

「お前は何んといふの？」

「あたし？　メリウィナつていふのよ。」と彼女は、平氣に少

尉から顔を背向けて足を動かした。「煙草を一本頂戴な！」

どこからか二人の猶太人の音樂師が出て來た。一人はヴヰオリンを、一人は鈴を持つてゐた。退屈なわざとらしいボルカの調子と、それに伴れて低い震へるやうな鳴物の音がすると、オリザール中尉とアルチャコーフスキイ中尉とが、カンカン（カッポレの類）を踊り出した。二人は互に向き合つて差出した手を打合せながら、片足づゝで交る〳〵飛び跳ねた。そして屈めた膝を延して親指を腋下へ嵌めて後退りをしたり胴體を不様に前後に屈めたりしながら臀を振り振り無遠慮に猥らな身振りをした。と、出し抜けにベーク・アガマーロフ中尉は椅子から飛び出した。そして鋭い甲高な發作的な大聲で呶鳴り出した。

「掠鳥なんか出て失せろ！　今直に出て失せろ！　畜生！」

入口には二人の文官が立つてゐた。二人は集會所の夜會に來たことがあるので、聯隊中の總ての將校は彼等を知つてゐた。一人は會計局の官吏で、もう一人は裁判所の看守の兄弟で小地主であつた。二人とも非常に律儀な青年である。

官吏の顔には蒼ざめたわざとらしい微笑が浮んでゐた。彼は願ふやうな調子で、しかし強ひて打解けたやうに粧びながら言つた。

「どうぞ皆さん……お仲間に入れてくれませんか、皆さんは私を御存じでせう……私はドゥーベッキイです……私達は決して皆さんのお邪魔は致しませんから。」

「身體は窮屈でも心は廣いといふことがあるぢやありませんか。」看守の兄弟はかう言つてわざとらしく笑つた。

「出て失せろ！」と、ベーク・アガマーロフ中尉は叫んだ。

「前へ進め！」

「諸君、掠鳥共を追ひ出しちまへ！」と、アルチャコーフスキイ中尉は笑ひ出した。

混雜が始まつた。室の中のものが何もかも圓い環のやうになつてぐる〳〵と廻つたり、唸つたり、げら〳〵笑ひ出したり、ばた〳〵踏鳴らしたりした。ランプの火の舌が燻りながら跳ね上つた。冷たい夜の空氣が窓からさつと入り込んで、人々の顔にそよ〳〵吹いた。文官達はもう屋外へ出て、訴へるやうな涙ぐんだ大聲で叫んだが、その聲には力ない毒々しい恐怖が響いてゐた。

「我々はこのことをこのまゝにしてはおきません！　聯隊長に訴へます。縣知事に上申します！」

「ラ、ラ、ラ、ラ！　この野郎共！」とウェーツキン中尉が窓から首を出して、細い假聲で叫んだ。

ロマショーフには今夜の出來事が何もかも皆斷目もなければ何んの連絡もなく、それからそれと引續いて起つてゐるやうに思はれた。ちやうど醜い下らない惡夢のやうな繪を描いたがさつな斑なリボンが彼の前で渦巻いてゐるかのやうであつた。またもヴヰオリンが單調に鳴り出して、鈴ががちや〳〵と震へた。誰か軍服を脫いで白襯衣一枚になつて、部屋の眞ん中で絶えずよろ〳〵と後へ倒れては手を床に衝きながら、蹲み踊りをした。痩せぎすな美しい女で——今までロマショーフはその女に氣が附かなかつた——黑髪を振亂して、露はな頸に鎖骨の突き出たのが、露はな腕で陰氣なレシチェンコ二等大尉の首を抱いた。そして音樂と話聲とを歌ひ消さうとして、彼の耳のすぐ傍で泣き喚くやうに歌つた。

「永久に肺を患ひて、
この壁のごとく蒼白き君は死せり。
身は醫師に圍まれて。』

ボベチンスキイ中尉はコップの中のビールを壁越しにとある離れた暗い部屋の中へ振りかけた。と、そこから怒つたやうな低い寐ぼけ聲が、ぶつ〳〵呟いた。

「おい、諸君……止め給へ。誰だ、そこにゐるのは？　何んといふ卑しい惡戲をするんだ！」

「お前はずつと以前からこゝにゐるのか？」とロマショーフは赤い表衣を着た女に訊ねた。そして自分では氣付かないかのやうにそうつと掌を彼女の丈夫な暖かい足に載せた。

彼女は彼に何とか答へたが、荒々しい騷ぎが彼の心を惹いたので聞き取れなかつた。ルボーフ見習士官が一人の音樂師を部屋中逐ひ廻して、どう〳〵彼の持つてゐた鈴で頭をいやといふ程擲り付けた。猶太人は早口で解らぬことを叫んだ。そして後の方を恐る〳〵見廻しながら、フロックコートの長い裾を摑み上げて、彼方此方とよろめいた。みんなどつと笑つた。アルチャコースキイ中尉は床の上へ笑ひ倒れて、眼に涙を浮べながら、彼方此方へ卓子を搖かした。やがて、もう一人の音樂師の劈くやうな喚きが聞えた。誰か彼の手からヴヰオリンを奪ひ取つて、恐ろしい力で、それを床へ叩き付けた。ヴヰオリンの臺はがたんといふ音がして粉微塵に碎けた。その音が猶太人の絶望的な叫喚と入り交つて聞えた。やがてロマショーフは數分間我を忘れて、ぼうつとなつた。と、不意に彼は熱にうなされた夢でも見てゐるやうに、部屋中の人が一齊に叫びながら駈け出して、手を振つてゐるのを見た。ベーク・アガマーロフのまはりには早くも人々がみつしりと詰め込んだ。けれども忽ち彼等はばつと散り擴がつて部屋中を駈け廻つた。

「皆こゝから出て失せろ！　誰も嫌ひだ！」とベーク・アガマーロフは物狂ほしく叫んだ。彼は齒ぎしりをして自分の

前で拳を振廻しながら地團駄を踏んだ。彼の顔は紫色になつて額には鼻梁で一緒になつてゐる二本の筋が紐のやうに膨らみ、頭は低く威嚇するやうに下がつて、くる〳〵廻つてゐる眼の中には露出した眞圓い白眼が恐ろしく輝いてゐた。彼は丁度人間の言葉を忘れてしまつたかのやうであつた。そして猛り狂つた獸のやうに恐ろしい顏へ聲で吼えた。

「アーアーアー！」

ふと彼は例の早業で吃驚するほど巧みに體を左に振つて鞘から劍を引拔いた。劍はさつと音がして、彼の頭上にきら〳〵と閃いた。

部屋中の人は慌てゝ窓や戸口に駈出した。女達はヒステリカルな叫び聲を出した。男子共はお互に打突り合つた。ロマショーフも無理に戸口の方へ引張り出された。誰か彼にびつたり寄り添つて肩章の端か釦で彼の頰を血の出るほどひどく摺剝いた。と、忽ち屋外では物に驚いたやうな慌だしい聲が互に奪ひ合つてゐるやうに喚き出した。ロマショーフは一人で戸口に殘つてゐた。彼の心臟の鼓動は強く、そして速かつたが、しかし彼は恐怖と同時に一種の甘い、物狂ほしい、愉快な豫感を味はつた。

「斬つちまふぞ！」とペーク・アガマーロフは、ぎり〳〵と齒を鳴らした。彼はみんなが恐怖に囚はれてゐる樣を見てすつかり醉うて了つた。彼は發作的の力で幾度か卓を擊ち倒つた。それから腹立しく劍で鏡を敲いた。と鏡の破片がぎら〳〵と虹の雨の樣に四方に飛散した。一つの食卓の上に載つてゐた壜やコップを彼は一擊の下に敲き落して了つた。

と、忽ち誰かの劈くやうな不自然な亂暴な叫び聲が響き渡つた。

「馬鹿野郎！　破廉恥漢！」

それは今レシチェンコ二等大尉を露はな腕で抱いたばかりの髮飾のない女が叫んだのであつた。ロマショーフは今までその女を見なかつた。彼女は煖爐の向うの壁龕に立つて、拳を脇腹に支へながら、全身を前に屈めて間斷なしに市場の惡たれ女商人のやうな叫び聲で呶鳴つた。

「馬鹿！　破廉恥漢！　誰がお前のやうなものを怖がるものか！　馬鹿々々、馬鹿、大馬鹿！……」

ペーク・アガマーロフは眉を顰めて、さも狼狽へたやうに劍を下した。ロマショーフは彼の顏が刻々に蒼ざめて、眼の中に薄氣味惡い黃色い輝きが燃えてゐるのを見た。それと同時に彼は兩足をだん〳〵低く〳〵屈めて、ちやうど跳躍しようとしてゐる獸のやうに、まるで蹲んでしまつて首を肩の間に引込めた。

「默れッ！」と彼は嗄れ聲で、吐き出すやうに呶鳴つた。

「馬鹿！　木偶アルメニヤ人！　默るものか！　馬鹿！　大馬鹿！」と女は一語々々、全身を慄はせて叫んだ。

ロマショーフは自分までが刻々に蒼ざめてくるやうに感じた。彼の頭の中には例の無限大と虛無と自由の感じが湧いて來た。恐怖と愉快と妙に入り混つたやうな感じが彼の心をちやうど輕い浮いた泡のやうに持上げるやうな氣がした。彼はペーク・アガマーロフが女から眼を放さずに徐かに劍を頭の上へあげてゐるのを見た。と、不意に無智な歡喜と恐怖と冷寒と笑ひと大膽との燃え立つやうな流れがロマショーフを襲うた。彼は前方に駈出しながら、まだペーク・アガマーロフが何か猛々しく唸つてゐるのを聞いた。

「中尉殿、お默んなさい。默らなけりや終ひにはあなたを……」

ロマショーフは自分ながら期待しなかつたほどの強い力を出してペーク・アガマーロフの手首をしつかり抑へた。二人は一尺ほど離れてお互に數秒の間顏を見合せてゐた。ロマショーフは馬のやうに度々鼻を鳴らしてゐるペーク・アガマーロフの息づかひを聞いた。そして彼の恐ろしい白眼とぎら〳〵光つてゐる瞳とぎり〳〵齒ぎしりして動いてゐる白い顎とを見たが、然しもうその醜い顏には無智な火のやうな表情が刻々に消えてゆくのを感じた。で、ロマショーフはかうして自分が生と死との瀨戸際に立つてゐるといふこと、また自分がこの戲れで勝利を占めるだらうと自覺することが何んだか切ないやうでもあり、又何んとも名狀し難いほど嬉しいやうでもあつた。大方外からこの光景を見てゐた人達はその危險なことを解してゐたに違ひない。窓外の庭はひつそりと靜まり返つた——どこか二步ばかり離れた闇の中で鶯が不意に大きな氣樂な顏へ聲で囀るのが聞えた。それほど靜かであつた。

「放せ！」とペーク・アガマーロフは、壓し出すやうな嗄れ聲で言つた。

「ペーク中尉殿女を斬るのはお止しなさい」とロマショーフは落着いて言つた。「一生の恥になります。お止しなさい。」

ペーク・アガマーロフの眼には、狂暴の最後の火花が消えた。ロマショーフは、ぱち〳〵と眼をしばたゝいて、ちやうど氣絕した後のやうに深い溜息を吐いた。彼の動悸は吃驚した時のやうに、ぞく〳〵と不規則に速くなつて、頭はまた重くぼうつと熱して來た。

「放せ！」とペーク・アガマーロフはまた忌々しさうに叫んで、手を振り捩つた。もうロマショーフは、彼に抵抗するだけの力がないといふことを感じた。けれども、ロマショーフは恐れなかつた。そして殆ど友の肩に感じるか感じないか

くらゐに觸れながら、憐れつぽく愛嬌よく言つた。

「お赦し下さい……ですけれど、あなたは後で私に感謝なさるでせう。」

ベーク・アガマーロフは、がちやりと鋭く劍を鞘の中へ納めた。

「よし！　畜生」と、彼は怒つた樣に叫んだが、それはもう態とらしい。そは〳〵しに調子であつた。「僕は何れ後で君と極りを付けるが君は何も權利がないぢやないか！……」

この光景を外から見てゐた人達は最早恐ろしい瞬間が過ぎ去つたと分つたので、さもわざとらしく緊張したやうな笑ひ聲を揚げながら群をなして戸の中へ入り込んで來た。今は彼等は皆懷しい親しさうな打解けた調子で、ベーク・アガマーロフを宥めたり賺したりした、が、彼はもう消えたやうに力拔けがして、急に曇つたその顏は、疲れたやうな不快な表情をしてゐた。

胸の脂切つた、睫毛のない、薄黑い緣をした眼に素氣ない表情を浮べた肥つちよの女將シュレイフエルシヤが駈け込んで來た。彼女は將校を一人々々捉まへて、彼等の袖や釦を弄りながら泣き聲で叫んだ。

「さア、鏡や卓子やお酒や娼妓の代を誰方が拂つて下さいますの？」

誰か知らない男が彼女と談判に殘つた。他の將校は群をなして外へ出てしまつた。五月の夜の淸々しい軟かな空氣は輕く快くロマショーフの胸に入つて、彼の身體中を爽かな喜ばしい戰慄で充した。彼には今日の醉の跡が、ちやうど濕つぽい唇の接觸のあとのやうに、すぐに彼の頭の中で拭き去られたやうな氣がした。

彼の所へベーク・アガマーロフが來て、彼の手を取つた。

「ロマショーフ君、僕と一緒に乘り給へ」と彼は勸めた、「いいかね？」

で、彼等が並んで坐つた時、ロマショーフは右の方へ身體を屈めて、馬が不揃ひな早足で馬車を山の上へ引上げるのを見てゐた。ベーク・アガマーロフは手探りで彼の手を見付けて、痛い程しつかと長いこと握つてゐた。その他には何にも二人の間には言ひ交されなかつた。

十九

が、今人々の經驗したばかりの不安は、みんなの神經的な不秩序な緊張した狀態に現れてゐた。集會所への道すがら將校達はいろんな不作法をした。通りすがりの猶太人を呼び止めて、その帽子を無理に奪つて、馭者を急がせて馬車を駈けさせながら、やがてその帽子をどこか塀の中の木の

上へ放り投げたりした。オリザール中尉は馬車が駈けてゐる時踏臺に立つて田舍の風として街道の眞中を歩いて來る通行人に引掛けようと狙ひながら、鋪道の上に小便をした。ボベチンスキイ中尉は馭者を毆り、他の人々は大聲で歌つたり、無茶苦茶に叫んだりした。唯ベーク・アガマーロフ中尉だけはロマショーフと並んで坐つてゐたが、腹立たしさうに、そして控へ目に鼻息をしながら道中默つてゐた。集會所は遲いのにも拘らず明るく輝いてゐて、人が一ぱい詰め込んでゐた。骨牌室にも、食堂にも、球戲室にも、酒や煙草や骨牌遊びやで馬鹿になつた人達が服の釦をはづしたまま、ぢつとした澁いやうな眼付をして、のろ〳〵した身ごなしでよろ〳〵とぶつ突り合つてゐた。ロマショーフは五六人の將校と挨拶を交しながら、ふとその中にニコラーエッ中尉が居るのを見て吃驚した。彼はオサッチイ大尉の傍に坐つて、酒に醉つて眞赤になつてゐたが、しかし氣は確かであつた。ロマショーフが食卓を廻つて彼に近づいた時、ニコラーエフ中尉は素早くちらと彼を見て手を出すまいとして急に顏を背向けて、隣の男とわざと面白さうに話し掛けた。

「ウェーッキン君、歌ひに行かう！」とオサッチイ大尉が友達の頭越しに叫んだ。

「なーにーかーうーたーはん」とウェーッキン中尉が教會の讃美歌の對詠の調子で歌ひ出した。

「なーにーかーうーたーはんー、なにかうーたーはん――」と後の人々が大聲で續けた。

「司祭の讀經の後で三人が一緒に歌ひ出すのだぞ。」ウェーッキン中尉はかう言つて教會風の早口で繰返した。「司祭、輔祭、堂役者、縣書記、いそげよ、ニチボレ、いそげよ。」『いそげよ、ニチボレ、いそーげーよ。』とコーラスが靜かに調子を合せて答へた。そのコーラスはオサッチイ大尉の柔かい低音で抑へられ、溫められてゐた。

ウェーッキン中尉は食卓の眞中に立つて、歌つてゐる人々の上に兩手を擴げながら、歌を指揮した。彼は時として惱い、時として愛嬌のある褒めるやうな眼付をして、下手な歌手を叱つたり、また差延ばした掌をやつと分るくらゐに動かしては、興に乘つた人達を制したりした。

「レシチェンコ大尉、君は假聲を使つてる！　君の耳には熊でも入つてるのか、默り給へ！」とオサッチイ大尉は叫んだ。「諸君、默り給へ。人が歌つてる時に、があ〳〵騷いぢやいかん。」

『富める百姓は、如何にプンシュを飮むか。』とウェーッキン中尉は朗讀を續けた。煙草の煙が眼をちく〳〵刺した。食卓の上にはねば〳〵した油布を敷いてあつた。ロマショー

フはふと今晩手を洗はなかつたのを思ひ出した。彼は庭を通つて、『將校室』と呼ばれてゐる室へ行つた——そこにはいつでも洗面器があつた。それは、がらんとした、冷たい、窓が一つしかない小ぼけな部屋であつた。壁に沿うて病院式に戸棚で分たれた二つの寢臺があつた。その敷布は一度も取代へたことがなかつた。そしてまたこの室は一度も床を掃除したこともなければ、空氣を通したこともなかつた。そのために部屋の中はいつも着古した襦袢や、長い間染み込んだ煙草の煙や、磨いた靴などの黴びた穢くるしい臭ひがした。この室は遠い離れた屯所から聯隊本部へ來た將校の臨時の居室に充てられてゐた。が、しかし平常は夜會の時に特別に醉つぱらつた將校を一つの寢臺に二人か三人づつ收容してゐた。それでこの室はまた『死人室』とも、『死骸室』とも名づけられてゐた。この名稱のうちには、無意識ではあるが、しかし恐ろしい實生活の諷刺が含まれてゐるのだ。なぜならこの町に聯隊が置かれてから、この將校室の二つの寢臺の上でもう數人の將校と一人の從卒が自殺したからである。しかしこの某聯隊では、將校のうちの誰かゞ自殺しない年はなかつた。

ロマショーフが死人室へ入つた時、窓際の寢臺の上の枕の傍に二人の男が坐つてゐた。

彼等は火もない眞闇がりに坐つてゐた。で、ロマショーフは聞えるか聞えない位の彼等の話聲で人の居るのに氣がついた。そしてずつと傍へ近寄つて彼等の上にのしかゝるやうにして、やつと、その誰であるかゞ分つた。それは中隊指揮から除かれた酒飲み泥棒のクロット二等大尉と、いつまでも見習士官の位置に甘んじてゐるやうな脊のひよろ長い年取つた禿頭の博徒で、亂暴な口穢い、そしてやはりのんだくれのゾロツーヒン見習士官であつた。二人の間にある卓子の上にはウォーツカの壜が四分の一ほどどんより光つてゐて、その傍に濃い汁の入つた空皿と酒を注いだ二つのコップがあつた。看らしいものは何も見當らなかつた。二人の飲相手は今入つて來た友達から姿を隱さうとしてゐるやうにひつそりと默つてゐた。そしてロマショーフが彼等の上に身を屈めた時、彼等は暗闇の中でにた〳〵薄笑ひをしながらどこか下の方を見てゐた。

「おや、あなた方はそこで何をしてゐるのです？」と、ロマショーフは吃驚したやうに訊ねた。

「シーツ！」と、ゾロツーヒンは警戒するやうな風に、そうつと指を上へあげた。「待ち給へ邪魔をしちやいけません。」

「靜かに！」とクロットが簡單に小聲で言つた。

ふと、どこか遠くの方で、がら〳〵と馬車の音が聞え出した。「いや、ちよつとお待ちなさい。どこへ行くのです。先刻あなたはお歷々と飲んでゐたぢやありませんか。いや、そんな嘘を言ふもんぢやありません！　大尉殿捕まへて下さい。私が戸を閉めますから。」

二人は寢臺から飛び上つて狂人のやうな狡猾い笑聲を立てゝロマショーフを捕まへようとした。そしてこの薄暗い臭い部屋も、この火の氣もない夜中の神祕な幻想的な酒宴も、この氣の狂つた二人の人も皆一緒になつて不意にロマショーフに死と狂氣との堪へ難い恐怖を起させた。で、彼は脊くやうな叫び聲と共にゾロツーヒンを遠く脇の方へ突き飛した。そして全身を慄はせ乍ら『死人室』から飛び出した。

心では家へ歸らなければならないと思つてはゐたが、しかし或る不可解な、變な、不快な內部の衝動に驅られて、彼は食堂へ歸つて來た。食堂では多くの人が椅子や窓床に坐りながら眠つてゐた。堪らなく暑かつた。窓は明け放たれてあつたにも拘らず、ランプと蠟燭はぢつと一搖ぎもせず燃えてゐた。草臥れて覺束ない步調をしてゐる小使と給使卒等は立ちながら、こくり〳〵居眠りをして、口を開けずにたゞ鼻腔だけで、絕えず欠伸をしてゐた。が、しかし重苦しい大酒宴はまだ終らなかつた。

ウェーツキン中尉は、今食卓の上へあがつて甲高い感動し

た。すると、二人は遽てゝコップを取つて、それをかち〳〵打合せッこをして、同時に飲み乾した。

「まア、一體それは何事ですか？」と、ロマショーフは驚いて叫んだ。

「いや、これはね、君！」と、クロットがさも意味ありげな小聲で答へた。「これがつまり僕等の着さ。馬事の音で飲むのさ。おい見習士官！」と、彼はゾロツーヒンの方を向いた、「さア今度はどの着で飲まうか？　月の光で飲まうか？」

「もう飲んだぢやありませんか、」とゾロツーヒンは、眞面目腐つて答へ乍ら窓越しに街の上に低く愁はしげに懸つてゐる鎌のやうな細い月を見た。「もう少し待ちませう。今に大方犬でも吠え出すでせう。一寸默つておいでなさい。」

彼等は無知な醉興の暗い惡戲に捕はれて、お互に寄り添ひながら、こんな事を囁き合つてゐたが、その時食堂から恰も遠方の埋葬の歌のやうな讃美歌の響が壁に遮られて、そのために哀調を帶びて聞えて來た。

ロマショーフは手を拍いて頭を抱へた。

「どうぞお願ひですから止して下さい。無氣味ぢやありませんか。」と、彼は悲しさうに言つた。

「どこへでも出て行きなさい！」と、ふいにゾロツーヒンが吼え出した。「いや、これはね、君！」と、クロットがさも意味ありげな小聲で答へた。「これがつまり僕等の着さ。馬事の音で飲むのさ。おい見習士官！」と、彼はゾロツーヒンの方を向いた、「さア今度はどの着で飲まうか？　月の光で飲まうか？」

「もう飲んだぢやありませんか、」とゾロツーヒンは、眞面目腐つて答へ乍ら窓越しに街の上に低く愁はしげに懸つてゐる鎌のやうな細い月を見た。「もう少し待ちませう。今に大方犬でも吠え出すでせう。一寸默つておいでなさい。」

彼等は無知な醉興の暗い惡戲に捕はれて、お互に寄り添ひながら、こんな事を囁き合つてゐたが、その時食堂から恰も遠方の埋葬の歌のやうな讃美歌の響が壁に遮られて、そのために哀調を帶びて聞えて來た。

ロマショーフは手を拍いて頭を抱へた。

「どうぞお願ひですから止して下さい。無氣味ぢやありませんか。」と、彼は悲しさうに言つた。

「どこへでも出て行きなさい！」と、ふいにゾロツーヒンが吼え出した。「いや、ちよつとお待ちなさい。どこへ行くのです。先刻あなたはお歷々と飲んでゐたぢやありませんか。いや、そんな嘘を言ふもんぢやありません！　大尉殿捕まへて下さい。私が戸を閉めますから。」

二人は寢臺から飛び上つて狂人のやうな狡猾い笑聲を立てゝロマショーフを捕まへようとした。そしてこの薄暗い臭い部屋も、この火の氣もない夜中の神祕な幻想的な酒宴も、この氣の狂つた二人の人も皆一緒になつて不意にロマショーフに死と狂氣との堪へ難い恐怖を起させた。で、彼は脊くやうな叫び聲と共にゾロツーヒンを遠く脇の方へ突き飛した。そして全身を慄はせ乍ら『死人室』から飛び出した。

心では家へ歸らなければならないと思つてはゐたが、しかし或る不可解な、變な、不快な內部の衝動に驅られて、彼は食堂へ歸つて來た。食堂では多くの人が椅子や窓床に坐りながら眠つてゐた。堪らなく暑かつた。窓は明け放たれてあつたにも拘らず、ランプと蠟燭はぢつと一搖ぎもせず燃えてゐた。草臥れて覺束ない步調をしてゐる小使と給使卒等は立ちながら、こくり〳〵居眠りをして、口を開けずにたゞ鼻腔だけで、絕えず欠伸をしてゐた。が、しかし重苦しい大酒宴はまだ終らなかつた。

ウェーツキン中尉は、今食卓の上へあがつて甲高い感動し

たやうな中音で歌つてゐた。

『我等が生活の日は
　波のごとく速し……』

聯隊には宗教學校出の將校が多かつた。で、そのために醉ひどれた時でさへ上手に歌つた。單調な悲しい感動させるやうな節が、卑しい歌詞を高尚に聞かせた。そして、窮屈な、物淋しい、盲目的な生活をしながら、古ぼけた室の低い天井の下にゐるのが、誰にもちよつとの間退屈で、狹苦しくなつて來た。

『あはれ死して葬らる、
　この世になかりしごとく……。』

とウェーツキン中尉が元氣よく歌つた。自分自身の高い感激したやうな聲と調和せるコーラスの快感とで、あの人の善ささうな愚かしい眼の中には淚が一杯溢れた。アルチャコーフスキイ中尉は注意深くウェーツキンの歌を繰り返した。彼は自分の聲を顫はせようとして喉節を二本の指で擦つた。オサッチイ大尉は低い重たい調子でコーラスを指揮した。そして凡ての他の聲は丁度暗い波の中を泳いでゐるかのやうに、この低い肉聲の中を漂うた。

この歌を歌つてから暫く休んだ。醉の眩惑のうちにも靜かな物思はしげな瞬間があつた。ふとオサッチイ大尉はどんよりと眼を落して下を見下しながら小聲で呟いた。

『狹く苦しき道をとほーり、生けるうち十字架を軛の如くになーひ……』

「おい、もう澤山だよ、」と誰か退屈さうな調子で言つた。

「まア君等は埋葬の歌なんかに熱中して、もう十度も繰り返してるぢやないか。」

が、他の人々はもう同じ埋葬の歌を續けた。汚ならしい唾を吐き散した、煙草の煙の一杯充ちてゐる食堂の中にはヨハネ上人の作つた埋葬曲の非常に熱烈な非常に感動的な悲哀と、過ぎ行く生活の哀切な思慕とに充された、清い、はつきりした諧音が鳴り響いた。

『信を以て我に從ふものは來り樂しめよ。蓋し汝のために尊貴と天の榮冠とは備へらる……』

と、すぐに助祭よりもよく禮拜式に通じてゐるアルチャコーフスキイ中尉が聯禱を續けた。

『我等心を盡して主に祈らーむ。』

かうして彼等はすつかり埋葬式を終つた。そして最後の聯禱の番になつた時、オサッチイ大尉は俯向いて頸を伸しながら變な恐ろしい悲しげな意地惡い眼付をして、コントラバスの絃のやうに低い轟くやうな聲で節を付けて祈つた。

『主よ汝の眠りし僕ニキホルに生命の幸福なる終りと永遠

の平安とを與へ給へ……』と、オサッチイ大尉は不意に怖ろしい皮肉な嘲笑を交へて祈つた。『而して彼に永遠の福樂を垂れ給へ……』

ロマショーフは飛び上つて物狂ほしく力一杯卓を叩いた。

「許しません！　お默んなさい！」と彼は劈くやうな苦しさうな聲で叫んだ、「どうして笑ふんです？　オサッチイ大尉殿、あなたはちつとも可笑しくないのです。却つてあなたは苦痛で怖ろしいのでせう！　私は知つてゐます。私はあなたが何を心の中で感じてゐなさるかよく知つてゐます！」

ちよつとの間、みんなが沈默してゐるうちに、たゞ一人誰かの聲が疑惑さうに言つた。

「彼奴は醉つてゞもゐるのか？」

と、先刻シュレイフエルシャの妓樓であつたやうに部屋中の者がどよめいて、唸り出して、席を飛び上つた。そして或る斑らな、くる〳〵動いてゐる騷々しい輪のやうになつて渦卷いた。ウェーツキン中尉は、食卓から飛び上りざま頭を吊ランプにぶツつけた。と、ランプは大きな正しい曲線を畫いて搖れた。そして物狂ほしい人々の影が、巨人のやうに高くなつたり、床の下へ消えたりしながら、氣味惡く白壁や天井に縺れつ、蹤きつした。

今集會所でこの放埒な興奮した醉ひどれた不幸な人々の間に起つた出來事は何も彼もみな無茶に速く取返しの付かないやうに行はれるのであつた。恰も或る意地惡い馬鹿げた、愚かな、そして腹立たしげに嘲つてゐる惡魔が、人々を左右して彼等に口汚ない言葉を吐かせたり、不様な不揃ひな行動をさせたりするかのやうであつた。

このむつとした人いきれのうちにふとロマショーフは自分のすぐ傍に口を歪めて叫んでゐる誰かの顏を見た。その顏はすぐには誰と見分けがつかないくらゐ憎さげに歪んで醜かつた。それはニコラーエフ中尉が彼に向つて泡を飛しながら、左の眼の下の頰の筋肉を神經的に痙攣させながら、叫んでゐるのであつた。

「自分こそ聯隊を汚してる癖に愚圖々々言ふな！　貴樣は第二のナザンスキイだ！　間拔けめ！……」

誰かそうつとロマショーフを後へ引張つた。ひよいと振返るとそれがベーク・アガマーロフ中尉だと解つた。が、すぐにまた振返つて、アガマーロフ中尉のことは忘れてしまつた。今に何か起るだらうと思つて、蒼ざめながら彼は苦しさうな憐れつぽい微笑を浮べて靜かに嗄れた聲で言つた。

「ですが、どうしてこゝでナザンスキイを引合に出すのです？　それともあなたには彼を不滿に思ふ特別な祕密な原因でもあるのですか？」

「貴様の醜面を殴り付けてやるぞ！　この卑怯者！　馬鹿野郎！」とニコラーエフ中尉は高い吠えるやうな聲で叫んだ。「この破廉恥漢！」

彼は素早くロマショーフに拳を振上げて威嚇すやうな眼付をしたが、殴らうとはしなかつた。ロマショーフは胸と腹とに悲しい厭な發作的の痲痺を感じた。この時まで彼は右の手に始終何か持つてゐるといふことを忘れて氣が付かなかつたが、ふいに彼はニコラーエフ中尉の顔へ自分のコップの中のビールの飲み殘りを素早くぶつ掛けた。

その時、ふと鈍い痛みと共に白く輝かしい電光がぎらつと彼の左の眼から迸つた。と、思ふまに長く引張るやうな獸のやうな吠え聲を出して、彼はニコラーエフ中尉に飛びかゝつた。そして二人は手足を縺んでどしんとぶつ倒れたまゝ椅子を蹴倒したり汚ない臭い塵を吸つたりしながら床の上を轉げ廻つた。そしてお互に吼えたり息をはずませたりしながら、引掻いたり、掻き挫つたり、絞め付けたりした。ロマショーフは自分の指が偶然に、ニコラーエフの口や頬に當つたことや、そのすべ〳〵した厭な熱い口を引裂かうとしたのを覺えてゐた……そして彼はこの馬鹿げた喧嘩の時に床に頭や肘を打付けても、少しも痛みを感じなかつた。

彼はこのことがどう終つたか知らなかつた。彼は自分がニコラーエフから離れて隅へ壓付けられたまゝ立つてゐるのに氣が付いた。ベーク・アガマーロフ中尉は彼に水を飲ませたが、ロマショーフは齒をコップの端にがち〳〵と痙攣的に當てた。で、彼がコップの端を嚙み碎きはしないかと心配した。彼の服は腋下と背中がびり〳〵に裂けて、捥ぎ離された一つの肩章が一本の絲に着いたまゝ、ばた〳〵飜つてゐた。ロマショーフの聲は涸れてしまつた。で、彼はたゞ唇だけをもぐ〳〵動かして微かに言つた。

「俺は彼奴を……もつと懲しめてやる……彼奴を引張り出せ！……」

今迄卓子の端に心地よく微睡んでゐたリョーフ老人は今すつかり眼が醒めてしまつて、眞面目腐つていつにない荒つぽい命令的な口調で言つた。

「俺は上官として諸君にすぐ散會することを命ずる。いゝかね、諸君！　今すぐだぞ。凡てのことは俺が明朝聯隊長殿に報告する。」

で、皆そは〳〵しながら、壓迫されるやうな氣持で、お互に顔を背向けながら散り〴〵に別れた。皆は他人の眼のうちに自分の恐怖や、自分の奴隷的な後めたいやうな悲みを讀むのを恐れた。それは小さな意地悪い穢ない動物の暗い理智が急に明るい人間らしい意識に照し出された時のやうな恐怖と愁ひとである。

明方であつた。空は明るく、子供のやうに淸々しく、空氣はぢつと靜まつて凉しかつた。見えるか見えないくらゐの水蒸氣に圍まれた濕つた樹々は默々のうちに自分の暗い謎のやうな夜の眠りから覺めた。そしてロマショーフは家へ歸りながら、その樹々や空や露に濡れて白くなつた草などを見た時、醒めかゝつて微笑んでゐるこの朝の純潔な美しさのなかで、自分を卑しい、穢らはしい、醜い、そして限りなく懸け離れた者のやうに感じた。

二十

その日――それは水曜日であつた――ロマショーフは簡單な命令を受取つた。

『某歩兵聯隊將校會議ハ、ロマショーフ少尉ニ對シ六時ニ將校集會所ノ廣間ニ出頭ヲ命ズ。服裝ハ通常禮服トス。

裁判長ミグノフ中佐』

ロマショーフは思はず苦笑ひを禁じ得なかつた。この『通常禮服』――肩章と飾帶との附いた軍服――は將校會議とか刑の宣告とか上官の不快な言渡しの時とかいふ最も異常な場合に限つて着用する服であつた。

六時に彼は集會所に行つた。そして傳令に命じて自分が出頭したことを裁判長へ取次がせた。彼は少し待たせられたので、その間、食堂の開け放つた窓の傍へ坐つて新聞を取つて讀み始めた。が、文句なんかてんで解らずに、何んの興味もなく、たゞ機械的に眼を文字の上に滑らせてゐた。食堂にゐた三人の將校は素氣なく彼と挨拶をして互に彼に聞えないやうに小聲でひそ〳〵話し合つた。唯一人ミーヒン少尉は濕んだ眼をして久しいこと堅く彼の手を握つた。が、何も言はずに顔を赤らめて、慌てゝぞんざいに服を着て出て行つた。

やがてニコラーエフ中尉が廣場を通つて食堂へ入つて來た。彼の顔は蒼ざめて、瞼が黑ずんでゐた。左の頬は絶えずぴく〳〵と痙攣を起してゐた。が、その上の顳顬には大きな腫れた斑點が靑くなつてゐた。ロマショーフは昨日の喧嘩をまざ〳〵と思ひ浮べるのが苦しかつた。そしてぐつと身を屈めて顔を顰めて、ちやうどその恥づべき思ひ出の堪へ難い重みに壓し潰されたやうに感じながら、新聞の蔭に隱れてぢつと眼を閉ぢてしまつた。

彼はニコラーエフ中尉が廣場で一杯のコニヤックを求めたことや、また誰かと別れ際の挨拶をしたのを聞いた。と、やがて自分の傍にニコラーエフ中尉の足音がするのを感じた。遣戸の滑車が軋つて二三秒も經つと、彼は不意に自分

の直ぐ後ろの中庭から用心深い囁き聲を聞いた。

「後を向かずに！　そのまゝぢつと坐つて聽いてゐ給へ。」

ニコラーエフ中尉が言つたのであつた。ロマショーフの持つてゐた新聞がびり〳〵と顫へた。

「僕は勿論君と話しをする權利はない。が、そんなフランス式の優美な眞似なんかどうでもいゝ。出來たことは取返しが付かないのだ。だが然し僕はそれでもまだ君を紳士と思つてゐる。僕は君にお願ひする。どうか聽いてくれ給へ、お願ひだ。妻のことと、匿名の手紙のことに就ては一言も言はないでくれ給へ。君解つたかね？」

ロマショーフは新聞で他の同僚から顏を隱しながら靜かに點頭いた。中庭の砂利が足に踏まれてざく〳〵と鳴つた。五分程過ぎてロマショーフは振返つて戸外を見た。が、ニコラーエフ中尉はもう見えなかつた。

「少尉殿、」と突然、彼の前に、傳令がひよつくり現れた。

「中佐殿がお呼びであります。」

廣間には狹い長い壁に沿うて、數脚の骨牌臺が並べられて、綠色の布の蔽ひがしてあつた。その卓に向つて窓を背にして裁判官達が坐してゐた。そのために彼等の顏は薄暗く見えた。眞中の椅子には裁判長ミグノフ中佐が坐つてゐた。彼はでつぷり肥つた、頸の短い、ふつくりした肩を怒らせた傲慢な男であつた。彼の兩脇にはラファリスキイ中佐とリョーフ中佐が坐つて、右側にはオサッチイ大尉とペテルソン大尉、左側にはヂュウェルヌア大尉と聯隊附主計ドロシェンコ二等大尉が並んでゐた。卓の上には何もなかつた。たゞ裁判書記ドロシェンコの前にだけは紙束が載つてゐた。戸外には暑いきら〳〵した太陽が照つてゐたにも拘らず、この大きながらんとした室の中は涼しく、薄暗かつた。そして古木や黴や古い器具の廢物の香ひがしてゐた。

裁判長は大きな白い太つた兩手を仰向けに卓の上に置いて、それを交る〴〵眺めながら素氣ない調子で言ひ始めた。

「ロマショーフ少尉、聯隊長殿の命によつて召集したこの將校會議は、昨日君とニコラーエフ中尉との間に起つた將校社會に許すまじき悲しむべき衝突の事情を審議しなければならないのだ。で、この事に就いて、君に出來得るだけ詳細に陳述することを望む。」

ロマショーフは兩手を下げて帽子の緣を捲りながら裁判長の前に立つてゐた。彼は學校時代に試驗に落第した時に味つたやうな苦々しい、極りの悪い、がつかりしたやうな心持がした。斷れ〴〵な聲で、しどろもどろの辻褄の合はない文句で、間斷なしにもぐ〳〵言ひながら、馬鹿げた間投詞を附け〳〵陳述した。それと同時に彼は裁判官等を一

人々眺めながら彼等と自分との關係を頭の中で評價した。「ミグノフは冷靜な男だ。まるで石みたやうだ。だが、彼奴は馴れない裁判の頭役や、それに伴ふ恐ろしい權力や責任やを嬉しがつてゐる。ブレーム中佐は憐れみのある、何んだか女のやうな眼付で見てゐる——あゝ懷かしいブレーム中佐！　憶えてゐますか、私はあなたから十ルーブル借りたことがありましたね！　リョーフ老人は眞面目腐つてゐる。彼は今日はしらふだ。彼の眼の下にはちやうど深い創痕のやうに黑い輪が滲み出てゐた。彼は俺の敵ではないが、然し彼自身集會所でいろんな時にいろんな無作法をした。で、今將校の名譽を頑强に熱心に保護するのは彼に取つて有利であらう。が、オサッチイとペテルソン——彼奴等はもうほんたうの敵だ。法律上俺は勿論オサッチイを忌避することが出來る——凡ての爭論は彼奴の埋葬の歌から起つたのだ。だが、しかしどうでもいゝ！　ペテルソンの奴、口の端で微かに笑つてゐるな！　彼奴の微笑には何だか野卑な、下等な、蛇のやうなものがある。彼奴は匿名の手紙のことを知つてるのぢやないかしら？　ヂュウェルヌアは寢惚顏をして、眼は毬のやうに大きくどんよりとしてゐる。ヂュウェルヌアは俺を毛嫌ひしてゐる。それから主計のドロシェンコだつてさうだ。俺は領收證に署名するばかりで、俸給

を受け取つたことはない。貴樣は運が悪いぞ、ロマショーフ君。』

「失敬ですが、ちよつと、」と不意にオサッチイ大尉が彼を遮つた。「中佐殿、私に質問をお許し下さいますか？」

「さアどうぞ、」とミグノフ中佐は鷹揚に點頭いた。

「ロマショーフ少尉！」とオサッチイ大尉は、引延ばすやうな重々しい口調で始めた。「君はあんなみつともない風をして集會所へ來る前にどこに居たのだ。さア之に答へ給へ。」

ロマショーフは眞赤になつた。そして彼は、額に一時に汗が滴る程滲むのを覺えた。

「私はその……私は……えゝ、或る所に居ました。」と言つた後で、彼は殆ど囁くやうな聲で附け足した。「遊廓に行つてゐました。」

「はゝア、君は遊廓に居たのか！」と、オサッチイ大尉が、わざと大きな聲で、荒つぽく判然と言つた。「そして君はそこで何か飲んだのか？」

「えゝ、の、飲みました、」と吃りながら、ロマショーフは答へた。

「さうか、ではもう質問はありません。」とオサッチイ大尉は裁判長の方を振向いた。

「續けて陳述し給へ、」とミグノフ中佐は、ロマショーフに

言つた。「さう、そこで君はニコラーエフ中尉の顏にビールを引掛けたといふ所で中止したが、その後を續け給へ。」

ロマショーフは昨日の出來事に就いて連絡はなかつたが、ありのまゝの事實を詳しく述べた。彼はやがて昨日の自分の行爲を悔いてゐるといふことを極り惡く恥かしさうに言ひ掛けたが、ペテルソン大尉はそれを遮つた。彼は自分の長い死んだやうな指と靑みがゝつた爪のある、節くれ立つた黃色い兩手をちやうど顏でも洗ふ時のやうに擦りながら、努めて叮嚀に、殆ど愛嬌のある程細い媚びるやうな聲で言つた。

「さう、これは勿論みんな君の美しい性質を證明するのだ。だが、何うだ、ロマショーフ少尉……君はこの惡い不幸な悲むべき事件の前にニコラーエフ中尉の家に行つたことはないか?」

ロマショーフは聽耳を立てた。そしてペテルソン大尉を見ずに、裁判長の顏を見ながら、ぶつきらぼうに答へた。

「さうです、參りました。けれども私はこの事がどうして問題になるかを解するに苦しみます。」

「待ち給へ、たゞ質問にだけ答へ給へ、」とペテルソン大尉が彼の話しを折つた。「俺は君とニコラーエフ中尉との間に今日の反目を見るに至つた、特殊な原因が有りはせぬかといふことを訊ねたのだ。つまり法律的性質の原因でなく、家庭的性質の原因はないか、それを訊ねたのだ。」

ロマショーフは眞直に身を延して、露はな憎惡を以てペテルソン大尉のどんよりした肺病やみの樣な眼に見入つた。

「私はニコラーエフ中尉の所には、他の私の知人の所と較べてさう度々うかゞつた譯ではありません、」と、彼は大きな聲できび〳〵と言つた。「そして中尉とはこれ迄何の怨恨もありませんでした。今回の事は凡て偶然に不意に起つた事です。それといふのも私共二人が醉つてゐたからです。」

「へつへつへ、君の醉つてゐたことは聞いたよ、」と再びペテルソン大尉が口を入れた。「だが俺は、たゞ君と彼との間に、前に何か衝突らしいことはなかつたか、それを訊ねたのだ。否、爭論ぢやないよ。俺の言ふことを間違つて取つては困るよ。たゞ個人的の關係で何か誤解とか、無理とかいつたやうなことはなかつたか。まア言はゞ意見の相違とか、それともまた內密事とかいつたやうなことさ、え?」

「裁判長殿、私に提供された或る質問に對して、私は答へなくても宜しうございますか?」と急にロマショーフは訊ねた。

「え、それは宜しい、」とミグノフ中佐は、冷かに答へた。

「君がもし全然それを口供するのを望まないとか、或は筆答でもしたいとかいふなら、それでもよろしい。それは君の自由だ。」

「さうでしたら、ペテルソン大尉の質問に對しては私は一つもお答へ致しません。」とロマショーフは言つた。「その方が大尉のためにも私のためにもいゝだらうと思ひます。」

なほ二三のほんの些細なことを審問して、やがて裁判長は彼に退廷を命じた。然し彼はなほ二回ほど補充口供のために出頭を命ぜられた。一度はその當日の晚で、もう一度は木曜日の朝であつた。實務上のことに就いてはてんで無經驗のロマショーフにさへ、この裁判が不用意に拙劣に執行されて、幾多の過失や不秩序をも顧みないで、極めてぞんざいであつたといふことが分つた。そして最も重大な失態は裁判上の事件を口外することを嚴禁してある軍紀規定第百四十九條の明確な條文の意味に反して、裁判官等が矢鱈に口外したといふことであつた。彼等は會議の結果を自分達の細君に話し、細君達は町の知合ひの婦人達に話し、その婦人達は仕立女や産婆や女中に話すと云ふ風で、噂は口から口に傳はつた。かうして一晝夜のうちにロマショーフは町の話柄となり、噂の主人公になつてしまつた。彼が町を歩くと、窓や耳門や植込や塀の隙間から彼を覗くのであつた。女達は遠くの方で彼を指さした。で、彼は絕えず自分の後ろの方で自分の名を早口に囁くのを聞いた。彼とニコラーエフ中尉との間に決鬪のあるといふことを町中で知らないものは一人もなかつた。はては決鬪の結果に就いて賭をするものさへあつた。

木曜日の朝、彼は集會所へ行く途中、ルイカーチュフの家の傍を歩いてゐると、誰か不意に彼の名を呼んでゐるのを聞いた。

「ロマショーフさん! ロマショーフさん! ちよいと、こゝへいらつしやい!」

彼は立止まつて頭を擧げた。と、カーチャ・ルイカーチェワが塀の向う側の庭の腰掛の上に立つてゐた。彼女は輕い朝着の日本風の寢衣を着て、その三角形に合さつた襟からほつそりした美しい處女らしい頸が出てゐた。そして彼女の身體全體が薔薇色がゝつて、鮮かで、品がよかつたので、ロマショーフはちよつとの間晴々しい氣持になつた。

彼女は顏を洗つたばかりで、まだ冷たい濕つぽい手を彼に差出さうとして、塀越しに乘り出した。同時に彼女は甘えるやうに、ぺちや〳〵喋つた。

「どうして私共へいらつしやらないの? お友達を忘れるなんて、あんまりひどいわ。いけない人ね、いけない人ね……しつ! 私みんな知つてゝよ、みんな知つてゝよ、」と

彼女は急に吃驚したやうな眼付をした、「ほら、これをお取んなさい。そして頸へ掛けて置きなさい。屹度よ、屹度掛けておきなさいよ。」

彼女はすぐ胸から護符と寄い絹紐とを取出して、急いで彼の手に押し遣つた。護符はまだ體の溫暖で溫かつた。

「御利益がありますかな？」と、ロマショーフは冗談に言つた。「これは一體何です？」

「それは祕密よ。笑つちや厭よ。ほんとにあなたはいけない不信心者ね。」

『だが、俺は今は涙行つ兒だ。ほんとに可愛らしい娘だ！』とロマショーフは、カーチャと別れながら思つた。が、とうとう彼はこゝでも自分のことを第三人稱で、美しい文句で考へるのを禁じ得なかつた。

『年老つた決闘家の無氣味な顏に人の好ささうな微笑が滑つた。』

その日の夕刻また彼は將校會議から召喚された。が、今度はニコラーエフ中尉と一緒であつた。二人の敵手は卓の前へ殆ど並ぶやうに坐つた。彼等は一度も互に顏を見合せなかつた。が、二人共離れてゐながら互に相手の心持を感じて、氣が立つてそはく〳〵してゐた。二人は裁判長が將校會議の判決文を彼等に向つて朗讀してゐる間、ぢつとして身動ぎもせずに裁判長を見詰めてゐた。

『某歩兵聯隊將校會議ハ某々等――（裁判官の位階姓名を列記す）――ヲ委員トシ、ミグノフ中佐ヲ裁判長トシテ、將校集會所ニ於ケルニコラーエフ中尉トロマショーフ少尉トノ衝突ニ關スル件ヲ審問シタル結果、兩將校ノ衝突ハ其相互ノ恥辱甚シキヲ以テ到底和解ノ望みなく、仍テ侮辱セラレタル相互ノ名譽ト將校タルノ體面ヲ恢復スル爲メニハ決闘ヲ唯一ノ方法ト認ム。右將校會議ノ判決ハ聯隊長ノ裁可ヲ經タルモノナリ。』

讀み終つてミグノフ中佐は眼鏡を脫つて、それをサックの中へ納めた。

「兩君は、」と中佐は冷靜な重々しい態度で言つた。「二人づゝの介添人を選んで今晚の九時迄にこの集會所へ寄越せばいゝ。さうすればこゝで我々はその人達と一緒に決闘の條件を決める。しかし、」と彼は立つて眼鏡のサックを後ろの衣嚢へ入れながら附け足した。「然し、今朗讀した將校會議の判決文は絕對的のものではない。兩君は決闘をしようとも或は……」と言つて彼は兩手を擴げて、ちよつと間を置いて言つた、「或は退職しようとも銘々の勝手だ。それで……兩君はもう退廷しても宜い……それからもう二言ばかり言つとく。が、これはもう裁判長としてぢなく、年長の同僚として兩君に勸告するのだ。兩君は決闘までは集會所へ來るのを止した方がよからうと思ふ。それは事件を複雜にする恐れがあるからだ……ではさやうなら。」

ニコラーエフ中尉はくるつと身を返して、すた〳〵廣間から出てしまつた。その後からロマショーフも出た。彼は怖くはなかつたが、しかし堪らなく淋しくなつて來て、妙に除け者にされたやうで、まるで全世界から切り離されたやうな孤獨を感じた。集會所の玄關へ出て彼は長いこと穩かな驚きの心で、空や、樹木や、塀に向つて立つてゐる牛や、道の眞中の塵埃を浴びてゐる雀などを見ながら考へた。「あゝ、一切のものは生きてゐる。くよ〳〵と齷齪してゐる。生長して、輝いてゐる。が、俺にはもう何も要らない。何も面白くない。俺はもう宣告されてしまつた。俺はたゞ一人つきりになつたのだ。」

のろ〳〵と如何にも退屈さうに彼は介添人に賴まうと思つてゐるベーク・アガマーロフ中尉とウェーツキン中尉とを探しに行つた。兩人とも快く承諾した――ベーク・アガマーロフ中尉は陰鬱な、遠慮するやうな調子で、ウェーツキン中尉は愛想のいゝ意味ありげな握手をしながら。

ロマショーフは家へ歸りたくなかつた――何んだか家に居るのが切なく退屈であるやうな氣がした。こんな絕望と、孤獨と、生の不可解とに苦しめられた時には、いつも彼に取つて近しい、同情のある友と、同時に細心な、理解のある、心の優しい人が必要であつた。

そして急に彼はナザンスキイ中尉を思ひ出した。

二十一

ナザンスキイはいつものやうに家に居た。彼は今重苦しい醉ひ寢から醒めたばかりで、手を頭に支つて、下着一枚になつて寢臺の上に臥てゐた。彼の眼にはぼんやりした疲れたやうな霞がかゝつてゐた。

「今日は、中尉殿！　お邪魔ぢやありませんか？」

ロマショーフはナザンスキイの上に體を乘せかけて、氣が引けるやうに、そは〳〵とかう言つた。が、彼は少しもその寢惚顏を變へなかつた。

「やア、今日は、」とナザンスキイは嗄れたやうな元氣のない聲で答へた。「何か面白い事はないかね。まア坐り給へ。」

彼はロマショーフに熱い濕つぽい手を差延べた。が、彼は少しも自分の好きな面白い友達が來たやうな調子ではなくて、まるで昔の退屈な夢のうちに見慣れた幻影にでも向つてゐるかのやうであつた。

「何んですか、どこかお惡いんですか？」と、ロマショーフ

は寢臺の上の彼の足許に坐つて、悸々しながら訊ねた。「それなら、お邪魔しないですぐに歸りますが。」

ナザンスキイは枕から少し頭を擡げて、顏を顰めてやつとロマショーフを見た。

「いや……待ち給へ。あゝほんとに頭痛がする！　まア聽き給へ、ロマショーフ君……君は何かあつたらしいね！　何か非常なことが。待てよ、僕は考へが纏らない。君には何か事件があつたのか？」

ロマショーフは默つて、いかにも悲しさうに彼を打ち戍つた。二人が暫く逢はない間に、ナザンスキイの顏は不思議に變つてしまつた。眼は深く窪んで、その周圍は黑く緣取られてゐた。顳顬は黃ばんで、頰のごつ〳〵した穢ない皮膚がこけて、薄い縮れつ毛が不様に生えてゐた。

「別に大したこともありませんが、たゞ私はあなたに逢ひたくなりましたので、」とロマショーフはぶつきら棒に言つた。「明日私はニコラーエフ中尉と決闘をします。私は家へ歸るのが厭でしたからお訪ねしました。しかしまアこんなことはどうでもいゝんです。さやうなら。私はたゞ誰も話相手がなかつたものですから……あゝ苦しい。」

ナザンスキイは眼を閉ぢた。彼の顏は苦しさうに歪んだ。彼がわざと意志を緊張させて、自分の意識を返さうとするのがよく解つた。やがて彼が眼を開くと、その眼には注意深い溫かい輝きが光つてゐた。

「いや、待ち給へ……さて僕等はどうしようかしら、」とナザンスキイはやつと寢返つて肘を突いた。「まアその戸棚から取つてくれ給へ……君は知つてゐるだらう……いや林檎は要らない……そこに薄荷饅頭がある。ありがたう。君、僕等はどうしようか……ふう、何んて穢はしいんだらう！　……僕をどこか屋外へ連れて行つてくれないか——こゝは實に穢はしい。僕はこゝが怖くてたまらん……しよつちうこんな怖ろしい錯覺に惱まされてゐるのだ。屋外へ出て小舟にでも乘つて話さうぢやないか。いゝだらう！」

彼はたまらなく憎さげに顏を顰めながら、ぐい〳〵と薔薇色に變つて來て、次第に活氣と光輝とに燃え出して、その空色の眼が、新に美しくなつて來たのを見た。

家を出て、彼等は辻馬車を呼んで、町端れの河へ行つた。土手の一方には猶太人の粉挽屋の大きな赤い建物が立つてゐた。向う岸は水泳場になつてゐて、そこに貸船があつた。

ロマショーフがオールを執つて、ナザンスキイは外套を被つて艫に横になつてゐた。堤防で堰いてあるその河は大きな池のやうに廣々として靜まり返つてゐた。河の兩岸はなだらかに段々上へ坂になつてゐて、その上に生えてゐる草は遠くから見ると手で觸つて見たい様に、平坦で、靜かで、しつとりしてゐた。岸邊の水の中には蘆が青々と繁つて蓮の繁つた黑い圓い葉の間から眞白な花が頭を擡げてゐた。

ロマショーフはニコラーエフ中尉との衝突を詳しく物語つた。ナザンスキイは俯向いて水を見詰め乍らしんみりと聽いてゐた。水は硝子の様にざわついて間斷なく懶い様な漣波を描き乍ら小舟の舳から段々と遠く擴がつて行つた。

「ほんたうのことを言つてくれ給へ、ロマショーフ君。君は一體怖くないのか？」と、ナザンスキイは靜かに訊いた。

「決闘がですか？　いゝえ、怖かありません。」とロマショーフは口早に言つた。が、すぐ彼は默つて、ちよつとの間に自分がニコラーエフと近く向ひ合つて、彼の手に支へられたピストルの黑い銃口を見る時の有様をまざ〳〵と想像して、「いや〳〵、」とロマショーフは慌てゝ附け足した。「私は怖かないなぞと嘘は言ひません。ほんとの所、怖いのです。然し、私は臆けるやうなことはありません。逃げもしません。また詫びようとも思ひません。それだけは確かです。」

ナザンスキイは微かにぺちや〳〵してゐる生溫かい夜の水に指先を浸して、時々咳をしながら、力のない聲で徐かに話つた。

「あゝ君！　ロマショーフ君！　なぜ君はそんなことをしたがるんだ？　考へて見給へ。もし君が臆けないと確信してゐるなら——もし全くさう確信してゐるなら——決闘を辭退するのは更にどれだけ勇敢だか知れないぢやないか。」

「私は彼奴に毆られたんです……顏を！」とロマショーフは執拗く言つた。そしてまたしても燃えるやうな憎惡が彼の心に苦しげに蠢き出した。

「あ、さうか、うむ、毆つたのか、」とナザンスキイは、愛想よく言つて、悲しさうな優しい眼付で、ロマショーフを見た。「だが、それが問題ぢやないだらう？　人の噂も七十五日で、世の中のことはみんな過ぎ去つてしまふよ、君の苦痛も君の憎惡も。そして君自身だつてそんなことは忘れてしまふさ。だが、君が殺した人間のことは君はいつまで經つても忘れることは出來ないよ。其奴は寢床であれ、食卓であれ、孤獨の時であれ、群集のうちであれ、いつどこにゐても君から離れないのだ。世間の馬鹿者は決闘で殺すのは殺人ではないなどゝ信じてゐる。何んたる阿呆だ！　が、彼奴等でも盜賊が自分の犧牲となつた人の腦髓や血を夢に見るといふことは感傷的に信じてゐる。殺人はいつだつて殺人さ。そして殺人の最も怖ろしいことは苦痛でもなけれ

ば死でもない。又脅迫でもなければ血や死骸に對するむかつくやうな嫌惡でもない——いや何よりも重大な怖ろしいことは君が人間の生活の歡樂を奪ふといふことだ。偉大なる生の喜びをさ！」と、ナザンスキイは急に大きな泣き出しさうな聲を出して繰り返した。「ねえ君！　誰だつて——君だつて、僕だつて、いや世界中の誰だつて——決して死後の生活を信じてはゐない。それだからこそ皆な死を恐れるのだ。けれども氣の弱い馬鹿者は晴々しい花園や、闇者の甘い歌などを夢に描いて、自分を欺いてゐるが、しかし強者は默つて必然の境界を跨ぐのだ。我々は強者ではない。我我が自分の死後はどうなるだらうと考へる時、我々には空虛な、冷たい、暗い墓が思ひ浮ぶ。いや、君こんなことは皆譫言だ。墓はまだ幸福な誘惑である。樂しい慰藉である。然し全然何もなくなつて、暗黑もなく、空虛もなく、冷たさもなく……それどころかそんなことに關する思想さへもなく、恐怖さへもなくなる時の怖しさを思ひ浮べて見給へ！　せめて恐怖だけでもあればだが！　まア、考へて見給へ。」

ロマショーフは襖を引き上げて傍へ置いた。小舟は僅かに水の上を進んでゐた。それも綠の岸が反對の方向へ靜かに動いてゆくので僅かにそれと分るくらゐであつた。

「さうです、何もかもなくなるのです。」とロマショーフは

物思はしげに繰返した。

「だが見給へ。人生はどんなに美しく、魅力があるか、ただそれだけを見給へ！」とナザンスキイは、自分の周圍に廣く手を擴げて叫んだ。「あゝ歡樂！　あゝ人生の神々しさ！　見給へ、あの青空を、夕陽を、靜かな水を——それらを見てゐると何んだかかう歡喜に顫へてくるぢやないか——あれ、ずつと向うの方で風車が翼を動かしてゐる。溫順しい綠の若草や岸邊の水が夕日を受けて薔薇色になつてゐる。あゝ、何んと不思議ぢやないか！　一切のものがいかにも優しく、そして幸福さうだ！」ナザンスキイは不意に兩手で眼を蔽うて泣き出した。が、彼はすぐ氣を取直して自分の泣いたのを含羞みもせず、濕んで輝いてゐる眼でロマショーフの方を見ながら言ひ出した。

「かりに僕が汽車にでも轢かれたとする。そして腹を割かれて僕の內臟が砂に塗れて、車輪に捲き付けられたとする。してその最後の刹那に僕に向つて、『さア、どうだ、これでも人生は美しいか？』と訊ねたら、僕は感謝の喜びを抱いてかう言ふよ。『あゝ人生は實に美しい！』と。たゞ視覺だけでも我々にどれだけの歡樂を與へてるか知れない！　それにまだ音樂も、花の香りも、女の甘い愛もある。それにも增して測り知られぬ歡樂は黃金のやうな生の太陽である人

間の思想なんだ！　あゝローモチカ！……いや、さう呼んだのは惡かつた、免して呉れ給へ、」とナザンスキイは、詫びるやうに遠くから顫へた手を彼の方へ差延べた。「假りに君が無期徒刑で牢獄に入つたとする。そして一生涯君は二つの古い腐蝕した煉瓦の隙間から、屋外を覗いてゐるとする……いや、假に君の牢屋には少しの光線の閃きも、少しの音響も、何もないとしたらどうだ！　ところが、それでも死の奇怪な恐怖とは較べものにならないのだ！　君にはまだ思想も、想像も、記憶力も、創作力も殘つてゐるから、それらと一緒に生きて行くことが出來る。それどころか君は生の歡樂のうちに喜悅の刹那を見出すことさへ出來る。」

「さうです、人生は美しいです。」とロマショーフは言つた。

「美しい！」とナザンスキイは、性急に繰り返した。「こゝに二人の人間があつて、一人が他の一人を毆つたとか、その妻を接吻したとか、または單にその傍を通り過ぎる時、鼻髭を撚りながら無遠慮にその男を眺めたとか——さういふことのためにこの二人の人間が擊ち合ふとか果し合ひをするとは何んのこつだ。いや、彼等の傷も苦痛も死も、そんなものはみんな下らないことだ！　自殺と言ふけれど、人間といふこの哀れむべき、動いてゐる塊は、果して自分を殺してゐるのか！　さうぢやあるまい。彼は太陽——熱い愛

らしい太陽や、明るい空や、自然や、人生のさまざまな美を殺してるのだ。人間の思想といふ最大の歡樂と誇りとを殺してるのだ！　彼はいつまでもいつまでも、永久に取返しの付かないものを殺してるのだ。あゝ馬鹿な奴！」

ナザンスキイは悲しげに長い溜息を吐いて、頭を振つて、そして俯向いた。小舟は蘆の中へ這入つた。ロマショーフはまた櫂を執つた。脊の高い綠色の硬い莖が、船舷にさらさらと擦れて、嚴かに、徐かに靡いた。そこは廣い水面よりも暗く、涼しかつた。

「では、私はどうしたらいゝんでせう？」と、ロマショーフは愁はしげに、素氣なく訊ねた。「退職するんですか。ですが、そしたら私はどこへ行くんでせう。」

ナザンスキイは溫柔しく、優しく、につこりと笑つた。

「待ち給へ、ロマショーフ君、僕の眼を見給へ。うむさうだ。いや、君、傍を向かないで眞正面に見給へ。そして清い良心の底から答へ給へ。君は果して眞に興味ある有益な仕事に從事してゐると信じてゐるのか？　僕は君を誰よりもよく知つてゐるし、また君の心はよく感じてゐるが、君は全然それを信じてゐないぢやないか。」

「信じてゐません、」とロマショーフは決然と答へた。「ですけれど、私はどこへ行くのです？」

「待ち給へ、慌てなくもいゝ。君、我々の將校仲間を見給へ。といつて僕は決して夜會で踊を踊つたり、フランス語を喋舌つたり、自分の兩親や自分の妻に養はれてゐるやうな近衞將校のことを言ふのではない。いや君は我々不幸な陸軍將校のことを、名譽ある勇敢なロシヤ軍隊の中堅ともいふべき陸軍步兵將校のことを考へて見給へ。何れもみな廢物か、ごみ屑か、反古ぢやないか。精々好い所で不具な大尉共の息子ぐらゐのものだ。多數は勉強嫌ひの中學生か、實業學校生徒か、或は中途半ばの宗教學校の生徒だ。例へば僕等の聯隊にしたところで誰が忠實に長く勤めてゐる者がある？　みんな家庭に苦しめられてゐる貧乏人とか、またはどんな讓歩をも、どんな殘酷をも、殺人をも、兵卒の給料の横領さへもしかねない乞食共だ。そしてそれがみんな食ふためなんだ。そんな奴に擊てと言へば直ぐ擊つ。それが誰であれ、何んのためであれ、また無駄であれ、そんなことに遠慮はない、どうせ分別なんかないのだから。そして家では自分の汚ならしい佝僂の子供がびい〳〵泣き喚いてゐるのを知つてゐるので、ちやうど啄木鳥のやうに愚かしく眼を剝き出しては、しよつちう『誓文』といふ一つの言葉を繰返してゐる。やゝ天才肌の才能のある者ときたらみな酒飲みだ。我々の將校連の七十五パーセントといふものはみな梅毒に罹つてゐる。一人の僥倖者が——それも五年に一度くらゐだが——大學へでも入る時はみんな厭々ながら送別する。比較的寵愛された者はおなさけで屹度憲兵になるか、或は大きな都會の警部の椅子を夢みてゐる。貴族とか、少しばかり財産でもある者は田舍の郡長になる。假令心ある敏感な人達が殘るとしても、彼等は何をするのだ？　彼等にとつては本職の勤務は嫌惡の連續であり、重荷であり、また憎むべき軛である。誰もかも自分を呑み盡すやうな或る道樂を一生懸命考へ出さうとしてゐる。或る者は骨董品の聚集に從事したり、又多くは家へ歸つてランプの傍に坐つて、針を持つて何か下らない要りもしない勞物や、十字形の刺繡をしたり、或は鋸で自分の肖像の模様枠を作つたりしてゐる。で、勤務中は彼等はその事をまるで祕密な甘い歡樂のやうに空想してゐるのだ。骨牌遊びや女を手に入れようとする意氣な競爭などに就いては僕はもう言ふまい。何よりも恥づべきことは勤務上の虚榮心だ。下らない殘酷な空威張だ。オサッチイを初め、部下の齒や眼を敲き出すやうな輩がそれなんだ。僕の居る側でアルチャコーフスキイが自分の從卒を無茶苦茶に擲つた時、僕はやつと離してやつたことがある。後で見ると血が、壁は勿論、天井にまで附いてゐたつけ。それがどんな結果になつたか

知りたいかね。その從卒こそ可哀想さ。彼がこの一件を中隊長に訴へに駈けて行くと、中隊長は彼に手紙を持たせて曹長の所へやつたのだ。すると曹長は、彼の青く腫れて血塗ろになつた顏を、また半時間も毆りつけたのさ。で、その從卒は、二度も檢閲の時に訴へ出たが、何んの效果もなかつた。」

かう言つて、ナザンスキイは默つて、神經的に掌で自分の顋顱を擦り始めた。

「待ち給へ……どうしてかう考へが、横へ逸れるのだらう……」と彼は不安さうに言つた。「自分で考へを制し切れないで、考へに制せられてゐる時は、ほんとに馬鹿々々しいね……さうだ、思ひ出した！　話は前に返つて、君、ほかの將校を見給へ、今、ブラーフスキイ大尉を例に取る。彼奴何を食つてるか譯が解らない。石油代に自分で汚ない襤褸屑を集めてるんだ、着てる着物といつたらまるで襤褸だ。それでゐて四十八ルーブルの月給から毎月二十五ルーブルづゝは屹度貯金して置くさうだ。はゝゝゝ、彼奴はもう銀行に二千ルーブルも預けてゐる。そしてそれを殖すため內證で友人に高利を貸し付けてゐるのだ。君はそれを先天的の吝嗇だと思ふだらう？　いや、いや、あれは苦しい、不可解な、無意義な軍職を遁れて、どこかへ隱れる手段に過ぎないのだ……ステリコーフスキイ大尉は賢い、強い、勇敢な男だ。だが、彼の生活の中心は何んだ？　彼は無經驗な百姓の娘達を誘惑してゐるぢやないか。それから君、ブレーム中佐と來たらどうだ。愛らしい素敵な奇人で、極めて心だての善い好人物だが、それでゐて彼は自分の獸舍に全然沒頭してゐる。勤務や閲兵式や軍旗や——譴責や名譽や——そんなものは彼に取つて何んでもない。人生のうちの些々たる不要な下らんものに過ぎない。」

「ブレーム中佐は奇特な方ですね。私は中佐が大好きです、」とロマショーフは、口を入れた。

「さうとも、さうとも、勿論愛らしい人間さ、」とナザンスキイは、元氣よく點頭いた。「だが、知つてるかね、」と彼は急に顏を顰めて言ひ出した。「僕は一度、演習でこんな惡戲を見たことがあるよ。夜間行軍の後で僕等は皆步調が亂れて草臥れて、氣がくつたりしてゐた——將校も兵卒もさうだつた。と、ブレーム中佐が喇叭手に攻擊の喇叭を吹けと命じた。所が、其奴はどうしたものか豫備の呼び出し喇叭を吹いた。一度、二度、三度と吹いてると、突然あの愛らしい善良な奇人のブレーム中佐が口へ喇叭を當てゝゐる喇叭手のところへ馬で駈け付けて來て、力一杯拳で喇叭を叩き付けたのさ！　すると、

その喇叭手はぼろ〳〵に缺けた齒を血と一緒に地面に吐き出した。それを僕は見たことがある。」

「あゝ、何んといふことだ！」と、ロマショーフは忌々しく唸つた。

「この通り彼等の中で最も善良な、最も優しい立派なお父さんと言はれ、世話好きな良人と言はれてる者ですら、軍隊では卑しい臆病な意地悪い愚かな獸のやうになつてしまふのだ。かう言ふと君はなぜだと反問するかも知らんが、それは彼等が一人として自分の職務を信ぜず、その職務の聰明な目的を認めないからなのだ。君は子供が戰爭ごつこをしたがるのを知つてるだらう？　歷史のうちにも血氣な少年時代があつた。亂暴な、そして快活な若い時代があつた。その時代には人々は自由な徒黨を造つて歩いたものだ。そして戰爭は一般の醉興であり、血腥い勇敢な慰藉であつたのだ。そして、一番勇敢な、一番強い賢い者が首領に選ばれるのだつた。その首領の權力は、部下のものに殺されないうちは、すべての人から神のやうに崇拜されてゐた。けれども今は人類が發達して、年々悧巧になつて、子供らしい騷々しい戲れの代りに、その思想が日に日に眞面目に、深刻になつて來た。恐れを知らぬ冒險者が今では詐欺師に變つて來た。兵卒はもう愉快な掠奪の職業だと思つて軍隊に入る者はない。それどころかその顎へ繩を掛けて引張つても猶ほ入營を厭がつて、呪つたり、喚いたりするくらゐだ。そして怖ろしい魅力を備へた、殘酷な、神のやうに崇拜されたコザックの亘魁が、今では自分のけち〳〵した月給で悸しながら生きてゆく官吏に代つてしまつた。彼等の勇氣はつまり猫を被つた勇氣だ。そして軍紀などゝいふものは恐怖の紀律であつて、憎惡に近いものだ。ちやうど羽根を拔いた雉子のやうに醜いものだ。僕は人類の歷史に於いてかうした實例をたゞ一つだけ知つてゐる。それは修道社會だ。この制度はその始め溫和しく、美しく、感ずべきものであつた。或は——どうだか分らんが——修道士の階級は世界の要求で起つたのかも知れない。だが、しかし數世紀も經つた今日僕等は何を見てるか、無數の閑人や、放蕩者や、また常に精神的の要求を抱いてゐる人々にすら憎まれてゐる達者な馬鹿者やの集合である。そして凡てこれが外部の形式や氣取つた階級の表徵や、滑稽極まる齒の浮くやうな儀式などで覆はれてゐるのだ。いや、僕が修道士のことをいふのは決して空なことではない。僕は寧ろ自分の比較が論理的なのを得意に思つてゐる。修道院と軍隊——この二つがどんなに似てゐるか、君ちよつと考へて見給へ。一方には袈裟や香爐といつたやうなものがあるし、一方に

は軍服やがちや〳〵いふ武器がある。彼方には謙遜や僞善的の嘆息や甘つたるいお說敎などがあるし、此方にはおどけじみた勇氣や、『誰か不意に俺を侮辱しはせんか？』と始終眼をくる〳〵廻してゐる傲慢な虛榮心や、ぐつと突出した胸や、嚴しく張つた臀や、聳やかした肩などがある。しかし寄食者だと云ふ點に於ては何方も同じだ。そして彼等はこの事を心の中では深く知り拔いてゐるのだが、それを理性で、殊に胃の腑で認めることを恐れてるのだ。彼等は丁度他人の肉體を食へば食ふほど、はち切れる肥つた虱のやうだ。」

かう言つてナザンスキイは意地惡さうに鼻を鳴らして默つてしまつた。

「どうぞお話し下さい！」と、ロマショーフは願ふやうに言つた。

「しかし、君、時代が來るよ。しかもはや門の所まで來てゐる。偉大なる覺醒と恐ろしい評價の時代だ。ねえ君、僕はいつか見えない殘酷な人類の守り本尊が太古から存在してゐるといふことを君に話したことがあるね。この守り本尊の法則は確實で動かすことの出來ないものだ。そして人類が賢くなればなるほど愈々大きく深くそれらの法則に徹底してゆくのだ。で、僕はこの破棄することの出來ない法則によつて早晩全世界に平等といふ事が行はれることを信じる。もし奴隸狀態が一世紀も續いたなら、その破滅は怖ろしいことになるだらう。壓制が大きければ大きいだけ裁判は殘酷になるだらう。僕は深く強く信じる。我々特許されたる好男子や、強い誘惑者や、きらびやかな洒落者や、參謀將校や尉官やを、四辻や、薄暗い廊下や、便所の中で擲つたり、また女共が我々を辱しめたり、我々の從順な兵卒共が我々に反抗したりする時が來ると信じる。しかしこれは我々が防禦の能力のない人々を血の出るまで毆打したがためでもなければ、我々が女を辱しめても軍人といふ名の下に罰せられずに濟んだといふためでもなく、また我々が居酒屋で醉つぱらつて遇ふ人や通りすがりの人を斬つたが爲でもなければ、我々お上の寄食者があらゆる國や、あらゆる戰場でロシヤの武器に泥を塗つたがためでもない。それは部下の兵卒が我々を軍隊から逐拂ふために起るのである。勿論それやこれやのためでもあるが、然し我々にはもつと怖ろしい、そしてもう取返しのつかない過失がある。それは我々が何事に對しても盲目であり、聾であるといふことだ。もう久しい以前から我々の汚い臭い屯所とずつと立離れた所では大きな新しい輝かしい生活が始まつてゐるのだ。新しい勇敢な傲慢な人々が現れてゐるのだ。彼等の

心には焔のやうな自由の思想が燃えてゐる。メロドラマの大詰のやうに舊い櫓や穴倉が破れて、その蔭からもう眩いやうな輝きが見え初めてゐる。が、我々は七面鳥のやうに臆れて、眼ばかりぱちくさせて傲慢にかう言つてゐる。

『何事だ？　何處だ？　默れ！　謀反だ！　擊つぞ！』と。人の心の自由に對する、かういふ七面鳥的な侮蔑は、我々には決して許されてゐない——永久に許されてゐない。」

小舟は靜かなひつそりした水の明るみへ出た。小舟の周圍をそよともしない高い蘆が圓い綠の壁のやうにみつしり取卷いた。小舟はまるで、切り離されたやうに、人寰を遠ざかつてゐた。小舟の上を鷗が鳴いて通つた。時には殆どロマショーフに翼を觸れるやうにしてその強い羽叩きの爆りを感じる程間近を通つた。大方こゝらの蘆の叢の中に巢があるのだらう。ナザンスキイは艫に仰向けに横になつて長いこと空を眺めてゐた。空には金色のぢつとした雲がもう薔薇色に染め出された。

ロマショーフは悸々して言つた。

「中尉殿、もうお疲れですか。もつと話して下さい。」

で、ナザンスキイはさも自分の考へを續けるやうにすぐ語り出した。

「さうだ、新しい、不思議な、華々しい時代が來る。僕は長いこと自由の生活をし、多くの書を讀み、多くの經驗を積み、多くの見聞をした。それまでは老耄た烏や鴉共が學校の椅子から我々にこんなことを吹込んだ。『隣人を愛すること己れの如くせよ。而して溫順と服從と戰慄とは人間の第一の資格なることを記憶せよ』と。もつと正直な、もつと強い、もつと雄々しい人々は我々にかう言つた。『手を相携へて共に行き、共に滅びよう。而して來るべき時代のため光明悅樂の生を準備しよう』と。しかし僕は未だにこのことが分らんのだ。この『我』が、隣人や、卑しい奴隷や、ホッテントットや、流行病患者や、白痴などゝ、何うして繫がつてゐるのか、それを僕にはつきり確信を以て證明したものがない。おゝ、凡ての傳說のうちから僕は何よりも『仁慈なるユリアン』の傳說を心から憎み且つ侮蔑する。癩病やみは言ふ。『私は震へてゐます。私と一緒に寢床に寢て下さい。私は寒い。私の上に橫になつて私をあなたの體で暖めて下さい。私は凍えた。あなたの唇を私の臭い口に觸れて呼吸を吹き掛けて下さい』と。あゝ厭だ、厭だ！　僕は癩病患者なんか眞平だ。隣人なんか大嫌ひだ。第一どんな興味があつて僕が三十二世紀の人々の幸福のために僕の頭を碎かねばならんのか。おゝ、僕は世界的精神とか、神聖な義務とかいふものに就いてのこんな牝鷄のよまひごとな

んか、とつくに承知してゐる。だが、しかし僕はそれを頭で信じた時ですら一度もそれを心で感じたことはなかつた。君は僕の言ふことを聞いてゐるのか、ロマショーフ君？」

ロマショーフは羞かしさうな感謝の面持で、ナザンスキイを見た。

「私には、あなたの仰しやることがよく解ります、」と彼は言つた。「私がなくなる時は全世界も滅びるでせう？　あなたはこの事を仰しやつたのぢやありませんか？」

「さう、そのことさ。今僕が話すが、人類に對する愛は人人の心から燃え立つてもう蒸發し盡してしまつた。その代りに世界の終りまでも續く新しい神々しい信仰が起つてゐる。それは自己に對する愛である。自己の美しい肉體と、自己の强大な智力と、無限に豐富なる自己の感情とに對する愛である。いや、考へて見給へ、ロマショーフ君。君に取つて誰が自分より尊く近しいものがあらう？　誰もない。君は世界の王であり、誇りであり、飾りであるのだ。君は全生物の神なんだ。君の見るもの、聞くもの、感ずるものは悉く君の所有に屬するのだ。何でもしたいことをしたまへ。そして君の好きなものを取り給へ。全世界の何人をも恐れてはならぬ。なぜなら君の上には何物もなければ、又何人も君と匹敵するものはゐないからね。時代は近づいた。

自己の『我』に對する偉大なる信仰が、聖靈の火の舌のやうに全人類の頭を覆ふであらう。その時は最早奴隷も、主人も、不具者も、憐憫も、惡も、憎みも、嫉みもなくなつてしまふだらう。その時は、人間が神となるのだ。まア考へて見給へ。その時僕は、どうして自分と同じ光明の神を宿してゐる人を辱めたり、その人に衝突つたり、欺いたりすることが出來やうか。その時は人生が美しくなるのだ。全地に輕い、明るい建物が築かれて、平凡な、下らない何物も、我々の眼を汚さないやうになるのだ。そして人生は甘い勞働となり、自由な科學となり、驚くべき音樂となり、愉快な、氣樂な、永久の祭りとなるのだ。そして愛は專有の暗い枷を脫して世界の光明な宗教となつて、今までのやうに暗い隅つこでびくついてるやうな厭々ながらの交合のひそやかな恥づべき罪惡ではなくなるのだ。そして我々の體までが明るく、强く、美しく、そして華やかな晴着を着たやうになるのだ。ちやうど我々の上に懸つてゐる夕空を信じるやうに、」とナザンスキイは、嚴かに手を上へ擧げて、「そのやうに僕はこの未來の神の如き生活を固く信じるよ！」と叫んだ。

ロマショーフは心が波立つて顫へながら、蒼ざめた唇で呟いた。」

「中尉殿！　それは空想です！　それは妄想です！」

ナザンスキイは靜かに控へ目に笑ひ出した。

「さうさ、」と彼は笑ひ聲で言つた。「そんじよそこらの獨斷的な神學の教授さんや、古典博言學の教授さん達は驚いて、脚を兩方に離して、手を擴げながら頭を一方へ傾げて、かう言ふだらう、『だが然しそれは、極端な個人主義の表現ではないか！』と。だが問題はそんな豪い言葉にあるのではない。ねえ君、問題の要點はつまり世の中にはたゞ少數の人々が今日夢に描いてゐるやうな空想より實際的なものは何もないといふその事なのだ。これらの空想は人々に取つて最も確かな最も望ましい鑛漬だ。どうだ君、我々は軍人だといふことを忘れようぢやないか。我々は文官だ。今街道に頭の二つある快活な怪物が立つてゐる。誰か彼の傍を通るといきなり醜面を擲り付ける。僕はまだ毆られないが、しかし彼奴は僕を毆り、僕の愛する女を辱め、僕の自由を勝手に奪ふことが出來るといふ、そのことを考へるだけでも僕は凡ての誇りを踏付けられるやうな心地がする。僕一人では到底彼を征服することは出來ない。けれども僕と一緒に僕のやうな勇ましい、傲慢な人が立つてゐる。僕はその人に向つて、『君、行かうよ、そして二人であの怪物が、君も僕も毆らないやうにしようぢやないか。』そして二人で出掛けるのだ。勿論これは馬鹿げた例だ。それは單に樣式に過ぎない。がしかしこの頭の二つある怪物の顏のうちには、僕の心を束縛し、僕の意志を壓迫し、僕自身の個性に對する僕の尊敬を撲滅するやうな心が讀めるのだ。その時こそ隣人に對する憐憫ではなく、自分自身に對する神々しい愛が、僕と同じ心の他の人々の努力と僕の努力とを結合するのだ。」

かう言つてナザンスキイは默つてしまつた。慣れない神經の興奮が、彼を疲らせたやうに見えた。四五分過ぎてから彼は沈んだ聲で元氣よく續けた。

「まアかうだ、ロマショーフ君。我々の傍を大きな、複雜な、まるで湧き立つやうな生活が漂うてゐる。神々しい炎のやうな思想が生れて、古い鍍金の偶像が、破壞されてゆく。然るに我々は手を脇に當てながら、我々の獸舍に立つてゐるのだ。そして、叫んでゐる。『おい、白痴共！　椋鳥共！　毆つちまふぞ！』と。だが、こんなことを人生は決して我々に許さないのだ……」

彼は身を起して外套の下に身體を竦めた。そして懶さうに言つた。

「あ、寒い……歸らうか……」

ロマショーフは蘆の中から漕ぎ出した。太陽は遠く町の家

家の屋根の向うに落ちた。で、屋根は夕映の赤い線の中に黒くくつきりと浮き出して見えた。どこかで、窓硝子がきら〳〵した火の反照のやうに輝やいた。水は夕映に向つた方は薔薇色を帶びて、滑々と樂しさうに見えたが、小舟の後ろの方はもう濃くなつて、いくらか靑みさへ帶びて波立つてゐた。

ロマショーフは自分の考へに答へながら不意に言つた。

「中尉殿の仰しやつたことはごもつともです。私は退職します。それをどういふ風にするかは、自分でも分りませんが、しかしこの事はもう疾から考へてゐたことです。」

ナザンスキイは外套に身をくるめて、寒さにぶる〳〵と慄へた。

「うむ、退職し給へ、退職し給へ、」と愛想好い悲しみを帶びて彼は言つた。「君の心のうちには何かあるね。一種の內的光明が……僕はそれを何んと呼んでいゝか分らない。が、然し我々の熊穴のやうな兵營ではそれを打消してゐるのだ。何んのことはない、それに唾をかけて吹き消してしまふのだ。何より大切なことは、生活を恐れてはいけないといふことだ。生活は愉快な、興味のある、不可思議な遊戲だ——まアいゝさ、どうせ君は幸福にはなれないのだから。君は墮落し給へ。無賴漢や飮んだくれになるまで墮落し給へ。けれども君、自由の放浪者はあのアダム・ゼグルジユト中尉やスリーワ大尉などよりは何千倍充實した面白い生活をしてるか分らんよ。地球を彼方此方とさすらつて都會を見たり、田舍を見たり、いろんな風變りの人や、暢氣な人や、皮肉な人達と近づきになつたりさ。それからいろんな物を見たり、嗅いだり、聞いたり、露深い草の上に寢たり、寒さに凍えたりさ。そして何物にも屈託せず、何人をも恐れずに心を擧げて自由な生活に憧憬れてるのだ……あゝ、どうして人は一體にかう解らないのだらう！　鯉を食ふのも菌と山羊の煮つけを食ふのも、ウォーツカを飮むのも、シャンペンを飮むのも、天蓋の下で死ぬのも、交番所で死ぬのも、どうせ同じことではないか。こんな事はみんな些々たることだ。ちよつとした方便だ。そして迅速に過ぎ去る習慣に過ぎないのだ。こんなことは却つて重大な人生の意義を沒却するだけだ。僕は時々立派なお葬式を見ることがある。銀の箱の中に馬鹿げた羽飾りを被つて、一匹のくたばつた猿が行くと、他の生きてる猿共がその後から醜面をぬつと差延ばして、前からも後ろからも可笑しな勳章をがら〳〵と掛けて嬉しがつてゐるんだ……だがこんなことはたゞの訪問だ、上申だ、會議だ……たゞ一つの變らない美しい、何物にも替へ難いものは自由な心だ。それと

獨創的の思想と生活の樂しい渇望とだ。茵は有ることも無いこともある。それは運命の皮肉な氣まぐれなんだ。馭者はまるで愚者でない限りは一年も經てば立派に馬車を馭するだけの資格を養ふことが出來る。しかし、でぶ〳〵した腹の上に劍を提げて、馬車に乘つてゐる肥つた重々しい愚かな猿は、決して自由の誇るべき美を解し得ない。靈感の喜びを知らない。また、柳の枝の上に、毛ばだつた新芽が、銀色に輝やくのを見ても、歡喜の甘い涙をそゝいだことがない！」

かう言つてナザンスキイは咳をし始めた。そして長いこと咳入つた。が、やがて舷の外へ唾を吐きながら續けた。

「退職し給へ、ロマショーフ君。僕は自分でも企てたことがあるから君に言ふのだが、若し汚れた籠へ舞ひ戻つたら、その罪は……だが、まアいゝさ。同じことだ、君は解るだらう。勇ましく實生活に突進し給へ。人生は決して僕等を欺かないよ。人生は例へば幾千と數知れぬ室のある大きな建物のやうだ。それらの室は光明や、歌や、不思議な畫や、賢い立派な人や、笑ひや、ダンスや、愛や、又藝術のうちの偉い立派なもので充されてゐる。然るに君は今までこの宮殿の中でたつた一つの薄暗い窮屈な室、それも塵埃と蜘蛛の巢だらけの室を見たゞけだ——そして君はその中から出るのを恐ろしがつてゐるのだ。」

ロマショーフは棧橋に小舟を繋いで、ナザンスキイを舟から助け上げた。彼等がナザンスキイの家へ着いた時はもう暗くなつてゐた。ロマショーフは彼を寢臺に寢かせて自分で彼の上に蒲團と外套とを掛けてやつた。

ナザンスキイは齒ががた〳〵する程ひどく顫へてゐた。圓く縮こまつて頭を枕に突込みながら、彼は憐れな、なさけない、子供らしい聲で言つた。

「あゝ、どうして僕は自分の部屋が怖いのだらう……何んといふ夢だらう、何んといふ夢だらう！」

「なんなら、私は御一緒に泊つてもよろしいんですが。」とロマショーフが言ひ出した。

「いや、いや、それには及ばんよ。どうぞブロム酒を誂へるやうに言つてくれ給へ……それからウォーツカを少しと。僕には金がないが……」

ロマショーフは十一時頃まで彼の所に坐つてゐた。ナザンスキイはだん〳〵身震ひが止んだ。彼は突然大きなぎらぎらした痙攣つた眼を瞬いて、きつぱり素氣なく言つた。

「もう出て行つてくれ給へ、さやうなら！」

「さやうなら。」ロマショーフは悲しさうに言つた。彼は『さよなら先生』と言ひたかつたが、言葉の言廻しを羞かしく

思つて、唯强ひて冗談のやうに附け加へてから言つた。

「どうして『さよなら』です！　どうして『またそのうち遇はう、』と仰しやらないのです？」

ナザンスキイは突然切ない様な無意味な笑聲を出した。

「どうしてまた遇はうと言はないかつて？」と彼は狂人のやうに荒々しい聲で叫んだ。

ロマショーフは體中にぶる〳〵と恐怖の戰慄を覺えた。

二十二

自分の家の近くまで來ると、ロマショーフは夏の夜の暖かい暗闇の中に自分の室の小さな窓から微かにそれと見別けられる程の光が洩れてゐるのを見て吃驚した。『あれはどうしたんだらう！』と、彼は不安さうにかう思ひながら、思はず足を早めた。『もしかするとあれは、俺の介添人が決闘の條件を持つて歸つて來たのかも知れん。』玄關で彼は、ガイナーンにぶつ突かつた。が、ガイナーンとは氣が付かずに吃驚して身慄ひした。そして腹立たしく叫んだ。

「何んだ畜生ー　貴樣か、ガイナーン？　誰だ、彼所にゐるのは？」

暗くはあつたが、彼はガイナーンがいつもの癖で、一つ所で踊つてゐるのを感じた。

「婦人の方が來まして、彼處に坐つてをります。」

ロマショーフは戸を開けた。ランプはもうとうに石油が盡きて、今はぱち〳〵と音を立てながら、最後の油煙臭い火花を散らしてゐた。寢臺の上にぢつと身動きもしない女の坐つてゐる姿が、重くゆらめいてゐる薄暗の中に、ぼんやり浮んでゐた。

「シューロチカ！」と、ロマショーフは息をはずませながら言つて、何故かそつと足を爪立てゝ寢臺に近づいた。「シューロチカ、あなたですか？」

「まアお靜かに！　お坐りなさい！」と、彼女は口早に囁いた。「ランプを消して頂戴！」

彼は火屋の上からぷつと吹消した。悸々した青い灯影は消えて室の中は俄かに暗く靜かになつた。と、今まで氣が付かなかつた枕時計が、慌だしく大きな音を立てゝ、ちくちくと鳴り出した。ロマショーフはシューロチカと並んで坐つたが、身を屈めて彼女の方を見ないやうにしてゐた。恐怖と不安と、それから何んだか心臟の痺れるやうな變な感じに制せられて、彼は一言ものを言ふことが出來なかつた。

「あなたのお隣のこの壁の向うには、誰方が住まつていらつしやるの？」と、シューロチカが訊ねた。「其處へ聞えるの所で踊つてゐるのを感じた。

でせうか？」

「いや、其處は空間で……古道具ばかりです……主人は建具屋です。大聲で話したつて構ひません。」

が、やつぱり二人は小聲で話しを續けた。そしてしつとりした重々しい濃い暗闇の中のこの靜かな斷れ〴〵の言葉には、何んだか悸々した、愉みでもするやうな胸騒ぎのする不安があつた。二人は殆んど互に觸れるくらゐに坐つてゐた。ロマショーフの耳の中では、血がどき〳〵と低く音を立てた。

「なぜ、あなたはあんなことをなすつたの？」と彼女が不意に靜かではあるが、熱した詰るやうな口調で言つた。彼女は男の膝に手を置いた。ロマショーフは着物を透して彼女の活々した神經のほとぼりを感じた。そして深く溜息を吐いて眼を細めた。が、それでもあたりは暗くはならずに、却つて眼の前には、お伽噺にある湖のやうな空色の光で隈取られた黒い楕圓形が、ちら〳〵とちらついた。

「あなた覺えてゐますか。いつか私はあなたにあの人とは遠慮して下さいと、お願ひしたでせう。いゝえ、いゝえ、私は責めるのぢやありません。あなたがわざと喧嘩をしかけたのでないといふ事は私も知つてゐます。ですけれど、あなたの心に野獸が目を醒した時に、あなたはちよつとでも私の事を思ひ出して、お制めなさることが出來なかつたのですか。あなたは、一度も私を愛したことがありませんのね。」

「私はあなたを愛してゐます。」と靜かにロマショーフは言つた。そして悸えてゐる〳〵顫へてゐる指で、彼女の手にそつと觸つた。シューロチカはすぐにではないが、恰も彼を憐れんでゐるやうに、また彼を辱しめるのを恐れてゐるかのやうに、そうつとその手を取り退けた。

「えゝ、私はあなたもあの人も私の名を言はなかつた事はよく知つてをります。だけど、あなた方の折角の騎士道も、無駄骨になりました。やつぱり市中には、噂が擴がりましたわ。」

「どうぞ免して下さい。私は自分を制し得なかつたのです。私は嫉妬に眼が昏んだのです。」とロマショーフが言ひ難さうに言つた。

彼女は長いこと意地悪く笑つてゐた。

「嫉妬ですつて？　まアあなたは私の夫が喧嘩の後で、あの時あなたがどこから集會所へお歸りになつたか、私に隱すほど寛大だとお思ひですか？　あの人はナザンスキイのことも私に話しましたよ。」

「お免し下さい。」とロマショーフは、繰返した。「私は彼處

で何も悪いことはしませんでした。お免し下さい。」

彼女は急に聲を高めて、愕然した荒々しい口調で囁いた。

「お聽きなさい、ロマショーフさん、私には一分間だつて大切です。だのに、私はもう一時間もあなたをお待ちしましたよ。だから簡單に用事だけお話ししませう。あなたはニコラーエフが私にとつて何んであるかは御存じですね。私は彼を愛してゐません。だけど私はあの人のために自分の心の一部を殺しました。私はあの人よりも自愛心が强いのです。あの人は二度も大學の試驗に失敗りました。そしてこれがためには、あの人よりも寧ろ私の方が遙かに劇しい恥辱と煩悶とを感じてゐるのです。※謀本部の事は私一人つきりの、全く私だけの考へなんですよ。私は精一杯、あの人を引張つて、あの人を鞭撻して、あの人と一緒に勉强して復習もすれば、あの人の誇りを强めもし、またあの人が鬱いだ時には勵ましもしました。これが私の本來の好きな仕事です。私はこの考へから、自分の心を離すことが出來ません。どんな事があつても、あの人は大學へ入らなければなりません。」

ロマショーフは頭を低く掌の上に俯向けて坐つてゐた。彼は不意にシューロチカが彼の髪の毛を手でそつと靜かに撫でたのを感じた。彼は悲しげな疑ひを抱いて訊ねた。

「では、私はどうしたらいゝんです？」

彼女は彼の頸を抱いて、彼の頭を優しく自分の胸に引き寄せた。彼女はコルセットを着けてゐなかつた。ロマショーフは彼女のやんはりとした肉體の彈力を頰に感じて、その温かい香よい溶けたやうな匂ひを嗅いだ。彼女が話す間、彼は自分の髪の毛に途切れ〳〵の呼吸を感じた。

「あなた、覺えてゐらつしやるでせう。あの時……あの夜……ピクニックの騒ぎ最中に森の中でお話しゝた事を。私はあなたにすつかりほんとの事をお話しゝたではありませんか。私はあの人を愛してはゐません。だけど考へて下さいな。三年、まる三年といふもの、希望や空想や計畫や、又こんなしつッこい厭な勉强を續けて來たんですもの！　あなたは私がこんな町人染みた貧乏な將校社會を身慄ひするほど厭がつてゐることは御存じでせう。私はしよつちう立派に着飾つて、美しく華やかでゐたいのです。私は崇拜と權力とが好きなのです。ところが圖らずもこんな下らない醉興な喧嘩沙汰になりましたので、もう何もかもお終ひです。何もかも粉微塵に壞れてしまひました。おゝ何んて怖ろしいことでせう！　私はまだ一度も人の母親になつたことはありませんが、しかし私はこんなことを想像します。假りに私に可愛い赤兒があつて、それが生長してゐるとし

ます。そして一切の希望をその子供に置いて、その子のためには心配もし、泣きもし、夜も碌々眠らないでゐるとします……と、不意に偶然な馬鹿げた殘酷な場合が起つて、その子が窓の上で遊んでゐる時、乳母が一寸傍見をしてゐる間に下の石の上に落こちたとします。どうでせう、その時の母親の悲しみは。今の私の悲しみや、恨みに較べられるのは、たゞこの母親の絶望ばかりです。ですけれど、私はあなたを責めるのではありません。」

ロマショーフは身を屈めて彼女が苦しくはないかと心配しながら坐つてゐるのが窮屈であつた。しかし、かうして幾時間も坐つて、彼女の小さな心臓の速い正確な鼓動を變な息苦しいやうな醉心地で聽いてゐるのは、彼に取つてどんなに嬉しかつたことであらう。

「あなたは私の言ふことを聽いてゐらつしやるの？」と彼女は彼の上に俯向いて訊ねた。

「えゝ、えゝ、聽いてゐます……もつと話して下さい……もし私に出來ることなら、あなたのお望みなさることは何んでも致します。」

「そんなことはどうでもいゝわ。私の言ふことをお終ひまでお聽きなさいよ。若しあなたがあの人を射殺すか、またはあの人が試驗を斷られるかしたらもうお終ひですよ！

そんなことが知れたら私はすぐにもあの人を捨てゝペテルブルグでも、オデッサでも、キエフでも、どこへでもいゝから行つてしまひます。そんなことは新聞小説の造りごとだなどゝお思ひなすつてはいけませんよ。私はそんな安つぽい感激の文句なんかであなたを嚇さうとは思ひません。でも私は自分が若くて、悧巧で、教育があるといふことを知つてゐます。勿論縹緻は好くありません。ですけれど私は世間の舞踏會で、美貌の賞與にニッケルのお盆だの、音樂づきの枕時計だのを貰つてゐる美人なんかよりは、もつと趣味に富んでゐるつもりです。私は自分を嘲笑けることもありますが、しかしまたちよつとの間、花火のやうにきらきらと燃え立つこともあります。」

ロマショーフは窓に見入つてゐた。もう彼の眼は暗闇に慣れたので、ぼんやりした、見えるか見えないくらゐの窓枠の繼目を見別けることが出來た。

「そんなことを仰しやらないで下さい……いけません……私には苦痛です、」と彼は悲しげに言つた。「お望みなら私は明日決闘を斷つて、あの人の前に謝罪りませうか？　さうしませうか？」

彼女はちよつとの間默つてゐた。枕時計のかち／＼いふ單調な音が、室の隅々まで響き渡つた。やがて彼女は、ロマショーフにも分らないほどの表情で、何か考へ事でもしてゐるかのやうに、やつと聞えるくらゐに言つた。

「私はきつとあなたが、さう仰しやるだらうと思つてゐました。」

ロマショーフは頭を擡げた。彼女は彼の頸を手で壓へたが、彼は寢臺の上に起ち上つた。

「私は何も怖いことはありません！」と彼は大きく淋しさうに言つた。

「さうぢやないのよ、そんなことぢやないの。」と彼女は熟して慌だしく祈るやうに囁いた。「あなたは、私の言ふことが分らないのね。私の言ふことが分らないのね。もつと私の傍へお寄んなさい……先刻のやうに……お寄んなさいつてば……」

彼女は兩手で男を抱いて、彼の顏を自分の細い髮の毛で擽りながら、彼の頰に熱い息を吐き／＼囁き出した。

「あなたは私の言ふことが分らないのね。私の考へはまるで別なことですよ。だけど私は、あなたの前だと、お羞かしいやうですわ。あなたは、こんなに純潔な、善いお方なんですもの。私は、こんなことを、あなたに面と向つて、お話しするのが苦しいですわ。私は打算好きな、卑しい女です……」

「いや、みんな仰しやつて下さい、私はあなたを愛してゐます。」

「まアお聽きなさい、」と彼女は言ひ出した。ロマショーフは彼女の言葉を聞かない先に、もう察してゐた。「もしあなたが決闘をお斷りなすつたらあなたはどんなに侮蔑と汚辱と苦痛とをお受けなさるか分りませんわ。あら、さうぢやなくつてよ、私又ほかのことを言ひました。あゝもう／＼今度と云ふ今度は私決してあなたの前に僞りません。あなた、私はもうこのことを長いこと考へて心の中で測つてゐましたわ。まア假りにあなたが斷つたとします。さうすればあの人の名譽は恢復されます。ですけど御承知の通り平和に終つた決闘の後には、いつでもあるものが殘るのです……何んといつたらいゝでせう？……何かかう誤解と失望とを起すやうな或る變なものが……私の言ふことがお分りになりますか？」と彼女は愁ひを含んで、優しさうに彼に訊ねた。そして、そうつと彼の髮の毛を接吻した。

「えゝ。ですが、それはまたどういふことですか？」

「それは、さうなつたらあの人は屹度試驗に加はるのを許されないだらうといふ事です。將校の名譽にけちがついてはおしまひです。だけどあなた方が實際擊合をなすつたら其處には或る勇ましい強い何かゞあるわけでせう。射擊の

下に泰然としてびくともしない人には、大抵の事は赦してくれます。それから……決闘の後でもしあなたがしたいとお思ひなら謝罪なすつてもいゝでせう……えゝ、それはもうあなたの御勝手ですわ。」

二人はしつくり抱き合つて互に顔や手を觸れて互の呼吸を聞きながら陰謀者でゞもあるかのやうに、ひそ〳〵囁き合つてゐた。が、ロマショーフは二人の間を或る隱れた穢らしいねば〳〵したものが、そつと匍ひ出して、それがために彼の心が冷りとしたやうに感じた。彼はまた彼女の手から脫れようとしたが、彼女は彼を放さなかつた。ロマショーフは不可思議なぼうつとした興奮を隱さうと努めながら素氣なく言つた。

「どうかもつとはつきり仰しやつて下さい。私は何んでもあなたには誓ひます。」

そこで彼女は、彼の口もとで、命令的の口調で言つた。彼女の言葉は、ちやうど慌てた顫へてゐる接吻のやうであつた。

「あなた方は明日必ず擊合をしなければなりません。だけどあなた方はどちらも傷ついてはなりません。あゝどうぞ私の心を察して下すつて、私を責めないで下さい。私は自分でも卑怯なことは大嫌ひです。私は女です。だけど私のためにどうぞさうして下さい。ゲオルギイさん！　いや、あの人のことはお訊き下さいますな、あの人はわかつてゐますから。私は何もかもすつかり、言ひ含めておきましたから。」

ロマショーフは今頭を強く動かして、彼女の柔かな強い手から放れた。そして寢臺から立ち上つて決然とした調子で言つた。

「ようございます。その通りにしませう。確かに承知しました。」

彼女もやつぱり立ち上つた。暗闇の中で見えはしなかつたが、しかし彼は彼女の動作で、彼女が髮の毛を忙しげに直してゐるのが分つた。

「あなたはもうお歸りですか？」とロマショーフが訊いた。

「えゝ、さよなら！」と彼女は小聲で言つた。「お別れに、も一度私を接吻して頂戴！」

ロマショーフの心臟は憐れみと愛とに顫へた。暗がりの中で彼は手探りで彼女の頸を探し出して、彼女の頰と眼とを接吻した。シューロチカの顏は一面に靜かなしんみりした涙にしつとりと濡れてゐた。それが一層彼の心を掻き亂して興奮させた。

「あなた……泣いちやいけませんよ……シューロチカ……」

と彼は憐れむやうに優しく繰返した。

彼女は不意に素早く兩手を彼の首に投げ掛けて、惱ましげな情熱に溢れた強い身振で全身を彼にぴつたり壓し着けた。そして自分の燃ゆるやうな唇を彼の口から離さずに體中を顫はせて、苦しげに呼吸を喘ませながら、途切れ〳〵に囁いた。

「私、このまゝあなたとお別れするのが堪りませんわ……私達はもう遇はれないのですもの。ですから、もう何も怖れますまい……で、私はかうしたいのですよ。ねえあなた、一度……私達の幸福を味ひませうよ……さア、あなた私の傍へお出でなさい、お出でなさいよ、お出でなさいつてば……」

と彼等二人も、室の中も、全世界も、一時に或る堪らない幸福の熱い譫言に充されてしまつた。ロマショーフはちよつとの間、白い枕の中に無智な幸福に輝いてゐるシューロチカの眼を自分のごく間近に不思議なほど まざ〳〵と見た。そして、饑ゑたやうに、自分の口を彼女の唇に壓し着けた……

「送つて上げませうか？」とロマショーフはシューロチカと一緒に戸口から中庭へ出ながら訊いた。

「いゝえ、どうぞそれには及びません。あなた……そんなことをしないで下さい。私はあなたのところで、どのくらゐ經つたか分りませんが、もう幾時でせう？」

「分りません、私は時計を持つてゐませんので、まるで分りません。」

彼女は出掛けるのを躊躇つて、扉に凭れながら立つてゐた。あたりの空氣には乾いたむつとした暑い夜の香が地面や石から匂つてゐた。薄暗かつたが、その薄闇を透してロマショーフには嘗て森の中で會つた時のやうに、シューロチカの顏がちやうど大理石像のやうに、不思議に眞白な光に輝いてゐるやうに見えた。

「ではさよなら、あなた！」と、彼女はとう〳〵がつかり疲れ切つた聲で言つた。「さよなら。」

二人は接吻した。が、もう彼女の唇は冷たくなつて動かなかつた。彼女は足早に門の方へ出て行つた。と、すぐ夜の濃い暗黑が彼女を呑んでしまつた。

ロマショーフは立つて耳門の軋りや、シューロチカの靜かな足音が消え失せるまで、ぢつと聽き入つてゐた。そして部屋に歸つた。

強いけれど心地よい疲勞が不意に彼を襲うた。彼はやつと着物を脫いだ——それほど彼は眠たかつたのだ。そして睡眠に落ちる前の最後のまざ〳〵した印象は、枕から匂つ

て來る輕い甘い香であつた——それはシューロチカの髪の毛と、その香水と、美しい、若々しいその肉體の移り香であつた。

二十三

一千八百××年六月二日　某市

某歩兵聯隊長殿

同聯隊附二等大尉ディーツ

我聯隊長殿ニ左ノ件ヲ報告スルノ光榮ヲ有ス。昨六月一日貴官ニ上申シタル條件ニヨリ今二日ニコラーエフ中尉ト、ロマショーフ少尉トノ間ニ、規定ノ如ク決闘行ハル。兩敵手ハ午前六時五分前ニ町ヲ距ル約三露里半ノ「ドゥーベチナヤ」ナル森ニ會セリ。決闘ハ合圖ノ時間ヲ合セテ一分一秒間繼續セリ。決闘者ノ位置ハ抽籤ニ依テ之ヲ定ム。開始ノ號令ト共ニ兩敵手ハ相向ツテ進ミシガ、其際ニコラーエフ中尉ノ發射セル彈丸ニ命中シテ、ロマショーフ少尉ハ右上腹部ニ負傷ス。射撃ノ後ニコラーエフ中尉ハ立止リテ恰モ敵ノ答射ヲ待ツモノヽ如ク立チ居タリ。答射ノ爲メニ定メラレタル半分間ヲ經過シタル後、ロマショーフ少尉ハ敵ニ答射シ能ハザルコト判明セリ。是レガ爲メロマショーフ少尉ノ介添人等ハ決闘終了ヲ告ゲ、立會人一同ハコレニ同意ヲ表セリ。ロマショーフ少尉ヲ馬車ニ移セシ際少尉ハ危篤ノ失神狀態ニ陷リ、七分間ヲ經テ內臟出血ノ爲ニ絕命セリ。ニコラーエフ中尉ノ介添人ハ小生及ビワーシン中尉ニシテロマショーフ少尉ノ介添人ニハ、ベーク・アガマーロフ中尉及ビウェーツキン中尉立テリ。決闘ノ指揮ハ雙方ノ承諾ニヨリ小生之ニ當レリ。別紙八等官ズノイコ二等軍醫ノ證明書ヲ相添ヘ右及報告候也。

二等大尉ディーツ

——了——

ヤーマ

多くの人々はこの小説を破倫、醜悪なものと思ふだらう、といふことはよく承知してゐるが、自分は却つて世の母親と青年とにこの作を心から捧げたいと思ふ。

クープリン

アレキサンドル・クープリン作

昇曙夢譯

前編

一

ずつと以前、それはまだ鐵道が敷かれない昔のことであるが、南露の大きな都會からかなり離れた街外れに、公設や自營の馭者が代々住んでゐた。そこでこの邊一帶はヤムスカヤ・スラバダ（馭者付の意）と呼ばれてゐた。又は碎けてヤムスカヤとか、ヤムキとか、もつと簡單にヤーマなどと言つてゐた。その後、汽車が通じて馬車が廢れると——威勢のいい馭者の子孫は次第に荒つぽい習慣や、勇敢な氣風を失つて、他の職業に轉じて、散り〴〵になつてしまつた。けれどもヤーマはその後長い間——今日に至るまで——陽氣な、醉つ拂ひの、喧嘩好きな、夜は物騒な場所として、芳ばしからぬ噂が殘つてゐる。

どうした拍子だか、自然とさうなつたのだが、以前從ら顏の元氣のいゝ兵士の寡婦と、眉の黑い、肌の綺麗な馭者の後家とが、內密でウォーツカと春とをひさいでゐたその住み馴れた古巢の跡に、地方官憲の許可を得、その筋の監督を受けて、れつきとした嚴しい規則を守つてゐる娼家が、段々と發達するやうになつた。十九世紀の終りごろになるとヤーマの二つの街は——大ヤムスカヤも小ヤムスカヤも——どつちの側も特に娼家ばかりがずらりと立ち竝んでしまつた。素人家といへばやつと五六軒殘つてゐるだけだつた。その素人家だつて、娼家の商賣の需要を滿たすための酒場

だとか、銘酒屋だとか、雜貨店だとか、そんなものだつた。

生活狀態や風俗習慣などは、三十に餘る娼家の何處でも似たり寄つたりで、その差異と言へば、一時的の情交に對して支拂はれる値段にある。つまり或る外面的の些細な異ひで、幾らか綺麗な女を選ぶとか、比較的服裝が立派だとか、部屋が綺麗で家具が贅澤だとかいふだけの異ひである。

一番立派なのはツレッペリと云つて、大ヤムスカヤ街へはいると、左側の一番目にある老舖である。今の持主はまるで別な名前の人で、市會議員で、市參事會員にさへなつてゐる。二階建の家は、擬ロシヤ式・ヨルニック式・ロペトフ式の折衷で、綠と白とで塗つてあり、裝飾のある棟、彫刻した窓枠、木の筐緣のついた梁や板など取附け、階段には白い筋の入つた絨毯が敷いてあり、玄關には、名刺受けの木の盆を手に持つて前へ差し出してゐる剝製の熊が立つてゐる。舞踏室の床は嵌床で、窓には眞紅な絹の、どつしりした窓掛と絹網がかゝつて居り、壁に沿うて、金色の入つた白い椅子と、金色の枠にはまつた鏡がある。外に絨毯、長椅子、柔らかな繻子の小椅子の備へ付けてある別室が二つ。寢室には空色と薔薇色の提灯、安物の絹夜具、小ざつぱりした枕などがある。其處に住んでゐる女達は毛皮の緣飾りの附いた、上半身の露はなダンス服か、でなければ高價な假裝會

めいた騎兵服、扈從服、漁婦服、女學生服などを着てゐる。その大部分は、バルチック海附近のドイツ種で、大柄な肌の白い、胸の廣い、綺麗な女達である。このツレッペリ樓では一時客が三ルーブル、泊りが十ルーブルとなつてゐる。

二ルーブルの家は三軒——ソフィヤ・ワシーリエヴナ樓、舊キエフ樓、アンナ・マルコーヴナ樓——であるが、これは幾らか格が落ちて貧弱である。大ヤムスカヤ街に沿うた他の家は——皆一ルーブル店で、設備がもつと不完全である。それから、兵士とか、こそ泥とか、職人など、概して下層社會の人間がやつて來る小ヤムスカヤ街では、一時客が五十カペイカか、それ以下で、どうにも不潔で慘めなものである。廣間の床は歪んで、さゝくれ立つて刺々しいし、窓には赤い木綿の切つ端がぶら下つてゐる。寢室は家畜小屋同然で、天井まで屆かない薄い仕切り壁で區劃してある。寢臺には、叩いた乾草が敷いてあり、その上に何だか皺くちやな、ぼろ〳〵に裂けた、おまけに古ぼけて黑ずんだ、汚點だらけの敷布と、穴のあいた粗い毛布とが拋り出してある。窒氣は饐えたやうに蒸れて、アルコールの發散と人體の分泌物の臭ひとが交つてゐる。女達は色更紗の襤褸か、水兵服を着て、大抵は嗄れ聲か、鼻聲で物を言ふ。それに鼻は半分缺け、顏には前日の打撲傷や掻き傷の痕を殘し、また

は卷煙草の赤い空箱に唾液をつけて、それであつさり化粧したのもゐる。

一年中、たゞ受難週間の最後の三日と福音祭（三月二十五日、天使が聖母にクリスト降誕を告げた日）の前日、即ち鳥も巢を作らず、娘も垂髮を編まないといふ安息日を除いては、毎晩戸外が薄暗くなるかならないに、各娼家の玄關前の、幕を張つた、彫刻のしてある車寄せの上に、赤い軒燈が點る。街路はまるで復活祭のやうなお祭騷ぎで、窓といふ窓は一つ殘らず照り輝きヴァイオリンとグランドピアノの陽氣な樂の音が窓硝子を透して響いてくる。辻馬車が斷えず往つたり來たりする。どの家でも入口の扉は明けつ放しで、街路から屋內が見える——急な階段、階上の狹い廊下、ランプの多面反射鏡の白い光、スイスの風景を描いた玄關の綠色の壁などが見える。明方まで數百千の男がこの階段を登つたり降りたりする。こゝへあらゆる種類の人間がやつて來る。半分、棺桶に足を突込んだ、涎を垂らした老人で、技巧的な刺戟を求める者、少年——幼年學校の生徒や中學生といふやうな小僧同樣のもの、髯を蓄はへた一家の長たる親爺、金緣眼鏡をかけた、名譽ある社會の中心たる人物、新婚者、婚約者、名聲高き名譽教授、泥棒、人殺し、自由思想の辯護士、嚴格なる道德の擁護者たる教育家、先登的な文學者、婦人同權問題に

就いて熱烈な論文を書く評論家、探偵、間諜、脫獄者、將校、學生、社會民主々義者、無政府主義者、御用愛國者、內氣な男や闊々しい男、病人や達者な者、始めて女を知つた者、ありとあらゆる罪惡で體を毀した老放蕩者、晴やかな眼をした美男子、『自然』によつて意地惡くも虐げられた不具者、聾者、啞者、盲人、鼻缺け、凋びてたるんだ體をした男、臭い息をする者、禿頭、中風でぶる〳〵震へる人、腫物だらけの男、腹のでつぷりした、痔を患らつてゐる猿共である。彼等はレストランか、停車場へでも來るやうな調子で、氣輕にぶらりとやつて來て、腰を下ろして、煙草を吹かし、酒を飲んで、熱病にでも罹つたやうに愉快を裝ひ、××に擬した卑猥な身振をして踊る。或る時は念入りにゆつくりと、或る時はがさつに急き込んで女を選ぶ。しかも、決して斷られる心配のないことを豫め知つてゐるのだ。×××ないといふ風に前金で支拂ひ、先客の××××××のまだ殘つてゐる××××××××なる。そしてこの世の神祕の中で最も偉大にして美しい、卽ち新生命の××といふ神祕を、そんな積りでなく××するのである。そして女の方では平氣な準備と、紋切型の言葉と、教へ込まれた職業的な、まるで××のやうな體の動かし方で××××××のである。……

かうして一夜が過ぎる。明け方になるとヤーマは、少しづゝ靜かになつて來る。すつかり明け切つた時分には、もう人つ氣はなくがらんとして、入口の扉は堅く閉ぢられ、窓々の扉はびつたり閉められて夢の裡に沈む。だが、夕暮前になると、女達は眼を覺まして、その夜の支度にかゝるのである。

かくて際限もなく、一日々々と月を重ね、年を追うて、この四百の愚かしい、懶惰な、ヒステリックな石女達は、社會から見放され、家庭から呪はれ、社會的雰圍氣の犧牲となり、都會の情慾過剩の掃き溜めとなり、家庭の名譽の保護者となつて、その千客萬來の××のうちに、本當とも思はれない奇怪な生活を送つてゐるのである。

二

晝の二時である。第二流の二ルーブル級のアンナ・マルコーヴナ樓では、すべてのものがまだ夢の裡に沈んでゐる。金色の枠に嵌つた鏡、壁に沿うてきちんと並んだ二十脚の天鵞絨の椅子、マコーフスキイの『貴人の酒宴』、『水浴』の石版畫、部屋の眞中に下がつてゐる硝子製の大釣燭臺——こんなものゝある正方形の大廣間も同じく寢鎭まつてゐて靜けさと薄暗がりの中で、いつになく打沈んで、嚴肅で、妙に悲しげに見える。昨夜はこゝで、いつもと同じく灯が輝き、騷々しい音樂が鳴動き、青い煙草の煙が渦巻き、幾組かの男女が臀を振り、足を高く蹴上げながら跳び廻つたのである。そして街路は車寄の上の赤い軒燈と窓から洩れる光りで照り渡り、朝まで人や馬車が雜沓してゐたのである。

今、街は人の氣もなく嚴かに、嬉しげに夏の太陽の光を浴びてゐる。しかし廣間は、カーテンが皆降りてゐるので暗く、薄ら寒く、何だかことさらがらんとしてゐる有樣はまるで白晝の、人の居ない劇場か、雨天の馬術練習場か、裁判所の中にゐるやうである。

ピアノの黑い彎曲した、光澤のある胴が、薄ぼんやりと光り、古ぼけて、毀れて、龜裂だらけの、黃色い鍵盤が鈍くかゞやいてゐる。澱んで動かない空氣は、まだ昨夜の匂ひのまゝで、香水、煙草、人氣のない大きな部屋の酸つぱいやうな濕氣、不健康で不潔な女の體から發散した汗、白粉、硼酸石鹼、昨日寢床に擦込んだ黃ろい樹脂などの匂がする。そして萎れかゝつた水草の匂ひが、これらの匂に混つて異樣な魅力を添へてゐる。今日は五旬節（クリスト復活より第八週目の日曜日）である。古い習慣によつて女中たちは朝早く、まだ娼婦達が寢てゐる時分に市場へ出かけ、肴を車一臺買ひ込んで、その長い、足下にさく〳〵と鳴る太い草を、廊下や事務室

や廣間や、到る處にまき散した。それからみんなの聖像の前に一々お燈明をあげた。これは夜の間に汚れた自分達の手でお燈明をあげることを、娼婦達が習慣上差し控へてゐるからである。

門番はロシヤ式の、彫刻した車寄を二本の白樺で飾つた。同じやうに何の家でも玄關や欄干や扉のまはりや外側を、葉の疎らな枯れかけた白い細い枝で飾りつけてゐる。

家中が靜かで、がらんとして、寢ぼけてゐる。臺所で晝食の支度にカツレツを叩いてゐろ音がする。娼婦の一人でリューブカといふ、雀斑のある、あまり美しくない、しかし、がつしりと、ぴち〳〵した體つきの女が、肌着一枚で、腕も露き出しで、裸足のまゝ內庭に出て來た。彼女には昨夜は唯六人の一時客があつたばかりで、別に泊り込む客もなかつたので、お蔭でのび〳〵と氣持よく、全く一人で廣い寢臺に寢られたのだつた。で、彼女は十時といふ早い時刻に起きて、女中が臺所の床板やテーブルを洗ふのを手傳つてやつた。そして今、番犬のアムールに肉の片や筋をやつてゐる。長い、光澤のある毛並で、鼻尖の黑い、大きな赤犬は、鎖をきつと引ばり、息苦しくぜい〳〵いひながら前足で女に飛びついたり、または背中や尾を波うたせながら、頭を地べたに曲げたり、鼻をぴよこつかせたり、微笑した

り、吼えかゝつたり、興奮してくしやみしたりした。女の方では肉で犬を揶揄ひながら、わざとらしい嚴しさで叱つてゐる。

「まア、お前馬鹿だね！　そんなことをすると、これだぞ、何んて亂暴なんだらう？」

然し彼女に取つては、アムールの興奮や甘える樣子、たとへ些つとの間でも自分が犬に對して示し得る威力、それにお客なしでぐつすりと一夜を過したことや、子供時分のぼんやりした記憶に殘つてゐる五旬節、滅多に見ることのない太陽の照り輝いてゐる日中などが、心から嬉しかつた。泊り客はもう歸つてしまつた。最も事務的な、靜かな、日常の仕事の時刻が來たのである。

女將の部屋では、コーヒが始まつてゐる。仲間は五人である。その女將といふのは、表札の名前通り、アンナ・マルコーヴナである。年は六十に近く、脊は至つて低いが丸々と肥つてゐる。下から上へと順に隙間のないやうに互ひに壓しつけた大中小の三つの柔かい膠の球を想像して、彼女の姿を思ひ浮べることが出來る。つまりそれはスカート、胴、頭である。奇妙なことには、彼女の眼は褪めた空色をして、少女の、いや寧ろ子供の眼のやうであるが、それに引換へ、口は濕つぽい紅い下唇が、老人のやうにだらりと

垂れ下がつてゐる。亭主のイサイ・サヴィチは同じく小作りな胡麻鹽頭の、靜かな、口數の少い老人である。この男は女房の尻に敷かれてゐるが、女房のアンナ・マルコーヴナがまだこの家で鴇母をやつてゐた頃、やはり門番をしてゐたのだつた。何か役に立つやうにと、獨習でヴァイオリンを稽古してゐたが、今では毎晩舞踏曲を彈いたり、醉つ拂つて、涙を求めてゐる道樂ものゝ番頭達のために埋葬曲を彈いたりしてゐる。

それから鴇母が二人——年增と若いのとである。年增の方はエンマ・エドゥアルドヴナといふ脊の高い、肥つた、栗色の頭髮の女で、年の頃四十六歲ぐらゐ、顎がでぶ〳〵してゐて、三重顎になつてゐる。眼の周りには黑痣のやうな輪が出來てゐる。顏は額から下へ、頰へかけて次第に梨形をして下脹れになつて、土色を呈してゐる。眼は小さくて黑く、鉤鼻で、唇はいかつく引締り、顏の表情は落着いた威嚴を持つてゐる。一年か二年も經てばアンナ・マルコーヴナが隱居してこの家の權利や設備をそつくりそのまゝ居拔きで彼女に賣渡すことや、また、その支拂の一部は現金で、一部は手形で分期拂ひをするといふことも、この家の者には別段祕密でもなかつた。さういふ譯で娼婦達はこの女を殆んど女將同樣に尊敬してゐやゝ怖がつてゐる。もし間違ひでも仕出かすと、この女が手づから折檻するのだが、殘忍で、冷酷で、用意周到で、それで落着いたその顏の表情一つ變へない。それにこの女にはいつも抱女の中にお氣に入りがあつて、その女を、强制的な愛と幻想的な嫉妬とで責めつける。それがまた折檻よりも苦しいのである。

もう一人はゾーシャといつて、つい先達てやうやく普通の抱女の中から足を拔いて鴇母になつたばかりである。だから娼婦達は今のところこの女を名指さずに『姐さん』と詔つて親しげに呼んでゐる。痩せがたで、敏捷で、一寸斜視で、顏は淡紅色、頭髮は縮毛である。俳優——殊に肥つた喜劇俳優の讃美者で、エンマ・エドゥアルドヴナに對しては奴隷のやうに仕へてゐる。

最後に五人目の男は——この界隈の分署長ケルベシュである。これは頑丈な體格の男で、頭は禿げかゝり、赫い髯が扇のやうな形をしてゐる。青色の眠さうな眼、いくらか腫れた細い、氣持のいゝ聲を持つてゐる。誰も知つてゐる通り、この男は最初探偵部に勤めてゐて、その怖ろしい腕力と、拷問の殘酷なことで、詐欺師の間に怖がられてゐたのだつた。

この男には自分のやつたことで後ろめたいことが幾つもある。二年ほど前に、七十になる金持の老婆と結婚して、

去年その老婆を絞め殺した一件は市中で知らぬ者はない。だが旨く事件を揉み消してしまつたのだ。ところで他の四人とても各自の波瀾の多い生涯の中で何かやつて來た人間共である。けれども昔の武者修業者が自分の犧牲者を思ひ出しても、少しも良心の苛責を感じないやうなもので、この連中も自分の過去に於ける暗い、血に汚れた事件を、單に止むを得ない些細な職業上の不快ぐらゐにしか見てゐない。

みんなは、煖めた脂肪の强いクリーム入りのコーヒを飮んでゐるが、分署長だけはベネヂクチンを入れたのを飮んでゐる。彼は元來酒は飮まない方で、たゞおつきあひをしてゐる、といふ風をしてゐるだけである。

「では、どうなんですか、フォマ・フォミッチ、」と女將は相手の肚を搜るやうに訊ねた。「こんな事は、腐つた卵ほどの値打もないぢやありませんか……たゞあなたさへ一言仰しやつて下されば……」

ケルベシュはゆつくりとリキュー酒を半杯ほど口に入れ、脂つこい、ぴりつとする强烈な液體を上顎と舌で一寸柔らげて、ぐつと飮む。そしてゆつくりとコーヒでその後味を消し、それから左手の無名指で鬚を左右に捻る。

「御自分で考へてごらんなさい、マダム・ショイベス！」と彼はテーブルを眺め、手を開き、眼をしかめながら言つた、

「まア、考へてごらんなさい、私がどんな役目に陷るか！あの娘は欺されて、この……何といひますか……つまり、難かしい言葉で言へば、妓樓へ誘拐されて來てゐるんですよ。娘の兩親は現に警察の手を借りて搜索してゐるんです。宜しいですか、娘は次から次へと五人十人の手を渡つて來てゐるんです……そして結局、あなたの處でその行方を突き止めたのです。それに肝腎なことは——考へてごらんなさい——私の管轄內といふことですよ。私は一體どうすればいゝんですか。」

「ケルベシュさん、でもあの娘は丁年になつてゐるぢやありませんか。」と女將が言ふ。

「あの娘は丁年です。」イサイ・サヴィチが合槌を打つ。「あの娘は自由意志によつて云々の證文を入れてゐます。」

エンマ・エドゥアルドヴナは冷靜な、自信のある樣子でパスで言ふ。

「ほんとうに、あの娘は此處ぢや生みの娘も同樣なんですよ。」

「私は別にそのことを言つてるんぢやありませんよ。」分署長は忌々しさうに顏をしかめる。「私の立場にもなつて見て下さい……何を言ふも職務ですからなア。いや、それでなくてさへ厭なことが隨分あるんですからなア！」

と、女將はつと立上つて、スリッパをばた〳〵させながら扉口の方へ行き、物倦げな、どんよりした、表情のない青い眼で、分署長に眼配せしながら言ふ。

「ケルペシュさん、自宅の改築の模様を一寸見て下さいな。も少し擴げようと思つてるんですよ。」

「あゝ、では拜見致しませう……」

十分も經つと二人は何喰はぬ顏して歸つて來た。ケルペシュの手はポケットの中で新しい百ルーブル紙幣を握つてゐる。誘拐された娘の話はもう出なかつた。分署長はあわてゝペネヂクチンを飲み干しながら、近頃の風紀頽廢をこぼすのだつた。

「私にパーウェルつていふ中學へ行つてる倅がありますがね、野郎、歸つて來るとこんなことを言ふんです。『お父さん、友達が僕に向つて、お父さんは警察官の癖にヤムスカヤに勤めてゐて、そして女郎屋から賄賂を取つてるつて、惡口言ひますよ。』どうです？　いやはや、マダム・ショイベス、隨分失敬な話ぢやありませんか？」

「あれ、まア……何が賄賂でせう？……でも、私どもの處でも同じでございますよ。」

「で、私は言つてやりましたよ、『馬鹿野郎！　校長ん處へ行つて言ふがいゝ、今後そんなことを言はせないようにつて。でないと、お父さんがお前さん達をみんな地方長官に申告するからつて。』ところがどうです、倅の奴またやつて來て言ふぢやありませんか。『私はもうお父さんの息子ぢやありません。他に息子を勝手にお搜しなさい。』ですとさ。まアこんな調子です。で、朔日まで厭といふほど折檻してやりましたよ。いやはや、今ぢや私と口も利きません。なアにまた痛い目を見せてやりますよ。」

「まアほんとに、仰しやるまでもございませんわ。」アンナ・マルコーヴナは紅い唇を垂れ、どんよりした眼を曇らせて溜息をついた。

「我宅でもベルトーチカをね——あの娘はフレイシェル女學校に行つて居るんですが——わざ〳〵町の立派な家庭に預けてあるんですよ。でもあなた、やつぱり何だか工合が惡うございましてね。ところが、あの娘が突然女學校から、それは〳〵酷い言葉や文句を言つて寄越すんでございますよ。ほんとに私、眞赤になるやうなことがありますよ。」

「まつたくアンナは眞赤になりましたよ。」とイサイ・サヴィチが裏書きする。

「眞赤になりますよ！」と分署長は熱心に調子を合はせた。「いや、まつたくその通りです。お心持はよく分ります。だが、ほんとに私達はどうなるんです！　私にどうしろと言ふんでせう？　大體、あの革命黨の奴等やいろんな書生つぽ共はどうしようとしてるんでせう？　それとも……奴等をどうしたらいゝんでせう？　いや、奴等は自分で自分を責めるが好いんでさ。到る處、墮落です。道德は地に墜ちて、兩親に對する尊敬など藥にしたくもない。奴等はみんな打ち殺しちまつた方がいゝんですよ。」

「一昨日此處でもこんなことがあつたんでございますよ。」とゾーシャは急いで口を入れた。「或るお客が來ましてね、それは肥つた人で……」

「餘計なことをお言ひでない！」分署長の言ふのを熱心に頷きながら、首を傾げて聽いてゐたエンマ・エドゥアルドヴナは、娼家の符牒で嚴しく遮つた。「あつちへ行つて抱女達の御飯の支度の監督でもするがいゝよ。」

「それに、誰一人氣が許せませんよ、」と女將は溢しつゞける。「女中だつて阿婆擦で、騙欺師ですもの。抱女達は抱女達で色男のことばかり考へてるんですから。自分の滿足を得ることばかり考へて、義務なんてことはちつとも考へてませんよ。」

氣まづい沈默になる。と、扉を叩く音がして、扉の向側で細い女の聲がする。

「をばさん！　お金を受け取つて頂戴、そしてあたしに傳票を下さいな。ベーチャは歸りましたよ。」

分署長は立ち上つて劍を直す。

「それはさうと、私はもう出勤時間です。ではさやうなら、アンナ・マルコーヴナ、さやうなら、イサイ・サヴィチー」

「どうです、もう一杯、お出掛けに？」と眼の霞んだイサイ・サヴィチはテーブルの上に手を突張つて言ふ。

「いや、有難う。もう結構です。これで十分ですよ。いや有難う。」

「よくお出で下さいました。またどうぞお立寄り下さい。」

「みなさん、さやうなら。」

然し戸口で一寸立止つて意味ありげに言ふ。

「ですが、とにかく御注意して置きますが、あの娘は、折さへあつたら何處かへ移しておしまひになつた方がいゝですよ。勿論、あなたの御勝手ですが。まアお心安い間柄ですから——念のため申上げときます。」

分署長は去つて了ふ。彼の足音が階段から消えて、その背後の玄關の戸がばつたり閉まると、エンマ・エドゥアルドヴナは鼻を鳴らして輕蔑したやうに言ふ。

「巡査奴！　彼方此方でお金を絞る積りなんだよ……」

みんなはぼつ〳〵部屋から出て行く。家の中は薄暗い。萎れかゝつた昔の甘い匂がする。靜かである。

三

夕方の六時に出る食事迄の時間は限りなく長く、堪へ難いほど單調である。一體この晝間の中休みといふのが——この家の生活のうちで一番重苦しい、一番空虚な時である。これは少々懸け離れた例ではあるが、その氣持から言へば、まづ大祭日に專門學校やその他の寄宿の女學校で經驗する、あの沈滯した空虚な時に似てゐる。友人達は方々へ出拂つてしまひ、非常にヒマで、所在なくて、一日中氣持のいい、甘い倦怠が湧くのである。女達は、白い肌着とスカート一枚で、腕は露き出しで、折々は靴下もはかずに、當もなく部屋から部屋へとうろつき廻り、誰一人顏も洗はず、頭髪も梳かさないで、物倦げに人差指で古物のピアノの鍵盤を突つついたり、氣乘りのしない樣子でトランプで占ひをやつたり、退屈さうに惡口を言ひ合つたりして、氣の腐るやうな焦立しい心持で、夕暮になるのを待つてゐる。

リューブカは朝食がすむと、アムールに麵麭の殘りとハムの切片を持つて行つてやつたが、直ぐ犬からも飽かれてしまつた。そこでニューラと一緒に伏牛花入りの糖菓と向日葵の種子とを買つて、家と街路との境になつてゐる垣根の外に立つて種子を噛みながら——その殼が二人の顏や胸にくつゝいてゐる——二人は街を通りかゝる人を片つぱしから拘泥らない氣持で盛んに品評してゐる。街燈に石油を注いで廻る點燈夫、送達簿を小腋に抱へた巡査、街を横切つて小間物屋へ駈けて行く他樓の鵜母のことなど喋つてゐる。

ニューラといふのは、小柄の、青い瞳をした出目の娘である。髮は白い亞麻色で、顳顬には青い筋が出てゐる。その顏には何だかかう、ぼんやりした、あどけないところがあつて、丁度白い砂糖で拵へた復活祭の小羊を思ひ出させる。そして、元氣で、せか〳〵して、物好きで、何事にでも出しやばつて誰にでも贊成する。何でも珍しい事は誰よりもいち早く聞き込んで、また喋る段になると、早口でうんと喋り、まるで子供みたいに口から飛沫を散らし、紅い唇に泡を立たせる。

向うのビヤ・ホールから縮髮のひよろ〳〵した、白內障を患つてゐる若い男で、人の走り使ひなどしてゐるのが飛び出して來て、隣りの料理店へ駈け込んだ。

「プロホル・イワーノウィチ、プロホル・イワーノウィチつたらさ！」と、ニューラが呶鳴る。「向日葵の種子を欲しくない？　上げませうか？」

「あたしんとこへお客にいらつしやいな。」とリューバが後を承けて言ふ。

ニューラはちよつと鼻を鳴らし、こみあげて來る笑ひを抑へながら附け加へる。

「親切にしてあげるわよ。」

ところが表の扉が開いて、年上の鵜母のいかつい姿が現はれた。

「まア！　何んてだらしのない！」と彼女は叱るやうに叫ぶ。「晝間、街路へ出ちやいけないつて、何べん繰り返すことか知れやしない。まア呆れた！　襦袢一つで。何だつてお前さん達にはこれつぱかしの良心がないのか、譯がわからない。自分の身を尊敬する上品な娘は、そんな端ない眞似をするもんぢやありません。仕合せとお前さん達は兵隊さん相手の娼家に居るんぢやないでせう。立派な娼家にゐるんですからね。こゝは小ヤムスカヤぢやありませんよ。」

二人の女は家の中へ戻つて臺所に引き込み、長い間床几に腰を掛けて、怒りつぽい料理女のプラスコヴィヤをぢつと眺めながら、足をばた〳〵させたり、默りこくつて種子を噛んだりした。

小さなマーニカ、一名喧嘩のマーニカ、白いマーニカの部屋には、一團の娼婦連が集つた。彼女は、も一人のゾーヤといふのつぽの綺麗な女で、圓い眉に灰色の出眼を持つた、ロシヤの賣春婦によく見る色白の善良な顏付の女と二人で寢臺の端に坐つてトランプの『六十六』をして遊んでゐる。小さなマーニカの一番の親友であるヂェーニャはその寢臺の二人の後の方で仰向けに寢ころんで、煙草を吹かしながら、ヂューマの『王妃の頸飾』の綴目のばら〳〵になつた小說本を讀んでゐる。彼女はこの樓中で唯一の讀書家で、それからそれへと無差別に讀み耽つてゐる。けれども案外なことには、事件澤山の小說を幾ら讀み耽つても、彼女はセンチメンタルにもならず、彼女の想像は煽り立てられもしなかつた。一番彼女の氣に入る小說は、極めて巧妙に考案され、手際よく仕組まれた長い間の陰謀や素晴しい決鬪を書いたもので、しかもその決鬪は、それを決行する前に伯爵は自分の靴の紐を解いて、一步たりとも自分の場所から退かない氣勢を示し、また決鬪の後では、伯爵を刺し貫いた侯爵が相手の立派な新しい胴衣に孔を開けたことを詫びるといつたやうなこと、また、作中の主人公に依つて無頓着に左右に撒き散らされる、黃金の一ぱいはいつた財布、ヘンリー四世の戀の經緯や頓智——一言で言へば、フランス歷史の王朝時代の纖細巧緻を極めた匂やかなヒロイズムが彼女の氣に入るのである。これに反して、平凡な日常生活に於ては、彼女は頭腦明晰で、嘲笑的で、實際的で、皮肉な程意地が惡い。彼女が他の娼婦達に對する關係は、丁度寄宿

女學校で一番の腕力家で、落第生で、暴威を揮ひながらも矢張り皆から尊敬されてゐる級中第一の美人と同じやうな地位を占めてゐる。脊の高い、痩せ形の、栗色の頭髪、綺麗な褐色の輝いた眼、傲慢な小さい口、そして上唇には薄い毛が生えて、頬には淺黒い不健康な赤味が差してゐる。

口に煙草を咬へたまゝ、その煙で眼をしかめながら、彼女は指に唾をつけて折々本のページをめくつてゐる。足は膝頭まで露き出しで、ごく下品な大きな恰好の蹠である。親指の根元には、尖つて醜い、不恰好な瘤が際立つて出張つてゐる。

それから他に、脚と脚とを組合せ、體を少し前屈みにして、手には刺繍をもつた、タマーラといふ女が腰かけてゐる。この女は靜かな、氣持のいゝ綺麗な女で、髪はやゝ赤味がかつて、丁度冬、山奥にゐる牝狐の毛のやうな暗い光つた色を帶びてゐる。本當の名はグリケーリヤ、つまり俗に言ふルケーリヤである。けれども娼家の昔からの習慣で、マトリョーナとか、アガーフィヤとか、シクリチニヤとかいふやうなぎこちない名前は、音調の好い、主として異國情調的な名前に變へるのである。タマーラはかつては尼僧であつた。でないまでも修道院の下級修道女だつたかも知れない。それで今でも蒼褪めた臃ぼつたさや、おど〳〵した瞳病さ、若い尼僧によく見る穩やかな憂しげな表情が顔に殘つてゐる。この女はこの娼家中で一人別になつてゐて、誰とも親しくしないし、誰にも自分の過去の生活を打明けない。けれどもこの女には修道院の生活の外にまだいろんな事件があつたに相違ない。この女のゆつたりした話振りや、長く垂れた睫毛越しに見やる濃い金茶の眼の物靜かな眼差や、身のこなし、微笑、愼ましやかな、けれども淫らな僞善者めいた調子の裡には、何かから神祕的な、口に出せない、罪に染んだ何ものかゞある。或る時ふとした機會でタマーラがフランス語とドイツ語を流暢に話すのを抱女達は聞いて殆んど異敬に近い恐怖を抱いた。この女には何か内的な抑制された力がある。それで、この女の外見はこの樣に溫和しく素直なのであるが、娼家中の者は、女將から朋輩、二人の鵜母、それから娼家の事實上の帝王で、皆の恐れてゐる英雄である門番までも、彼女に對しては、尊敬と愼重の態度をもつて接してゐる。

「伏せたわよ、」とゾーヤは言つて、一組のトランプの下にある切札をめくる。「四十から出て、スペートの一。マーニカ、どうぞ十點を。これでお終ひ。五十七、十一、六十八よ……お前さんはいくら？」

「三十、」マーニカは脣を脹らましながら、怒つたやうな聲で言ふ。「でも、好いわよ、さ、お前さん、順をすつかり覺えてるでせう。お配りよ……さあ、それからどうしたの、タマーロチカ？」と彼女は朋輩に向つた、「その先きを話して頂戴、聽いてるから。」

ゾーヤは古い、油で汚れて、黒くなつたトランプを掻き混ぜて、マーニカに渡して切らせ、それから先づ指に唾をつけてトランプを配る。

その間タマーラは刺繍から眼を離さないで、靜かな聲でマーニカに話す。

「あたし達は箔や金で、祭壇掛や聖器覆ひや、僧正方の祭服に縫箔したの……草や花や十字架の模樣をね。多はよく窓際に腰かけてゐましたわ。窓は小さくて格子が嵌つてゐて、少ししか光が差さないんですの。油や香や檜の匂ひがしたわ。お互ひに口を利くことは出來ませんの。ほんとに院長さんはやかましい方でしたからね。誰かゞ退屈の餘り四旬齋の聖歌を唱つたりしましたわ……『み空を仰ぎほめたゝへ歌ふ……』つてね。それは上手に歌つてよ。素敵だつたわ。ほんとに靜かな生活で、好い匂はするし、窓の外は雪で、まるで夢のやうなの……」

ヂェーニャはぼろ〳〵の小説本を自分の腹の上に置いて、ゾーヤの頭越しに煙草を投げすてゝ、嘲笑するやうに言ふ。

「お前さん達の靜かな生活がどんなものか分つてゐるわよ。赤ん坊を便所に棄てたりしてさ。惡い奴がしよつちうお前さん達の神聖な場所の周圍をうろ附いてゐたんだよ。」

「四十ですよ。あたしの處には四十六あつてよ。お終ひ！」小さなマーニカは興奮して叫び、手を叩く。「三を明けますよ。」

タマーラはヂェーニャの言葉にこつこりして、眼につくかつかない位の微笑をもつて答へる。その微笑は脣を動かさないと言つても好い位で、たゞ脣の端に、丁度レオナルド・ダ・ウィンチの描いたモナ・リザの肖像に見るやうな、憂しげな、二重の意味を含んだ、小さな笑窪を形作つてゐる。

「世間では尼さんのことを隨分噂してるのね。でも、罪を犯したところで、それがどうなの……」

「罪を犯さなけれア悔い改めることもないわよ。」ゾーヤが眞面目に言葉を挿んで、指を口中に漬ける。

「坐つて刺繍してゐると金ピカで眼がちか〳〵する。朝のお祈りでは背も折れるし脚も折れる。夕方には又お勤めで院長さんの僧房を叩いて『われらが聖なる師父の禱りにより て、神よわれらを憐み給へ。』と言ふと、院長さんは僧房の中から低聲で『アーメン』と返辭するのよ。」

ヂェーニャはタマーラをしばらくぢつと眺めてゐたが、や

がて頭を振つて意味ありげに言ふ。

「お前さんは變な人ね、タマーラ。かうやつてお前さんを見てゐると全く驚くわ。それア、ソーニカみたいな馬鹿女達の色事三昧は分つてるさ、それだけ馬鹿だからね。だけどさ、お前さんは苦勞の限りをして來たらしいぢやないの。それでゐて矢つぱりこんな馬鹿をやつてるのねえ。何故お前さんは、そんな襤衣なんか縫つてるの？」

タマーラはゆつくりと布を留め針で、膝の上に留め直して、指貫で縫目を撫で、細くした眼を伏せたまゝ、一寸頭を傾げて言ふ。

「でも何かして居なくちやアね、ほんとに退屈なんだもの。あたし、カルタはやらないし、嫌ひだし。」

ヂェーニャはやはり頭を振つてゐる。

「いゝえ、お前さんは變だよ。ほんとに變な人。お前さんは、いつも私たち皆よりかお客からの貰ひが多いでせう。だけど、お錢なんか溜めてどうする氣なの？　何に使ふ積り？　一纏七ルーブルもする香水を買つてるのね。そんなものが誰に要るの？　それからこんな絹地を十五ルーブルも出して買つてさ。セーニカにやる積りぢやないこと？」

「無論、セーニカにやるんだわ。」

「とんでもないお寶を見つけたのねえ。不仕合せな泥棒風情でさ、偉さうな恰好でやつて來るぢやないの。お前さんを打たないのが不思議な位だわ。泥棒なんて打つのが好きだからねえ。隨分捲き上げるこつたらうよ。」

「あたしの思ふだけきや、遣らないもの。」おとなしくタマーラは答へて、糸を噛む。

「あれだ。呆れつちやふ。お前さん程の智慧と縹緻があれアあたしならお客が引かしてくれるやうに丸めちまふわ。さうなれア自分の馬も出來るしダイヤも出來るんだがねえ。」

「それア好き〳〵よ、ヂェーネチカ。お前さんだつて綺麗で可愛いし、それに氣性は確りしてゐて利かぬ氣だし、それでゐてやつぱりあたし達と一緒にこのアンナ・マルコーヴナ樓に身を沈めてゐるんだもの。」

ヂェーニャはぱつと顔を赤らめて、眞面目らしい萎れた口調で答へる。

「まつたく、それに違ひないわ！　でもお前さんは旨くやつてるわねえ！……お客は好い人ばかり附いてゐるし、お前さんは好きなことが出來るもの。ところがあたしの客と來たらお爺さんでなけりや乳臭い子供ばかりなのよ。何にもなりやしないわ。洟つ垂らしや嘴の黄色い奴ばかりなんだもの。その中でも子供が一番嫌ひさ。來ると、おづ〳〵したり、せか〳〵したり、××××××、××××××××××

××××××××××、恥しくて眼の遣り場がないつて風さ。厭らしくて仕樣がないから無理に苛めてやるわ。まつたく横つ面の一つも撲つてやりたい位よ。お錢を渡す迄はポケットの中で握りしめてゐるから、お錢は熱つぽく、汗ばんでゐることさへあるくらゐよ。ひよつ子め！　お母がフランスパンと腸詰を買ふために十カペイカ呉れるのを頭を刎ねといたんだよ。こなひだもさ、あたしん許へ幼年學校の生徒が來たので、わざと意地悪く言つてやつたわ。ねえ坊ちやん、お駄賃にキャラメルをあげるから學校へ歸つてお喰べつてね。すると初めは怒つたけれど、受け取つたわ。後でわざ〳〵玄關から覗いて見ると、まアどうでせう、街路へ出て後先き見廻してから、早速口ん中へキャラメルを抛りこんだわよ。子豚め！」

「だけど、年寄と來たらもつと悪いわよ。」と小さなマーニカは優しい聲で言つて、狡さうにゾーヤを覗き込む。「ゾーニカ！　お前さんはどう思つて？」

ゾーヤはもうトランプ遊びを止めて、丁度欠伸をしようとしてどうしても欠伸が出きれない處だつた。彼女は怒りたいやうな笑ひたいやうな氣持がした。といふのは、自分に、或る地位の高い、變態性慾の年取つた馴染客があつて、この老人が彼女の許へ通ふのが娼家中の笑ひ草になつてゐるからである。

ゾーヤはやつと欠伸が出た。

「へん、畜生！」と彼女は欠伸した後の嗄れ聲で言ふ。「あゝ、忌々しい！　あの老いぼれの悪魔め。」

「だけど一番悪いのは、」とヂェーニャは批評を續ける。「ね、ゾーニカ、お前さんの社長よりも、あたしの幼年學校の生徒よりも、誰よりも悪いのは——みんなの情夫つて奴よ。あんなもの、何の嬉しいことがあるの。醉つ拂つてやつて來て、駄々をこねる、悪口は言ふ、變に勿體振つてはゐるが、まるで駄目の皮さ。小僧つ子つて言つておやりよ。下司で、汚くて、ぼろ〳〵で、臭くて、體中創痕だらけでねえ。唯一つの取柄は、タマーロチカが縫つてやつてゐる絹のルバーシカだけさ。犬ころ奴が、口汚なく悪態を吐く、喧嘩に出しやばる、ふゝんだ。いや、」と彼女はいきなり陽氣な、喰つてかゝるやうな聲で叫んだ。「誰かをあたしが見せかけでなく本氣に、何時迄も愛するとすれば、それはこのマーニカさ。白いマーニカ、小さなマーニカ、喧嘩のマーニカさ。」

そして突然マーニカの肩と頭とを抱いて自分の方へ引き寄せ、寢臺の上に轉がして、頭髪や眼や唇に永く強く接吻した。マーニカはやつとの思ひでそれをすり抜けたが、明

るい色の、細い、柔毛の頭髪はもぢや〳〵に亂れ、抵抗したために顏は充血し、眼は羞しさとをかしさで、潤みを帶びて、伏眼になつてゐる。

「お止しよ、ヂェーネチカ！　お止しつたらさ。何だつて、そんな……放して頂戴。」

小さいマーニカは——娼家中で一番溫和しい靜かな女である。善良で、謙遜で、誰の賴みでも斷り切れぬ性質で、從つて皆もこの女には至つて優しくして呉れる。それにこの女はどんな冗談にも顏を赤らめる。さういふ時は殊に魅力がある。丁度、肉感的な皮膚を持つた極めて優しい金髪の女が魅力を持つのと同じである。けれども、この女が好きなペネヂクチンを三四杯も引つかけたが最後、まるつ切り人が變つてしまつて、騷ぎを引き起して、いつも鴇母や門番や、時には警察の厄介にまでなる。客の顏を殴つたり、酒のはいつたコップを眼に投げつけたり、ランプを引つくり返したり、女將に呶鳴りつけたりするのは、醉つたこの女に取つては何でもないのである。ヂェーニャはこの女に對して或る不思議な優しい保護と、粗野な崇拜の情をもつて交際つてゐる。

「みなさん、食事ですよ、食事ですよ。」と鴇母のゾーシャが廊下を駈けぬけながら遠くで呶鳴る。彼女は走りながらマーニカの部屋の扉をあけて早口に言ひすてる。

「食事ですよ、食事ですよ、みなさん。」

またみんなは臺所へ行く。みんな揃ひも揃つて下襦袢一枚で、顏も手も洗はず、素足にスリッパを突つかけたまゝである。豚の脂肉とトマトのはいつた旨いスープ、カツレツ、菓子はケーキが出る。が、坐食生活と不規則な睡眠のために食慾がない。それに女達の大部分は終日の女學生同樣、晝間のうちに揑菓子や南京豆やトルコゼリーや鹽胡瓜や乳菓などを買ひにやつて、自分で食慾を毀してゐるのである。たゞ一人、僅か二ヶ月ばかり前、或る旅商人に欺されて娼家に賣られて來たニイナといふ、柄の小さな、獅子鼻の、鼻にかゝつた聲を出す田舍娘だけが四人前も喰べる。まだ田舍娘の旺盛な食慾を失つてゐないのである。

ヂェーニャはさも厭らしくカツレツを突つつき廻し、ケーキを半分喰べて、外見だけの思ひやりの調子でニイナに言ふ。

「フェクルーシャ、あたしのカツレツも食べたらどう？　お食りよ。遠慮なしに。お前さんも全快ならなけやいけないわ。みなさん知つてゝ？」と朋輩に向つて言ふ。「フェクルーシャには條蟲がゐるのよ。それでね、條蟲のゐる人はいつも二人前喰べるのさ。半分は自分に、半分は條蟲にね。」

ニイナは怒つて鼻を鳴らし、體に似合はぬバスを鼻にかけながら答へる。

「あたしにや條蟲なんかゐないわよ。あんたこそ居るでせう。だからそんなに痩せてるんだよ。」

それからニイナは平氣で喰べつゞける。蟒蛇のやうに、食事が濟むと眠氣がさして、大きな欠をして、水を飲み、吃逆をする。誰も見てゐないと、昔ながらの習慣で、そつと口許で十字を切る。

間もなく廊下や部屋でゾーシャの響きのいゝ聲がする。

「皆さん支度ですよ、支度ですよ。お神輿を据ゑてはいけません……お勤めですよ……」

數分經つと、家中の部屋々々で、燐寸をあてゝ焦げる髪の匂ひ、硼酸石鹸や安香水の匂ひがする。女達は晩の衣裳をつけるのである。

四

晩い黄昏に續いて暖かい暗い夜が來た。けれどもまだ暫らくは、眞夜中までも眞赤な夕映が燃えてゐた。廣間の壁に懸つてゐるランプや、大燭臺や、また玄關の上の赤い軒燈に、門番のシメオンが灯を入れた。このシメオンは痩せこけて脊の曲つた、口重の、氣むつかしい男で、肩は眞直で

廣く、髪は黒く、顏に痘痕がある。眉や鬚は疱瘡のお蔭で所々抜けて禿になつて居り、黒い、光澤のない、圖々しい眼をしてゐる。晝間は暇でよく眠つてゐるが、夜になると玄關の反射鏡の下に腰掛けたまゝ離れず、客の外套を脫がせたり着せたり、また萬一の騷ぎの用意をしてゐるのだつた。

そこへピアニストがやつて來た。脊の高い、亜麻色の髪をした、物腰の穩やかな青年で、右の眼に星がある。客の來る迄、彼はイサイ・サヴィチと一緒に、目下流行りかけてゐる舞踏『パーデス・パーニュ』をそつと練習してゐた。客の註文の舞踏一曲毎に、容易しい舞踏なら三十カペイカ、カドリールには五十カペイカ貰つた。が、その半分は女將のアンナ・マルコーヴナが頭を刎ね、後の半分を樂師達が分けるので、つまりピアニストは全體の收入の四分の一を貰ふだけだつた。これは無論不公平である。といふのは、イサイ・ザヴィチは我流でやつたからまるで音樂の耳がない。だからピアニストは絶えず新しい曲を敎へてやつたり、訂正してやつたり、高い音でこの男の間違ひを覆ひ消してやつたりしなければならなかつた。女達は多少自慢してこのピアニストのことを客に話してゐた。彼が音樂學校でいつも優等生だつたこと、けれどもユダヤ人で、おまけに眼を患つたので卒業が出來なかつたことなど話した。そして女

達はみんな彼に對しては氣をつけて注意深く接し、一種の思ひやりのある、幾分わざとらしい同情をもつて交際つた。かういふことは娼家の內部の隱れた風習によく見るもので、女學校の寄宿舍や、話に聞く牢獄の中のやうに、外見では亂暴で、醜惡な言葉を使つてゐても、その背後にはかうした甘つたるい、ヒステリカルな感傷性が潛んでゐるのである。

アンナ・マルコーヴナ樓の抱女達はみんな身支度を整へて、客の來るのを待つてゐたが、所在なさと期待とでうづうづしてゐた。大抵の抱女は自分の情夫を除いては、男に對して無頓着で、いくらか嫌惡の情すら持つてゐるのではあるが、それでも夕暮になると、彼女等の心のうちには淡い希望が甦り、動搖するのだつた。誰が呼んでくれるだらうか、何か並外れた可笑しいこと、面白いことが起りはしまいか、客が吃驚するほどの寬大な心を見せてくれはしないだらうか、この生活を引つくり返すやうな何かの奇蹟が起りはしないだらうか？　かういふやうな豫感と期待の中には、丁度賭博常習者が賭博場へ出かける前に、自分の懷錢を勘定する時の心のときめきに似た何ものかがあつた。その外、彼女達は自分が性的には無差別でありながら、やはり、男の氣に入りたいといふ女性の最も主なる本能的な欲求を失つてはゐなかつた。

時によると全く變挺な人がやつて來て、下らない、ごてごてした事件の起ることがあつた。また突然、變裝した探偵と警官とが現はれて、外見は極めて上品な、一點非難の打ち處のない紳士を捕縛し、頸を突つきながら拉れ去ることもあつた。時には、醉つ拂つた亂暴な連中と、仲間の加勢に驅けつけた方々の娼家の門番との間に格鬪が始まることがあつた——その格鬪の時には窓硝子やピアノの傳聲盤は破られ、籐椅子の脚は捥ぎ取られて武器にされ、廣間の敷物や階段には血が流れ、土手つ腹を突かれて、首の骨を折られた人達が車寄の泥の中に轉がる。こんな時のヂューニャの貪るやうな野獸性は大喜びで、朋輩が恐しさに悲鳴を擧げ、寢臺の下に隱れるのに、彼女は眼を輝やかせて幸福さうに笑ひ乍ら、すつたもんだの最中に飛び込んで、自分のお臀を叩きながら罵つたり嗾しかけたりするのだつた。

またこんなこともあつた。數千ルーブルの金を浪費して、賭博と醜態をつくした酒盛りを打つ續けて、今や自殺するか捕はれて被告の椅子につくかの瀨戸際に、一つ最後の金を醉ひ痴れた無茶苦茶な馬鹿騷ぎの中へ叩き込まうといふ取引所員か會計係かが、取り卷き連と一緒にやつて來た。そして娼家の戸も窓も堅く閉めて、二晝夜といふもの打つ續けで惡夢のやうな、退屈な、野蠻な、その上喚いたり泣いたり、女の肉體を凌辱したりするロシヤ式の狂宴がつゞいて、樂園の夜を出現させた。その際醉つ拂つた、足のひん曲つた、毛むくじやらの、腹の出つ張つた男や女が、萎びた、黃色い、だらけた、べた〳〵した體をして、素裸で音樂に合はせながら、變な恰好に曲つたり、人いきれと不潔な體臭の發散とで汚れた、息詰るやうな、酒浸りの空氣の中で、寢臺や床の上で、豚のやうに飮み食ひした。

たまには曲馬團の拳鬪家が遊びに來た。それが、高くない部屋の中に變にどつしりした、まるで室內に引ぱり込んだ馬といふ印象を與へた。それから靑い上衣に、白い靴下、辮髮といふ扮裝の支那人や、スモーキング、格子縞のズボン、糊のしたワイシャツ、胸に花といふ扮裝の、カッフェ・シャンタンの黑ん坊も來た。その黑ん坊は、眞黑い肌をしてゐるにも拘らず、白いワイシャツが汚れずに、却つて一層くつきりと光つて見えるのには、抱女達も眼を圓くした。

こんな珍しい人々は、娼婦の飽滿した想像を煽り立て、彼女達の弱つた情慾と職業上の好奇心を誘つた。そこで彼女達は岡惚れでもしたかのやうにそれ等の珍客の後から附き纏つて、お互ひに嫉妬し合つたり喧み合つたりした。

シメオンが、或る町人のやうな服裝をした好い年配の人

を廣間へ通したことがある。その男はこれといつて變つた處はなかつた。嚴格さうな痩せた顏で、頰骨は瘤のやうに意地惡く突き出てゐた。額は狹く、鼻が楔形で、眉が濃く、片方の眼は他のよりも心持あがつてゐた。で、その男は廣間に入るなり十字を切らうとして、指を額に持つて行つたが、隅々を見廻しても聖像が見附からないので、何等まごつく樣子もなく手を下ろし、唾を吐いて、すぐ事務的な顏付で、一番肥つたカーチャに近づいた。

「行かう！」と彼は手短に命じ、きつぱりと扉の方へ向いた。

ところで、何でも知つてゐるシメオンは、その男の居ない間に、やゝ自慢めいた口吻で、その頃自分の情婦だつたニューラに、その男の正體を打明けた。するとニューラは恐ろしげに眼を丸くして小聲でその祕密を朋輩に告げた。それは、この町人體の男は、ヂャトチェンコと言つて、去年の秋、十一人の謀反者の刑を執行するのに、死刑執行人が居ないので、召集されて來たもので、彼は二朝の中に十一人を自分の手で絞殺したといふのだつた。すると——隨分變なことではあるが——この時娼家中の女で肥つたカーチャを羨ましがり、息塞るやうな、銳い、眩暈のするやうな好奇心を起さない者は一人もなかつた。半時間程經つてヂャト

チェンコが眞面目なむつかしい顏付をして歸つて行くと、女達はみんな無言で口を開いたまゝ彼を出口まで見送り、後で窓から、彼が街路を歩いて行く姿を見送つて居た。そして衣物を着てゐたカーチャの部屋へ飛び込んで樣々なことを訊ねた。皺くちやになつた寢臺、カーチャの赤い太い素肌の腕、カーチャが靴下から抜き出して見せた、古びた、油じんだ紙幣などを、女達は新しい心持、殆んど驚嘆に近い感情をもつて眺めた。カーチャは何も言ふことが出來なかつた——「やつぱり男よ、他の男と別に變つちやゐないわ」と當惑しながら落着いて言つた。けれども自分のお客が何者であつたかといふことを知ると、何故か自分でも判らないが、急に烈しく獻欵きし始めた。

擯斥される者の中でも最も擯斥されるこの男、人間の空想で考へられる限りのどん底にまで墮落して、自分から進んで死刑執行人になつたこの男は、彼女に對してはちつとも手荒いことはしなかつた。けれども愛撫といふ氣持は微塵もなく、たゞ侮蔑と、木石のやうな冷淡さを以て接した。それは、人間に對しては固より、犬や馬、さては傘、外套、帽子のやうなものに對してすら、あれ程の態度は誰も執るまいと思はれる程だつた。まるで、一時の避け難い要求は生じてもその要求が濟めば、關係のない、用のない、嫌なものとなるところの、何かの汚れた物體に對する態度だつた。こんな考へがどの位み怖ろしいものか、それが肥つたカーチャの肥つた七面鳥同樣の頭腦では理解出來なかつた。で、彼女自身も譯が分らずに獻欵いたのだつた。

この哀れな、病める、愚かな、不仕合せな女達の、濁つた、汚れた生活を掻き混ぜる事件が他にもあつた。野蠻な無節制な痴話喧嘩には附き物の、ピストル騷ぎや、毒殺騷ぎも持上つた。時とすると、極く稀ではあるが、この肥料の上にも優しい、燃えるやうな清い戀の花が咲くこともあつた。或る時は愛する男の助けによつて女達がこの娼家から出たこともあるが、大抵は又舞ひ戻つて來た。また二三度こゝの女が思ひがけなく姙娠したことがあつた——これは皮相な眼で見ると滑稽で、恥づべきことにちがひないが、事件を深く考へて見たら感動すべきものがあつた。

とにかく、夕暮になる度に、事あれかしと待つ苛々した緊張した、快い期待の氣持がするのだつた。それで、一たび娼家の生活をしてからは、これらの怠惰な、自由を奪はれた女達に取つては、他のあらゆる生活は無味乾燥なものと思はれるのであつた。

五

窓はたそがれの匂やかな薄闇に向つて開け放たれてゐる。絹網のカーテンが、微かな空氣の動きにもゆら〳〵と搖れる。家の前の、見るかげもない小さな庭からは、露を含んだ草の匂ひがする。また、車寄の側に飾つてある五旬節の飾木からは、ライラックと凋れかけた白樺の葉が匂うてくる。リューバは、思ひ切つて胸を切り下げた、靑い天鵞絨衣を着、ニューラは「人形」のやうな身裝で、膝まで屆く淡の短紅色の廣い上衣を着て、明るい頭髮を垂れ、額の上には髮を縮らせてゐた。二人は窓際の上で抱き合つて寢ころびながら、娼婦の間で評判になつてゐる、病院のことを歌つた流行の端唄を小聲で歌つてゐる。ニューラが鼻にかゝつた細い聲で、最初の方を唄ふと、リューバがかすれたアルトで繰り返す。

月曜日が來りや
わたしや檢査に行きます、行けば
お醫者の、クラソフ奴が放さない……

どの家でも開いた窓々に赤々と灯が點り、車寄せの前には軒燈がついてゐる。二人の眼にはソフィヤ・ワシーリエヴナ樓の廣間の內部が手に取るやうに見える。眞正面に、黃色い、びか〳〵光る嵌床、紐でからげた戶口の暗紅色の緞帳、黑いピアノの一部、金色の枠を嵌めた鏡、窓から見え隱れする派手な着物を着た女の姿、鏡に映るその影、そんなものが見える。右手にはツレッペリ樓の彫刻した玄關が、大きな光澤消の電球の靑い光で、煌々と照らされてゐる。

しめやかで曖かな夕である。何處かずつと遠い、鐵道線路の向うに、何だか黑い屋根と細い黑い樹立の彼方に、力强い絲の春の色調が、眼には見えないが確かにそれと感じられる暗い大地の上に、低く、晩く迄消え殘つた細い長い一抹の夕映が群靑色の靄を透して紅味を帶びた金色に染め出されてゐる。この朧氣な遠くの光や、和やかな空氣や、間近に迫つた夜の匂ひなどの中には、春から夏にかけた時分の夕暮によく感じられる、何となく神祕的な、甘い、心からの哀愁が籠つてゐた。と、街のどよめきが漂ひ、手風琴の物悲しい旋律、牛の啼聲などが聞えて來る。誰かの靴音がこつ〳〵と聞え、金具のついた杖の音が步道の敷石に高く響く。球を轉がすやうに、ヤーを轉がり廻る辻馬車の車輪が物倦げに不揃ひに響く。そしてこれら凡ての物音が、日暮れ時の眠たげな夢心地の中で、美しく柔らかに、溶け合つてゐるのだつた。と靑色と赤色との燈火で暗闇の中に目じるしをしてゐる鐵道線路で、機關車の汽笛が、靜かな、歌ふやうな用心深い調子で鳴りひゞく。

そこで看護婦がやつて來ます。

パンと砂糖をもつて來ます、
パンと砂糖を持つて來て
みんなに同じやうに分けてやります。
「プロホール・イワーノウィチ！」ビヤホールから出て來て、輕い黒影のやうに街路を横切つて走る縮れ毛の下男に向つて、ニューラが突然聲を掛ける。「プロホール・イワーノウィチつてば！」
「おやお前さんかい、」とその男は嗄れ聲で呶鳴る。「何んだね？」
「あんたのお友達がね、宜しくつてさ。あたし今日逢つたのよ。」
「どんな友達かね？」
「それア素敵な男よ。ブリュネットの好い男さ。それよりか、何處で逢つたかつて訊ねた方がいゝわ。」
「ちや、何處でだ。」プロホール・イワーノウィチは一寸足を止める。
「何處つて、それアね、自家の釘の上よ、死んだ狼のゐる五番目の棚の上よ。」（ロシヤの謎々――分らないといふ意）
「何んだ！　馬鹿！」
ニューラはヤーマ中に聞こえる位、きやつ〳〵と笑つて、窓床の上で、長い黒い靴下をはいた脚を、ばた〳〵跳ね返した。やがて笑ふのをやめ、いきなり吃驚したやうに眼を丸くして囁くやうに朋輩に言ふ。
「あのね、あの男は一昨年或る女を斬つたのよ。プロホールがさ。本當なのよ。」
「それで？　死ぬほど斬つたの？」
「いゝえ、死にやしなかつたけど、轉げ廻つたわよ。」とニューラは氣の毒さうに言つた。「でもね、二ケ月もアレクサンドロフスカヤ病院に入つてゐたわ。お醫者さんの話ぢや、もうちよつぴり上の方だつたら、それこそ助からなかつたんですつて！　怖いはね！」
「何んだつてあの男はそんなことしたの？」
「あたしが知るもんですか。多分お錢でも誤魔化したか、それとも浮氣でもしたんでせうよ。あの男は戀人だつたんだよ、その女の――まア間夫さね。」
「それで、あの男はどうなつたの？」
「どうもなりやしないさ。證據が何もないんだもの。そこで又大騒ぎさ。百人ばかり摑み合つてね。あの女もやつぱり自分には何の嫌疑もないつて、警察へ申立てたのよ。だけどプロホールは後で偉さうな口利いてたわ、あの時はドゥーニカを殺らし損つたけど、今度こそやつゝけて見せる、彼女は俺の手から脫れつこないつてね。屹度殺されてよ。」

リューバは背筋がぞく〳〵した。
「仕樣のないものね、間夫つてものは！」と彼女は靜かに恐怖を帶びた聲で言ふ。
「何を仕出かすか解りやしない！　あたしはこゝのシメオンと丸一年好い仲だつたけど、それア亂暴でひどい男よ。あたしの體に滿足な處つてありあしなかつたわ。體中が紫色になつちまつてねえ。それが別にどうしたつて譯でもなく、たゞ朝、あたしと一緒に部屋にはいつて、扉を閉めて苛めるのさ。腕を捻ぢあげるやら、胸をつねるやら、咽喉を締めつけるやら。そして接吻して〳〵唇から血が出るくらゐ嚙みつくのよ。どうしても彼奴はさうしないと承知出來ないの。そしてけだものみたいに××××××××××。それに有りつたけの錢は一文殘らず取り上げるし、十本入りの煙草を買ふことも出來なかつた位よ。その癖あのシメオンと來たら吝嗇漢で、何も彼もみんな貯金の通帳へ持つて行くんだからね……彼奴はね、さうやつて千ルーブルも溜つたら修道院へ行くんだつて言つてたわ。」
「へえ？」
「本當よ。彼奴の部屋を見てごらん。いつもしよつちゆう聖像の前にはお燈明があがつてゐるわ。彼奴も神樣にはほんとに信心深いのよ……やつぱり重い罪を犯してるから、あんな眞似するんだと思ふわ。あれは人殺しですもの。」
「まア、お前さんつたら？」
「あゝ、彼奴の話なんか止しませう。リューボチカ、さ、その先きを唄ひませう。」
わたしや藥屋へ行つて、毒藥買つて
わたしや自分でのみませう――
とニューラは細い聲で唄ひ始める。
ヂェーニャは腰に兩手をあて、廣間を往つたり來たりして、歩きながら體をゆすり、方々の鏡に映る自分の姿を眺めてゐる。彼女の纏うてゐるのは、短い繻子のオレンヂ色の着物で、そのスカートについてゐる眞直な深い襞が、彼女の臀部が搖れるにつれて調子よく左右に搖れる。小さなマーニカは、朝から翌日の朝までも續けてやらうといふ程の熱心なカルタ氣狂ひで、パーシャと『六十六』に夢中になつてゐる。何方も札を配るに工合の好いやうに、眞中に空椅子を置き、貰ひ札は、兩膝の間に張つたスカートの上に集めてゐる。マーニカは茶色の、極く地味な衣裳で、黒い前掛と襞のついてゐる黒い胸當をしてゐるが、この服裝が、柔らかなブロンドの頭髪と低い背丈とに好く似合つて、若く見せ、卒業まであと一年といふ女學生にそつくりだつた。

彼女の相手になつてゐるパーシャは——とても風變りな、不幸な女である。この女は娼家どころか、とつくの昔に精神病院に行つてゐるべき筈の女である。といふのは痛ましい精神錯亂のお蔭で、病的なほど飽くことなく、熱烈に、あらゆる男、彼女を好まない最も厭らしい男にまで身を委すのだつた。朋輩達はこの女にこの缺點のあるために、恰も男性に對する娼婦の團體的敵愾心の裏切りでもあるかのやうに、この女を嘲笑し幾分輕蔑さへしてゐる。そして、この女は××××××××、××××××××××××、××××言葉を無我夢中に洩すのだつたが、それは壁を通して隣室まで屢々聞えて來た。で、ニューラは、そつくりその眞似をやつたものである。パーシャが娼家に陷ち込んだのは全然貧窮のためではなく、誘惑されたからでもなく、瞞されたのでもなく、自分から好んで、恐ろしい、飽くことを知らぬ本能に隨つてやつて來たのだと言はれてゐる。しかし女將と二人の媼母は、色々とパーシャの機嫌を取り、その狂的な弱點を奬勵してゐる。といふのは、そのお蔭でパーシャは相手かまはず誰でも客を取り、そして他の女の四倍も五倍も稼ぐからである——といふ譯で賑かな祭日などには、少し景氣の惡さうなお客には全然この女を出さない、又は病氣だからといふ口實で斷つてしまふ。といふのは、常連の好い客が、もしその馴染女が他の人の敵方になつてゐると聞けば腹を立てるからである。かういふ常客がパーシャには可なりあつた。その大部分は鬱的な惚れ方ではあるが、眞劍である。大して古い話ではないが、二人の客が殆んど同時にパーシャを退かして妾にしようと申し込んだことがある。一人はグルジヤ人で、洋酒店の番頭、一人は鐵道に勤めてゐる男で、至極傲慢な、至つて運の惡い貴族で、脊が高く、房の垂れた袖口をつけ、片眼は黑い護謨の義眼をしてゐた。パーシャは情慾にかけては見界のない上に、凡ての點で受身の女であるから、來いと言はれゝば勿論誰の處へだつて行つたゞらうが、何分にもこの家の帳場では眼を光らして彼女を自己の利益のために見張つてゐたのである。彼女が間もなく發狂するといふことは、すでにその可愛らしい顏や、いつも醉つたやうな恍惚した、おとなしい、內氣らしい、そして猥らな微笑を湛へた、半ば閉ぢた眼や、いつも舐め廻してゐる、潤みを帶びて柔らかくなつた、惱ましげな脣や、短い靜かな笑ひ——白痴女のやうな笑ひのうちにほの見えてゐる。それと同時に、一般社會のテンペラメントの眞の犧牲者であるこの女は、日常生活においては至つて好人物で、愼しみ深く、まるで慾がなく、自分が人並外れて多情であるのを酷く恥ぢてゐたのである。そして朋

輩には優しく、彼女達と接吻し合つたり、抱擁し合つたり、一つの寢臺に寢たりするのが大好きである。それでもみんなは幾らかこの女を爪彈きしてゐるやうである。

「マーニェチカ、可愛いマーニェチカ！」とパーシャはマーニャの手に纏りながら愛嬌よく言ふ。「占つて頂戴な、好い娘だから。」

「うん、」とマーニャは子供のやうに脣を脹らます。「もつと骨牌をやりませうよ。」

「親切なマーニェチカ、可愛いマーニェチカ、仲好しのマーニェチカつてば！」

マーニャは讓歩して、自分の膝の上にトランプを並べる。と、ハートの家が出る。一寸した金儲けと、スペートの家で、大勢のゐる處でクラブのキングとの逢曳といふ運勢。

パーシャは嬉しさうに手を叩く。

「あら、それはあたしのレワンチックよ！　えゝさうよ。今日來るつて約束したもの。レワンチックに違ひないわ。」

「あのグルジヤ人のことなの？」

「えゝさうなの、グルジヤ人よ。あゝ、何てあの人は氣持の好い人だらう！　ほんとうにあの人はいつも歸したかないわ。こなひだあの人の言つたことを知つてゝ？　もしお前がこんな處にまだ居るんなら、お前を殺して俺も死ぬんだつて。そして眼を光らせて私を見てたわよ。」

傍に立ち止つてゐたヂェーニャは彼女の言葉をじつと聽いてゐたが、傲慢に訊ねる。

「誰がそんな事を言つたつて？」

「あたしのグルジヤ人のレワンよ。お前を殺して俺も死ぬんだつて。」

「馬鹿だね、何もグルジヤ人なんかぢやありやしないよ。ただのアルメニヤ人ぢやないか。お前さん、どうかしてるよ。」

「そんなことないわよ。グルジヤ人だとも。お前さんこそどうかしてるわよ。」

「アルメニヤ人だとも。あたしの方がずつとよく知つてらあ。馬鹿ね！」

「何故そんなに毒吐くの、ヂェーニャ？　あたし、何も先きに口出しゝやしないのに。」

「最初お前さんが毒づいたぢやないか！　馬鹿ね！　彼奴が何處の人間だつて好いぢやないの。おつ惚れでもしたの？」

「惚れたとも！」

「馬鹿だね。それからあの、ほら、帽子に徽章をつけたためつかちにも惚れちまつたのね？」

「それがどうしたのさ？　あたし、あの人を大變尊敬してるわ。大變身分のある人だもの。」

「それから帳簿係のコーリカにも？　講負人にも？　アントーシカの芋野郎にも？　でぶの役者にも？　おや、おや、この恥知らず奴が！」と突然ヂェーニャは叫び出した。「お前さんを見るのも胸糞が悪くなる。まるで畜生さ！　もしあたしがお前さんと入れ替つてそれほど薄倖だつたら、いつそ思ひ切つて、コルセットの紐で首でも縊つてゐるわよ。糞蟲め！」

パーシャは默つたまゝ、涙を溜めた眼に瞼をおろす。マーニャは彼女を庇はうとする。

「どうしたのさ、ほんとうに、ヂェーネチカ……どうしてお前さんはこの娘をそんなに……」

「えゝ、お前さん達はみんな好い人よ！」ヂェーニャはつゝけんどんに遮る。「自尊心なんてまるつ切りありやしない！下司野郎がやつて來て、まるで牛肉でも買ふやうにお前さん達を買つてゐるんだ。馬車でも傭ふやうにさ。規定の料金で、一時間の情ほしさにやつて來る。それだのにお前さん達はへと〳〵になつて、やれ『いとしい男でござる』の、やれ『神聖な戀でござる』のと、ふゝんだ！」

ヂェーニャは腹立たしく彼女達に背中を向け、腰を振り振り廣間を斜にぶら〳〵歩いて、一つ一つの鏡に映る自分の姿を、眼をしかめながら眺める。

この時、ピアニストのイサーク・ダヴィードウィチは、頑迷なヴァイオリニストを相手に頻りに骨を折つてゐた。

「さうぢやない、違ふ、イサイ・サウィチ。ちよつとウァイオリンを措いて、少し私の彈くのを聞いてゐなさい。ほら、樂旨はかうです。」

彼は一本の指で彈いて、恐ろしい山羊のやうな聲で、それに合せて歌ふ。こんな聲は樂長によくあるもので、實は彼も樂長にならうとした事があつた。

「エス——タム、エス——タム、エス——チャム——チャムと。さア、先づ私について初めの一節をやつて見なさい……さア……一、二、一……」

その練習振りをゾーヤとウェーラが一心に見てゐる。灰色の眼をした、丸ぽちやの、眉の丸い、無暗と安紅、安白粉をぬたくつたゾーヤは、ピアノに肱をついてゐる。ウェーラは體つきの弱々しい、痩せた顏付の女で、競馬の騎手の服裝をしてゐる。眞直な庇のついた圓い帽子、靑と白で縞になつた絹の短衣、白いぴつたりした乘馬ズボン、黃色い胴のついたエナメルの靴といふ扮裝である。ウェーラは、何しろ痩せた顏立で、額に垂れた髮の下に靑い輝いた眼が、曲つた神經質の、素敵に綺麗な鼻に近寄り過ぎてゐるので、全く騎手によく似てゐる。長い間、骨を折つて、やつとの事

で樂手達が調子を合せると、脊の低いウェーラは、尻を突出し、手を體からぶら〳〵離し、男裝の女だけがよくやる、小胯で滑らかな足取りで、脊の高いゾーヤの側へやつて來てずつと手を下の方へ擴げ、男のするやうな滑稽なお辭儀をする。そして二人は大滿足の態で部屋中を跳ね廻り始めた。

いつも人より先きに新しい事件を觸れ廻る機敏なニューラが、いきなり窓際から飛び下りて、急き込んで咽喉を塞らせながら叫んだ。

「ツレッペリへ……立派な馬車が來たわよ……電氣のついた……あら、みなさん……本當よ……轅のとこに電氣がついてるわ。」

傲慢なヂェーニャの外の女達はみな窓から顏を出す。ツレッペリ樣の車寄せの横には、事實馬車が止つてゐる。その新しい立派な車體は、塗りたての漆でてか〳〵してゐて、轅の先には小さな黃色い電燈が二つ點つてゐる。脊の高い、白い馬は、毛のない、薄赤い鼻柱をした、綺麗な頭を自烈たさうに振り、その場でかば〳〵脚を踏みかへ、細い耳を動かしてゐる。脊の生えた、肥滿した馭者は、膝の上に眞直に手を延ばして、丁度彫像のやうに馭者臺に腰かけてゐる。

「乘つて見たいわねえ、」とニューラは金切り聲をあげる。

「馬車のをぢさん、をぢさん、」と彼女は窓際に體を乘り出して叫ぶ。「可哀さうな娘を乘せて頂戴よう……後生だから、乘つけてよう！」

けれども馭者は笑つて、ちよつと指で合圖をすると、白い馬はその合圖ばかりを待つてゐたかのやうに直ぐその場から急歩を出して、恰好よく後に向きを變へ、規則正しい速度で、馬も馬車も馭者の廣い背中も暗の中へ消えて行く。

「まア！　だらしのない！」エンマ・エドゥアルドウナの不滿さうな聲が部屋の中で響く。「何處でそんな眞似をやつてますかね？　良家の娘が窓から乘り出して、街ちゆう聞えるやうな聲を出してさ。何んて不體裁な！　みんなニューラの仕業なんだ。いつもこのニューラのすることなんだ。」

この女は黑い服裝をしてゐるので如何にも威嚴ありげに見える。黃色つぽい、萎びた顏で、眼の下には黑い窪味があつて、頰は三重にくゝれてだらりと垂れて、搖れてゐる。抱女達は惡い事を仕出かした寄宿女學生のやうに、行儀よく各自壁を後にして椅子に掛ける。たゞヂェーニャだけはまだ鏡に姿を映して眺めてゐる。またもや馬車が二臺、向うのソフィヤ・ワシーリエウナ樓につく。ヤーマはそろ〳〵活氣づいて來る。もう一つ、馬車が敷石の上でごろ〳〵鳴つてゐたが、やがてアンナ・マルコーヴナ樓の車寄せの處で、ぴつたり音が止まる。

門番のシメオンが玄關で誰か外套を脫ぐのを手傳つてゐる。ヂェーニャは兩手で戶口の柱に捉まりながらそちらの方を覗く。しかし直ぐ後を振り向いて、歩きながら肩を窄めて、打消すやうに頭を振る。

「知らないわ。まるつきり知らない人よ、」と小聲で言ふ。「自家へはまだ一度も來たことはないわ。どつかの親爺さんよ。肥つちよの、金緣眼鏡を掛けた、お役所服を着た人よ。」

エンマ・エドゥアルドウナは騎兵の召集ラッパのやうなよく響く聲で言ひつける。

「さ、皆さん、廣間へ！　皆さん！」

つぎ〳〵に、鷹揚な足取りで廣間へ出て行く。白い露き出しの腕をして、人造眞珠の紐を素肌の頸に掛けたタマーラ、肉付きの好い、四角な顏をした額の狹いカーチャ——この女の服裝はデコルテであるが、肌は赤くて吹出物がしてゐる。それから鉤鼻で、のそ〳〵した、鸚哥色の着物を着た新米のニイナ、もう一人のマーニカ、つまり大きなマーニカとか、鰐のマーニカとかいはれる女——それから最後に——ユダヤ女の鼻のソーニカ、この女は左程綺麗でもない淺黒い顏をして、鼻が素敵に大きいのでこの綽名がついた譯だが、それでゐて、全世界の女の中で只ユダヤ女だけに見受けられる、美しい、大きな、同時に溫和しい、悲しみを湛へた、燃えるやうな潤みを帶びた眼をしてゐる。

六

慈善事業管理局の制服を着た、相當年の行つてゐる客が、のそ〳〵した、逡巡ふやうな足取りで、一歩毎に全身を少し前に曲げて、手でも洗ふやうな工合に、掌を丸い恰好に擦り合せながら入つて來た。抱女達は、それに氣が付かないといつた風に、皆きちんとして默つてゐたので、彼は廣間を通つて、リューバと並んで椅子に腰を落ち着けた。で、リューバは良家の令孃風に、こだはらない樣子をしながら、禮儀上一寸スカートをつまみあげた。

「姐さん、今晩は、」と彼が言つた。

「今……晩……は、」とリューバは斷々に答へた。

「如何ですな？」

「有難う。煙草を御馳走して頂戴な。」

「お生憎さま——煙草は吸ひませんのでな。」

「あら、さう。男の癖に煙草を吸はないなんて。ではレモン入りの葡萄酒を御馳走して下さいな。レモン入りの葡萄酒が恐ろしく好きなんですもの。」

男は默り込んだ。

「あら、吝嗇坊ねー　何處にお勤めですの？　あなたはお役人さん？」

「いや、先生だよ。ドイツ語を敎へてゐるんだ。」

「何處かでお目に掛りましたわ。お顏に見覺えがあつてよ。何處でお逢ひしたか知ら。」

「さア知らないね、往來でかね。」

「大方往來でだつたかも知れないわ……ぢや、せめて蜜柑でも奢つて頂戴よ。註文してもいゝでせう？」

彼は周圍を見廻はしながら又口を緘んだ。彼の顏は輝き出して額の吹出物は赤くなつた。彼は頭腦の中で廣間中の女を物色して自分に適當した女を搜しながらも、默り込んでゐるといふ事を氣兼してゐた。話の種とて別にないし、それに自分を無視したやうなリューバの平氣な强要が彼の氣持を焦立たせた。肥つちよのカーチャの牛のやうな大きな體が氣に入つたけれども、この女はすべての肥つちよの女がさうであるやうに、繼に掛けては至つて冷淡に違ひなからうし、その上、顏だつて大したものぢやない、と彼は頭の中で極めた。またウェーラの少年のやうな樣子と、白いズボンにぴつたりと蔽はれた、肉の締つた大腿部にも氣を惹かれた。同じく、無邪氣な女學生のやうな白いマーニャや、精力的なヂェーニャの薄黑い美しい顏も氣に入つた。で、一寸の間ヂェーニャにしようかと極めては居たが、それも唯椅子の上で氣を惹いて見たゞけの話で決心はつかなかつた。ヂェーニャの無遠慮な、人を寄せつけない、人を喰つたやうな樣子や、少しも彼に注意を拂はない點から推して、この女はこの娼家中でも我儘者で、他の女よりも客に金を使はせる女だらうと察した。ところで、この敎育家は、勘定高い男で、大勢の家族を抱へて居り、ぐうたこの男の夫としての要求のために衰弱しきつて、おまけに婦人病を患つてゐる妻もあつた。で、いろんな女學校や專門學校で敎授をしながら、絕えず祕められた淫蕩な夢心地で、その日その日を送つてゐたが、たゞドイツ流の節制と吝嗇と臆病とのお蔭で自分の永遠に興奮した欲望を辛うじて抑へ付けてゐたのである。そして、好きなビールの晩酌も斷り、馬車鐵道の乘車賃を儉約して、町を歩いて大廻りしてまで、貧乏な豫算から五ルーブルか十ルーブルをやつとのことで年に二三度捻出することが出來た。その金を彼は女に分け與へたり費つたりしたのだが、さうするのにもそろ〳〵と、味ふやうにして、その悅樂を出來るだけ長びかせて安上りにしようと努めた。しかもこの金で、不可能といつてもいい位、澤山の欲望を遂げようと思つてゐた。この男のドイツ流のセンチメンタルな魂は、グレートヘンの薄色髮をした相貌の中に、純潔と內氣と詩とをぼんやり渴望してゐ

た。が、男性として、彼は自分の愛撫で、女が×××になつて、××××、甘い××を覚えるやうにと、それを空想し、希望し、要求したのである。

然しすべての男は——極めて慘めな、片輪の、虐げられた、無力な男でも——みんなそれと同じことを獲得しようとするのであるが、女達は××××でさへ至つて冷靜な氣持を保つてゐて、たゞ聲音と身體の×××だけで燃えるやうな情熱を裝ふことを、永年の經驗で教へられてゐる。

「せめて樂師さんにボルカ(舞踊曲の名)でも言ひつけて頂戴な。皆を踊らせるんだから。」とリューバは不平らしく賴んだ。

これは男に取つて好都合だつた。音樂に合せて、みんながダンスに夜中になつてゐるの最中に立上つて、女を一人廣間から連れ出すのは、みんながしんとして妙に鹿爪らしく腰掛けてゐる時よりも遙かに都合が好かつた。

「だが、夫は幾らかゝるんだね?」と男は用心深く訊いた。

「カドリールなら五十カペイカ、普通のダンスなら三十カペイカよ。ぢや好くつて?」

「好いとも……やるさ……惜しかないよ。」と彼は氣前を見せて承知した。「こゝぢや誰に言へばいゝのかね?」

「あの、樂師さんよ。」

「いゝとも、大いに結構……樂師さん、どうぞ何かあつさりした曲を」と彼はピアノの上に銀貨をのせながら言つた。

「何をやりませうか?」イサイ・サヴィチはポケットに銀貨をかくしながら訊いた。「ワルツ? ボルカ? マヅルカ?」

「左樣……まア、その邊の處を願ひますよ。」

「ワルツよ、ワルツよ、」とダンスの大好きなウェーラは自分の席から叫鳴つた。

「いゝえ、ボルカよ!……ワルツを!……ハンガリヤンダンスを!……ワルツを!……」と、他の女達がてんでに要求した。

「ボルカをやるがいゝわ、」とリューバは駄々つ兒の口調でから極めた。「イサイ・サヴィチ、どうぞボルカをやつて頂戴。これはあたしの夫よ。夫があたしのために註文したんですもの。」と彼女は教育家の頸玉に噛り付いて附け足した。「さうでせう、ねえあなた。」

だが、彼は龜のやうに頭を體の中にすくめて、女の手からすり抜けた。と、女は別に怒つた風もなくニューラと踊り始めた。外にもう三組踊つた。ダンスする時、女達は出來るだけ腰を眞直に保ち、頭は成るたけ動かさないで、冷靜な表情を取るように努めた。かうするのが、この娼家では禮儀の一要件となつてゐた。この騒ぎの隙を見計つて、教師は小さなマーニカに近づいた。

「行かうぢやないか?」と彼は腕を丙側に丸く曲げて差出しながら言つた。

「さ、參りませう。」と彼女は笑つて答へた。

女は、中流の娼家相當に嬌めかしく裝飾された自分の部屋に案内した。編物の覆布で被はれた簞笥、その上に鏡、浩花の花束、二三の糖菓の空箱、白粉箱、傲慢な樣子をして、物に驚いたやうな顔付の、金髪の若い男の變色した寫眞、數枚の名刺などがある。縫模樣のある淡紅色の夜具で覆はれたベッドの上の壁には、土耳古王がその閨房で煙管を喫へてやに下つてゐる繪を織り出した絨毯が貼りつけてある。その外、壁には、從僕や俳優風の伊達者の寫眞が數葉あり、天井から鎖で吊した薔薇色の燈火、絨毯の覆ひの掛つた圓テーブル、山毛欅製の椅子三脚、ベッドの蔭になつてゐる床几の上には琺瑯の洗面器、同じく水差が置いてある。

「あなた、レモン入りの葡萄酒を奢つて頂戴よ。」と小さなマーニカは娼家の習慣によつて、衣服を××ながらねだつた。

「××××××から」と教育家は素氣なく答へた。「それはお前のやり方次第だ。それからの話だよ。こゝに葡萄酒なんかあるものかね。あつても精々濁酒位のもんだらう。」

「此家には上等の葡萄酒があるわよ、」と女は些かむつとして言つた。「一本二ルーブルよ。だけどそんなにけちゝゝするんなら、せめてビールでも買つて頂戴な。いゝでせう。」

「うむ、ビールか、よからう。」

「それからあたしに、サイダーと蜜柑をね。いゝでせう?」

「サイダー一本だけ。蜜柑は要らんよ。濟んでしまつたらシャンパンだつて御馳走してもいゝ。それもみんなお前の××一つだ。××××××したらね。」

「ぢや、ビール四本とサイダー二本をお願ひしますわ。好くつて? それからあたしに板チョコレートをね。いゝでせう? ね?」

「ビール二本サイダー一本、外に何もいらん。俺は掛引したりするのは嫌ひだ。もし要るんなら俺が自分で註文する。」

「ぢや、も一人お友達を招んでもいゝでせう?」

「いや、もうどんな友達も要らんよ。」

マーニカは扉口から廊下へ首を突き出して叫鳴つた。

「姐さん、ビール二本に、あたしにサイダー一本。」

セミョンが盆を持つて來て、手馴れた敏捷さで、罎の栓を抜き始めた。つゞいて鐵母のゾーシャが來た。

「これはゝゝ。好いお配偶ですこと。天下晴れての御夫婦で、お目出度うございますわ!」と彼女は祝福した。

「あなた、姐さんにビールを御馳走して頂戴な。」とマーニ

カが頼んだ。「お食んなさいな、姐さん。」

「ぢや旦那さま、この機會に御健康を祝はせて頂きます。旦那、わたし何だかお顔を存じてる様な氣が致しますが。」

ドイツ人は髭を營めたり舐つたりしながらビールを飲み、早く鵞母が出て行けば好いと、じり〳〵しながら待つてゐた。鵞母は自分のコップを下に置き、お禮を言つたと思ふと、直ぐに請求した。

「恐れ入りますが、旦那、お勘定をお願ひ致します。ビール代と玉代でございます。その方が旦那にも宜しうございませうし、手前共も好都合でございますから。」

代金の請求が教師の癪に觸つた。彼の考へてゐたセンチメンタルな部分をすつかり壞してしまつたからである。彼はひどく腹を立てた。

「實に失敬千萬な話だ！　俺がこゝから逃げ出すとでも思つてるのか。それにまた、お前達は人間の見境ひがつかんのか。いゝかね、この俺はな、制服を着てゐる相當な人間だぞ。浮浪人などゝは譯がちがふ。何んていふ無禮だ！」

鵞母はやゝ讓歩した。

「まアそんなに御立腹なさらないで、旦那。勿論玉代はこの女に直接お渡し下さいまし、どうぞお怒りなさらずに。私の考では、あの娘は此家では立派な娘なんでございますよ。

では何卒、ビールとサイダーの方だけ頂かして下さいまし。私も女將に勘定書を出さなけりやなりませんので。ビールが二本、五十カペイカづゝで——一ルーブル、サイダーが卅カペイカ——〆めて一ルーブル卅カペイカでございます。」

「何？　ビール一本五十カペイカ？」ドイツ人は呆れた。

「何處のビヤホールだつて十二カペイカで手に入るよ。」

「では、その方がお安けれア、どうぞビヤホールへいらしつて下さいまし。」ゾーシャはむつとなつた。「上品な家へおいでになつたからには、五十カペイカが規定のお値段でございますからね。決して餘分には頂きません。あ、さうさう、それで結構ですよ。二十カペイカのお釣錢でございますね？」

「左樣、もちろん、お釣錢だ、」と教師は力を入れて言つた。

「それから、もう誰も來ないやうにして呉れ。」

「えゝ、えゝ、承知致しましたとも。」とゾーシャは扉口で言つた。「どうぞお好きなやうに。お樂に。では、御ゆつくりとお樂しみなさいまし。」

マーニカは、鵞母の出て行つた後の戸を閉めて鍵をかけ、ドイツ人の膝に腰を掛けて、露き出しの腕をドイツ人に卷きつけた。

「お前はもう長いこと此處に居るのかい？」と彼はビール

を咬りながら訊ねた。彼は、これから始まらうとする戀の眞似ごとが、或る精神的な接近、もつと親密な交誼を要求するといふことをぼんやりと感じた。だから自分の×××しさにも拘らず、娼婦と向き合つた場合、大抵の男が交すやうなお定りの話を始めた。こんな話はまた娼婦にも、殆んど機械的に、何等の苦痛も興味も憎惡の念もないのに、古い定り文句で嘘を吐かせるのである。

「ついこの間よ。やつと三ケ月目ですわ。」

「年は幾つかね？」

「十六。」小さなマーニカは五つ減らして嘘をついた。

「ほう、素敵に若いんだね！」とドイツ人は驚いて、俯向いて唸りながら長靴を脫ぎ始めた。「だが、どうして此處へ來るやうになつたのかね？」

「或る士官があたしの純潔を奪つてしまつたんですの……まだ故郷に居た時分にね。ところがお母さんと來たらそれはやかましいんですの。もしお母さんが知らうもんなら、自分の手で私を絞め殺したかも知れないわ。それで、家を逃げ出して、こゝに來るやうになつたんですの……」

「お前はその士官を愛してゐたのか？　それが最初の男だつたのか。」

「だつて愛してゐなけや關係などするものですか。それア

惡い人でね、結婚するつて約束しときながら、××××××××しまふと、見捨てつちまつたんですの。」

「どうだね？　最初は恥かしかつたかね？」

「それは恥かしかつたわ……あなた、どう？　電氣は點けといた方がよくつて？　それとも暗い方がいゝ？　少し暗くしませうか。よくつて？」

「どうだい？　こゝにゐて退屈しないかね？　お前、何んて名前だい？」

「マーニャつての。それア退屈に極まつてますわ。それは酷い生活ですもの！」

ドイツ人は女の唇に强く接吻してから、又訊ねた。

「で、男を愛してるかね。お前の氣に入つた男があるかね？　お前に滿足を與へるやうな男が？」

「ないことはないわ、」とマーニャは笑ひ出した。「あたし、殊にあなたのやうな感じの好い、肥つた方が好きなの。」

「好きだつて？　え？　なぜ好きだね？」

「何となくたゞ好きなの。あなたは人好きのする方なんですもの。」

ドイツ人はビールを咬りながらしばらく考へ込んでゐた。それから、大抵の男が、女の肉體を一時的でもすつかり自分の自由にしたいといふ下心から、かういふ場合に娼

婦に言ふやうなことを言つた。

「ねえ、マリヘン、お前だつて非常に俺の氣に入つてゐるんだ。俺の世話になる氣はないかね？」

「でも、あなたには奥さんがありますもの。」と彼女は彼の指環を弄りながら言つた。

「あるにはあるさ。だが、同棲はしてないんだよ。病身で、妻としての勤めも出來ないんだ。」

「可哀さうに！　あなたがこんな處へ出入りしておいでなのをお知りになつたら、屹度お泣きになるわ。」

「いやそんな話は止さう。俺はな、しよつちゆうお前みたいな娘を捜してゐたのさ。溫和しい綺麗な娘をね。俺は相當に暮してゐる人間だよ。お前に食事附、燃料附、電燈附の貸間を見つけてやらう。そして小遣として月に四十ルーブルやらう。どうだ、來るかい？」

「行くどころですか、行きますとも。」

彼は女をきつく接吻した。しかし密やかな心配が直ぐ臆病な胸に閃いた。

「病氣は無いだらうな？」と彼は敵意を含んだ聲で訊ねた。

「えゝ、そりや大丈夫よ。土曜日毎に、檢査があるんですもの。」

五分ほど經つてから彼女は男から離れた。そして歩きながら稼ぎの金を靴下の中に挟んだが、迷信的な習慣で、その金に唾を吐いた。女には口で言ふ程の味も素氣もなかつた。で、ドイツ人はマーニャの冷淡ぶりに不滿を覺えて、鶺母を寄越すやうに言ひつけた。

「姐さん、私の夫があんたに御用ですとさ。」マーニャは廣間にはいり、鏡の前で髪の形を直しながら、かう言つた。

ゾーシャは出て行つた。そして戻つて來るとパーシャを廊下へ呼び出した。それから今度は獨りで廣間へ戻つて來た。

「お前さん、どうしたの、マーニャ。お客の氣に入るやうにしなかつたんですね？」と彼女は笑ひながら訊ねた。「お前さんのことで不平を言つてますよ。『あれは女ぢやない、丸太ン棒だ、氷の塊りだ』なんて。で、代りにパーシャをやつときましたよ。」

「厭な奴！」とマーニャは顔をしかめて唾をはいた。「厚かましくいろんなことを吐かしあがつて。俺が接吻する時、お前は××があるか、××××なるか、だつてさ。妾にしてやるだつて……老いぼれの犬ころ奴！」

「誰だつて其樣事を言ふよ。」ゾーシャは平氣な顏で言つた。

しかし朝から機嫌の惡いチェーニャは俄かにむら〳〵と激した。

「あ、彼奴は下司野郎さ、」と彼女は顏を赤くし、兩手を脇腹に强く突つ張つて叫んだ。「あたしがあの厭な親爺を客に取りでもしたら、彼奴の耳を捉まへて、鏡の前へ曳ずつて行つて、あの厭らしい面を見せてやつたのに。どうだ？　好い男かつて？　お前が××××××××××××、眼をすが目にして、女の××××××××××××言つたりしてる時は、もつと立派だらうよ。それにお前はその一留でもつて、お前のお菓子のために私が×××して、お前の汚らしい愛情で××になつて眼を釣りあげるやうにしたいのかい。畜生！　彼奴の横つ面を血の出るほど！」

「まア、チェーニャ、お止しよ、ほんとに。」氣の小さいエンマ・エドゥアルドヴナは彼女の亂暴な調子を心配してとめた。

「止めませんよ。」と彼女は鋭く遮つた。が、口を緘んで小鼻を怒らせ、激してやゝ暗くなつた美しい眼に炎をたゝへて、腹立たしげにその場を立ち去つた。

七

廣間は次第に一杯になつて來た。ずつと前からヤーマ中に知られてゐるワーニカ・フスタニカがやつて來た。この男は脊の高い、痩せこけた、鼻の赤い、胡麻鹽頭の老人で、山番の制服を着、長靴をはいて、脇のポケットからはいつも木製の物差が出てゐた。夜であらうと晝であらうと、球突場のある酒場の常連になつて、いつも生醉ひで、冗談や洒落や名句などを吐き散らして、門番や鶺母や抱女などに戲けながらその日を送つてゐた。何處の娼家でもみな——女將から女中に至るまで——氣さくな、多少輕蔑した、が、惡意のない嘲笑の氣味でつき合つてゐた。彼とても偶には役に立たないでもなかつた。例へば抱女から戀人への手紙を渡したり市場や藥屋へ一走りしたりした。遠慮のない口輕なのと、昔から自尊心を失くしてゐるお蔭で、時偶赤の他人の中に混つてその費用を嵩ばらせる。然しその時借りた金は他所へ持つて行かずにその場で女に費消する——そして煙草錢を少し殘すか殘さないといふ風だつた。といふ譯で人々は長い間の習慣によつて大目に見てゐたのである。

「あら、ワーニカ・フスタニカがやつて來たよ。」とニューラが報告した。もうその時彼は門番のシメオンと仲よさゝうに手を握つて挨拶してしまつて、制帽を小意氣に横つちよに被つた脊の高い姿を廣間の入口に見せた。「さア、ワーニカ・フスタニカ、早くいらつしやいな。」

「お目に懸る光榮を有します。」ワーニカ・フスタニカは早速小腰を屈めて、軍隊式に片手を帽子の庇に擧げた。「當地愉快樓樞密貴賓、德利公爵、果酒伯爵、進止男爵です。ベ

ートウエン君、ショパン君！」と彼は樂師に挨拶した、「一つどうか、『勇壯にして名譽あるアニシーモフ將軍、一名廊下騷動』といふオペラの中から何かやつてくれたまへ。や、今晩は、家内掃除大臣ゾーシャ。あは、復活祭にだけ接吻なさるんですか？　書き取つておきませう。いよう、これは俺の可愛いタマーロチカ！」

かういふ工合にみんなの女に冗談や皮肉を言ひながら、最後に肥つちよのカーチャの隣りに腰かけた。カーチャは自分の肥つた片脚を彼の膝の上にのせ、自分の膝に肘をつゝ張り、掌で顎を支へ、平氣で、この測量師が煙草を卷くのをぢつと眺めてゐる。

「ほんとによく飽きないことね、ワーニカ・フスタニカ。しよつちゆうその山羊みたいな脚を曳ずり廻はしてさ。」

ワーニカ・フスタニカは、すぐに頭蓋骨の皮を動かして、詩を唄ひはじめた。

煙草さん、わしが內緒のお友達！
どうしてお前を好かずにゐられう。
みんながお前を吸ひ出したのも
そりや、氣まぐれからぢやない。

「ワーニカ・フスタニカ、あんたは直ぐあの世へおさらばするんぢやないの？」とカーチカはあつさり言つた。

「それはわかりきつた話だよ。」

「ワーニカ・フスタニカ、何かもつと面白いことを歌つて頂戴。」とウェールカが賴んだ。

そこで彼は溫和しく、すぐ變な恰好で立ち上つて、朗吟を始めた。

空に滿ちたる星の數
算へ盡さん術もなし。
術ありと風は言ふなれど
いかで算へ盡さるべき。

牛蒡花咲き、鷄歌ふ——

こんな風に戲けながらワーニカ・フスタニカは夜となく晝となく娼家の廣間に坐りこんでゐた。女達は何かしら或る精神的な共鳴によつて、この男を自分達の仲間のやうに見做してゐた。時によると、一時の面倒を見てやつたり、自腹を切つてビールやウォーツカを買つてやつたりした。

この男よりやゝ後れて、理髮師の大一座が崩れ込んだ。この日は丁度この連中の公休日だつた。彼等は騷々しく、陽氣で、こんな處——娼家でさへ、些細な金錢上の勘定のことや、表向きの收入、內緒の儲け、主人のことや、主人の妻君の事などの話を止めなかつた。かういふ連中は餘程の放蕩者で、嘘吐きで、未來に對する大きな野心、例へば

伯爵夫人の男妾にならうといふやうな大それた望みをもつて居る連中だつた。そして可なり世智辛い儲けを出來るだけ大きく利用したいと思つてゐたので、ヤーマ中の娼家を殘らず素見することにしたのである。が、ツレッペリ樓だけは餘り豪奢すぎるので柄を考へて寄らないことにした。しかしアンナ・マルコーヴナ樓へ來るが早いか、すぐにカドリールを註文して踊つたが、殊に第五節、卽ち男舞踏者が獨りで踊る件などは、まるで本物の巴里つ子のやうに、チョッキの脇に親指を挾んで踊つた。が、それ以上、女と一緒に殘らうとはしないで、娼家を殘らず一廻りしてからまた寄らうと約束した。

なほこの外に官吏達、エナメルの靴をはいた縮毛の若い男達、學生數名、それから女將や他の客の眼に自分の威信を傷つけることをひどく怖れてゐる數名の將校がやつて來てすぐ歸つた。段々と廣間は、騷々しい一種異樣の光景を呈して來て、居合はす者は最早間の惡い思ひはしなくなつて來た。入り浸りになつてゐる、鼻のソーニカの戀人がやつて來た。この男は每晩のやうにやつて來て、自分の惚れたソーニカの側に數時間腰かけてゐて、どんよりとした東洋的な眼で彼女を眺め、溜息を吐き、うつとりとなり、また彼女が娼家にゐることや、土曜日の神聖を汚すことや、禁制の豚肉を食べてゐることや、家庭と偉大なるユダヤ敎會から遠ざかつてゐるといつたやうなことで、彼女を相手に騷動を演じたりした。

すると——これはよくあることだつたが——鴇母のゾーシャが騷ぎの中を縫うて此男に近寄り、唇を歪めて言つた。

「旦那、どうして坐つてばかりおいでゝすか。お聲でも溫めていらつしやるんですか？　あつちへいらしつて女の子を相手にお遊びなつたらどう？」

このユダヤ人とユダヤ娘の二人はホメル生れで、正しく優しい熱烈な愛のために、彼等の神によつて創造られたものに相違ない。しかし多くの事情、例へばその故鄕に起つたユダヤ人虐殺、貧窮、失意、恐怖などが一時二人を引裂いた。しかしながらこの藥學生ネイマンが大なる困難、努力、屈辱を堪へ忍んで、この土地の或る藥屋に見習の口を搜しあて、愛する女を搜し廻つたほど、その愛は偉大だつた。この男は熱狂に近いほど、眞に信仰の正しいユダヤ人だつた。彼はソーニカが母親の手によつて人買ひに賣られたことを知つた。それから女が轉々として人手から人手へ賣り渡されたことに關して、恥づべき醜惡なことを、細かに知つた。そしてこの男の敬虔にして潔癖な、眞のユダヤ魂は、これらの事を考へては蹶き苦しんだ。しかし、愛

は何物よりも強かつた。さういふ譯でこの男は毎晩アンナ・マルコーヴナ樓の廣間へ現はれるのだつたが、もし何とか才覺して貧しい收入の中から思ひ掛けない金を割り出すことが出來るとソーニカを呼んで彼女の部屋へ拉れ込んだ。だがこれは男に取つても女に取つても喜びではなかつた。瞬間的な幸福——お互ひの肉體を占有し合ふこと——が濟むと、二人は泣いたり、お互ひに非難し合つたり、ユダヤ氣質の芝居がゝりの身振りで喧嘩したりした。いつもこんな訪問の後では、鼻のソーニカは赤く、脹れぼつたい眼瞼をして廣間へ戻つて來るのだつた。

けれども男は大抵金を持つてゐなかつた。で、夜通し自分の戀人の身近く坐り込み、偶然、客がソーニカを呼んだりした場合は、ぢつと我慢して、嫉妬の氣持を抱きながら女を待つてゐた。そして女が戻つて來て彼の隣りに腰を掛けると、彼は人の注意を惹かぬやうに努めながら、そつと、頭も振り向けずに、絶えず女に非難を浴びせかけた。すると彼女の美しい、潤んだユダヤ式の眼には、かういふ時にはいつも、殉教者のやうな溫和しい表情が浮んでゐるのだつた。

そこへ眼鏡屋に勤めてゐるドイツ人の大きな一團がやつて來た。ケレシュコーフスキイ魚類食糧品店の番頭の一組も來た。ヤムキで有名な二人の若者——二人とも禿頭で、禿の周圍に疎らな柔らかな毛が生えてゐる——こゝいらで帳簿係のコーリカ、歌ひ手のミーシカと呼ばれてゐるのも來た。眼鏡屋連中のカルル・カルロウィチや看屋連中のウォローヂカ同樣、この二人も非常に歡迎され、喜ぶやら、叫ぶやら、接吻するやらで、大いに二人の自慢れをそゝつた。お轉婆のニューラは玄關へ飛んで行つては、來た者を確めて、例の通りいそ〳〵と報告した。

「ヂェーニカ、お前さんの旦那が來たわよ。」

とか、または、

「マーニカ、お前さんの好い人が來たわよ。」といふ工合に。

歌ひ手のミーシャは——その實、歌ひ手でも何でもないのだが——藥品倉庫の持主で、部屋へはいるが早いか、顚へ聲で、途切れ勝ちの、山羊のやうな聲で唄ひ出した。

まこ——とをこ——そ、知——れ！

君は——あけ——ぼ——の……

これはアンナ・マルコーヴナ樓に來る度に、彼のやる十八番だつた。

殆んどのべつにカドリール、ワルツ、ポルカが演奏され、踊られた。タマーラの戀人であるセーニカもやつて來た。だが今日はいつになく、勿體振らず、「破產もせず」、イサイ・サウィチに埋葬曲も註文せず、抱女達にチョコレートも奢

らなかつた。……どういふ譯か陰氣な顏をして、右足は跛を曳き、出來るだけ人目を避けるやうに努めてゐた。大分仕事が思はしく行かないのに違ひない。彼は歩きながら頭を一寸動かして合圖し、タマーラを廣間から呼び出して、二人とも彼女の部屋へ姿を消した。俳優のエグモント・ラヴレッキイもやつて來た。髯を剃つた、脊の高い、宮廷の小使めいた男で、下品な、高慢ちきな顏をしてゐた。

食糧品店の番頭達は、若者らしい熱心さとヘルマン・ホッペの禮法獨習書の中に書いてある上品さを保つて踊つた。この點では女達も彼等の意向に應じた。男も女も、出來るだけ身體を動かさず、兩手を垂れ、頭をぐつと持上げて傾げ、幾らかツンとした、同時に疲れて弱つたやうな樣子で踊るのが上品で社交的だとされてゐた。節と節との切目切目では、退屈なやうな、氣にかけない風で手巾を振らなければならなかつた。……一と言で言へば、彼等は自分達が最も洗煉された社會に屬してゐて、踊るのも友達として一寸した御相伴ぐらゐに謙つてするのだといふ樣子をしてゐた。それでもケレシュコーフスキイの番頭連は、汗が流れるぐらゐ一生懸命に踊つた。

もうあちこちの娼家で二つ三つ騷動があつた。血みどろになつた一人の男が、利鎌のやうな月の蒼白い光に照らされて、血のために顏は黑く見えてゐるのだが、本人は街路を走りながら惡口を叫鳴つて、自分の傷にはちつとも注意を拂はず、喧嘩の折失くした帽子を搜してゐた。小ヤムスカヤでは、參謀部の書記が水夫長と喧嘩した。疲れたピアニストやヴァイオリニストは、機械的な習慣に依つて夢うつゝで演奏してゐた。これはもう夜明け間近の時分であつた。

ところが、全然思ひがけもなく、アンナ・マルコーヴナ樓へ、大學生七名と、助敎授と、探訪記者とがやつて來た。

八

探訪記者を除いた他の連中は、みんな知り合ひの令孃達と一緒に五月祭を催して、早朝から終日遊び暮したのだつた。小舟に乘つてドニェプル河を漕ぎ廻つたり、向う岸の川楊の香のぷん〳〵する繁みの中で粥を煮たり、男と女と交替で流れの速い、暖かい水の中で泳いだり、手製の香入りの火酒を飮んだり、節廻しのいゝ小ロシヤの唄を歌つたりした。そして、小舟のへりに波が惱ましく樂しげに打ち寄せる、暗い廣い河面に、星の影や、雷燈の光の顫へがちな銀色の縞模樣や、澪標のこくり〳〵と搖れる火影が、ちらちら映る日暮方、彼等は街の方へ歸つた。そして陸へあがつてからも、オールを漕いだために皆の掌はほてり、手足

の筋肉は快く痛み、體中が幸福な勇ましい疲れに溢れてゐた。

それから令孃達をその家に送り届けて、潜戸や車寄の處で長い間、熱心に、まるで喞筒の柄でも動かすやうに大きく握手したり、笑つたりして、別れを告げたのだつた。

愉快に騒いで、むしろ少々騒ぎ過ぎて疲れた程であつたが、しかし青年らしく天眞爛漫に、酒に醉つ拂ひもせず、珍しいことに、お互ひに侮辱したり、嫉妬したりすることもなく、又は口には出さない不滿なやうな氣持は微塵もなくて一日を過した。勿論このやうにゆつたりした氣持になれたのは、太陽や、清々しい河風や、草や水の樂しい呼吸や、水浴みや、舟を漕ぐときの自分の體の頑健さと敏捷さに對する喜ばしい感覺や、知り合ひの家庭の、賢い、優しい、純眞な、美しい令孃たちのお蔭が大分あつた。

けれども殆んど彼等の意識には上らなかつたが、その情火——妄想でなく、若い悪戯好きの牡が持つてゐる普通の健全な、本能的な官能——は、彼等と娘達との手が偶然に觸れ合つた時の感じや、娘達が舟に乘つたり陸へ飛びおりたりする際に手傳ふ時の、友達としての親切からの抱擁や、太陽で暖められた娘達の着物の柔らかな匂ひ、河の上で娘達が揚げる娟びるやうな驚きの叫び、サモワールの周圍の青草の上に無遠慮に寢そべつた娘達の姿、それに野遊びや郊外散歩や舟遊びなどに有り勝ちで避けられない色々の無邪氣な我儘、さういつたやうなもので、彼等の情火は知らず識らず焚きつけられたのである。かういふ際は、人間の内部には、人間の心の測り知られぬ奥底には、土や草や水や太陽などに對する無關心な接觸によつて、古い、美しい、自由な、だが人間によつて醜くされ、脅やかされてゐる野獸が、祕かに眼を覺すものである。

さて、夜中の二時、居心地のいゝ學生向きカフェー『雀』が閉ると、彼等八人の同勢は、アルコールや多量の食べ物のお蔭で昂奮して、煙草の煙が濛々と立罩めた蒸れた地下室から街路へ出た。それは甘い、落着きのない暗い夜で、空と地上には誘ふやうな灯がゆらめき、温かい醉つたやうな空氣が充ちて、その空氣で彼等の鼻は貪るやうに膨らんだ。何處からか眼には見えない庭や花園から、かぐはしい匂ひが漂うて來る。すると各自の頭はほてり、心はぼんやりした憧憬に充たされて、靜かにうつとりと蕩けた。一と休みしたので、一行は愉快に誇らしく、筋肉の隅々迄も滿ち渡る新鮮な力、深い呼吸、血管の中を流れる紅い彈力のある血液、四肢のしなやかな自由さなどを感じた。そして——口にもそれと出さず、頭でも考へず、意識もせずに——一行はこの夜に惹きつけられて、眠りに陷ちた森の中を着物もつけないで駈け廻り、露をしつとり帶びた草の中に何者かの足跡を嗅ぎ廻つて、大聲を揚げて牝を呼び寄せたいやうな氣持になつた。

かうなつてはこの儘解散するのは至極困難だつた。一緒に送つた全一日の氣分が、彼等を習慣的な、引離すことの出來ない一と群に固めてしまつたのだ。もし一人でも一行から拔けると、今迄旨く調和してゐたバランスが破れて、その後は到底回復することが不可能だといふ氣がした。で、一行は、折から來かゝる通行人を邪魔しながら、カフェーの地下室の出口の邊りで、歩道をぐづ〳〵ぶらついてゐた。そして一夜の興を盡すにはこの上何處へ行つたがよからうかと勿體らしく相談を始めた。ティヴォリ公園へは遠過ぎるし、おまけに入場券を買はなければならないし、食堂の値段も法外に高い。而も演奏はとつくに終つてゐる。ウォローヂャ・パーウロフは自分の家へ來たらどうかと勸めた。ビール一打とコニャークが少しあるといふのである。けれども一行にして見ると、夜中に他人の家を訪ねて、拔足差足で階段を登り、絶えず忍び聲で話し合ふといふのは餘り感心しない。「どうだい？　諸君……いつそのこと娟妓達の處へ遊びに行かうぢやないか。それが一番いゝよ。」と年上の學生でリホーニンといふ眷の高い、一寸猫背の、むづかしい風貌の、少しばかり顎鬚の生えた男が、思ひ切つて言つた。この男は主義に於ては、理論的アナーキストだが、趣味から言ふと——撞球、競爭、カルタの熱心家で、相當凄い腕を持つてゐる。現に前の晩も商業クラブで賭博をやつて、千ルーブルばかり儲け、その金がまだこの男の懐でうづ〳〵してゐた。

「何だつて？　あ、さうだ、まつたくだ。」と誰かが合槌を打つた。「どうだ？　諸君は？」

「それはつまらん。それぢや底なしの遊蕩だ……」と別な男が、取つてつけたやうな分別ぶりで、いゝ加減な疲れた口調で言つた。

すると、他の男がわざと欠伸をしながら言つた。

「いつそのこと、諸君、家へ歸らうぢやないか。あ、あ、あ……眠い。今日はこれで十分だよ。」

「夢の中で毛皮の外套が縫へやしまいし、」とリホーニンが輕蔑した樣に言ふ。「先生、貴方はおいでになりますか。」

だが、助教授のヤルチェンコは絶對に反對を唱へ、本氣で腹を立てたやうだつた。その癖、暗い心の隅に何かひそんでゐるのを、彼自身も恐らく知らなかつたのである。

「構はんで呉れ給へ、リホーニン。僕の考へでは、諸君のやらうとしてゐることは、明らかに陋劣極まることだよ。

今日は一日美しく、樂しく、無邪氣に遊んだんだから——今更醉つ拂つた畜生みたいに泥水の穴へはいり込む必要はないぢやないか。僕は行かないよ。」

「ですがね、私の思ひ違ひでないとすれば、」とリホーニンは落着いて厭味を言つた。「まだやつと去年の秋時分、私達は或る未來のモムゼンと一緒に、或る所で氷のはいつたクリュションをピアノの中に注ぎ込んだり、ブリャート民族の神の眞似をしたり、腹踊りをやつたりしたやうに記憶してゐますがね……」

リホーニンの言ふ通りだつた。ヤルチェンコは學生時代も、その後大學に留まるやうになつてからも、極めて戲けた輕薄な生活を送つてゐた。何處の酒場でも、カフエー・シャンタン、その他の娛樂場でも、彼の小さな肥つた、丸々した姿、化粧した戀の神に見るやうな、ふつくらした紅い頰や、輝いた、潤みを帶びた、人の善さそうな眼は、よく知られてゐた。そして彼の早口で喋べる口調や、きやつ〳〵いふその笑聲をみんな覺えてゐた。

同僚達は、一體この男に何時勉強する暇があるのか、突き止めることが出來なかつた。それでゐてすべての試驗や論文は立派にやつてのけ、一年生の時分から教授連の眼に留つた。そして近頃になつてヤルチェンコは今迄の友人や飮仲間から少しづゝ遠ざかり始めた。そしてつい先頃、教授連と重要な關係が結ばれて、來年はローマ史の講義を託された。そこで彼はもう屢々話の中で「我々學者は！」といふ助敎授仲間の流行語を使つた。そして、學生の馴々しさや、餘儀ない交際、色々な集會、反對運動、示威運動への義務的參加、かういふことは彼に取つて不利益な、困難な、いや寧ろ不愉快なことにさへなつた。けれども彼は靑年の間に於ける聲望の必要なことを知つてゐた。それがために、以前の仲間とすつぽり手を切つてしまふ決心はつかないのだつた。だが、リホーニンの言葉は彼をむつとさせた。

「それはお互ひ、子供の時分はいろんな事をやるだらうぢやないか。砂糖を盜んだり、ズボンを汚したり、甲蟲の羽を捥いだり、」とヤルチェンコは激してむせりながら言つた。「しかし何によらず物には限度、程度といふものがある。僕は勿論、諸君に忠告したり、敎へたりする資格はない。然し物には秩序といふものがなければならない。賣春が人道上最大の不幸であることは吾々の同感する所であり、同時に、この賣春に就いて罪ある者は女ではなくして我々男性である點も同感である。といふのは需要から供給が生れるからだ。それで、自分がこんな主張を持つてゐるにも拘らず、一杯餘計に酒を飮んで、娼婦の處へ行くとすれば、僕は三重の卑しいことを行つたことになる。つまり、自分が汚れた金を與へて最も忌むべき奴隷の所業に陷れた不幸な無知な女に對して、それから人道に對して、卽ち一時間乃至二時間の間、自分の情慾のために醜業婦を購ひ、それに依つて賣春を是認し援助したことに對して、それから最後に、自己の良心及び思想に對してゞある。また理論に對しても同樣だ。」

「ヒュー！」とリホーニンは口笛を長く吹いて、傾げた頭で拍子をとりながら、陰氣な調子で韻をふんで詩を口吟んだ。「わが哲學者はいつもながらの警言をおつしやる。繩は普通の紐なりと。」

「無論、交ぜつ返すほど容易いことはないさ、」とヤルチェンコは素氣なく答へた。「僕の考へでは、悲しむべきロシヤの社會の中で、この思想の散漫と腐敗ほど悲しむべき現象はない。今、我々は、なアに、娼家へ自分が行かうと行くまいと同じことだ、一度ぐらゐ行つたからとて良くも惡くもならないと、かう自分に對して言ふかも知れない。だが、五年も經つたら我々はかう言ふだらう。勿論、賄賂つて奴は忌むべきです、だが御存じの通り、子供が、家族がありまして……とね。それと同じ理窟で、十年も經つたら、我々は元々通り立派なロシヤの自由主義者のまゝでゐて、個人の自由を慨嘆したり、輕蔑してゐる無賴漢に對して腰をかがめ、その玄關口をうろつき廻つたりすることだらう。『狼と一緒に住んでゐるので、やつぱり狼のやうに吼えない譯には行きませんので。』などと、追從笑ひしながら言ふだらう。いや、或る大臣が、ロシヤの學生を未來の課長と呼んだのも實に尤もな次第さ。」

「或は未來の敎授つてね。」とリホーニンが喙を入れた。

「しかし、最も肝要な點は、」とヤルチェンコは、この當擦りを聞き流して言葉を續けた。「最も肝要な點は、今日みんなが河の上で……又その後、向う岸で……あの可愛らしい立派な令孃達と一緒にゐる處を僕が見たといふことだ。諸君は實に注意深く、規律正しく、親切であつた。然るに別れを告げるや否や賣笑婦に惹きつけられてゐるんだ。みんな自身でちよつとでも想像して見給へ、我々が自分の姉妹の所へお客に行つて、その歸りにヤーマに立寄つたと……どうです？　こんな想像は愉快ですか？」

「まつたくです。だが社會一般の情慾に對する何等かの安全瓣は存在しなければなりませんね？」ポリス・ソバーシニコフがかう改まつて言つた。この男は脊の高い、少し傲慢な處のある、氣取つた靑年で、肥滿した臀を匿し切れない程の短いリンネル服、騎兵型の流行ズボン、廣い、黑い

紐のついた鼻眼鏡、プロシャ型の帽子、こんなもので餘計氣障つぽく見えた。「女中の愛を利用したり、隅つこで他人の妻と不義を働く方が正しいとでも言ふのですか。もし私に女が必要だとしたら、私はどうすればいゝんですか。」

「なに、女なしでも行けるよ。」とヤルチェンコは忌々しげに言ひ放つて、一寸手を振つた。

そこへ、友達仲間でラムゼスと呼ばれてゐる學生が仲にはいつた。この男は黄色つぽい、薄暗い顔の、鈎鼻の、脊の低い男である。髯を剃つた顔は、段々禿げ上つて行く兩方の廣い額際と、陷込んだ頬と尖つた顎のお蔭で、三角に見えた。この男は學生としては餘程風變りな生活をしてゐた。同窓の者が、政治、戀愛、芝居、少しばかりの學問、こんなものに交る〳〵身を入れてゐる最中に、この男は、凡ゆる民事訴訟の研究、財産、家族、土地、その他の事件の訴訟における詐欺的技巧、大審院判決の研究とその論理的解剖に沒頭してゐた。或る年は金に窮した結果でなく、全然自分から好んで貴金屬商の番頭に住み込んだ。或る時は仲裁裁判官の祕書となつたり、卒業前である去年一年は、この土地の新聞に市會記事を書いたり、製糖シンヂケート事務所の祕書の助手などといふ地味な仕事もやつた。そしてそのシンヂケートが、契約に背いて餘計な砂糖を賣り出したバスカコフ大佐といふ組合員に對して訴訟を起した際、ラムゼスはその後この事件に就いて高等法院が下した判決を、その當初に先見し、極めて明確にその理由を説明したのだつた。

彼は比較的若年ではあるが、可なり有名な法律家達も一目も多少は見下し氣味であるが——その意見を傾聽した。ラムゼスをよく知つてゐる者は誰でも、彼が出世するといふことを疑はなかつた。それにラムゼス自身も三十五歳までには、特に民事關係の辯護士としての活動だけで百萬は儲けて見せるといふ自信を匿さなかつた。友人達はこの男を屢々集會の會長や級長に推薦したけれども、暇がないといふ口實でいつもその名譽を辭退した。けれども同僚の仲裁裁判に參加することだけは避けなかつた。そして彼の理路整然たる論證は、事件を平和的に解決する驚くべき力をもつてゐて、當事者の兩方とも滿足さした。彼もヤルチェンコ同樣、青年學生間に於ける聲望の必要なことを知つてゐた。で、みんなに對して多少輕蔑した見下すやうな眼をもつて見てはゐたものの、それを鋭敏な、賢さうな、活活した唇の、一寸した動きにも現はさなかつた。

「どうあつても破戒させようなんて、誰もあなたを誘惑しやしませんよ、ガヴリーラ・ペトローウィチ、」とラムゼスが

なだめるやうに言つた。「話はごく分りきつた事ですから、何もそんなに昂奮なさつたり憂鬱におなりなさらなくともいゝでせう。ロシヤの青年紳士の一組が溫和しく仲よく夜の殘りを過ごして、愉快をつくし、歌を唄ひ、何ガロンかの酒やビールを攝取しようといふのです。ところが最早、娼家以外の家はみな閉つてゐます。そこで！……」

「そこで賣笑婦の許へ？　娼家へ？」とヤルチェンコは輕蔑するやうに、敵意をもつて遮つた。

「といつた處でね。或る哲學者を人々が侮辱しようと考へて、食事の際、どこか樂隊の傍へ哲學者を掛けさせたことがあります。すると哲學者が云ふのには、これこそ後なる者が先きになる確かな方法だ、と。で、私は最後に繰り返します。もしあなたの良心が、あなたの言葉を借りて言へば、女を買ふことを許さないならば、娼家へ行つても、御自分の純潔を汚さずにお歸りになることが出來るでせう。」

「君は餘り附會けすぎるよラムゼス、」とヤルチェンコは不滿さうに言つた。「僕は例の町人達を思ひ出すよ。まだ暗い間から死刑見物に出掛けて行つて居りながら、我々が此處にゐるのは別に何の爲めでもない、我々は死刑に反對だ、これはまつたく檢事と死刑執行人との仕業だ、といふあの町人達をね。」

「うまく言つたものですね。一面の眞理はありますよ、ガヴリーラ・ペトローウィチ。だが、その比較は我々に對しては何の關係もありませんよ。ねえ、重い病氣だと、本人を診ないでは治療出來ないぢやありませんか。今かうやつて往來に突つ立つて通行の妨害をやつてゐる我々はみな、いつかはその仕事の上で、この怖るべき醜業婦問題、言ふまでもなくロシヤの醜業婦問題に逢着するに相違ありません。リホーニンや私やボーリャ・ソバーシニコフやパーウロフなどは法律家として、ペトロフスキイとトルプイギンは醫者として逢着します。尤もウェリトマンは、數學といふ特殊の專門ですが、これにしたつて教育家とか、靑年指導者とか、または人の父親とかになることもあるでせうから。それで、もし妖怪で人を脅かすのなら、先づその前に自分でそれを見屆けて置くことがいゝでせう。それから、ガヴリーラ・ペトローウィチ、あなただつて死語學者で、未來の古墳發掘界の明星たるべき人でせう——だからせめて現代の娼家とポンペイの賣春、乃至はセペスやニネベエに於ける宗教的賣淫制度といふやうなものとの比較研究も、非常に重要且つ有益ではありませんかね。」

「うまいぞラムゼス、名論だ、」とリホーニンが呶鳴つた。

「何をこんな處でぐづ〳〵やつてるんだ？　諸君、先生の鰓を引つ捉まへて馬車へ乘つけるさ！」

學生達は笑ひながら押し合ひへし合ひして、ヤルチェンコを取巻いて、手を捉まへたり腰を抱へたりした。彼等はみんな女に心惹かれてはゐたのだが、リホーニンの外は誰も眞先きに言ひ出す勇氣がなかつたのである。しかし今はこの面倒臭い、不愉快な、僞善的なことも、幸にして先輩に對する簡單な、輕い冗談で片附いた。ヤルチェンコはすり抜けようと跼きながら、强情を張つたり、腹を立てて見たり、笑つたりした。そこへ、騷ぎ立てゝゐる學生達の傍へ、脊の高い、黑い髭の巡査がつか〳〵とやつて來た。この巡査はさつきから眼を光らせて、忌々しさうに彼等を眺めてゐたのだつた。

「學生諸君、一つ所にかたまらないやうに願ひます。困りますな。何處へでもいゝから行つて下さい。」

で、みんなはぞろ〳〵前へ歩き出した。ヤルチェンコも少しづゝ軟化し出した。

「それぢや諸君、僕も行くことにしよう……だがエジプト王ラムゼスの詭辯に說き伏せられたなんて思はないでくれたまへ……僕はたゞこの仲間をこのまゝ解散するのが殘念なばかりなんだから……然し僕は一つ條件を提出する。つまり、向うで、酒も飮まうし、出鱈目も喋べらうし、笑ひもしよう……だが、それ以上何もしないやうに、何も醜態を演じないやうにしたい……ロシヤ・インテリゲンチヤの花であり誇りである我々が、行當りばつたりのスカートを見て、涎を垂らし、ぐにや〳〵になると言ふことは、思つたゞけでも恥かしい、腹立しいことだ。」

「誓ひますよ！」とリホーニンは手を擧げながら言つた。

「自分で責任を持ちます。」とラムゼスが言つた。

「僕も、僕も！　まつたく、諸君、約束しよう……ヤルチェンコ先生の仰しやる通りだ。」と他の者もその後から言つた。

一行は二人三人づゝ、辻馬車に乘つた。馭者達は餘程前から、齒を露き出して罵り合ひながら、列を作つて一行の後を跟けてゐたのだつた。彼等は出かけた。リホーニンは念のため自分で助敎授と並んで腰掛け、彼の腰を抱へ、自分と助敎授の膝の上に、小柄なトルブイギンを掛けさせた。これは薔薇色の顏をした愛くるしい少年で、年は二十三にもなつてゐるのに、顏には子供みたいな柔らかな、白く光る生毛が生えてゐた。

「ドロシェンコの傍で停めるんだぞ、」とリホーニンは、後からつゞいて來る辻馬車に向つて叫んだ。「ドロシェンコの傍でストップだぞ。」と振り向いて繰り返した。

ドロシェンコ料理店の側でみんな止つた。そして廣間へはいり、賣臺の傍へ集つた。みんなはもう腹一ぱいで、飮みたくもなければ食べたくもなかつた。でも各自には、これから或る無用な、破廉恥なことをやらうとする、或る痙攣的な、技巧的な、まるで面白くもない快樂に加はるのだといふ意識が、まだ心の中に殘つてゐた。そして、酒の力を借りて、何だつて構はない、手足が何をやつてゐるか、舌が何を喋つてゐるか、頭では少しも知らない、といふやうな模糊とした狀態になりたいといふ氣が各自にあつた。この學生達ばかりでなく、出來心でヤーマを訪れる人も常連も、みんなこの心の刺の痛さを多少なり嘗めてゐるのに違ひない。それでドロシェンコは特に晩おそくか夜分だけ營業をやつてゐるので、誰も長く坐り込む客はなく、一寸通りすがりに立ち寄るだけだつた。

學生達がコニャークやビールやウォーツカを飮んでゐる間に、ラムゼスは廣間のずつと奥の方を覗くやうに絕えず見てゐたが、そこには二人の男が腰掛けてゐた。一人は毛むくじやらの、胡麻鹽頭の、大柄の老人で、それと向ひ合つて、スタンドに背中を向けて、テーブルの上に肱をひろげ、組み合せた兩の拳の上に顎をのせた、頭を短く刈つた、頑丈さうな紳士が、鼠色の服を着て丸くなつてゐた。老人は前に置いてある琴の絃に指を觸れて、嘆れてはゐるが氣持のいゝ聲で靜かに歌つた。

わが谷間よ、可愛い谷間よ、
ひろき山峽よ——

「一寸失敬、あれは僕の仲間なんです。」とラムゼスは言つて、鼠色の紳士と挨拶するために近づいて行つた。しばらく經つて、ラムゼスは件の紳士を賣臺の所へ拉れて來て、友人達に紹介した。

「諸君、紹介致します。この方は新聞の方での僕の同僚で、セルゲイ・イワーノウィチ・プラトーノフ君です。新聞社中で一番の怠け者で、一番の天才です。」

一同はぶつ〳〵と不明瞭に自分の姓名を名乘つて挨拶した。「ぢや、お近づきに一つ乾杯しませう。」とリホーニンが言つた。「ヤルチェンコは、例の持前の上品な丁寧さで訊いた。「一寸、失禮ですが、私は少しあなたを存じてゐます。蔭ながらですけれども。あの、プリクロンスキイ敎授が學位論文の討論をやつた時、大學においでになつたのは、あなたぢやありませんか？」

「私です。」と探訪記者は答へた。

「さうですか、そいつは實に愉快です、」とヤルチェンコは優しく微笑んで、何の爲めだか、も一度强くプラトーノフの

手を握つた。「私は後であなたの報告を拜見しましたが、極めて正確で、精細に、巧妙に書かれてありました……どうです？　あなたの健康を祝して。」

「ぢや私も、」とプラトーノフが言つた。「オヌーフリイ・ザハールイチ、もう……一、二、三、四……九杯コニャークを注いでくれ給へ。」

「いや、それはいけませんよ……あなたは——我々のお客ですよ、先輩ですから、」とリホーニンが抑へた。

「なアに、何が先輩なもんですか、」と探訪記者は人の好さうに笑ひ出した。「私はたゞ一年級に居たゞけで、それも半年程聽講生で居たゞけですから。オヌーフリイ・ザハールイチ！　さ、今の勘定だ。皆さん、どうぞ……」

結局、半時間經つと、リホーニンとヤルチェンコはどうしてもこの探訪記者と別れたくなくなつて、一緒にヤーマへ曳つぱつて行くことになつた。探訪記者の方でも別に反對しなかつた。

「もしお邪魔でなければ非常に嬉しく存じます、」と彼はあつさりと言つた。「幸ひ、今日私はべら棒な金を持つてゐます。ドニェプル言論社から原稿料を受け取つたんです。まア、劇場の外套掛の合札で賭博をやつて、二十萬留儲けたやうな奇蹟ですよ。一寸失禮して。直ぐに參ります。」

彼は初め一緒のテーブルにゐた老人の傍へ行つて、いくらか錢を手に摑ませ、優しく別れを告げた。

「爺さん、これから私の行く處へはお前は行けないんだよ。あしたまた今日會つた處であはう。さよなら。」

それから一同は料理店を出た。いつも氣障つぽい、必要もないのに勿體ぶるボーリャ・ソバーシニコフが、戸口でリホーニンを呼びとめ、脇の方へ引つぱつて行つた。

「君には呆れたよ、リホーニン、」と彼は苦々しげに言つた。「僕らは親しい一團をなしてゐるのに、君はどうしてあの浮浪人みたいな奴を曳つぱり込まなけやならんのかね。あいつ、何處の馬の骨だか分つたもんぢやない。」

「止せよ、ボーリャ、」リホーニンは親しげに答へた。「なアに、面白い男さ。」

九

「これはまた何といふ野卑なこつだ！」アンナ・マルコーヴナ樓の車寄せの處でヤルチェンコは腹を立てゝ言つた。「來た以上は、少くとも上品な娼家へ行くべきだ、穴倉のやうな處でなくね、まつたく。諸君、隣りのツレッペリへ行つた方がいゝよ。彼處なら幾らか綺麗で明るいから。」

「さアどうぞ、さアどうぞ、貴方、」とリホーニンは宮廷風に鄭重に、助教授の前の扉を開けて、お辭儀し、片手を前にひろげながら無理にすゝめた。「さアどうぞ。」

「汚らしいぢやないか。ツレッペリなら女も幾らか綺麗だらうにさ。」

その後から歩いて來たラムゼスは素氣なく笑つた。

「さう、さう、その通りです、ガヴリーラ・ペトローウィチ。萬事その調子で行きませう。店の盆から五カペイカの麵麭を盜んだ空腹の泥棒のことは非難しますが、銀行の頭取が、駿馬や葉卷に人樣の金をしこたま使つても、情狀を酌量しますからね。」

「失禮だが、その比喩は分りませんな、」とヤルチェンコは感情を抑へて答へた。「だが、僕はどつちでもいゝ。まアはいらう。」

「その上、」とリホーニンは助教授を先きに入れながら言つた。「その上、この家には歷史的因緣が隨分あるんです。諸君！　この外套掛の上からは、過ぐる幾十代かの學生時代が我々を見守つてゐるんです。その外、この家では慣例によつて、展覽會と同じく、兒童と學生に限り入場料は半額なんです。さうだらう、ねえ市民シメオン。」

シメオンは、多人數の一團がやつて來ると好い顏をしなかつた——といふのは、間もなく起る騷動がいつも見え透いてゐたからである。この男は一般に學生といふものを輕蔑してゐた。彼にはよく分らない言葉を使つたり、輕率な惡戲をやる癖があり、神を信じなかつたり——殊に絕えず日上の者や秩序に反抗するからだつた。ペッサラーブスカヤ廣場で、コザックや肉商や粉屋や看屋が學生連を袋叩きにした當日、シメオンはその事を知るが早いか、通り掛つた辻馬車に飛び乘つて、警察署長のやうに馬車の中に突つ立つて、加勢するつもりで現場へ飛んで行つたのも無理ならぬことである。この男は、しつかりした、肥つた、相當年配の人を尊敬してゐた。さういふ人々は獨りでそつとやつて來て、見知り越しの人に遭ふのを氣遣ひながら、廣間の入口でおど〳〵見廻して、歸る時も非常に急いで、祝儀もたんまり奮むからだつた。で、この男はさういふ人を『閣下』と呼んでゐた。

そんなわけでシメオンはヤルチェンコの輕い灰色の外套を脫がせながら、リホーニンのこの冗談に對して、陰氣な調子で、意味深長に言ひ返した。

「私はこゝぢや市民ではありません。妓夫ですよ。」

「いや、それは恐れ入りました。」とリホーニンは馬鹿丁寧にお辭儀した。

廣間には澤山の人がゐた。踊り終つた番頭連は赤い顏を

して汗ばんで、忙しさうにハンケチを振りながら、各自自分の相手の女の側に腰かけてゐた。この連中は古い山羊の皮の匂ひがした。唄ひ手のミーシカとその相棒の帳簿係は二人とも禿頭で、藥鑵頭のまはりには柔らかな毛が生えて居り、二人とも濁つた眞珠のやうな、醉拂つた眼をして、大理石のテーブルに肱をつきながら向ひ合つてゐた。そして二人は絶えず合唱をやらうとするのだが、丁度誰かゞ絶えず彼等の背後から頸骨を突つついてゐるやうな震へた、飛び上るやうな聲で始終唄の調子を合せようと試みてゐた。

まことを——こそ——知れ——

ところが、エンマ・エドゥアルドヴナとゾーシャは、一生懸命になつて、むから騒がないやうにしてくれと說いてゐた。ワーニカ・フスタニカは長い脚を片方の脚の上に載せ、組み合せた手で尖つた膝を抱へ、がつくり頭を垂れて、椅子の上で溫和しく眠つてゐた。

抱女達は直ぐに學生の中の或る者を見つけて、出迎へに飛んで行つた。

「タマーロチカ！　お前の旦那のウォローデンカがいらしつたよ。あたしの良人もよ！——あ、ミーシカ、」とニューラは、脊の高い、鼻の大きい、眞面目なペトローフスキイの頸にぶら下りながら叫んだ。「今晩は、ミイシェンカ。何だつてこんなに永く來なかつたの？　あんたが來ないで淋しくて仕方がなかつたわよ。」

ヤルチェンコは氣拙さうに周圍を見廻した。

「私達に何とかして……その……別室を」と彼は近づいて來たエンマ・エドゥアルドヴナに向つて、優しく言つた。「それからどうぞ何か赤い酒をね……それからあのコーヒもね……自分でわかつてゐるでせう。」

ヤルチェンコは、いつもそのりゆうとした服裝や、丁寧な、旦那らしい態度で、召使や給仕頭に自分への信用を吹き込んだ。エンマ・エドゥアルドヴナは、まるで曲馬團の老いた肥つた牝馬みたいに、首を唯々と縱に振つた。

「ようございます。さアどうぞ……みなさん此方へお通り下さいまし。客間の方へ。さア、どうぞ、どうぞ……リキュールは何に致しませう？　うちにはペネヂクチンばかりでございますが……ではペネヂクチンに致しますか？　ようございます……それで、娘達も入れてようございませうか？」

「どうしても入れなけれアならんものならね。」とヤルチェンコは溜息を吐いて兩手をひろげた。

そこで、すぐ抱女達が、鼠色の籐の家具と水色の灯のあるこの小さな客間へ、ぞろ〳〵とやつて來た。入つて來ると、握手に慣れない、硬ばつた手をみんなに順々に差し出して、低い聲で簡單に、マーニャ、カーチャ、リューバ……といふ風に自分の名を名乘つた。そして誰かの膝の上に腰かけ、頸を抱き、例の通りせがみ始めた。

「學生さん、あなた隨分いゝ男つ振りねえ……蜜柑を御馳走して頂戴な。」

「ウォローデンカさん、あたしに糖菓を奢つて下さいな。」

「あたしにはチョコレートをねえ。」

「肥つたお方、」と競馬服のウェーラは、助敎授の膝ににじり上りながら甘えた。「あたしのお友達が一人、病氣で出られませんの。そのお友達に林檎とチョコレートを持つて行つてやらうと思つてますけど、いゝでせうかしら。」

「友達なんて出鱈目だらう！　とにかくそんな愛嬌を振撒いて俺の膝にのつかつちや駄目だよ。賢い子供のやうにちやんとお坐り。さアこの椅子に並んで、さう〳〵。お手々を重ねて。」

「だつて、あたし、出來ませんわ、」とウェーラは上眼使ひしながら、體を捻ぢて嬌態を作つた。「あなたはほんたうに思ひやりの深い方ですもの。」

リホーニンはこの職業的强制に對して、丁度、エンマ・エドゥアルドヴナのやうに勿體らしく、人の好さゝうに頷いて、彼女のドイツ風のアクセントを眞似て繰返した。

「よろしい、よろしい、よろしい……」

「ぢやア、あのお友達に、林檎とお菓子を持つて行くやうにあたし給仕に言ひつけますよ、」とウェーラは執拗く言つた。

言はず語らずの中に、かうした强請が抱女達の義務の一つになつてゐた。女達の間では「客から金を絞り取る」腕前を淡み合ふといふ馬鹿げた、子供じみた、妙な嫉妬があつた。妙だといふ譯は、こんなことをした處で別に劃前が貰へる譯でなし、たゞ幾らか媼母の氣受けがよくなつたり、女將から褒められるぐらゐが關の山だからである。しかし彼女達のぐうたらな、單調な、いつもぶら〳〵してゐる生活には、おしなべて、子供々々した、半ばヒステリカルな戲れが可なりあつた。

シメオンがコーヒ沸しと、茶碗と、ペネヂクチンの平たい壜と、硝子の菓子入にはいつた果物と、糖菓とを運んで來て、陽氣に、氣輕にビールや葡萄酒の栓を拔き始めた。

「なぜお飮みになりませんか？」とヤルチェンコは、探訪記者のプラトーノフの方に向いて言つた。「失禮ですが……間違つてゐませんですかしら、セルゲイ・イワーノウィチ、コーヒを差上げしやいましたね？」

「さうです。」

「失禮ですが、セルゲイ・イワーノウィチ、コーヒを差上げ

ませう。元氣がつきますよ。それとも、このいかゞはしい葡萄酒を乾杯しませうか?」

「いや、辭退してすみませんが、私には自分の飲み物があるんでして……シメオン、こちらに與れないか……」

「コニャークをね!」とニューラが急いで叫んだ。

「それから梨もね、」と白いマーニカが續いて言つた。

「承知致しました。セルゲイ・イワーノウィチ。只今すぐ、」とシメオンは悠々と、然し恭々しく返辭して、身を屈め、力み聲を出しながら、ぽんと音を立てゝ栓を拔いた。

「ヤーマでコニャークを出すとは、こりや初耳だ!」とリホーニンは驚いて言つた。「僕はいくら註文しても、斷られてゐたんだが。」

「多分、セルゲイ・イワーノウィチは、その合言葉を御存じなんでせうね?」とラムゼスが冗談を言つた。

「それとも此家では特別な、名譽ある位置に居られるて譯ですかな?」とボリス・ソバーシニコフは、力を入れて當擦りを言つた。

　探訪記者は、顔を向けず、物倦げにソバーシニコフと、その短い、洒落たリンネル服の下の方の鈕をぢろりと見て、ゆつくり答へた。

「私が馬のやうに飲めて、しかも決して醉つ拂はないといふ事は別に名譽でもありませんがね、その代り私は誰とも喧嘩しないし、誰にも喰つてかゝりません。明らかにこれが私の性格の好い方の一面で、それがこの家ではよく知れてゐるのです。だから私を信用してゐるんですね。」

「偉い!」と嬉しさうに、リホーニンが叫んだ。彼は探訪記者の何だか特殊な、怠惰な、口數の少い、同時に自信のある無頓着さに感嘆してゐた。「コニャークを分けてくれませんか?」

「さアどうぞ。」プラトーノフは、愛想よく返辭をして、殆んど子供のやうな明るい微笑を浮べて、突然リホーニンを眺めた。その微笑で、彼の美しくない、頰骨立つた顔が美しく見えた。「私は一度であなたが好きになりましたよ。あのドロシンコでお見受けした時から、見掛けほど粗暴な方ぢやないと、直ぐさう思ひましたよ。」

「さア、これでお世辭も交換致しました、」とリホーニンは笑つた。「しかしね、此處で一ぺんもお會ひしなかつたのは不思議ですね。どうやらアンナ・マルコーヴナ樓へは、度々お出でのやうですが。」

「いや、來過ぎるほどですよ。」

「セルゲイ・イワーノウィチはこの家で一番大事なお客樣ですわ!」とニューラが無邪氣に疳高い聲で言つた。「セルゲ

イ・イワーノウィチはこゝぢや兄弟も同樣ですわ!」

「馬鹿ね!」とタマーラが止めた。

「不思議ですな、」とリホーニンが言葉をつゞけた。「私も御同樣、常連ですが、とにかくあなたに對する皆の好意は羨望に堪へませんね。」

「此處の村長樣だね。」とボリス・ソバーシニコフは、唇をへの字なりに曲げて、小聲で言つた。それはプラトーノフの考へ一つで何も聞えなかつた振りをすることの出來る位低かつた。ボリスはこの探訪記者に對してずつと前から何だか盲目的なちく〳〵刺すやうな腹立しさを感じてゐた。探訪記者が自分達の仲間でないといふ事は別に問題ではない。しかしボリスは多くの大學生同樣(或は士官、士官候補生、中學生などもさうだが)放蕩學生の一團と偶然落合つた『腰辨連』が、いつもいくらか卑屈な氣分で、その中に加はり、學生に媚び、その大膽さに驚嘆し、その冗談を聞いて哄笑し、その自負心に感心し、自分の學生時代を思ひ出して羨しさうに溜息したりすることにはよく馴れてゐた。けれどもプラトーノフは、靑年の前でお追從をふり撒くやうな事をしないばかりでなく、それどころか、却つて無視したやうな、落着いた、そして叮嚀な無頓着さが感じられた。

　その外、ソバーシニコフを怒らせたのは――詰らない岡燒半分のむかつ腹を立てさせたのは、門番初め、肥り肉の無口なカーチャに至るまで、この家中の者が探訪記者に示した單純な、けれども親切な心遣ひだつた。その心遣ひといふのは、皆が彼の言葉を聽いてゐる樣子や、タマーラが彼に酒を注いでやる時の愼ましやかな態度、白いマーニカが彼に梨を剝いてやることや、ゾーヤが談話中の二人の隣人に煙草をねだつて貰へなかつた時、探訪記者がテーブル越しに抛り投げた煙草入れを巧みに受取つた時のゾーヤの滿足や、抱女達が一人として彼にチョコレートや果物を强制ないことや、彼の一寸した親切氣や御馳走に對する女達の活々した感謝などに現れてゐた。「間夫だ」とソバーシニコフは意地惡く獨極めしたものの、自分でも信じられなかつた。といふのは、この探訪記者は男振りも惡く、服裝も至つて無頓着であるし、それに極めて品を保つてゐたからである。

　プラトーノフはまたも學生の言つた無禮な言葉を聞かない振りをした。そしてたゞ神經的にナプキンを指の間につかんで皺苦茶にして、少し脇へ押しやつた。そしてまた、彼の眼瞼はボリス・ソバーシニコフの方に向つて震へた。

「左樣、私はこゝではまつたく家の者同樣です、」と彼は杯をテーブルの上でゆつくり圓形に動かしながら言つた。「考へて見て下さい。私はこの家で、まる四ヶ月といふもの、

毎日食事してゐたんですよ。」

「眞逆？　本氣ですか？」とヤルチェンコは驚いて笑出した。

「まつたく眞面目な話ですよ。特にこの家では旨いものを食はせますよ。いさゝか脂つこい嫌はありますが、腹一杯、美味しく食はして呉れますよ……」

「だが、それはどうしてゞすか？」

「なアに、こゝの女將のアンナ・マルコーヴナの娘を女學校に入學させる準備をしてやつてゐたんです。それについて月謝の一部を食事で支拂ふといふ條件をつけたのです。」

「それはまた妙な考へですね！」とヤルチェンコが言つた。「で、それはあなたの自由意志ですか……それとも……お許し下さい、厚かましく思はれるかも知れませんが……多分、その頃……生活に困つてゞもいらして……」

「違ひます。アンナ・マルコーヴナは學生の食事の値段の三倍も高く拂はせたんですよ。たゞ私としては、此處で、もつと近く、もつと密接に、つまり親しくこの社會にはいつて見たかつたのです。」

「あはあ！　私は大分わかつて來たやうです！」とヤルチェンコは活々し出した。「私の新しい友は——少々打ち解けるのをお許し下さい——察するところ社會的材料を集めて居られるんですね？　數年經つたら拜讀の榮を得るでせう。」

「魔窟の悲劇か！」とボリス・ソバーシニコフは、役者めいた口調で、大きな聲で嘴を容れた。

探訪記者がヤルチェンコに答へてゐる間に、タマーラはそつと自分の席を立つて、テーブルを迂回して、ソバーシニコフの上に身をかゞめ、小聲で囁いた。

「あなた、この新聞記者に構はないがいゝわ。ほんたうよ、あなたのためにその方がいゝのよ。」

「それがどうした？」と、この學生は二本の擴げた指で鼻眼鏡を直しながら、傲然と女を眺めた。「あの男は——お前の戀人かい？　間夫かい？」

「あのお方が一生の中一度もあたし達のやうな女と一緒になつた事のないのは、心から誓ひますわ。でも繰返して申しますけど——あの方に喧嘩をお賣りにならないやうにね。」

「うんよし、解つたよ」とソバーシニコフは輕蔑するやうに顏を顰めて答へた。「奴にはこの娼家全體が立派な味方なんだ。大方ヤムスカヤ中の妓夫は皆奴の友達なんだらうよ。」

「いゝえ、さうぢやないの、」とタマーラは優しい小聲で反對した。「あの方はあなたの襟首をつかまへて、犬ころみたいに窓から拋り出してよ。あたし、何時かそんな宙返りを一度見たことがあるわ。そんなことがなけやいゝけど。恥かしいことだし、危いわ。」

「去せあがれ、畜生！」とソバーシニコフは、タマーラに腕を振り上げて呶鳴つた。

「行きますわよ。」とタマーラは溫和しく答へて、輕い足取りで遠ざかつた。

みんなは一寸彼の方を振向いた。

「暴れるなよ、でくのぼう！」とリホーニンは指で脅かした。「それで、それで、さア次ぎを、」と探訪記者に頼んだ。

「あなたのお話はみんな面白いですよ。」

「いや、私は何も集めてはゐません、」と探訪記者は落着いて、眞面目に續けた。「ですが、材料はこゝに、實に莫大な手におへない位の怖ろしいものがあります……女肉賣買とか、白色奴隷とか、賣春とか、或は大都會を喰ひ盡す惡疫とか、やれ何だかんだと業々しい文句が恐ろしいんぢやない……それは古ぼけた、みんなが飽き〳〵してゐる手風琴ですよ！　いや、恐ろしいのは日常の習慣的な茶飯事、この忙しい毎日の商賣上の計算、幾千年も經て來た戀の學問、數世紀の間に澱んだ、この散文的な家常茶飯事です。この眼につかない些細なことの中に、憤怒、屈辱、羞恥といふやうな感情がまるで溶け合つてゐるのです。殘るものは純粹の職業や、契約や、約束で、まるで堅氣の女商人と同じで食料品の營業より惡くもなく好くもないのです。お分りでせう？　諸君。何の恐怖もないといふことに凡ての恐怖があるんです！　町人の日常生活——唯それだけです。それと、無邪氣、亂暴、感傷性、模倣性などを持つてゐる寄宿女學校の殘味ぐらゐなもんです。」

「まつたくです。」とリホーニンが合槌を打つた。が、探訪記者は憂鬱に自分の杯を眺めながら言葉を續けた。

「我々は社會評論や新思想の論說の中で、おせつかいな人人の樣々な慟哭を讀みます。又、女醫連中もこの方面に努めてゐます、しかも可なり不愉快なやり方でね。『やれ警察處罰令だ！　やれ公娼制度廢止だ！　やれ生きた商品だ！　奴隷の境遇だ！　貪慾なる吸血鬼の女將！　賣春婦の生血を啜る汚らはしい人道の頽廢者！』……といつた調子です。ですがこんな叫びでは世間を驚かすことも感動させることも出來ますまい。吼える獸に毛は少いといふ諺がありますね。有りと凡ゆる怖ろしい言葉よりももつと怖ろしい、百層倍も怖ろしいものは——不意にあなた方の額を打つ或る些細な散文的な一點一劃です。例へばです。こゝの門番シメオンでも見て御覽なさい。諸君は、これより墮落のしやうがないと思はれるでせう。娼家の妓夫で、獸で、確かに——人も殺してる筈ですし、娼婦の稼ぎの頭を刎ね、この家の言葉を借りて言へば、女達に『黑い眼をする』、つまり女

達を矢鱈に殴るんですからね。それではどの點で私はこの男と一緒になり、馴染みになつたのでせうか？　それは僧正の勤行の華やかな細目に於て、クリート島の牧者、アンドレイの祈禱に於て、ダマスカスの教父ヨアンの書に於いてです。宗教的ですよ——非常に！　私はよくあの男を引つ張つて行つたものですが、あの男は眼に涙を浮べて私に唄つてくれます。『來れ、兄弟よ、永眠る者に最後の接吻を與へむ。』これは埋葬曲の一節です。ね、諸君考へて下さい。たゞ獨りロシヤ精神の中にのみ、かういふ矛盾が兩立し得るのではありませんか。」

「さうです。さういふのが祈つて、祈つて、その後で人殺しをやつて、それから手を洗つて、聖像の前に燈明をあげるんです。」とラムゼスが言つた。

「そこですよ。實際熟心な敬神の念と先天的な犯罪傾向とのこの結合より怖しいものを私は知りません。打明けて申しませうか？　私がシメオンと差向ひで話をする時——私達は長い間綴りと、左樣、數時間も話し込みますが——私は時々一瞬の間、眞の恐怖を味ふことがあります。迷信的恐怖です！　丁度薄暗い中で、ゆら〳〵動く板の上に立つて、暗い、惡臭のする井戸の上に體をかゞめて、井戸の中を見てゐると、井戸の底には毒蛇がうよ〳〵蠢めいてるのがやつと見別けられる、といつた感じです。けれどもあの男は心底から神を信じてゐる人間で、いつかは僧院へ行つて、偉い斷食者、祈禱者となるに違ひありません。あの男の魂の中にはまつたく眞の宗教的法悦と、不敬、瀆神、或る忌はしい情慾、殘虐性、又はそれに類したものとが何といふ奇怪な形で縺れ合つてゐることでせう。」

「然し、あなたは御自分の觀察の對象を見逃してはゐらつしやらないでせうね。」とヤルチェンコは言つて、用心深く眼で女達を指し示した。

「いや、それはどうでもいゝんですよ。彼女たちに對する我々の態度は今のところ冷淡なんです。」

「どうしてです？」とウォローヂャ・バーヴロフが、言葉尻を捉まへて訊ねた。

「何、それだけの事でして……お話しする程のことでもありません……」と探訪記者は微笑に紛らした。「下らんことです……ヤルチェンコさん、あなたの杯をこちらへどうぞ。」

すると、何でも思つたことをすぐ言ひ出す慌て者のニューラが、いきなり早口で言つた。

「それといふのは、セルゲイ・イワヌィチがあの人の頬つぺたを毆つたからですわ……ニンカのことからね。ニンカの處へ或る年寄が來たの……そして夜通しゐたのよ……でもニンカは赤旗だつたもんですからね……それで其年寄があの娘を苛め通したの……でニンカは泣いて逃げ出したの。」

「止せよ、ニューラ、詰らない。」と顏をしかめながらプラトーノフが言つた。

「オデブネ（お止しよ）！」とタマーラが娼家の符牒で罵しく命じた。

けれども逃げ廻るニューラを止める事は出來なかつた。

「でね、ニンカが言ふことに、あたしどんなことがあつてもあの人とは一緒に寢ない、たとへ切り苛まれてもいやだ……體中嘗め廻すんだものつて。で、その年寄が門番に訴へたのは分り切つてるわ。無論のこと、門番はニンカを打つたのさ。その時セルゲイ・イワヌィチは、田舍の家へ宛てたあたしの手紙を書いて下すつてゐたの。ニンカの叫び聲が耳にはいると……」

「ゾーヤ、彼女の口に蓋をしちまへ！」とプラトーノフが言つた。

「すぐに飛んで行つて、それから……あつぷ……」ニューラの早口は、これ迄言つて、ゾーヤの手で突然口を閉がれてしまつた。

みんなは笑ひ出したが、ボリス・ソバーシニコフだけは、騷ぎの中にあつて輕蔑した調子で呟いた。

「Oh chevalier sans peur et sans réproche！」（怖れも知らず非難の點もなき伊達男よ！）

彼は最早隨分醉が廻つてゐて、挑みかゝるやうな姿勢で、ズボンのポケットに兩手を突込み、壁に凭れかゝつて、焦々しげに紙卷煙草を噛んでゐた。

「そのニンカつてどんな女ですか？」とラムゼスが好奇心をもつて訊ねた。「こゝに居ますか？」

「いや、居ません。小作りな、鉤鼻の娘ですよ。無邪氣で、とても怒りつぽい。」と探訪記者は突然、本氣で、聲を立てて笑ひ出した。「や失禮……つひその……頭に浮んだものですから、」と彼は笑ひながら說明した。「今、その老人といふのを明瞭思ひ出しました、驚いて上衣と短靴とを抱へて廊下を駈ける格好をね……使徒のやうな外見の、身分のある老人がです。私はこの老人の勤め先も知つてゐます。諸君だつて御存じでせう。ですがそれよりもつと奇拔だつたのは老人が廉間でいよ〳〵自分の身に危險がないと感じた時です。いゝですか、椅子に掛けてズボンをはかうとするんですが、とうしても旨く足がはいらない。そして、家中聞えるやうに呶鳴つてゐるんです。『醜怪だ！　忌はしい魔窟だ！　お前達を明るみへ曝け出してやるぞ！……明日二十四時間以內に！』……とね。いやその慘めな腑甲斐なさと

威嚇の怒號との取合はせが實に滑稽でしてね、澁面してゐたシメオンでさへぷつと噴き出した程です……序に、このシメオンのことを……言ひますと、人生といふ奴は渾沌として複雜してゐて、人を面喰はせ、途方に暮れさせます。數千言の仰々しい文句を費して娼家の妓夫のことを云々することは出來ますが、さてシメオン如きは全然思ひ浮べもしない。世の中はこのやうに多樣多彩です。或は又、この女將アンナ・マルコーヴナを例に取つて見ます。この吸血女、豺狼、牝狐……などと言はれるこの女も、實にこの上もない優しい母に過ぎないのです。彼女にはペルタといふ一人娘があるんです。その娘は今、女學校の五年級ですが、娘が偶然にひよつとした機會で母の職業を知りでもしたら大變だと、アンナ・マルコーヴナは、どの位綿密な注意を拂ひどの位優しく心を碎いてゐるか、諸君が御覽になつたら……いやもう、何でもかでも——ペルトチカの爲め、ペルトチカの爲めといふ有樣です。自分自身も娘の前へ出ると碌々物も言へない始末です。娼家の女將で、以前娼婦だつた自分の言葉使ひを心配し、娘の顏色を覗き〳〵まるで奴隸のやうな態度です。歲を取つた召使ひのやうに、愚かで忠實な乳母のやうに、疥癬に罹つた忠實な老ぼれの番犬のやうです。この女將はもうとつくに隱居しなければならない筈なんです。金はあるし、娼家の仕事は苦しい面倒臭いものぢやあるし、それにあの女ももういゝ歲ですからね。ところが隱居しないのは、まだ少し金を拵へなければ足りないといふので——これもみんなペルトチカの爲めなんです。ところでこのペルトチカは馬を持つてゐるし、ペルトチカを毎年外國へ連れて行くイギリス女の家庭教師はゐるし、四萬留ぐらゐのダイヤモンドも持つてゐる。一體このダイヤモンドは誰のものです？　それから次に言ふことは私がさう信ずるのみでなく、事實さうなのです。例へば、このペルトチカの幸福の爲めだつたら、いや、幸福の爲め處か、早い話が彼女の指に逆剝けが出來たとして——その逆剝けを癒す爲めなら——かういふ場合があり得ると一寸想像して見て下さい——アンナ・マルコーヴナは眉毛一本動かさずに我々の姉妹や娘達を墮落に突き落し、我々凡ての者や、我々の息子達に黴毒を傳染させます。どうです？　諸君は怪物と言ひますか？　が、我々は言ふ。彼女を動かしてゐるものは、偉大な、沒常識な、盲目的な、利己的な愛、それあるが爲めに我々が我々の母親を聖なる女性と呼んでゐるところの、その愛なのです。」

「話題を變へる方がいゝ！」とボリス・ソバーシニコフが齒の隙間から言つた。

「御免なさい。私は人間を比較したのではなく、たゞ感情の源泉を綜合したに過ぎません。私は例として動物としての獻身的な母性愛を引用したいのですが、しかし何やら話が退屈になつたやうですから。いつそ止しませう。」

「いや、お終ひまでやつて下さい！」とリホーニンが言つた。「あなたには、何か纏まつた考へがおありのやうに感じられます。」

「極めて單純な考へですよ。さつき教授は、私が何か著作でもする考へで此處の生活を觀察してるのかと御質問でしたが、私はたゞかう申上げたい。私は見る事は出來るが觀察するなんて事は出來ません。今例としてシメオンや女將を擧げました。私はどうしてだか自分では分らないが、彼等の內部には、何だか怖ろしい、侵すことの出來ない現實が潛んでるやうに感じられます。然しそいつを口で言ふことも表現することも出來ない——私にはその力がないのです。それには何か些細な、詰らない點を把握する偉大な手腕が必要です。すると、讀者が驚きの餘り開いた口が塞がらないといふ程の恐ろしい眞實が得られるのです。一體人人は言葉や叫び聲や身振の中に恐ろしいものを搜してゐます。例へば、今私はユダヤ人虐殺とか、牢獄內の屠殺とか、暴動鎭壓などの描寫を讀むとします。無論、警官、專橫の忠僕、膝まで血潮に浸りながら歩いてゐる現代のオブリーチニック（イワン雷帝時代の親衞兵で暴虐殘忍を以て聞ゆ）、その外、こんな場合によく書かれる手合が出て來る。無論、それは憎々しく、痛々しく、厭なものです。然しそれはみんな——頭腦で感じることで、心臟によつて感ろじのではない。ところがです、私が朝、レビャーヂヤ街を歩いてるとして、見ると——人だかりがして、その眞中に五歲の女の子がゐる——母親にはぐれて迷子になつたのです。もしかすると母親が捨てたのかも知れません。女の子の前には巡査が蹲んでゐる。名は何といふか？　何處から來たか？　父親の名は？　母親の名は？　と訊ねてゐる。可哀さうに巡査は一生懸命なので汗ばんで、帽子を後ろに辷らしてゐる。その大きな鬪面は、ほんとに人の善さうな、慘めな困り拔いた樣子で、それは優しい聲を出してゐる。で結局、どうなつたとお考へです？　女の子はいやもう、おど〳〵して、涙で聲はかすれみんなを怖がるので——巡査は、この『交通巡査』は自分の固くなつた黑い指を二本、人差指と小指とを前に突き出して、山羊の眞似をして見せるんです！『角で突こか、足で踏もか！』とね。ところで私がこの可憐な光景を見た時から三十分も經てば、この同じ巡査が警察で、今迄一度も見たこともなく、その罪さへも知らない人間の顏や胸を土

足にかけるだらうといふことを考へた時——お分りでせうが！——私は言ひ知れぬ苦しい、やるせない思ひがしました。これは頭腦に依つてゞはなく、心臟に依つてゞす。この人生は斯樣に惡魔的に渾沌としてゐるんです。乾杯しようぢやありませんか？　リホーニン君、コニャークを。」

「君、僕で、話してはどうです？」と突然リホーニンが提議した。

「結構、たゞし接吻なしでね。いゝでせう？　君の健康を祈つて……それから外にまだ例があります。フランスの或る文豪が、死刑宣告を受けた人の考へや感じを描寫したものを、讀むとします。堂々と、力强く、見事に描寫してある。けれども讀むと……何等印象を受けない……胸のときめきも、憤怒も——單に退屈のみです。ところが最近フランスの何處やらで殺人犯を死刑にする短かい新聞記事が眼に觸れたのです。罪人が最後の身繕ひをする際、臨場してゐた檢事が、見ると罪人が素足の儘で靴をはいてゐる。『馬鹿！　靴下はどうした？』と注意する。すると罪人は檢事を眺めて逡巡つて、『その必要もありますまい？』と言ふんです。どうです、この短い一句はまるで石のやうに私の頭を打ちました。强制的な死の怖ろしさと愚さが私の眼の前に忽然として悉く展開されたのです。……死についてならばまだ話があります。私の或る友人が死にました。これは歩兵大尉で、飲んべえで、浮浪者で、また世界中で一番眞實な男でした。我々は何故かこの男を電氣大尉と呼んでゐました。私が一番仲良く交際つてゐたので、この男に死出の晴着を着せてやることにしました。私は彼の禮服を取つて、それに肩章を附け始めました。御承知の通り、肩章卸の耳に紐を通して、それから紐の兩端を襟の下の二つの穴に刺し込んで、中側の裏から結ぶんです。で、私はこの面倒な順序をすつかり終へて、紐を結びつける段になると、どうしてもうまく行かない。あまり緩く縛り過ぎたり、一方の端が短かすぎたりする。こんな下らん事で手間取つてゐましたが、その時、ふつと、極めて驚くべき單純な考へ、つまり、丸結びにする方がずつと簡單で早い——同じことだ、もう誰も解く者はゐないのだから、といふ考へが頭に浮びました。すると私は忽然として死といふものを全身に感じました。それ迄は大尉の硝子のやうになつた眼を見たり、冷たい額に觸つて見たりしても、どういふものか、少しも死といふものを感じなかつたのですが、丸結びのことを思ふと——我々の總ての言葉、事業、感覺などの、取り返しのつかない、避けることの出來ない滅亡、ありとあらゆる眼に見える世界の滅亡といふことの單純な、悲しい意識が

全身を刺し貫いて、私を地面に叩きつけたのです。かういふ小さな、しかも驚くべき事柄なら幾らでも擧げられます——人々が戰爭でどんな事を經驗するかといふ事でさへもね……しかし私は自分の考へを一方にだけ導かうと思ひます。我々はみなこの特色のある些細な事柄の傍を平然と、盲目のやうに、現に自身の身許に轉がつてゐるのが見えないかのやうに通り過ぎてしまふのです。ところが藝術家がやつて來て眺める。拾ひ上げる。そして突如、人生の微細な斷片を巧妙に明るみへ出して見せると、我々は皆感動する。『あゝ、これは私自身が——この眼で見たことなんだ。たゞこれに注意を向けることを思ひ浮ばなかつただけだ。』といふ次第です。然し、わがロシヤの文學者は——世界中で最も良心に富み最も誠實な文學者であるが——何故か今迄淫賣や娼家の問題を避けてゐます。どういふ譯か？この返答は私には出來ません。或は恐らく、嫌惡から、小膽から、猥褻文士と見做される心配から、いや結局、單にわがおせつかいな批評家が作家の藝術品と個人生活とを同一視して、そのよごれた肌着の中を探索に來ることを怖れてゐるがためでせう。それとも或は、この生活に頭を突込んで、偏見もなく、大袈裟な文句もなく、羊のやうな憐憫もなしに、この實生活の奇怪な單純さと、家常茶飯事とを、極めて近くから觀察すべく、彼等には時間もなく、犧牲的精神にも乏しく、自制力も足りないからかも知れません。でなければ、どんなに素晴しい、世を震駭させるやうな眞實の作品が出來上るでことせう。」

「書いてはゐますよ！」とラムゼスが本意なげに言つた。

「成程書いて居ます、」とブラトーノフは彼に調子を合せて退屈さうに繰り返した。「けれども、どれを見ても、出鱈目か、さもなければ子供の爲めの劇的効果を槪つたものか、乃至は未來の賢人のみに理解されるやうな狹い象徴に過ぎませんよ。だが、人生そのものには誰もまだ觸れてゐない。或る文豪が——水晶のやうな純眞な心と驚くべき描寫の才能をもつた文豪が、或る時この主題に近づいた。そして外的な、眼の捉へ得るものはすべて、立派な鏡に映るやうに彼の心に映つた。けれども彼は人々を欺くことも驚かすことも、決心出來なかつた。そこで彼は單に、犬の毛のやうに粗硬い門番の髮の毛を眺めて、『彼にも確かに母があつた筈だ。』と思たゞけです。聰明な、正確な眼差で娼婦達の顏をちらりと眺めて、それを胸に印したけれども、この作家は自分の知らないことは書かなかつた。だが正直と眞實とを以て人を魅するこの作家が、一再ならず農民にも眼を注いだといふことは注目に値します。然し彼には、農民の言葉も

考へ方も心もみんな茫漠として不可解なものと思はれた。そこで、この驚くべき手腕を持つてゐる作家は、温和しく、農民の心を脇へ避けて、自分の優れた觀察の蓄へを、悉く都會人の眼を透して屈折させたのです。私はわざとこのことを言ひました。わが國では、どうです、探偵、辯護士、稅務監督、敎育家、檢事、警察官、將校、淫蕩な貴婦人、技師、バリトン歌手、などの事を書いてゐる——實に巧妙に、聰明に、微細に、見事に書いてゐる。けれどもかういふ人達は皆、廢疹ぢやありませんか。彼等の生活は生活ではない。頭腦から考へ出された、夢幻的な、役にも立たない、世界文明の贅言ですよ。しかし此處に人類そのもののやうに古い不思議な現實が二つある。卽ち娼婦と農民です。而して我々は、箔を着けて文學に現はれた、饗餅のやうな、頽廢した人物を除いては、娼婦や農民に就いて何も知らないのです。お訊ねしますが、ロシヤ文學は賣春の惡夢から何を收穫しましたか？　ひとりソーネチカ・マルメラードワ（ドストエフスキイ作「罪と罰」の女主人公）だけです。またロシヤ文學は農民に關して、胸糞の惡い、贋造の、民情派の牧歌の外、何を與へましたか？　唯一つ、眞に唯一つ、ですがその代り實に世界に於ける最も偉大な作品——戰慄すべき悲劇があります。その眞實さのために呼吸は詰り、頭髮は逆立つといふ悲劇があります。何の事を言つてるかお分りでせうね……」

「『闇の力』……」とリホーニンが靜かに囁いた。

「さうです。」探訪記者は答へて、感謝の念をもつて優しく學生を眺めた。

「しかし、今のソーネチカですが、あれは抽象的タイプではありませんか、」とヤルチェンコがきつぱりと言ひ切つた。

「云はゞ心理學的構想です……」

今迄身の入らない調子でぼつ〳〵話してゐたプラトーノフが、俄かに熱を帶びて來た。

「そんな批評は百度も耳にしました。百度も！　が、そいつは全然出鱈目です。卑賤な、恥づべき職業の蔭に、罵詈惡口の裡に、泥醉した醜惡な姿の裏に、——依然としてソーネチカ・マルメラードワは生きてゐます！　ロシヤの娼婦の運命——あゝ何といふ悲劇的な、哀れむべき、血みどろな、しかも滑稽な、愚劣な道でせう！　こゝにすべてのものが一緒になつてゐます。ロシヤの神、ロシヤの博大さと無關心、墮落にまで達するロシヤの絶望、ロシヤの非文明、ロシヤの無邪氣、ロシヤの忍耐、ロシヤの無恥などが、皆一緒になつてゐます。諸君が寢室に呼び入れるこの抱女達はみんな——よく觀察して御覽なさい——みんな子供で、どれも十一歲ばかりではありませんか。運命がこの女達を賣春に突き落したのです。そしてその時から彼女達は不思議な、妖精のやうな、玩具に等しい生活を送り、發育もしないし、經驗によつて豐富にもならず、無邪氣な、信じ易い、我儘な、半時間も經てば何を言ひ出すか、何を仕出かすか自分にも分らない——まるで子供のやうです。この朗らかで滑稽な子供らしさを、私は最も墮落した、最も歲を取つた、馬車馬のやうに乘り潰されて不具になつた娼婦達に見たのです。そして彼女達には、人間的苦悶に對するその力ない哀憐の情、その無益な同情が、斷じて消え失せてはゐないのです……例へば……」

プラトーノフは坐つてゐる一座の者をゆつくりした眼差で見廻はしたが、急に片手を振つて、疲れた聲で言つた。

「だが然し……止しませう！　今日、私は十年分ほど喋りました……しかも何の役にも立たないのです。」

「然しね、セルゲイ・イワーノウィチ、まつたくの話が、何故それを自分でお書きにならないんですか？」とヤルチェンコが訊ねた。「あなたはこの問題に對して注意が活々と集中してゐるぢやありませんか。」

「試つては見ましたよ、」とプラトーノフは、沈鬱な微笑を浮べて答へた。「然し全然駄目です。書きかけても、直ぐ色々な『ことが』とか、『それは』とか、『であつた』とかいふやうな文句の中に迷ひ込んでしまひます。形容詞が月並です。言葉は紙の上で冷却する。まるで何かの食戻しみたいです。御存じでせうが、或る時あの有名な……テレーホフが通りすがりにこの町に一寸居たことがあります。私はあの人の所へ行つて、こゝの生活に關して隨分色々と、今は退屈を怖れて諸君には話さなかつたことまで話したのです。そして私の材料を利用してくれるやうに頼んだのです。彼は私の話に極めて注意深く耳を傾けてゐましたが、話し終つて彼が言つたのは次のやうな言葉でした。『怒つてはいけませんよ、プラトーノフ君。今迄に私が會つた人々で、私に小說の材料を提供するか、書かねばならぬ事を教へてくれるか、何れかしなかつた人は一人も無いほどです。が、あなたが今話して下すつた材料は、その意義と重要さが無限に大きいんです。で私はそれをどう取扱ふか？　あなたの考へてゐるやうなそんな尨大な本を書くとなれば、たとへ如何に正確であらうと他人の言葉では不完全だし、備忘錄と鉛筆を以てした觀察では不十分ですよ。自らその生活に入つて、變に賢明ぶらずに、何等作家的意圖なしにやらなければなりません。その時こそ怖るべき作品が出來上りますよ』——彼の言葉は私を落膽させると同時に勇氣附けました。その時から私は信じてゐるのですが、今直ぐでなくとも、五

十年も經つたら、天才ある眞のロシヤ作家が現はれて、この重荷とこの生活のあらゆる汚穢を一身に背負うて、それを、單純な、緻密な、限なく灼熱した形で吾々の眼前に投げ出してくれるでせう。そして我々は言ふでせう。『さうだ、これは我々も自身で見て知つてゐるが、こんなにも恐しからうとは想像すら出來なかつた！』とね。この未來の藝術家の出現を私は衷心から信じてゐますよ。」

「アーメン！」とリホーニンは眞面目に言つた。「その藝術家のために乾杯しませう。」

「あゝほんとに、」と突然、小さなマーニカがそれに應じた。「誰でもいゝから、あたし達……不幸な者が、此處でどんな生活をしてゐるか、眞實のことを書いてくれたらねえ。」

この時、扉をノックする音がして、すぐ、ヂェーニャが輝かしいオレンヂ色の衣裳ではいつて來た。

十

彼女は家中での第一人者の自由な態度で、打解けて凡ての男達に挨拶して、セルゲイ・イワーノウィチの椅子の後に腰掛けた。彼女はやつと今、あの慈善事業協會の制服を着たドイツ人から解放された處だつた。このドイツ人は夕方やつて來て、その相手を白いマーニカに極めたのだが、後で鵜母の取持ちに依つて彼女をパーシャに變へたのだつた。しかしヂェーニャのがみ〳〵した、自信のある美貌は確かに彼の淫蕩な心に喰ひ入つたに違ひない。何故かと云ふに彼は三時間ぐらゐビヤホールやレストランをほつつき廻り、そこで元氣をつけて、またアンナ・マルコーヴナ樓に舞ひ戻つて、ヂェーニャの一時客だつた眼鏡屋のカルル・カルロウィチの歸るのを待つて、彼女を部屋に呼んだからである。

タマーラの眼に表はれた無言の間に對して、ヂェーニャは嫌惡に堪へないといふやうに顏をしかめ、肩を震はし、頭を縱にふつて頷いた。

「歸りあがつた……いやな奴！」

プラトーノフは、非常な注意を以て、ヂェーニャを見つめた。彼はこの女を他の女とは區別して、そのしつかりした、利かぬ氣の、思ひ切つて嘲笑的な性格を尊敬してゐるといつてもよかつた。そして今、彼は折々背後を振向いては、彼女の燃えるやうな美しい双の眼を見、輝かしい、一樣でない頰の病的な紅潮を見、また咬み切られて血の固つた唇を見て、大きな、久しく熟し切つた憎惡の念が彼女の心の中に搖れ、彼女の息を塞らせてゐるのを感じたのである。そしてその時彼は、（その後よくこの事を思ひ出したが）今晩ほどこのヂェーニャの輝き渡るやうな美しさを見たことがないと思つた。それに鵜母を除くすべての男が——或はおほつぴらに、或はちら〳〵と——好奇心と欲望とをもつて、この女を眺めてゐるのにも氣がついた。この女の美貌と、いつでも極く手輕に手に入るといふ考へとがこんがらかつて、彼等の想像を掻き亂した。

「お前、どうかしてるね、ヂェーニャ、」と靜かにプラトーノフが言つた。

彼女は優しく、指を輕く彼の手に觸れた。

「氣にしないで頂戴。何でもないの……女同志のことですの……あんたには面白くもないことだわ……」

けれども彼女は直ぐにタマーラの方に振向いて、內緒の符牒で、早口に、熱して、何か喋り出した。その言葉は、ユダヤ語、ジプシイ語、ルーマニヤ語、泥棒や馬泥棒などの言葉の無茶苦茶な混合のやうに思はれた。

「そんな事、べら〳〵喋つてはいけないわ。」とタマーラは押とゞめて、につこりしながら、眼で探訪記者をさした。

事實プラトーノフには何事か判つてゐた。今日の夕方と夜は安客が多く、それが爲に不幸なパーシャは××××、××××に呼ばれたことを、ヂェーニャは憎々しげに物語つたのである。丁度さつきも、パーシャは神經の發作が起つて意識を失つてしまつた。ところがパーシャが我に返つて、

纈草水を酒の杯で飲むと、エンマ・エドゥアルドヴナは又もや彼女を廣間へ出したのだつた。ヂェーニャは朋輩の身代りにならうとしたけれども、鵜母は彼女を罵つて、罰を食はすぞと脅かしたのである。

「あの娘は何を言つてるんです？」とヤルチェンコは眉を高くあげて訝しさうに言つた。

「どうぞお氣に掛けないで……何んでもないんですの、」とヂェーニャはまだ昂奮してゐる聲で言つた。「たゞ……あたし達の內輪の下らないことですの……セルゲイ イワーノウィチあなたのお酒を頂いてもいゝ？」

彼女は自分で半杯ほど注いで、細い鼻孔をふくらませながら、一息にぐつとコニャークを飲みほした。

プラトーノフは無言のまゝ立上り、戸口へ歩いて行つた。

「それには及ばないわ、セルゲイ・イワーノウィチ、打つちやつといて頂戴」とヂェーニャがとめた。

「不可ない？　何うしてだね？」と探訪記者は訊き返した。「私は最も單純で無邪氣なことをやるんです。パーシャを此處へ呼んで、もし來ればその代金を拂ふんです。この長椅子の上に横にさせて暫くでも休ませてやらう……ニューラ、急いで枕を取つて來てくれ！」

鼠色の服を着た、廣い、ぎこちない彼の姿が消えて扉が

閉ると、すぐ、ボリス・ソバーシニコフが蔑んだとげ〳〵しい調子で言ひ出した。

「何だつて諸君、あんな奴を路傍から引つぱつて來たんだ？　碌でもない手合に掛り合ふ必要があるのかい？　奴は何んな人間だか知れたもんぢやない。ひよつとしたら探偵かも知れない。誰が保證出來るもんか。君はいつもこれだ、リホーニン。」

「だがボーリャ、君は探偵に會ふと、何か危險でもあるのかね？」とリホーニンが穩やかに訊れた。

「リホーニンぢやない、僕が皆に紹介したんだ、」とラムゼスが言つた。「僕は、彼が全く立派な人間で、好い友達であることを知つてゐる。」

「ちえ、馬鹿々々しい。好い友達が他人の懷をあてに酒を飲むかい。君だつて分る通り、野郎は最も有りふれた娼家の常連だ。殊に野郎はこの家の間夫で、やつて來る客におごらせる癖をつけて、御馳走の割前を貰つてる奴に過ぎないことは解り切つてらあね。」

「止し給へ、ボーリャ、馬鹿な、」とヤルチェンコは咎めるやうに言つた。

だが、ボーリャはやめる事が出來なかつた。この男には不幸な癖があつた。といふのは、この男は醉つ拂つて來ると足取や言ふ事は確りしてゐるが、陰鬱な、怒りつぽい氣分になり、喧嘩がしたくなるのだつた。それに娼家の別室には不似合な、誠實で、確信のある、眞面目なプラトーノフの語調が、餘程前から彼に癇癪を起させてゐた。しかしその癇癪を更に煽つたのは、話の間に彼が挿し挾む意地惡い差出口を探訪記者がわざと平氣に無視したことである。

「それに、吾々の仲間で、野郎は何といふ調子で喋つてるんだ！」とソバーシニコフは激昂し續けた。「何だか嫌に落着いたやうな、謙遜したやうな、敎授めいた口調でさ……嫌な三文々士奴！　サンドウィチ野郎奴！」

ぢつとこの男の樣子に眼を着けてゐたヂェーニャは、輝いた暗い眼を、快活に、意地惡くきら〳〵させながら、いきなり手を打つた。

「さうだわ！　旨い、學生さん！　偉いわ、偉いわね！……そんな工合にあの人をうんと……本當に何て生意氣でせうねえ！　ほら、あの人がやつて來るわ。私がみんなあんたの言つたことをあの人に繰り返してあげるわ。」

「ど、どうぞ、いくらでも！」とソバーシニコフは口元に傲慢な、憎々しげな皺を寄せながら、俳優の科白めいた調子で呟いた。「僕自身も同じことを繰り返します。」

「ほうら——偉いわねえ、だからあたし好きよ、」とヂェーニャは拳固で卓子の上を叩いて嬉しさうに、意地惡さうに叫んだ。「梟は飛びやうで、好い人は鼻汁ですぐ解るわね。」

白いマーニャとタマーラは驚いてヂェーニャを見たが、彼女の眼の中に躍つてゐる狡い火花と神經質に震へてゐる鼻孔とを見て、二人とも譯が分つて微笑した。

白いマーニャは笑ひながら非難するやうに頭を振つた。かうしたヂェーニャの顏付は、彼女によつて惹き起される騷ぎが近づいて來るのを、彼女の暴々しい心が感知した時にいつも現はれるのだつた。

「拗ねちやいけないぜ、ボーリヤ」とリホーニンが言つた。「こゝぢやみんな平等だからね。」

ニューラが枕を持つて來て、長椅子の上に置いた。

「それアまた何の爲めだ！」とソバーシニコフがニューラに叫鳴りつけた。「あつちへ行け、とつとゝ持つて行つちまへ。此處は木賃宿ぢやないんだぞ。」

「ねえ、打つちやつときなさいよ、あなた。どうしたんですの？」と甘つたるい聲でヂェーニャは言つて、枕をタマーラのうしろへ匿した。「待つてゝ頂戴。あたし、かうやつてあんたと一緒に腰掛けたが好いわねえ。」

彼女は卓子を迂回してボリスを椅子に腰掛けさせて、その×の上にのぼつた。そして彼の頭に腕を卷きつけて、彼の××××ほど、彼の唇に自分の唇を、××××押しつけた。彼は自分の眼のすぐ前に、變に大きな、暗い、輝いた、不可解な、ぢつとして動かない女の眼を見た。この生氣のない眼の中に、ほんの四分の一秒の間、鋭い、物狂ほしい憎惡の表情が烙き付けられてゐるやうに、彼には思はれた。そして恐怖の惡寒、怖るべき避け難い禍の、或る漠然とした豫感が彼の腦裡に閃めいた。で彼はやつとの思ひでヂェーニャの柔軟な手をもぎ放して、彼女を押し退け、紅くなつて、息を喘ませて、笑ひながら言つた。

「君は、かうした氣象なんだね。あゝ君はメッサリーナ・バフヌーチェヴナだ！……君はヂェーニカと言つたつけな？好い女だ。魔女だね。」

プラトーノフがパーシャをつれて來た。パーシャは慘めな樣子で目も當てられなかつた。顏は靑つぽく脹れぽつたい艶を帶びて蒼ざめ、濁つて半ば閉ぢた眼には弱々しい白痴のやうな微笑を浮べ、締りのない唇は二つのぼろ〳〵になつた赤い濕つた襤褸片に似てゐた。そして片足を大胯に片足を小胯に歩くやうな恰好でおづ〳〵した危かしい足取りだつた。彼女は從順に長椅子の方に近寄り、微かな無智の微笑みをまだ止めないで、溫和しく枕の上に頭を橫へた。遠くから、彼女は寒いのだといふことが分つた。

「諸君、失敬して上衣を脱ぎます」とリホーニンは言つて上衣を脱ぎ、娼婦の肩に投げかけてやつた。「タマーラ、この娘にチヨコレートと葡萄酒をやり給へ。」

ボリス・ソバーシニコフは、また書像のやうに隅つこに屈んだ姿態をして、片脚を他の脚の上に置いて、頭を上へ擡げた。するとみんなが沈黙してゐる眞最中、彼は突如として、最も氣障な調子で直接プラトーノフに向つて言つた。

「えゝ……もし……あなたのお名前は？……この女はあなたの色女に違ひないでせうな？　えゝ？」そして彼は靴先で、横になつてゐるパーシャの方を指した。

「何んです？」とプラトーノフは眉を動かしながら長く引つぱつて訊ねた。

「それともあなたがこの女の戀人か——何れ同じことだが……かういふ關係をこゝのあなた方の間では何んと呼んでゐますか？　つまり女がルバーシカを縫つてやつたり、自分の正しい稼ぎで儲けた金を分けてやつたりする、そんな間柄ですか？……えゝ？……」

プラトーノフはしかめた眼瞼を通して、重々しい緊張した視線で彼を眺めた。

「お聞きなさい、」と彼は嗄れた聲で、ゆつくりと、重々しく、一言々々切つて、靜かに言つた。「今日あなたが私に喧嘩を吹つかけるのはこれが始めての事ぢやありません。けれども第一に、あなたは醉つてないやうで實は酷く惡醉ひしてゐるのが私の眼に見えるのと、第二には、あなたのお友達の手前をはゞかつて私はあなたを許してゐるんです。だが警告して置きますが、まだこんなことを私に言ふ積りなら、まア眼鏡を外づして置きなさい。」

「何んて囈言だい。」とボリスは叫んで、肩をそびやかし、鼻を鳴らした。「どんな眼鏡です？　何故眼鏡を外すんです？」けれども彼は機械的に、二本の伸ばした指で、眉間の鼻眼鏡のつまみを直した。

「私があなたを毆る時、硝子の破片が眼にはいるかも知れないからです。」と記者は落着いて言つた。

かやうに口論の風向きが不意に變つたのだが、誰も笑はなかつた。たゞ白いマーニカ一人がほつと溜息を吐いて手を叩いた。ヂェーニャは酷く待ち兼ねた態で二人を見比べた。

「さア、さうとすれア！　私だつてうんとお釣錢をあげますよ、あなたが喜べない位！」とソバーシニコフは亂暴に、まるで腕白小僧のやうに叫んだ。「唯手を汚すだけの値打がないんです。あらゆる……」彼は何か新しい惡口を附け加へようと思つたが、決心出來なかつた……「……あらゆる者に對して。とにかく、諸君、僕は最早此處に止つてゐたくありません。かういふ人間と親しくするにしては、僕は餘りによく教養されてゐます。」

彼は急いで傲然と戸口に向つた。

彼は、野獸のやうに眼の角で自分の一擧一動に眼をつけてゐるプラトーノフのすぐ傍を通らなければならなかつた。と、ほんの一瞬間、この學生の腦裡にこんな欲望が閃めいた。橫から不意を覗つてプラトーノフを撲つて飛び退かう、すると、友人達は必ず二人を引止めて摑み合ひまではさせないだらうと。けれども同時に彼は、探訪記者の顏は見ないでも、そのどつしりと卓子の上に落着いてゐる逞しい腕や、額の廣い、頑强に俯向いてゐる頭や、平氣さうに丸くなつて椅子に坐り込んではゐるが、いざといふ時は卽座に素早い猛烈な突擊にいつでも移れるやうにしてゐる敵のぎこちないやうな敏捷な强壯な身體を、或る深刻な無意識的な本能で見もし、感じもした。で、ソバーシニコフは大きくばたりと戸を閉めて廊下へ出て了つた。

「荷車から女を降せば牝馬は樂だ。」と嘲るやうに早口でヂェーニャが、彼の後から捨ぜりふを送つた。「タマーロチカ。コニャークをもう一杯注いで頂戴。」

すると、脊の高い學生のペトローフスキイが立上つて、ソバーシニコフの肩を持つ必要があると考へた。

「諸君！　諸君がどうしようと、それは諸君各自の勝手だが、僕は主義としてボリスと一緒に出て行かう。彼が惡いとすれば、僕等は何れその中に內輪の會合で彼を責めることが出來る。だが一旦僕等の友人が侮辱を受けた以上——僕は此處に止る譯に行かない。僕、歸る。」

「おい君、まア／＼、」とリホーニンは言つて忌々しげに神經質に鬢の毛を梳き上げた。「ボリスは斷えず極めて陋劣な、粗暴な、馬鹿げた振舞ひをやつたのだ。君はそれが何の團體的名譽だつて言ふんだい？　編輯局から、政治會合から、娼家からの集團的退出か。吾々は一人々々の友人の馬鹿げた眞似を庇ふやうな將校ぢやないよ。」

「君達はどうあらうと構はない、僕は共同責任感のために歸る」とペトローフスキイは勿體ぶつて言ふと出て行つた。

「そちのために、大地は柔毛の如くあれ！」とヂェーニャが彼の後から浴せかけた。

然し複雜で判らないものは人間の魂の道である。ソバーシニコフとペトローフスキイの二人は、可なり眞劍に憤慨してゐたのであるが、前者は半分、後者はほんの四分の一だけだつた。ソバーシニコフはあれ程まで酩酊し、憤慨してゐたに拘らず、今ならヂェーニャを呼んでそつと雲隱れするのに友達の手前、都合がいゝし又容易いといふ咬かすや

うな考へが彼の頭に閃めいたのだつた。ところがペトローフスキイもまつたく同じ目的で、しかも同じギェーニャを手に入れようとしながら、ボリスの後から跟いて出て、三ルーブル借りてやらうといふ肚だつた。で、二人は廣間で妥協した。十分經つと、別室の半ば開いた扉から、鵜母ゾーシャの薔薇脫みの薔薇色した、狡い眼が覗いた。

「ギェーネチカ」と彼女は呼んだ。「ちよいと、あちらへお前さんの襦袢が來たから勘定しておくれ。それからニューラ、役者さんがシャンペンを飮みに一寸來てくれつてさ。役者さんはヘンリエッタと大きなマーニャと一緒にゐますよ。」

プラトーノフとボリスとの間の、速い、取り止めのない喧嘩は、長い間話題になつた。探訪記者はいつもこんな場合に立到ると、羞かしさ、間の惡さ、慘めな氣持、良心の苛責などを感じた。そして、後に殘つた人々は彼の味方であるにも拘らず、彼は憂鬱な聲でかう言つた。

「諸君、まつたく私は歸つた方が好いやうです。何の爲めに私は諸君のサークルを掻き交ぜませう？　私達は兩方とも惡かつたのです。私は歸ります。勘定の方は御心配なく。パーシャを呼びに行つた時、シメオンにもう拂ひはすましときましたから。」リホーニンは突然手で頭髮を掻きあげ、決然として立上つた。

「いゝえ、いゝえ、とんでもない。僕が行つて奴を曳つぱつて來ます。二人とも實に人の好い坊ちやんなんです、ボリスも、ワーシカも。しかし何分若いので自分の尻尾に吼えてるんです。僕が呼んで來ます。そしてボリスがお詫びすることを保證します。」

彼は出て行つたが、五分經つて歸つて來た。

「もう寢んでゐます、」と陰鬱に彼は言つて、絶望したやうに手を振つた。「二人とも。」

十一

この時、別室にシメオンが盆を持つてはいつて來た。盆の上には泡立つた金色の酒の注がれた臺付盃が二つ載つて居り、大きな名刺が添へてあつた。

「お訊ね致しますが、ガヴリーラ・ペトローウィチ・ヤルチェンコとおつしやるお方はどなた樣でいらつしやいますか？」と彼は一座を見廻はしながら言つた。

「私だ。」とヤルチェンコが返辭した。

「これをどうぞ。役者さんからで御座います。」

ヤルチェンコは、大きな侯爵の冠で上の方を飾つた名刺を取り上げて、聲を出して讀み上げた。

エヴメーニイ・ボルエクトウィチ

エグモント・ラヴレーツキイ

首都劇場悲劇俳優

「ロシヤの役者連が、フリサンフォフとか、フェチソフだとか、マ、ントフとか、エピマーホフとか、變な名前を持つてるのには呆れますな。」とウォローヂャ・パーヴロフが言つた。

「おまけに有名な連中ときたら、極つたやうに舌が廻らなかつたり、しゆう〳〵言つたり、吃つたりするんですからね。」と探訪記者が附け加へた。

「左樣、しかし更に驚くべきことは、私はこの首都劇場の俳優とやらを知る光榮を全然有してゐないのです。だが、何やら裏に書いてあります。筆蹟から推すと、酷く醉つ拂つた、大して讀み書きの出來ない人が書いたらしいですね——第一乾杯といふ文字の書き方から誤つてゐますよ、」とヤルチェンコは說明した。——『廊下を通りすがりに偶然お見掛け申せしロシヤ學界の明星、ガヴリーラ・ペトローウィチ・ヤルチェンコ氏の健康を祝して乾杯致し候……親しく盃をかち合せて乾盃致度と存候。もし御記憶なくば、國民劇場と「貧は罪ならず」並びに、「アフリカン」を演じたる貧弱なる俳優を思ひ起し被下度候。』

「さう〳〵、本統だ。」とヤルチェンコは言つた。「國民劇場でこの慈善興行をやる時、私も妙なことから引つぱり出されましたよ。髯を剃つた横柄な顏が、かすかに記憶に殘つてゐます。ですが……どうしませう、みなさん？」

リホーニンは快く答へた。

「では其方をつれていらつしやい、多分面白い人でせう。」

「が、あなたは？」と助敎授はプラトーノフに向つた。

「私はどつちでも構ひません。私はその人を少しは知つてゐますよ。先づ最初は『給仕、三鞭酒だ！』と呶鳴るでせう。次ぎに天使だといふ自分の妻君の泣き事を並べる。それから愛國的演說をやる。最後に勘定のことから騷ぎをおつ始める。と言つて別に大聲を擧げるわけではありません。なアに面白い人間ですよ。」

「寄越し給へ。」とウォローヂャ・パーヴロフは、自分の膝の上に腰掛けて、足をばた〳〵させてゐるカーチャの肩越しに言つた。

「で、君は、ウェリトマン？」

「何です？」と學生ははつとした。この男は、横になつてゐるパーシャの傍で、友人達に背を向けて長椅子に腰掛け、パーシャの上に身をかゞめて、大分前から親友めいた、同情に堪へないやうな風に、女の肩や襟筋の髮などを撫でゝやつてゐた。ところが女は氣兼ねしたやうな、淫らな、無意味に情熱的な微笑を浮べ、半ば閉ぢた、震へる睫毛越しに

最早笑ひかけてゐた。「何です？　何の用です？　あゝ、役者を寄越していゝかつていふんですね？　別に異存はありません。どうぞ。」

ヤルチェンコはシメオンを通じて招待した。すると俳優がやつて來て、早速、例の俳優らしい演技をやり出した。彼は戸口の處で立止つた。絹の折り返しの光つた、長いフロックコートを着て、相當年のいつた社交界の伊達者か銀行の頭取に扮した舞臺の俳優のやうに、光つてゐる絹帽（シルクハット）を左手で胸の中央に支へてゐた。大體こんな人物に扮してゐると、自分でも内心想像してゐたのである。

「皆さん、皆さんのお親しい仲間にお邪魔致しても構ひませんでせうか？」彼はやゝ横に傾いて、半分ほど頭を下げて、滑らかな優しい聲でかう訊ねた。

彼を招き入れた。彼は近づきの挨拶をはじめた。握手をしながらずつと前に肱を突き出し、上へ高くあげたので、手首はかへつてずつと下の方にあるやうに思はれた。もう今は銀行頭取ではなく、立派な青年の中でも元氣のいゝ優れた青年、スポーツマンか道樂者だつた。けれども彼の顔は——逆立つてゐる粗々しい眉毛、毛のない眼瞼をした顔は典型的な酒精中毒患者、道樂者、こせ〳〵と慘酷な事をやる人間の、野卑な、氣むつかしい、下賤な面構へだつた。

彼について二人の娼婦がやつて來た。その一人のヘンリエッタは——アンナ・マルコーヴナ樓で一番年取つた抱女で、經驗を積んだ、すべてのことを見て來た、そして打穀機にくゝりつけられた老馬同樣、すべてを耐へ拔いて來た女であつて、太い低音の持主で、まだ〳〵美しい女である。もう一人は大きなマーニカ、又は鰐のマーニカだつた。ヘンリエッタは娼家から宿屋へ呼ばれて、昨晩から俳優に附きつ切りだつた。

彼はヤルチェンコと並んで腰を下ろすと、直樣別な役を演じ始めた——年取つて人の善い地主といつた風の人間になつた。そしてその人は曾つては自分も大學に學んだことがあるので、かうやつてゐると、父親らしい靜かな感激なしには學生を眺めることが出來ない、といふ風だつた。

「實際、みなさん、若い方々の中にゐると、この浮世のすべての苦勞も心から忘れて、ほつと息吐くことが出來ますよ、」と彼は粗野で荒んだ顔に、芝居がゝりの誇張した、本當らしくない感激の表情を浮べて言つた。「神聖なる理想に對するこの信念よ、この率直なる感激よ！……吾がロシヤ學生より氣高く純潔なものが他にあらうか？……給仕！三鞭酒だ！」といきなり耳ががんとするやうな高い聲で呶鳴つて、拳固で卓子を叩いた。

リホーニンとヤルチェンコとは、彼からおごられたまゝでは濟ましたくなかつた。酒宴が始まつた。どういふ風にしてだつたか判らないが、とに角別室に、間もなく唄ひ手のミーシカと帳簿係のコーリカとが姿を現はして、早速持前の跳びはねるやうな聲で歌ひ出した。

まことを……こそ知れ……

そも、なれは……あけ……ぼの……

眼を覺ましたワーニカ・フスタニカもやつて來た。彼は感動したやうに頭を傾げ、ドン・キホーテ式の皺だらけな老けた顏に、細い、涙ぐんだ、甘い眼をして、說き付けるやうな懇願するやうな調子で言つた。

「學生さん方……この老人に御馳走してやつて下さい……まつたく、わしは學問が好きです……御免なさい！」

リホーニンは誰でも歡迎した。しかしヤルチェンコは最初——三鞭酒の醉が廻るまでは——危ぶむやうな、吃驚したやうな、無邪氣な態で、短かくて黒い眉毛をあげるばかりだつた。俄かに別室は狹苦しくなり、煙つぽく、がや〳〵して息苦しくなつて來た。シメオンはこつそりと音させて外側から窓の鎧戸に閂を下ろした。やうやく客から解放されたばかりの女や、ダンスの合間の女が別室に立ち寄つて、誰かの膝にのり、煙草を吸ひ、てんでに歌を唄ひ、酒を飲み、接吻して、出て行つてはまたやつて來た。女達が廣間よりも別室の方へ氣を取られてゐるのに向つ腹立てたケレシュコーフスキイ商會の番頭連は、一と騷ぎ起さうと考へて學生達に喧嘩腰の談判をしようと試みたがシメオンがそれとなく言ひ棄てた二言三言の力ある言葉で溫和しくなつた。

ニューラが自分の部屋から歸つて來た。それに少し後れてペトローフスキイが歸つて來た。彼が眞面目腐つて話した所によれば、彼はあの出來事を色々と考へながら、今まで街を步いてゐた。そして結局ボリスが事實よくなかつたのではあるが、彼の罪を輕減すべき事情もある。卽ちそれは酩酊だといふ結論に達したといふのである。それからヂェーニャも戻つて來た。だが彼女一人だけで、ソバーシニコフは彼女の部屋で寢込んでゐるのだつた。

俳優にはいろんな隱し藝が無數にあることが分つた。彼は醉つ拂つて窓硝子の上で捉へた蠅の唸り聲や鋸の音の眞似が旨かつた。隅つこに突立つて、神經質な婦人が電話を掛けてゐる處を滑稽にやつて見せた。それから、蓄音器のレコードの唄を眞似たり、終ひには、藝を仕込んだ猿を曳いてゐるペルシャ小僧の眞似を實に活々とやつてのけた。假想の鎖を手に持ち、それと同時に尾長猿のやうに齒を剝き出して、蹲つたり、眼をしばゝ叩いたり、背中を掻いたり、

頭髪を撫でたりし乍ら、鼻にかゝつた單調な物悲しい聲で、文句を訥りながら唄つた。

若いコザックは戰さに行つた。
若い娘は垣根の側に泣き倒れ、
あゝ、悲しい、悲しい……

最後に彼は白いマーニャの手を執つて、フロックの端にくるみ、そして片手を延ばして、泣き面をしながら、横へ傾げた頭を振り始めた。これは黒い顏をした汚ない東邦の子供達を眞似たのであつて、彼等は、古ぼけた、長つたらしい兵卒の外套を着て、銅のやうな色の胸を現はし、毛が脫けて咳をしてゐる猿を懷に抱きながら、ロシヤの隅から隅を徘徊してゐた。

「お前は何だね？」この俳優の冗談を知つてもゐるし、好きでもある肥つちよのカーチャが嚴しく訊ねた。

「セルビヤ人でございますよ、奥さまア」と俳優は哀れつぽく鼻聲で呻いた。「何かおくんなさいまし、奥さまア。」

「その猿の名は何て言ふの？」

「マトリョーシカでございますよ……こいつは、奥さま、腹が空いてゐますので……何か喰べたがつて居ります。」

「お前は旅券を持つてるかい？」

「わし等はセルビヤ人でして。何かやつて下さい、奥さま。」

俳優は全く餘計な人間でないことがわかつた。彼は直ぐに沈んだ氣分を引立てゝ陽氣にした。そして彼は時々大きな聲で呶鳴つた。

「給仕、三鞭酒だ！」しかし彼の遣り口に馴れてゐるシメオンは、この叫びには別に注意も拂はなかつた。

いよ〳〵本物のロシヤ式の騒々しい、譯の分らない亂痴氣騒ぎが始まつた。紅顏で、薄色髪の可愛らしいトルプイギンはピアノでカルメンの中のスペイン民謠を彈奏した。ワーニカ・フスタニカはそれに合はせて田舍踊の百姓を踊つた。彼は狹い肩を上げ、全身を曲げ、下に垂れた手の指を擴げ、變な恰好で、一つ處で長くて細い脚を互ひ違ひに動かした。それから急に鋭く唸つて立ち上ると、その荒々しい踊りの拍子に合せて叫び出した。

うんとこさ、踊れよマトフェイ
草鞋を惜しむな……

「えい、一つの踊りに、廿五カペイカぢや少ねえぞ！」と彼は長くて白くなりかけた頭髪を振り立て乍ら附け加へた。「まことをこそ知れ！」と二人の友達が、濁つてとろんこになつた眼に重たくかぶさつてゐる眼瞼をやつとあげながら吼えた。

俳優は、袋の中からでも撒き散らすやうに、それからそれと卑猥な話をやり出した。すると女達は大喜びで、きやつ〳〵騒いで、可笑しさのあまり、體を二つに曲げたり、安樂椅子の背に轉げ廻つたりした。パーシャと長い間ひそひそ話してゐたウェリトマンは騒ぎの隙にそつと別室から拔け出した。それから數分して、パーシャも靜かな、無習な、おど〳〵した微笑を浮べて出て行つた。

こんな工合で、リホーニンを除いた他の學生達は、或る者は人知れず、或る者は何か口實を拵へて、次ぎ〳〵と別室から姿を消して暫らくは戻つて來なかつた。ウォローヂャ・パーウロフはダンスが見たくなつたと稱し、トルプイギンは頭が痛いから顏洗ひに連れて行つてくれとタマーラに賴んだ。ペトローフスキイは內緒で三ルーブルをリホーニンから受取つて、廊下へ出ると、白いマーニカを呼んでくれと搖母のゾーシャに賴んだ。聰明で氣難し屋のラムゼスですら、今日のヂューニャの不思議な、華やかな、病的な美によつて惹き起された味な氣持を抑へつけることが出來なかつた。彼は今朝重要な退引ならぬ仕事があるので、家に歸つて、せめて二時間でも寢なければならないことが分つてゐた。けれども友人達に別れを告げて別室から出て行く時、素早く眼で意味あり氣にヂューニャに向つて戶口を差した。彼女は直ぐにそれと悟つて承知の印として徐々に、氣づかれないやうに睫毛を垂れた。そして彼女が眼を開いた時、この無言の會話を見るともなしに眼に留めたプラトーノフは、出て行くラムゼスの後姿を見送つた彼女の眼に溢れてゐる憎惡と威嚇の表情を見て愕然とした。五分待つて、彼女は立上るなり、「一寸失禮いたします。」と言つて、オレンヂ色の短いスカートを搖り動かしながら出て行つた。

「どうです？　今度は君の番ですかね、リホーニン。」と嘲るやうに探訪記者が訊ねた。

「いや、お見込み違ひです？」とリホーニンは言つて舌打ちした。「それも信念とか主義とかの爲ぢやありません……いや、僕はアナーキストとして、惡ければ惡いほど好いといふことを自狀します……しかし、幸ひにして僕は大の博奕好きで、僕の體質は全然博奕に消耗されてゐます。ですからかゝる劣情よりは、むしろ單なる嫌惡の情がずつと強く働くんです。ですが、二人の考へがこんなに符合したのは奇妙ですね。僕も同じことを丁度お訊ねしようとした處でしたよ。」

「僕——いやどう致しまして。時とすると、酷く疲れた時は此處で泊ることもあります。イリヤ・サヴィチから奴さんの部屋の鍵を受け取つて、長椅子の上に寢ますよ。しかし僕が——中性的な人間だつてことはずつと以前から此處の

女達は慣れっこになつてゐますよ。」
「ぢや本當に……一度も？」
「さうです、一度も。」
「本當だと言つたら本當ですよ！」とニューラが叫んだ。
「セルゲイ・イワーノウィチはまるで隱者ですよ。」
「昔、五年程前には僕もあゝしたことを經驗しました、」とブラトーノフは言つた。「しかし極めて詰らない、厭なものですね。さつき俳優が演つた蛹みたいなものです。ちよつと窓枠にへばり附いてゐるが、その後で、馬鹿が驚いたやうな恰好で後足で背中を掻き、永遠に飛び去るのです。何こゝの娼家で戀の花を咲かせると言ふんですか？……いやそれにしては僕は彼女達の小說の主人公ではありませんよ。僕は男振りも惡いし、女に對しては臆病で、遠慮勝ちで、腰懸です。ところがこゝの女達は荒々しい情熱、血みどろな嫉妬、涙、毒殺、格鬪、犧牲——まア一と言で言へば、ヒステリカルなロマンチシズムに憧憬れてゐるんです。その氣持は分ります。女の心はいつも戀を要求する。然るに女達に向つて毎日語られる戀は色々の酸つぱい、涎の出るやうな言葉です。そこで餘儀なく戀にも辛子が要る。もうかうなると情熱の言葉でなくて悲劇的な情熱の行爲が必要になつて來ます。だから女達の戀人はいつも盜賊か、人殺しか、男姿か、その他の無賴漢にきまつてゐます。」
「ところで一番肝心なことは、」とブラトーノフは附け加へた。「そんなことをすれば、今まで旨く行つてゐた僕の友情關係がすつかり臺なしになりますよ。」
「御冗談はお止しなさい！」と信じ兼ねたやうにリホーニンが言つた。「何がもとでこゝに夜晝君は流連してゐるんです？　君が文士なら——問題は別だ。說明を見つけるのは譯ない。性格を集めるためとでも、人生を觀察するためとでも。まア、猿の言葉や習慣を研究するために猿と一緒に三年も暮したドイツの敎授といふ工合です。だが君は文士なんて自惚はないと言つたんぢやない。到底駄目だ、出來ない、といふだけの話です。」
「自惚れはないと言つたんぢやない。到底駄目だ、出來ない、といふだけの話です。」
「ぢやさうとしときませう。今度は外の假定をして見ます——君はより善き、正しい生活の宣傳者として此處に現はれてゐるとしませう。丁度、滅びゆく魂の救濟主といふ鹽梅に。ほらあの、基督敎の黎明期の敎父達は三十年間祭壇に立つたり、森の洞の中で暮したりする代りに、市場や娛樂場や淫婦や門附の處へ出かけたさうですね。然し君はさういふ譯ぢやありますまい？」
「さうですよ。」

「そんなら何だつてこんな處にうろ〳〵してるんです？君自身に取つてさま〴〵な事が厭で、苦しくて辛いといふことが僕にはよく判ります。例へばボリスとの詰らぬ口喧嘩だとか、女を毆る下男、その他一般の凡ゆる汚穢、情慾、獸慾、墮落、陷穽、などを絕えず觀察するといふ事がね。左樣、君が一旦口にした以上——君は肉慾に溺れないことを信じます。だが、さうすると、新しい評論の表現を使ふと、所謂君の生活樣式なるものが、僕にはいよ〳〵解らなくなつて來ます。」
探訪記者は暫く答へなかつた。
「いゝですか、」と探訪記者はゆつくり、間を置いて、まるで自分の考へに先づ耳を傾け、それを一々吟味するかのやうにして言ひ始めた。「つまりですね、この生活に於いて僕を惹きつけ、僕に興味を起させるものは、その、何と申しますか……その恐しい赤裸々の事實なのです。どうです、この生活からはまるで凡ゆる常套的な被ひが剝ぎとられてゐるやうなものですよ。虛僞もなく、虛飾もなく、僞信もなく、また社會一般の意見だとか、祖先からの煩い因襲とか、自分の良心とか、そんなものとの妥協が少しもない。何等の幻惑も飾氣もない！　此處の女は言ひます——私は——娼婦で、社會一般の用器で、都會の情慾過剩を捨てる下水溜である。誰でも好きな者は私の所へ來るがいゝ、肱鐵砲を喰ふことはない、それが私の勤めです——しかしこの大急ぎの××の瞬間に對して、お前さんはお金と嫌惡の情と病氣と破廉恥とを支拂へばいゝ——。それだけの話です。人類生活の何の方面を見ても根本的な重大な眞實が、かく迄に怪奇な醜惡な露骨な光輝を以て、何等人類の虛僞の影と虛飾を交へずに輝いてゐる處は他にありませんよ。」
「まアさうだとしませう！　だが、この女達は靑馬みたいに嘘をつきますよ。先づ娼婦達とその最初に墮落した話をして御覽なさい。飛んでもない出鱈目を喋りますよ。」
「大體そんなことを訊くのが間違ひです。それが君に何の關係があります？　もし女達が嘘をつくとすれば、それは子供のやうに嘘をつくんです。君だつて御存じと思ふが、子供つてものは、一番最初の、一番可愛い嘘吐きで、それと同時に、この世の中で一番眞實な人間でせう。しかも注意すべきことは、兩者、つまり娼婦も子供もたゞ吾々——男に對し、大人に對してのみ嘘を吐くといふ點です。お互ひ同志では嘘をつかない。——たゞ興に乘ると間に合せを言ふだけです。けれども吾々に對しては嘘をつく。といふのは我々が彼等に嘘を要求してゐるからです。我々がいろんな馬鹿氣た態度や質問で、まるで緣もゆかりもない彼女

達の心に這入りこむからです。それに、女達が吾々を大馬鹿者、度すべからざる僞善者と心祕かに思つてゐるからです。もしお望みならば、娼婦達が必ず嘘をつくといふ場合を列擧して御覽に入れます。さうすれば、娼婦に嘘をつくやうに仕向けたのは男だといふことが、君にも呑み込めるでせう。」

「では、伺ひませう。」

「第一、女は矢鱈に化粧する。時とすると害になる位にね。それは何うしてか？　それは交尾のついた蝦夷山鷄のやうに、春先きになると馬鹿になる程その性的成熟に苦しめられてゐる面皰だらけの士官候補生や、お役所の哀れな腰辨や、姙娠した女房をもつてゐる夫や、九人の子供の父親や——こんな手合はみんな、情慾の過剩を捨てるといふ聰明な、單純な目的をもつて此處へ來るのでは全然ないのです。かういふ輩は快樂を貪るつもりでやつて來る。そこでこの恥美派の連中には美といふものが必要ですからね！　ところがこの抱女達、平凡な素直な、偉大なロシヤ國民の娘達は、一體美學といふものをどう見てゐるでせう？『甘いものは——旨い、赤いものは——美しい』といふ譯で眉黛、白粉、頰紅から美をお受け取り下さいといふ譯になるのです。

これが一つ。第二は、これらの御立派な伊達男は美だけでは物足らず——戀に似たものを與へろつていふんです。彼の愛撫のために、例の下らない歌の文句にある『物狂ほしき情熱の炎』つて奴が女の胸に燃えるやうにといふのです。どうです！　君はこんな事を望みますか？　そこだよ！　だから女は、顏や聲や溜息や呻きや身振で嘘をつくんです。しかも男は男で、心の底ではその職業的僞瞞を知つてゐます。それでゐて尙喜んでゐるのです。あゝ俺は何と好い男振りだらう！　女共の俺に惚れてゐることは何うだ！　何てまア俺は女共を夢中にさせたことだらう！……とね。ところでゞす。滅茶苦茶に、露骨に、眞實とも思はれない遣り方で、面と向つて男にお追從を言ふ。ところで言はれた本人はこれをよく見、また知つてゐながら——いやはや、やつぱり何だか甘い氣持が心を唆るんですね。こゝでもさうなんです。一體、嘘の始めは誰だと思ひます？

そこで今度は第三の點ですが、これは君自身が仄めかしたものです。抱女が最もよく嘘を吐くのは、『どうしてこんな生活に墮ちたか？』と訊ねられた時です。抑々、女にこんなことを質問する權利が何處にありますか？　女は君の內輪の生活に立ち入らないぢやありませんか？　女は君の最初の『神聖なる』戀とか、君の姉妹や許嫁の純潔などに興味を持つてゐません。はゝあ！　君が金を拂ふからです

か？　素敵です！　女將も妓夫も、警察も醫者も市會も君の利益を擁護してくれる。素敵ですよ！　君が戀のために雇つた娼婦の君に對する鄭重な禮儀正しい行爲は君のために保證されてある。そして君の人格は傷けられはしない……直接の意味に於いてだつてさうだ。つまり、無意味なうるさいほどの質問をすれば當然受けても文句の言へない横面を毆られるといふ意味に於いてすらも。しかもなほ君は金を拂つてやつたからとて眞實までも要求するのですか？　だがもう君は眞實を知つたり調べたりする必要はないのです。君自身が型に嵌つた人間だからそれ相當な型に嵌つた話を聞かされるでせうよ。といふのは、君に取つて人生といふものが極めて平凡で退屈なものであるとか、又は人生といふものが本當らしいものでない限り、もはや君には人生は眞實でないからです。そこで君は、紋切型の月並な、士官や番頭や子供の話、田舍にゐて墮落した娘のことを歎いて、家に歸るやうに口說いてゐる老齡の父親の話などをいつも聞かされる。しかし、リホーニン君、僕の言つてる事は何も君に關係してゐるんぢやありませんよ。まつたく君には眞實の大きな心のあることを僕は感じてゐます……さあ、君の健康を祝して乾杯しませう。」

二人は乾杯した。

「その續きを話しませうか？」とプラトーノフは逡巡ひながら續けた。「退屈でせうね？」

「いゝえ、どうぞ話して下さい。」

「で、女達はその外に嘘を吐く。政治上の尻馬に乘つて女達に偉さうに見せかける手合に對しては殊に無邪氣に嘘をつく。この點では彼女達は何にでも贊成する。今日私が女にかう言ひます。現代ブルジョア社會××××××！　××や××××資本家、地主、官僚を××せよ、とね。すると女は熟心に贊成する。ところが明日になつて穀物商ノズドルーノフとでもいふ奴がやつて來て、社會主義者を全部死刑にし、大學生を懲罰に附し、キリスト教徒の血を汚すユダヤ人をみんな虐殺しなければならぬといへば、女はそれにも喜んで贊成する。そして、なほ女の想像を煽つて自分に惚れさせでもしようものなら、女は君達の後から何處へでも跟いて行く。ユダヤ人虐殺であれ、バリケードであれ、竊盜であれ、殺人であれ。子供つてものは說き伏せるに譯はない。然るに娼婦はまるで子供ですからね、リホーニン君……

十四の時、女を墮落させると、十六になつてから黃色い鑑札と花柳病とをもつた天下御免の娼婦になります。そしてその女の一生は、何だか奇怪な、めくらとつんぼの壁に取り圍まれて、世の中から隔離される。女達の日常の用語に氣

を附けて御覽なさい。三十か四十の言葉を知つてる位が關の山で——まるで子供か未開人です。食べる、飲む、寢る、男、寢臺、女將、ルーブル、戀人、醫者、病院、襦袢、巡査——これ位のものです。その知的發達、その經驗、その興味、などといふものは死ぬ迄子供の標準で止つてゐて、まるで十歳の時から學校の門を一歩も外へ出たことのない白髪交りの無邪氣な女舍監か、子供の時分僧院に入れられた尼僧同樣ですよ。早い話が、大きくなる性質の木でありながら、硝子の筒をかぶり、空鑵の中で成長した木を想像して見て下さい。彼女達の強ひられた嘘——實に無邪氣な、目的のない、習慣的な嘘は、彼女達の生活のこの子供染みた一面に由來すると思ふのです……だが、その代り、夜の値段に關する事務的な取引、一夜に十人の男客、市の父親達によつて發布された、硼酸水の使用と身の廻りを清潔にして置くことに關する刷り物の規則、毎週の醫者の檢査、鼻感冒位の程度に、氣にも懸けずに笑談半分に、單純に苦痛もなく見てゐる汚はしい病氣、男に對する女達の嫌惡——それを女達は殆んど例外なしに同性愛で代へて、少しも隱し立てしない位の深刻な嫌惡、さういつたやうなもの〻中に、何といふ怖ろしい、赤裸々の、何等飾りもない、公然たる眞實が存在してゐる事でせう。彼女達の無茶苦茶な生活は、その皮肉や畸形な粗野な不合理と共に、凡て手に取るやうに私には分ります。しかしその生活には、上層から下層まで全人類を包んでゐる所の、人と自己とに對する、あの虚僞はないのです。考へて下さいリホーニン君、夫婦生活の百の中、九十九まではどれほどの不愉快な永續的の嫌惡すべき虚僞があるか！　どれほど盲目的な容赦のない慘忍性、しかも野獸的ではなく、人間的で賢明で、先きの見える打算的な慘忍性があるか——聖なる母としての感情の中に——そしてこの感情が如何に優しい花で飾り立てられてゐるかを御覽なさい！　そして我々の巢、我々の肉塊、我々の女、我々の子供などを保護する爲めに、文明人によつて考へ出された不必要な馬鹿々々しい職業、この色々な監督者、管理者、審査員、裁判官、檢事、獄吏、辯護士、課長、官吏、將官、兵卒、その他數百數千の名稱、これ等はすべて人類の貪慾、卑怯、邪惡、奴隸、合法的淫慾、怠惰、貧窮等を助長してゐます。左樣　これこそ眞實の言葉です！——人類の貧窮。ところがまた何といふ立派な言葉があることでせう！　祖國の祭壇、隣人に對するキリスト教的同情、進歩、神聖なる義務、神聖なる財産、神聖なる愛だなんて、ちえツ！　僕はもうどの美しい文句も信じない。これらの嘘吐き、卑怯者、貪慾漢のことを考へると胸

糞が惡くて堪らない。乞食共奴が！……人間は大きな喜び、純間ない創造のために生れたのです。その創造に於いて人間は神です。人間はまた、廣い、自由な、何ものにも妨げられない、萬物に對する愛のために生れて來たのです。即ち、木や、大空や、人類や、犬や、優しい穩やかな美しい大地、その中でも殊にその祝福されたる母性や、朝や夜や、美しい日々の奇蹟を持つ大地に對する愛の爲めに生れて來たのです。ところが人間は御覽の通り嘘をつき、乞食になり果て、墮落して了つたのです！……あゝリホーニン君、憂鬱ですよ！」

「僕はアナーキストとして幾分君の言ふことが分ります。」とリホーニンは沈痛に言つた。彼は探訪記者の言ふことを聽いてゐるやうでもあり、聽いてゐないやうでもあつた。或る想念が重苦しく彼の頭の中に萌芽み始めたのだつた。

「しかし一つ、分らないことがあります。もし君にとつて人類がそんなにやくざなものであるとすれば、君はどうしてそれを我慢してゐるんです？　しかもこんなに長い間、これら一切の事を、」リホーニンは、手を卓子の上に置く動かした、「人類が考へ出したもので最も汚らはしい事を？」

「それは僕にも分りません、」とプラトーノフは率直に言つた。「ねえ君、僕は——放浪者で、熱烈に人生を愛してゐます。僕は旋盤工や、植字工にもなりました。煙草を、安い屑煙草を栽培して賣つたこともあります。火夫になつてアゾフ海を航海したこともあります。黒海のドゥビニン漁場で漁業に從事したこともあるし、ドニェプル河で西瓜や慷瓦を舟に積んでゐたこともあります。曲馬を興行して廻つたこともあれば、俳優になつたこともあります——全部は記憶してゐません。そしてこれは貧窮のためにそんなことをやつたのぢやないのです。まつたく、單に、あく迄も人生を味はうとする貪婪な氣持と、抑へ難い好奇心とからです。實際、數日でも馬になつたり、植物になつたり、魚になつたり、または女になつて出産の經驗もして見たいと思ひます。そしてそれらの内面生活をやつて、僕が出會ふ凡ゆる人達の眼で世界を眺めてみたいのです。さういふ譯で僕は街から街へ、村から村へ、何の心配もなく放浪し、何の束縛もなく、幾十となく職業を知つてもゐるし、愛してもゐます。そして運命が私の帆を差し向けるが儘に何處へでも喜んで航海します……。さういふ次第で僕は娼家へやつて來たのですが、その内面を見れば見るほど、僕の心の中には驚愕と不可解と、大なる憤怒が增大して行くんです。でもやがてお終ひになりませう。秋になれば——また左樣ならです。軌道工場にはいります。僕に一人の友人がゐま

してね、その男が工場を建てるんです……ちよつと、ちよつと、リホーニン君……俳優の言つてゐることを聽いてごらんなさい……あれが三幕目ですよ。」

この時まで、袋に入れられた小豚や、猫と犬との喧嘩を上手に眞似てゐたエグモント・ラヴレーツキイは、段々と疲れて弱り出した。そして間もなく襲つて來る自己譴責の氣分になりかけてゐた。その發作に當つて、彼は何べんかヤルチェンコの手に接吻しようとやりかけた。彼の眼瞼は赤くなり、剌々した唇のまはりには、べそをかいた皺が出來、鼻や咽喉が涙で詰つてゐるのはその聲で解つた。

「俺は道化役を勤めてゐるんだ！」と彼は拳固で自分の胸を打ちながら言つた。「滿腹した群衆のお笑ひ草に縞ズボンをはいて、變挺な身振りをしてゐるんだ。自分の光明を消し、天才を埋めてしまつたのだ。怠け者の奴隷みたいに。それでも以ー前ーは」と彼は悲劇的にうめいた。「以ー前ーは！　ノウォチェルカッスクでお訊ね下さい。トウェーリでお訊ね下さい。ウスチュジナで、ズウェニゴロードカで、クルイジャボールでお訊き下さい。私はどういふ工合にヂャードフやベルギンを演じたか、どんなにマクスを演つてゐたか、私がウェリティシチェフのどんな型を作り出したか——これが私の主な役割なんです。ナディン・ペレコープスキイは私と一緒にスムベコーフの所でやり始めたんです。私はニキーフォロフ・パヴレンコとも一緒に勤めてゐました。一體誰がレグーノフ・ポチャイニンに名聲を作つてやつたか、それは私です！　然るに今では……」

彼は鼻で啜泣をして助教授に接吻しようと這つて來た。

「さうです！　私を輕蔑して下さい、侮辱して下さい、正直な方々。私は惡ふざけしたり、醉拂つたりしてゐるんです。……聖油を賣つたり……零したりしました。魔窟では賣女と一緒に坐つてゐます。しかも私の妻は……清い、純な私の小鳩よ！　あゝ若し彼女が知つたら、一寸でも知つたら！　彼女は稼いでゐます。流行品雜貨店を開いてるんです。彼女の指——あの天使のやうな指は針の刺傷だらけです。それに何ぞや、この私は。あゝ清淨無垢な女よ！　私は祿でなしだ！　私はお前を誰かと取換へてゐるんだ！　あゝ恐しい！」と俳優は自分の頭髮を掻きむしつた。「先生、あなたの博學な手に接吻させて下さい。あなたぢゃけが私を理解して下さる。これから參りませう。あなたに妻を紹介致します。どんな天使だか、お分りになります。彼女は私を待つてゐます。毎晩眠らない。彼女は私の子供に手を重ねて一緒に祈つてゐます。『神樣、お父樣をお救ひ下さい、お護り下さいませ、』とね。」

「嘘ばつかり言つてら！」と醉つぱらつた白いマーニカが突然憎々しげに、エグモント・ラヴレーツキイを眺めながら言つた。「何を祈つてるもんかね。あんたの寢臺の上で、他の男と好い氣持で寢てるわよ。」

「默れ！　賣女！」と俳優は發作的に叫鳴つて、壜の口を握ると、彼女の頭上に振り上げた。「私を押へて下さい。でないと私はこの阿魔の頭を叩き潰すから。そんな邪教徒の言葉で濟しちやいけねえ……」

「邪教徒の言葉ぢやないわよ。私は、聖餐を受けてゐますよ、」と彼女は荒つぽく答へた。「あんたこそ馬鹿さ。嫉妬を燒いてゐるんだわ。あんたは自分が惡所通ひしながらさ、女房が間男しないようにと願つてるのね。お馬鹿さん、だら〳〵と涎を手綱みたいに垂らす處をよくも目つけたものだ。何だつて子供なんぞ卷添へにしたんだい？　不幸な親爺だよ！　そんなに私を睨んだり齒を剝き出さなくてもいいよ。ちつとも怖かないよ。あんたこそ馬鹿さ！」

ヤルチェンコの方では、ベネヂクチンを飮むといつも喧嘩する白いマーニカと、この俳優とを宥めるのに隨分努力と雄辯とを要した。たうとう俳優は大仰に、醜く、年寄臭く獻欵して、鼻をかみ、へたばつてしまつたので、ヘンリエッタが自分の部屋へ連れて去つた。

もはやみんなはぐつたりしてゐた。學生達は次ぎ〳〵に寢臺から戻つて來た。彼等とは別々に彼等の一夜の戀人も平氣な風ではいつて來た。ほんとうに、兩方とも、たつた今、窓硝子から飛び去つた蠅の雌雄に似てゐた。みんな欠伸をし、背伸びをし、不眠のお蔭で蒼白めた、不健康にてかてかした顏には、我にもなく浮んで來た懊惱と嫌惡の表情が長らく消えなかつた。そして解散する時に挨拶した際彼等の眼には、一度、同じ汚れた不必要な罪を犯した共犯者同志に見るやうな、どうやら敵意ある感情が閃めいてゐた。

「君はこれからどちらへ？」とリホーニンは小聲で探訪記者に訊ねた。

「いや、實を言ふと、自分でも分りません。イサイ・サヴィチの部屋で泊らうかとも思ひますがね、こんな素敵な朝を失ふのが殘念です。で、一風呂浴びてから汽船に乘り、リプスキイ僧院の或る知り合ひの、飮んだくれの黒衣僧を訪ねようかと思ひます。ところで何ですか？」

「どうかも少し居殘つて、外の連中より後になつて下さい。一言二言、重大なことをお話しゝたいのです。」

「承知しました。」

最後にヤルチェンコが歸つた。彼は頭痛と疲勞にかこつけた。彼が娼家を出るとすぐ、探訪記者はリホーニンの手を

取つて、時を移さず車寄の硝子張の玄關へ引張つて行つた。

「あれをごらんなさい！」と彼は街を指して言つた。

見ると、窓のオレンヂ色の色硝子を透して、リホーニンは、助教授がツレッペリ樓の呼鈴を鳴らしてゐる姿を認めた。やがて扉が開き、ヤルチェンコは家の中に消えた。

「どうして氣が附いたんです？」とリホーニンは驚いて訊いた。

「何でもありませんよ。僕は彼の顏を見ましたし、彼がウェールカの肌衣を撫でゝゐる所を見ましたから。外の連中は左程遠慮しなかつたが、あの人は恥しがり屋ですね。」

「さ、ぢや行きませうか、」とリホーニンが言つた。「長くお引留めは致しませんから。」

十二

抱女達のうちで別室に居殘つたのは、夜着を着てはいつて來たヂェーニャと、大きな籐椅子の上に丸くなつて、話最中に、可なり前から寢込んでゐたリューバの二人だけだつた。生々として雀斑のあるリューバの顏は、穩やかで、子供のやうな表情を浮べ、唇は、夢を見て笑つてゞもゐるかのやうに、美しい、靜かな優しい微笑が、かすかに名殘を留めてゐた。部屋の中は濃い煙草の煙で青く、饐えてゐた。

溶けて流れた蠟が蠟燭や燭臺の上に固まつてゐた。コーヒーや酒の零れたのや、蜜柑の皮の散亂で、卓子は亂雜で目も當てられなかつた。

ヂェーニャは長椅子に脚をあげ、手で膝を抱へて腰掛けてゐた。上から下へと鼻梁の方へ物凄く下がつた黑い眉毛の下に隱れてゐるやうな、その深い眼の沈鬱な炎は、又もやプラトーノフを驚かせた。

「蠟燭を消しますよ、」とリホーニンが言つた。

水々しい、眠さうな朝の薄明りは、窓の隙間から差し込んで部屋に溢れた。消えた蠟燭の燈心は細々しい筋を曳いて煙つた。煙草の烟は重り合つた空色の練絹のやうに搖めいてゐたが、窓の扉の心臟形をした穴から射し込む日光は、快活な埃つぽい金色の双の形をして部屋を斜に貫き、軟かい熟した金色のやうに壁紙に波うつた。

「かうして居る方が、いつそいゝですなア、」とリホーニンは腰を下ろしながら言つた。「かいつまんで申上げますが、さア、何から始めたらいゝでせうか。」

彼は何氣なくヂェーニャを眺めた。

「ぢや、あたし出て行きませうか？」と彼女はあつさり言つた。

「いや、掛けてゐ給へ」と探訪記者はリホーニンに代つて答へた。「この娘は邪魔にはなりませんから」と學生の方に向いて一寸微笑んだ。「話は淫賣に就てゞすね？さうでせう？」

「えゝ、まア、さういつた風の……」

「いや結構。この娘の言ふのを聞いて御覽なさい。この娘の意見は極めて皮肉ではありますが、時にはどうして、千鈞の重味がありますよ。」

リホーニンは掌で自分の顏をひどく撫でたり、揉んだりして、それから指と指とをからんで、二度ほど、焦々しく鳴らした。そして、そは〳〵して、言はうとしてゐることを自分でも憚つてゐるらしく見えた。

「あゝ、どうでも好いんだ！」と突然彼は怒つてゞもゐるやうに叫んだ。「今日君はこれらの女達に就いて話をして呉れました……僕はそれを聞いてゐました……實際君は別に耳新しい事を聞かして呉れたのでもなかつた。けれどもー不思議なことに——何故だか僕は自分のだらしない生涯の中で、始めて聞いたかのやうに、眼を開いてこの問題を眺めたのでした……君にお訊ねしますが、賣春とは結局どんなものか？　抑も何ものであるか？　大都會の氣まぐれな妄想か、永遠の歷史的現象か？　何時になつたら止むべきものか。それとも全人類の死滅と同時にやうやく滅びるものか？　僕にこの事を答へてくれるのは誰でせう？」

プラトーノフは例の癖で少し眼をしかめながら、じつと彼を凝視めてゐた。リホーニンは一體どういふ根本思想からこのやうに烈しく苦しんでゐるのか、それがプラトーノフの興味を惹いた。

「それが何時になつたら止むか——誰も君に答へる者はない。或は、社會主義者やアナーキスト達の美しい××××××××された時、××××××のものとなり、××××でもなくなつた時、愛が絕對に自由となり、唯自分の限りない××にのみ××され、汝の、俺の、といふやうな××××××なつて、一つの幸福な家族の如く××××××し、地上の××が現出し、人間がまた裸で、祝福されて、罪のない者になつた時、まア、さういつたやうな時でせうね……」

「ぢや今は？　現在は？」とリホーニンは次第に高まる昂奮を以て訊ねた。「手を束ねて見てゐるだけですか？餘計な嘴を入れるなつて譯ですか？避け難い惡として忍ぶんですか？　妥協して手を振るんですか？　祝福するんですか？」

「いや、それは避け難い惡ではないが、打ち克ち難い惡なんです。然し君に取つてはどうだつて好いぢやないですか？」とプラトーノフは冷靜な驚きをもつて訊ねた。「君はアナーキストぢやありませんか？」

「僕がどんなアナーキストです。左樣、僕はアナーキスト

です。何故かと云ふに人生について考へる時、僕の理性はいつゝも僕を論理的に××××××××××導くんです。僕自身としては理論上かう考へます。人間は相互に爭闘し合ひ、欺瞞し合ひ、羊の群のやうに頭髪を剪らせるがいゝ。暴行によつて、遲かれ早かれ、敵愾心が生れるやうにさせるがいゝ。子供を虐待しろ。創造的思想を土足にかけろ。奴隷も宜からうし、賣春結構、泥棒するならしろ、××も流さば流せ……勝手にするがいゝ。××くなれァなるほど××くなるんだ。それだけ最後が近づくんだ。僕は思ふに、魂のない事物にも、恒久に亙る幾千萬の人類生活にも、一貫する偉大な法則があります。それは、動の力は反動の力に相等しいといふことです。ですから悪いほどいゝ譯です。人類に悪と復讐とが蓄積するがいゝ。それが奇怪な腫物——地球全體ほどの大きさの腫物になつて化膿するがいゝ。さうすればいつかは潰れるのだ。耐へ切れぬほどの苦惱と恐怖があつてもいゝ。膿汁が全地球を浸すがいゝ。人類はその膿汁の中に息塞つて滅亡するか、全快して新しい、美しい人生に生れ更るか、何方かです。」

リホーニンは冷たくなつた黒いコーヒーをぐつと飲み干して熱心に續けた。

「さうです。さういつた風に僕は外の多くの人と同じやうに理論を立てゝゐます。自分々々の部屋に腰かけて、パンと煮た腸詰とで茶を啜りながら。この時は個人の生命の價値は物の數にも入らず、數學的公式に於ける無限小の數なんです。然るにです。子供を虐待してゐる處を目擊するとしませう。すると赤い血潮が怒りに燃えて頭へあがつて來る。農民や勞働者が勞働してゐるのを見ると、自身の代數的計算が恥しくなつて來て氣も狂ひさうになります。然し——何だか知らないが——人間の心の中には、不合理な、まるで非論理的な、けれども人間の理性よりも百倍も強い何ものかゞ介在してゐます。そこで今日のことですが……どうして僕は、寢てゐる人のものを盜んだやうな、三歲の幼兒を瞞したやうな、又は、縛られた者を毆るやうな氣がするんでせう？　またどうして、今日は、賣春の惡が僕自身の罪であるやうな——僕の沈默、僕の無關心、僕の間接的默認の罪であるやうな氣がするのでせう？　僕はどうしたらいゝのです、プラトーノフ？」と學生の聲は悲しみを帶びてゐた。

プラトーノフは細い眼をしかめて彼を眺めたまゝ何も言はなかつた。するとデェーニャが、突然、意地惡い調子で言ひ放つた。

「ぢやいつか來た英國女のしたやうにするといゝわ……あ

る赤つ茶けた婆がやつて來たのさ。大方身分のある奴なんでせうよ、大勢のお伴を拉れてゐたから……みんなお役人でね……その前に警察署長補と分署長ケルベシュとがやつて來てね、その署長補がきつぱりと言つたわよ。『もし阿魔共が一言でも野卑な言葉でも口に出すか何かしたら、この家は石塊一つだつて殘しちや置かんぞ。そして女共は一人殘らず警察で酷い目に遭はして牢屋へ叩き込んでやるから』つてね。それからその老耄れ婆がやつて來たのさ。ぺちや〳〵何か外國語で言つて、しよつちゆう片手で天を指して、その後で五錢本の聖書を私達みんなに與れて歸つたのよ。どう、あんたもさうやつたがいゝわ、ねえ。」

プラトーノフは大聲で笑つた。しかしその嘲笑を理解もせず不思議にも思はないリホーニンの無邪氣な悲しみの表情を見ると、プラトーノフは笑を抑へて、眞面目に言つた。

「どうも仕方はありませんね、リホーニン。所有權のある限りは貧窮は存在します。結婚の存在する限りは賣春は無くなりません。誰が常に賣春を維持し、養つてゐるか御存じですか？　それは謂ふ所の堅氣な人々、一家の立派な父親、非の打ち處のない夫、戀してゐる兄弟などですよ。この連中は料金制の淫蕩を合法化し、規則に箝め、特許するに足る尊敬すべき理由をいつでも見出します。でなければその淫蕩が彼等の寢室や、子供部屋に侵入して來るのをよく知つてゐるからです。彼等に取つては賣春は——他人の慾情が彼等の個人の合法的寢室へ侵入するのを防ぐ防禦手段なんです。それに又一家の立派な父その人が密かに淫蕩に耽ることを辭さない。まつたく、妻や女中や情婦だけぢやいつも同じで飽きて了ふのです。事實に於いて人間は極端に一夫多妻の動物です。人間の持つ、鷄のやうな性愛の本能はツレッペリ樓とか、アンナ・マルコーヴナ樓とかいふやうな豐饒な苗床で芽をふくのがいつも快いんです。いや勿論、男女同權主義の夫や、年頃の娘を六人持つてゐる父親はいつも賣春の恐怖を絶叫することでせう。福引會や素人演劇の力を借りて、淪落婦人救濟會とか、聖マグダレナ・ホームとかを設立さへすることでせう。しかしさうした人間は賣春の存在を祝福し、維持してゐるのです。」

「マグダレナ・ホームですつて！」と、さつきからまだ失せ切らない憎惡にみちた、靜かな笑ひを浮べてヂェーニャは繰返した。

「さうだ、僕は知つてゐます。こんな虚僞の計畫はみんな無意味で——間斷なき侮辱です、」とリホーニンは遮つた。

「しかしです、僕はいくら滑稽でも馬鹿でも構はぬ——僕は同情してゐる傍觀者でありたくない。土手に腰かけて、火

事を眺めながら『あれ、燃えてるぢやないか……いや本當に燃えてゐる！　大方人々も焼け死ぬぞ！』と言ひながら自分はたゞ悲しんで眼を叩いてゐるだけの人間でありたくないのです。」

「成程ね、」とプラトーノフは氣むつかしげに言つた。「ぢや君は玩具の喇叭を持ち出して消しに行くんですか？」

「いゝえ！」とリホーニンは熱して叫んだ。「ひよつとしたら——それは何故だか分りませんが、ひよつとしたら一人の人間でも僕は救ひ出せるかも知れません……この事を實はお訊ねしたかつたのです、プラトーノフ。君はきつと助力してくれるでせう……たゞ、お願ひしますが、嘲笑しないで、冷かさないで……」

「つまり此處から抱女を拉れ出さうつていふんですね？　救はうつて？」と注意深く彼を眺めながら、プラトーノフは言つた。今迄の話が、何に向いてゐたのか、今になつて彼は合點が行つた。

「さうです……僕には分らないが……試つて見ます、」と自信なささうにリホーニンが答へた。

「元の古巢へ歸つて來ますよ。」とプラトーノフが言つた。

「歸つて來るわ。」とヂェーニャはきつぱりと繰返した。

リホーニンはヂェーニャに近づいて、手をとつて、震へる小聲で切り出した。

「ヂェーネチカ、多分君は……ね？　僕は戀人として呼ぶんぢやないんだ……友人としてだ……何でもない事だ半年も靜養して……何か仕事も教へようし、讀書もしようし……」

ヂェーニャは忌々しげに自分の手を振り放した。

「勝手にするがいゝ！」と彼女は叱鳴るばかりに言つた。「あたしはあんたみたいな人を知つてますよ！　あんたの靴下の破れを縫ふんでせう？　石油焜爐で料理をするんでせう？　夜は毬栗頭連中がやつて來て、がや〳〵喋るので寢られやしないでせう。それでさ、あんたが醫者か辯護士か官吏にでもなれア、あたしの背中を膝で突き飛ばして、街へ出て行け！　つて來るのさね。賣女、お前は俺の若い時代の生活を蝕んだんだ。俺は堅氣な、純潔な、無邪氣な女と結婚するんだ、といふ譯さね。」

「僕は兄妹として……僕はそんなことはしないで……」とリホーニンは狼狽てゝ呟いた。

「そんな兄妹ごつこはね、知つてますさ、最初の夜までだわね……止したがいゝ。馬鹿々々しいことは言はないで頂戴！　聞くさへ飽き〳〵する。」

「ちよつと待ち給へ、リホーニン、」と探訪記者は眞面目に言ひ出した。「君は自分の力以上の重荷を背負はうとしてるんぢやないか。僕は、主義の上で普通の百姓娘と結婚した理想主義者の民情派を知つてゐるが、この手合は、自然や黒土や未開墾の力なんてことを考へたもんだ。ところがこの黒土が一年も經つと、でぶ〳〵の醜い女になつて、一日中寢床にゐて、薄餅を喰べたり、指に三文指環を嵌めて、指を伸して見惚れたりするんです。さもなければ臺所に坐つて、馭者と甘い果實酒を飲みながら田舍式情事をやらかすんです。ねえ好いですか、今の場合は、それよりもまだ悪いですよ。」

三人とも默つた。リホーニンは蒼白めて、汗ばんだ額をハンカチで拭つてゐた。

「いや、馬鹿な！」と突然彼は頑として叫んだ。「僕は君の言ふことを信じない！　信じたくない！　リューバ！」と彼は寢てゐる娘を聲高く呼び起した。「リューボチカ！」。

娘は眼を覺まして、掌を口にあて、一端から一端へと動かして、欠伸をし、滑稽に子供臭く微笑んだ。

「あたし寢ちやゐなかつたのよ、みんな聞いたわ、」と彼女は言つた。「たゞほんの少し、うと〳〵してたの。」

「リューバ、君、僕と一しよに此處を出たかないかね？」とリホーニンは訊ねて彼女の手を執つた。「しかし全然、永久になんだよ。二度ともうこんな處へも來ないし、街へも出ないんだよ。」

と、リューバは訊ねるやうに逡巡つてヂェーニャを眺め、無言でこの冗談の說明を求めるかのやうだつた。

「澤山だわ、」とヂェーニャが狡るさうに言つた。「あんたでさへまだ勉强中なのに、何の必要があつて妾なんか置くの？」

「妾ぢやないよ。リューバ……たゞ君を助けてあげたいんだよ……こゝにこの娼家にゐたつて旨くは行かないだらう。」

「それア分りきつてますわ。砂糖ぢやあるまいし！　あたしがヂェネチカのやうに氣性が確かりしてるか、パーシャみたいに男を惹きつけることが出來たら別だけどね……でも、あたしどうしても此處には馴れ切れないわ……」

「ぢや行かう一緒に行かう！」とリホーニンは說きつけた。「君は多分何か手細工を知つてるだらう？　さうしたら何か縫ふなり刺繍するなり型をとるなり知つてるだらう？」

「あたし、何も知りませんわ！」とリューバは遠慮深さうに答へて、笑ひながら顔を赤らめ、空いた方の手の肱で口を覆うた。「田舍風でいゝつて仰しやるなら、知つてゐますけど、外には何も知らないわ。料理ならいくらか出來るけど……坊さんの處にゐて料理してゐましたから。」

「そいつは結構！　大出來だ！」とリホーニンは喜んだ。「僕は君を助けて食堂を開かう……分るかい、簡易食堂だ…

…廣告も捧へてやらう……學生連がやつて來るよ。素晴しいぞ！……」

「冗談はお止しなさいよ。」とリューバは少し憤つとしたが、また訊ねるやうに横眼でヂェーニャを見た。

「冗談ぢやないのよ、」ヂェーニャは妙に震へる聲で答へた。「この人はほんとに眞劍なんだよ。」

「誓つて言ふよ、眞劍だ！　神かけて」と學生は熱心に言添へた。そして何の爲めだか、聖像も何もない隅に向つて十字を切つた。

「ほんとうに、」とヂェーニャは言つた。「リューブカをお連れなさいな。あたしとは違つてます。あたしは癖のある、年とつた、騎兵の牝馬みたいよ。乾草でも、鞭でも性分は直りませんわ。だけどリューブカは素直な好い娘です。まだあたし達の生活に馴染んぢやゐないわ。まア馬鹿ね、何であたしを見詰めてゐるの？　訊かれたら返辭するものよ。どう？　承知なの？　厭なの？」

「それは姐さん！　もし冗談でなく本當なら……だがヂェーネチカ、お前さんどう思ふ？」

「まア、この木偶棒！」とヂェーニャは腹を立てた。「お前さんは何方が好いと思ふの、鼻つ缺けになつて藁の上で腐つたり、犬みたいに垣根で野垂死するのと、堅氣な女になるのと？　馬鹿ね！　あの方の手に接吻すればいゝのに、そんなに勿體ぶつてさ。」

無邪氣なリューバは本當に、リホーニンの手に唇を差伸べた。この動作は皆を噴き出させて感動を餘り與へなかつた。

「いや結構、素敵だ！」と喜んだリホーニンはせかゝし出した。「すぐ女將の處へ行つて今日限りこの家を出るつて言つて來給へ。そして手廻りの荷物を纏めるんだ。近頃は昔と違ひ、女が廢業したいと思へば何時だつて出られるんだ。」

「いゝえ、それは駄目よ、」とヂェーニャは押止めた。「この娘は出て行ける——それはさうよ、本當ですわ。でも厭なことや、喚めき聲を背負ひ込まない方がいゝわ。學生さん、かうなさい。あんた十ルーブルは惜しかないでせう？」

「無論、言ふ迄もない……さアどうぞ。」

「あんたがね、今日一日リューバをお宅へつれて行くつて、この娘から鴇母に言はせるんですよ。それがお定りで十ルーブル。その後で、明日でもいゝからこの娘の鑑札と荷物を取りにいらつしやいよ。なアにあたし達が旨くやつてあげますわ。それから、あの娘の鑑札をもつて警察へ行き、リューバ何某はあんたん處の女中に雇はれたから、この娘の鑑札を本當の旅券と取つ替へてくれと申し出なければやならないわ。さア、リューブカ、急いで！　お金を持つて行つて來るんです。でも氣をつけて巧くやらなけや、あん畜生、眼色で覺つてしまふよ。それから忘れずにね、」と彼女はリューバの後から聲をかけた。「頰紅を落すんですよ。でないと馭者達が指差しするよ。」

半時間も經つと、リューバとリホーニンは車寄せの處で馬車に乘つた。ヂェーニャと探訪記者とは歩道に立つてゐた。

「君は大變な馬鹿をやるんですねリホーニン。」とプラトーノフは物憂げに言つた。「だが君の立派な感激には敬意を表しますよ。考へると——直ぐに實行だ。君は勇敢な、立派な靑年だ。」

「門出をお祝ひ致します！」とヂェーニャは笑つた。「いゝですか、赤ちやんの洗禮日には招待を忘れないでね。」

「當にしないで！」とリホーニンは帽子を振りながらからから笑つた。

彼等は去つた。探訪記者はヂェーニャをちらと眺め、彼女の柔らいだ眼に涙を認めて驚いた。

「あゝ神樣、あゝ神樣。」と彼女は呟いた。

「今日はどうかしたのか、ヂェーニャ？」と彼は優しく訊ねた。「どうしたんだね？　苦しいのか？　何か私で役に立つならしてあげようよ。」

彼女は彼に背を向けて、玄關の彫刻した欄干に凭れかゝつた。

「もし、あんた宛に手紙を書きたい時は、宛名はどう書くの？」と彼女は小さい聲で訊ねた。

「簡單さ。『反響』編輯局氣附。これでいゝ。直ぐ私に渡してくれる。」

「あたし……あたしは……」とヂェーニャは言ひ掛けたが、突然、聲を擧げて烈しく慟哭し始めて、兩手で顏を覆うた。「あたし、あなたに手紙を書きますわ……」

そして、手で顏を覆うたまゝ、肩をふるはせながら玄關を駈け登つて、かたんと高い音をさせて扉を閉め、家の中に姿を消した。

中編

一

以前ヤムキに住んでゐた人達は、不幸な、汚らはしい、血まみれの事件が夥しく起つたその年を、十年經つた今日に至るまで記憶してゐる。それは、最初詰らない、小つぽけな騷ぎが次ぎ〳〵に持上つて、ある日、到頭、曾つて警察自身が設けたこの住み馴れた公娼の巢窟を、今度は警察の手で、思ひ切つて根こそぎ叩き潰して、その殘類を病院や牢獄や大都會の路頭へ撒き散らしたのだつた。今日まで生き殘つてゐる少數の、まるで老いぼれてしまつた以前の女將や、年取つた狆のやうに脂切つた、嗄れ聲の鴇母上りなどは、あの總舐め的な滅亡を思ひ出しては、悲しさや怖ろしさや、愚かしい疑念に包まれるのだつた。

まるで袋の中から轡でも取出すやうに、それからそれへと喧嘩、强盜、病氣、殺人、自殺が持上り、それが別に誰のせゐでもないやうだつた。こんな事件が無暗矢鱈に自然と起つて來て、お互ひに積み重り、擴がつて、大きくなり出した。丁度子供達の足で蹴ころがされる小さな雪塊が、融けた雪が附着して來るためにひとりでに大きくなり、段段と大きくなつて行つて、人間の背丈よりも高くなり、遂には、一寸した最後の一と突きで、大きな雪崩となつて谷底へ轉り落ちるのに似てゐた。年寄りの女將や鴇母などは、勿論運命などといふことは耳にしたこともなかつたが、あの怖ろしい年に起つた避け難い災厄には、その運命といふものの神祕的な手が動いてゐることを、ひそかに心の中で感じてゐた。

また實際、人生到るところ、人々が共通の利害關係とか、血統とか、系統とか、或ひは職業上の利益などといふもので密接な特殊の集合體をなしてゐる處では——事件の思ひがけもない聚合、堆積、その傳播、その奇怪な傳統性、連繫、その不可解な持續性、などといふ神祕的な法則が必らず認められてゐるものである。かうしたことはむかしから民衆の叡智が氣附いてゐたやうに、個々の家庭にもよくあることで、病氣や死が、避け難い、謎のやうに代る〳〵突如として近い身内の者に襲ひかゝるものである。『不幸は獨り來らず』『不幸來らば——門を開け』と言はれてゐる。同樣に、これは修道院や、銀行や、官廳や、聯隊や、學校や、その他諸官省、會社にも認められるもので、長い間變りもなく、殆んど數十年といふもの泥川のやうに平板に流れてゐた生活が、何かの一寸した機會がきつかけになつて、突然、移動、轉任、馘首、損失、病氣などが始まる。社員が申合はせたやうに死亡し、發狂し、泥棒を働き、ピストル自殺や首縊りを仕出かし、空席に次いで空席が出來、昇進に次いで昇進が行はれ、新しい分子が加はり、そして二年も經てば其處には以前の人間は一人もゐない、たゞその官署が全然瓦解したり、横倒れに崩壞しなかつたといふだけで、あらゆるものが新しくなつて了ふことがある。老大な社會的團體、世界的團體——都市、國家、國民、國土、或は恐らく全遊星世界が遭遇するところのものも、矢張りこの驚くべき運命ではなからうか？

この不可思議な運命に類したものがヤムスカヤ村にも落ちかゝつて來て、見る〳〵醜態を極めた滅亡に至らしめた。現在では荒つぽいヤムキの代りに平和な、有りふれた郊外村が殘つてゐて、菜園作り、猫皮商、タタール人、養豚家近在の屠殺場の肉商等が住んでゐる。これらの尊敬すべき人々の請願によつて、ヤムスカヤ村といふ名稱は、悪い過去をもつてゐて、今の居住者を辱しめるものだといふので、ゴルベフカといふ名に改められた。これは植民地物産及び食料雜貨店の持主で、土地の教會の管理者であるゴルベフといふ商人の名に因んだものである。

この異變の最初の地下震動は、丁度夏の眞盛り、年一回の夏市場の際に起つた。その年の夏市場は眞實とは思へない位盛大だつた。夏市場の素晴しい成功、澤山の人出、その際結ばれた多大の取引契約、それには色々と譯があつた。卽ち郊外に三ヶ所新しい製糖工場が建つたことや、穀物、中にも甘菜が近年には珍しい位多量に收穫れたこと、電車敷設と運河開掘の土木工事が始まつたこと、七百五十露里に亙る新道路が開通したことなどであるが、殊に市を初め、銀行といふ銀行、その他の金融機關や家主達の間に起つた建築熱等であつた。煉瓦製造工場が郊外に續々と菌のやうに出來た。堂々たる農業博覽會が開かれた。新しく二つも汽船會社が設立されて、以前からあつた會社と猛烈な競爭をして巡禮者や貨物を輸送した。その競爭の揚句、三等の船賃七十五カペイカから、五カペイカ、三カペイカ、二カペイカとゞの詰りは一カペイカまで値下げするに至つた。しまひには、力不相應の競爭に參つて、一つの汽船會社は三等船客全部に對して無賃輸送を提議した。するとその競爭相手は無賃輸送の外に白パン半斤を景品につけたのだつた。しかし、この年の最も大仕掛けの著しい事業といふのは、大きな河港を築き上げることだつた。それが數十萬の勞働者を吸ひ寄せて、殆んど計り知れない巨額の金を費した。

もう一つ附け加へて置かなければならないのは、ロシヤ中の有名な僧院のなかでも、最も尊崇され、最も富裕であるこの地方の僧院の千年祭を、市が丁度この時分に擧行したことである。ロシヤの隅々から、シベリアから、北氷洋の海岸地方から、南の邊土から、黒海やカスピアン海の沿岸から、無數の巡禮者達が、この僧院の聖物を禮拜するために、地下深く漆喰ひで固めた洞窟に眠つてゐる聖者達を禮拜するために雲集して來た。僧院では毎日四萬人の人間に宿泊所を與へ、とも角も食物を與へたことは言ふ迄もないが、寢場所のない人々は、毎晩、まるで薪か何ぞのやうに僧院の庭先や通り道にごろ寢してゐた。

それは嘸にでもありさうな夏だつた。この市の人口は、流れ込んで來たいろんな人々のお蔭で殆んど三倍に增加した。石工、大工、ペンキ屋、技師、技手、外國人、農民、仲買人、三百代言、河仲仕、のらくらの無賴漢、旅行家、泥棒、詐欺師——かういふ人間で市は一ぱいで——どんな汚ない、怪しげな宿屋でも、たゞの一つも空間はなかつた。そして部屋代と來たらお話にならない程高かつた。取引所は今迄にもその後にもなかつたほどの大景氣で活動した。數百萬の金は、一つの手から他の手へ、それから又第三者の手へ、河のやうに流れて行つた。一時間のうちに巨萬の富が出來た。が、その代り、以前からの商會が倒れ、昨日の金持が乞食に落ちぶれた。最も下級の勞働者がこの黄金の流れに浴し、懐を暖めた。荷揚人足、馬方、荷馬車曳、手押車夫、煉瓦の運搬人足、土方などは、この氣狂ひ染みた夏に、賃金をどの位稼いだか、今でもみんなの記憶に殘つてゐる。どんな立ん坊でも西瓜を積んだ艀の荷役の時は一晝夜に少くとも四留か五留は受け取つた。そして金廻りがいゝので歡喜にひたり、綺麗な古い都の官能的な美しさに醉ひ、南國の夜の甘い曖さに魅せられ、白いアカシヤの唆るやうな香りにうつとりとなつてしまつたこの隘々しい他所の人々の群——これら男性の姿をした數十萬の、飽くことを知らぬ淫蕩な野獸達は聲を揃へて叫んだのである、『女を！』と。

一ヶ月の間に市内には數十の新らしい娯樂場が出來た——華麗なティヴォリ、花屋敷、オリンピア、王宮等々で、合唱團もあれば小歌劇もあつた。それから涼庭つきのレストランやビヤホールが續々開店し、工事中の港の附近には手輕な居酒屋などが出來た。街の辻々には『一杯屋』と稱して板圍ひの掛小屋が店を張つて、何れも表向きは裸麥酒を賣つてゐる風を裝ひ、奥の薄板で仕切つた圍ひの中には年增女が二人か三人ゐて、自分の肉を鬻いでゐた。そして、

この年の夏は多くの母親や父親達に取つては、自分等の息子、中學生、幼年學校生徒達が忌はしい病氣に感染して、忘れることの出來ない苦々しい夏だつた。市へ入り込んで來た一時の客人達のために女中が入用だつた。で何千といふ田舍娘が近在の村々から市へ引寄せられた。賣春の需要が非常に增して來たのは止むを得ないことだつた。そこで、ワルシャワ、ロッジ、オデッサ、モスクワ、さてはペテルブルグや外國からまでも、數限りのない外國女や、ロシヤ仕込みの賣笑婦や、極く有り觸れた淫賣婦、華美なフランス女、ウィン女、かういふ連中が乘り込んで來た。氣紛れな數億の金の與へた頽廢的影響は歴然として現はれて來た。この黄金の瀑布は市全體に波うち、市全體を眩惑させ、溺れさせたやうに思はれた。竊盗と殺人の件數は吃驚する位ぐん〳〵增して行つた。警察は非常召集をやつては見たものゝ、狼狽して、手も足も出なかつた。しかし後になるとしこたま袖の下を貰つて、まるで腹がくちくなつて、思はず知らず眠くなり氣惰るくなつた蟒蛇のやうになつてしまつた。何の爲めといふこともなく、どういふ譯といふこともなく、無暗に人が殺された。眞晝中、何處か人通りの少い通りで、通りがゝりの人間に近づいて訊ねる。「お前の名前は何といふ？」「フョードロフだ。」「あゝフョードロフか？ぢやかうだ！」と言つて、その男の土手腹に劍を突き刺すといふやうなこともあつた。といつたやうな譯で市ではこの惡戲者達に『刺客』といふ綽名をつけてゐたが、この手合の中には市の新聞の三面記事が自慢にしてゐるやうな名前があつた。ポリシチュウキ、ミーチカとドゥンダスの二人兄弟、ギリシャ人のウォローヂカ、フョードル・ミルレル、ドミトリエフ大尉、シウォーホ、ドブロウォーリスキイ、シパーチェク、その外隨分ゐた。

そして、この馬鹿になつた市の大通りでは、晝も夜も、まるで火事場か何ぞのやうに群衆が立止つたり、動いたり、叫喚つたりしてゐた。その時ヤムキでは何ういふ有樣だつたか、描き出すことは殆んど不可能だつた。女將達は抱女を二倍以上に增やして、値段も三倍にあげたのではあるが、馬鹿のやうになつた哀れな女達は、木葉のやうに金を浪費する醉つぱらつた、氣狂ひ染みた群衆の要求を充してやることは到底出來なかつた。まるで市場のやうに人々が充滿で、混雜してゐる廣間では、七人づゝ、八人づゝ、時によると十人づゝ位の客が一人の女を待つてゐることがあつた。實際、何だか、氣の狂つたやうな、酩酊したやうな漫作的な時節だつた。

ヤムキを滅亡に導いた色々の出來事が起つたのも正しく

この時からだつた。そして、肥つた、年寄りの、灰色の眼をしたアンナ・マルコーヴナが經營してゐた、我々に馴染みの娼家も、またヤムキと共に滅びたのである。

二

旅客列車が、黄金色の穀物畑や、美しい櫸の木の林を横切つて、清らかな小川の鐵橋を轟々と音たてながら渡り、渦巻く煙を後へ殘しながら、南から北へ氣持よげに走つてゐた。

二等車は車窓を開けてゐても息苦しい程、ひどく蒸暑かつた。硫黄の煙の匂ひにみんなむせ返つた。唯一人、陽氣で元氣のいゝ、そは〳〵動き廻つてゐるユダヤ人で、身裝の立派な、親切さうな交際上手な話好きの男を除いて、他の旅客はみんな震動と暑さにへとへとになつてゐた。彼は若い妻と一緒だつたが、この二人が結婚して間もないといふことは、殊に女の樣子で一目で判つた。それは、夫がほんの一寸とした親切を見せる度に突然ぱつと顔を赤らめるのだつた。それに、夫の顔を見ようとして睫毛をあげる時の彼女の眼は、星のやうに輝いて、潤みを帶びてゐた。その顔は、戀に醉うてゐる若いユダヤ娘の顔にだけ見られる美しさであつた——無邪氣な魅力のある輪廓をもつた薔薇色の唇、瞳孔と虹彩のけぢめが附かない位に黒い眼、そして顔全體が柔らかな薔薇色だつた。

この男は、同席してゐる三人の赤の他人の前も憚らず、連れの女を始終嘗めるやうに可愛がつてゐたが、これは可なり野卑なものだつたことを一言して置かねばならない。彼は專有者のもつ無遠慮さと、全世界に向つて「我々の幸福なことを見給へ——これは諸君達までも幸福にする。さうぢやないかね？」といふやうな、戀してゐる者の特有の利己主義とで、——彼は、衣裳の下にしなやかに、ふつくらと浮き上つてゐる女の脚を撫でたり、頬ぺたを抓つて見たり、自分の剛々した、黒い、びんと跳ね上つた口髭で女の頸を擽つたりしてゐた……けれどもこの男は、嬉しさで輝いてはゐるものの、その眼につかないほどの皺に圍まれて前に突出た、剃つてゐる角ばつた顔の險しい輪廓の中や、しば〳〵瞬く眼や、上唇の痙攣などに、何だか強慾さうな用心深い、落着きのない何ものかが閃めいてゐた。

この戀仲の一組に對ひ合つて三人の旅客がのつてゐた。一人は退職將官で、痩せ形の、小ざつぱりした老人で、頭髪には油をつけ、顳顬の髪を前に梳き並べてゐた。もう一人はでつぷり肥つた地主で、堅いカラーを外してゐてもやはり暑くて息を切らし、始終濕めしたハンケチで濡れた顔を拭いてゐた。それから後の一人は若い步兵將校だつた。セミョン・ヤーコヴレウィチ（若いユダヤ人は、自分がセミョン・ヤーコヴレウィチ・ゴリゾントといふ者であることを、もう同車の人に知らせてゐた。）の止め度のない饒舌は、まるで蒸暑い夏の日に、閉め切つた部屋の窓硝子にぶんぶんとりズミカルな音を立てゝ打つつかつてゐる蠅のやうで乘客達をうるさがらせ、癇癪を起こさせた。とはいふものの矢張り彼はみんなの氣持を引き立てることが出來た。手品をやつて見せたり、微妙な、獨特なユーモアを含んだユダヤの一と口噺をして聞かせたりした。彼の細君が、涼みに車室の外へ出た時、彼は或る話をしたが、それを聞いて、將軍は相好を崩して笑ひ、地主は黒土育ちの腹を搖ぶつて笑ひ聲を立て、やつと一年前に士官學校を出たばかりで髭もなく子供々々した少尉は、可笑しさと好奇心を抑へきれず、自分が赤くなつてゐるのが人に見えないやうに横を向いたほどだつた。

妻は感心な無邪氣な心盡しをもつてゴリゾントにかしづいてゐた。ハンケチで彼の顔を拭いてやつたり、扇で煽いでやつたり、しよつちうネクタイを直してやつたりした。そんな時の彼の顔は滑稽な程傲慢で、馬鹿らしい位、滿足さうだつた。

「甚だ失禮ですが、」と品よく咳しながら痩せた將軍が訊ねた。「失禮ですが、あなたの御職業は何ですか？」

「いや、お言葉ですが！」セミョン・ヤーコヴレウィチは隔意のない優しい調子で答へた。「まア今日日に、哀れなユダヤ人が何の職業に就くことが出來ませうか？　私は自分で一寸した行商と取次販賣をやつて居りますよ。尤も、唯今のところ仕事は拋つたらかしですが。皆さんは、へ、へ、へ、先刻御承知かと存じます。何しろ蜜月は——赤くならなくたつて好いよ、サーロチカ——年に三度も繰返されるもんぢやありませんからね。しかし、これからは隨分彼方此方と飛び廻つて稼がなきやなりません。で私は妻と市へ出掛けて、妻の親戚を訪ねる處ですが、それがすめばまた旅へ出ます。最初の行商には妻も連れて行かうと思つてるんですが、まあ新婚旅行つて處ですね。私は、シドリスと、二つのイギリスの會社の代理人でして。時に如何です、御覽になりませんか？　幸ひ手許に見本がございます…」

かう言つてる中にもう、手早く、黄色い皮の、小形で綺麗な鞄の中から、長い折紙の見本帖五六册取り出して、洋服屋らしい器用さで片端を摘んで展げたので、見本帖は輕い音を立てゝばら〳〵と下へ垂れて行つた。

「御覽なすつて下さい。素晴しい見本ですよ。實際外國製

に劣りませんよ。お目を留めて下さい。例へば、これがロシヤ製の肉襦袢で、こちらがイギリス製です。それから、これがカンガールで、こちらがシェウィオットですが、較べて見て下さい。撫でて御覽なさい。ロシヤの見本が外國のものに劣らないつてことがよくお分りになりますよ。これで見るとロシヤの文明も進歩發達したものですね。だからヨーロッパがロシヤ人を野蠻人だなんて思つてるのは飛んだ間違ひですよ。……それはそれとして、私達は家族的な訪問をやつてから、市場を見物して、花屋敷をちよつと覗いて、そこいらを散歩したり、ぶらついて見たりして、それから、ウォルガ河を下つて、ツァリツインまで行き、黑海へ出て、避暑地廻りをやつてから、故郷のオデッサへ歸るつもりでゐます。」

「結構な旅行ですな。」と控へ目に少尉が言つた。

「話だけでは結構ですがね、」とセミョン・ヤーコヴレウィチはうなづいた。「しかし、刺のない薔薇つてありませんからね。行商人の仕事つて奴は仲々面倒で、相當知識が要るんですよ、あれでね。それも仕事の上の知識の方よりは、さ、何と言ひますか……つまり人の心を見拔く方ですね。こゝに註文したがらない男がゐると、その男をまるで象を口説くやうに說き伏せる。しかも此方の言ふことをはつきり分るやうに、成程尤もだと腑に落ちる迄說き伏せなければならないのです。と申しますのは、私は何にも怪しげな點のない至極確かな仕事だけ、引受けてゐるからです。たとへ百萬出すからと言はれたつて、へてんや素性の良くない仕事は御免蒙つてゐるんです。まア何處でも構ひません、グルアルの——私はこの會社の代理人もやつてるんですが——このグルアルの羅紗かズボン吊りか、それともヘリオスの釦を賣つてる店なら何處でもいゝです——セミョン・ヤーコヴレウィチ・ゴリゾントといふ男はどんな奴だつて一言訊いて見て下さい。さうすると、十人が十人お答へするでせう。『セミョン・ヤーコヴレウィチか。あれは普通の人間ぢやない。黃金だ。清廉潔白で、間違ひのない正直者だ』つてね。」から言ひながら、ゴリゾントはもう專賣特許のズボン吊りの入つた細長い箱を開けて、色とりどりの釦がきちんと並べてある、ぴか〳〵光つたボール紙を見せた。

「私が行く迄に、多くの行商人がはいり込んで、その地方を荒してゐる場合には、それはまつたく不愉快なことがありますよ。そんな土地は何とも手がつけられません。こつちの言ふことにはてんで耳を貸さず、手を振るばかりなんです。いや、それは他人のことを言つてるんで、私は——ゴリゾントとも言はれる人間です！　私なら、新アスカニ

ヤのファルツフェイン先生の駱駝のやうに說き伏せて見せます。ですが、一つの町で同じ商賣の競爭者がばつたり落ち合つた時は、こいつはもつと不愉快ですよ。いや、もつと惡いのは、何か奸商がゐて、自分では何も出來ない癖に、こつちの邪魔をするやうな場合です。そんな時はいろんな計略を用ひます。相手をぐでん〳〵に醉ひ潰したり、行方を晦ましたりするんです。いや、樂な商賣ぢやありません。その外にもう一つ私は代理業をやつて居ります——義眼と義齒ですが、こいつは餘り利益があがらないんでしてね、止さうかと思つてゐます。いやどの仕事もみんな止さうと思ひますね。成程、血氣盛りの若い男に取つちや蝶々みたいにあちこち飛び廻はるのもいゝんですが、一度家內を持つと、先づまア大勢の家族が……」と冗談らしく女の片脚を叩いた。「吾々ユダヤ人の不幸の埋合はせとして、神樣は子寶を惠んで下さるですからね……ですから私も何か自分の仕事を持ちたいもんだと思ひますよ。それにですよ、家も自分のものだし、家具も自分のものだし、寢臺も臺所も自分のものといふ工合に、定まつた一つの所に落着きたいと思ひますよ。さうぢやありませんか？　閣下！」

「左樣です……左樣です……え——え……まつたく、それはさうですとも。」と將軍は丁寧に答へた。

「ところで妻のサーロチカが持參金を少々持つて來ました。少々の持參金とは何を意味しますか？　それはロスチャイルドなら見向もしない位の金ですが、私の身に取つては大した資本ですよ。それに私の手許にも幾らか貯金もありますからね。馴染の商會は信用貸してくれますし。で、神樣のお許しさへあれば、私どももチーズ附の麵麭を喰べられませうし、土曜日々々には旨い魚も喰べられますよ。」

「好い魚ですよ。ユダヤ式猛魚つてやつはね！」息を喘ませながら地主は言つた。

「私共は『ゴリゾント父子商會』を開きますよ。ねえさうだらう、サーロチカ、『父子商會』だらう？　ですから皆さん、一つ註文してやつて下さい。もし『ゴリゾント父子商會』といふ看板がお目に留りましたら、いつぞや汽車で一緒になつた、戀と幸福とに夢中になつてゐた、あの若い男だな、と思ひ出して下さい。」

「勿論ですとも！」と地主が言つた。

そこでセミョン・ヤーコヴレウィチは直ぐさま地主の方に向いた。

「時に私は周旋業の方もやつてるんです。地所の賣却、地所の購入、第二抵當證書の作成——こんなことに掛けちや、

私以上の專門家は居りますまいし、私ほど安い手數料でやる者も居りませんよ。御用でもありましたら盡力いたします、」と緩りした口調で言つて頭を下げながら地主に名刺を差し出した。その序に二人の隣人にも名刺を渡した。

地主は脇ポケットに手を入れて、同じく名刺を取出した。

「ヨシフ・イワーノウィチ・ウェングヂェノーフスキイ」とセミョン・ヤーコヴレウィチは聲を出して讀んだ。「いや、まことに有難う存じます！　では御用でもありました節は…」

「ようがすとも！　多分……」と思案の態で地主は言つた。

「左樣、多分、お互ひにお誂へ向きの機會に打つつかつたといふんでせうよ。實はね、私は今、或る森林の別莊を賣り渡す用件でK―市へ行くところでしてね。それでは、どうか私のところへいらしつて相談に乘つて下さい。私はいつもグランド・ホテルに泊つてゐますから。大方、何とか旨く行くでせうよ。」

「なアに！　大丈夫ですとも、ヨシフ・イワーノウィチ。」とゴリゾントは喜んで叫んで、指先で輕くウェングヂェノーフスキイの膝を叩いた。「いや、大船に乘つた氣でゐて下さい。このゴリゾントが引受けた以上、屹度あなたは生みの親にでも言ふやうに、この私にお禮を言はれるでせうよ。」

半時間の後には、セミョン・ヤーコヴレウィチと口髭のない少尉とは、汽車の昇降口に立つて、煙草を吸つてゐた。

「少尉さん、あなたは始終市へおいでになりますか？」とゴリゾントが訊ねた。

「いや、これが始めてなんですよ。我々の聯隊はチェルノボーブにあるんです。私はモスクワの生れなんですが。」

「おや〳〵！　そいつはえらい遠方へお引込みですな？」

「えゝ、さういふ羽目になつちまつたんです。編入の時、外に空がなかつたもんですから。」

「チェルノボーブと言や、――穴つこぢやありませんか！　ボドリヤ中で一番厭な町ですよ。」

「本當です。しかし、さうなつちまつたんですから。」

「そこでつまり、若い將校さん、K市で少々氣晴らしをなさらうつてわけですな？」

「さうです。二三日滯在する積りでゐますが。實は、モスクワへ行く途中なんです。二ヶ月の賜暇でね。で、途中下車して市中を見物するのも面白からうと思ひまして。隨分立派だつて話ですな。」

「いや！　立派の何のつて、實に晴しい市ですよ！　あれはもうヨーロッパの市といつても好いです。街路がどんな風か、電燈の工合、電車、劇場、こんなものを御覽になつたら、また、どんなカフェ・シャンタンがあるかお分りになつたら、いや、それこそ指を口ん中に入れて舐め廻はすばかりですよ。若いお方、花屋敷やティヴォリには是非行つて御覽なさい。お勸め致しますよ。それから島の方へもお出掛けになるんですね。此處も趣きが少々變つてゐます。あすこの女子と來たら、いや大したもんですぜ！」

少尉は顏を赤らめて眼を逸し、震ひを帶びた聲で訊ねた。

「えゝ、聞いてはゐます。實際そんなに綺麗ですか？」

「いや！　これは恐れ入ります！　本當の話が、綺麗な女なんて、てんで居やしませんよ。」

「といふと、どういふわけですか？」

「つまりですね。彼處の女は綺麗どころか、美人ばかりなんですよ。お解りですか、素晴しく幸福な種族の混血なんですよ。ポーランド女、小ロシヤ女、ユダヤ女の配合ですよ。いや、あなたはお一人で自由なのがお羨しいですな。これが以前の私なら人後に落ちない積りですがね！　殊に驚かされるのは非常に情熱的な女達であるつてことです。あれぢやア、まるで火ですな！　それからその、御存じでせうな？」と彼は突然意味ありげに低い聲で訊ねた。

「何んです？」とびつくりしたやうに少尉は訊ねた。

「驚くべきことは、世界中何處にも、パリーにもロンドンにも――これは世界中を見て來た人に聞いたのですが――

何處にだつて、この都ほどデリケートな戀の仕方をする處はないさうです。これは何か獨特なもんだらうと我々ユダヤ人仲間ぢや言つてますが。何しろとても想像もつかないことを考へ出してるんですからね、氣が狂ひさうですよ。」

「本當ですか？」と息を喘ませながら少尉は小聲で訊ねた。

「えゝ、正眞正銘の話ですとも！　しかし、失禮ですが、あなた御自分でお分りになるでせう。私も獨身時代には、それは無論どんな人間でも罪は作りますからね……無論今はそんなことはありませんがね。もう憲兵の仲間にはいりましたよ。ですが、昔の名殘りで私の手許には素敵な蒐集が殘つてゐます。一寸待つて下さい。今お目に掛けます。たゞ、用心して見て下さい。」

ゴリゾントはおど〳〵と左右を見廻して、カルタでも藏つて置くやうなモロッコ革の細長い箱をポケットから取り出して、少尉へ差出した。

「これです。御覽なさい。但し用心して下さい。」

少尉は普通の寫眞や彩色を施した××を一枚一枚めくつて見始めた。その××には、人間を狒々よりも殘しく淺ましくしてしまふ××の外貌が、本當とも思へない位な光景でこれ以上に野獸的になれない恰好で、あらゆる場面が撮し出されてあつた。ゴリゾントは少尉の肩越しに覗き込ん

で、肱で突ついて、囁いた。
「どうです、仲々素敵でせう？　これこそ本當のバリーやウキンの趣味ですよ。」
少尉は始から終ひ迄見直した。そして彼が小箱を返した時はその手が顫へてゐた。顋顱や額は汗ばんで、眼は濁り、頬には斑點のやうに紅味が差してゐた。
「ところで、」と不意にゴリゾントは愉快さうに言つた。「私にはどうでもいゝんですよ。私はもう束縛された人間ですから。古い諺のやうに自分の船を燒いたのです……大事にしてゐた物をみんな燒いたのです。そしてこの寫眞を誰かに讓らうと、隨分前からその機會を捜してた譯です。値段の處は別にかれこれ申しませんが……私が買つた値の半分で結構です。お引取りになる氣はありませんか、將校さん？」
「いや……私は、その……どうして？……多分その……」
「それは結構です！　こんな愉快なお近付きになつた折ですから一枚五十カペイカにしときませう。何、高いつて？　ぢや止めませうよ！　あなたは旅のお方だから高いことは言ひませんよ。ぢや三十カペイカなら。何？　これでも安くない！　ぢや大負けに負けて、二十五カペイカにしませう。おや〳〵隨分頑固な方ですな！　ぢや廿カペイカだ！　後になつて見て私にお禮を仰しやいますよ！　さて、それからですが、私はK——市に着いたらいつでも『エルミタージ』旅館に泊るんです。朝早くか、夕方の八時頃ならすぐお目にかゝれますよ。私の知合には美しい婦人が可なり居りますから御紹介致しませう。ですがお金なんか要りませんよ。要りませんとも！　要するに、婦人達に取つちや、あなたのやうな若くて、健康で、綺麗な男の方と時間を過ごすのが愉快で面白いのです。金なんか絶對に要りません。しかも、葡萄酒や三鞭酒一本の代金ぐらゐは婦人の方で喜んで拂ひますよ。ぢや覺えといて下さい、『エルミタージ』ゴリゾントですから。そんなことの有るないに拘らず、兎に角覺えといて下さい！……また何かのお役に立つかも知れませんから。ですが、その寫眞は大した代物ですよ。斷じてあなたの手許に長いこと遊んぢやゐますまい。好きな人なら三ルーブルづゝで引取りますよ。まア大抵金持の老人にきまつてますがね。それに」とゴリゾントは將校のすぐ耳の傍へ身をかゞめて、片眼をしかめ、狡い小聲で言つた。「それに、大抵の婦人はこんな繪が好きでしてな。あなたなんか若くて男振りがいゝから、これから大分ロマンスが出來ますよ！」
ゴリゾントは金を受け取つて念入りに勘定し、少尉に握手しようとして、洒々と手を差し出した。少尉の方では彼

の顔を見得ないで、彼を昇降口に殘したまゝ、何事もなかつたやうな風をして車内の廊下へ歸つた。
このゴリゾントといふ男は一方ならぬ交際好きな人間だつた。彼は自分の車室へ歸る途中、三歳位の小さな愛くるしい女の子の側に立止つた。彼は遠くの方からこの女の子に戲け掛けて、いろんな滑稽な顔付をして見せてゐたのだつた。で、女の子の前に蹲んで、山羊の眞似をして見せたり、しゆうしゆうといふ聲で色々訊ねたりした。
「孃つちやん！　何處へいらつちやるの？　おや〳〵、隨分でつかい孃つちやんね！　獨りで、母ちやま置いて來たの？　獨りで切符買つて來たの？　まあ！　いけまちえんね、母ちやまは何處？」
この時、車室から脊の高い、綺麗な、嫌に取り澄ました女が姿を現はして、落着いて言つた、
「退いて下さい。他人の子供に揶揄ふなんて隨分失禮ぢやありませんか！」
ゴリゾントは飛びあがつて、遽てゝ言つた。
「奥さん！　つい我慢が出來ませんでしたのでね……ほんとに愛くるしい綺麗なお子さんですね！　キューピットそつくりですよ！　奥さん、實は私も親爺でして、やつぱり子供が居ましてね……で、どうも嬉しくつてつい我慢が出來なかつたんですよ！」
だが婦人は彼に背を向けて、娘の手を曳いて、ゴリゾントがいふお世辭や詫言を聞き流して車室へ這入つた。

ゴリゾントは一晝夜の中に五六回三等室に立寄つた。その三等室といふのは二箱あつて、殆んど列車の長さほど隔つてゐた。一つの箱には、黒い髯の無口な陰氣な男と一緒に、三人の美しい女が腰かけてゐた。その男とゴリゾントとは、何か特殊な符牒で變な言葉を交はした。女達は不安さうにゴリゾントを眺め、何か訊ねたいやうで言ひ出せないといふ樣子だつた。たゞ一度、晝頃に一人の女が思ひ切つておど〳〵しながら訊ねた。
「本當でございませうか？　職業口に就てのあのお話は？……何だかあたし、胸騒ぎがするんですの！」
「おや！　あなたは何をいふんです、マルガリタ・イワーノヴナ！　私が一旦口に出したからには、國立銀行のやうに確かですよ。おい君、ラーゼル、」と彼は髯の男に向つた。「間もなく停車場に着くよ。この人達に何でも好きな肉饅頭を買つてやり給へ。二十五分停車だから。」
「あたし、肉汁が欲しうございますわ。」と小柄なブロンドの女が瞼病さうに言つた。この女は熟れた裸麥のやうな頭

髪をして、眼は矢車草のやうだつた。

「ベーラさん、何でもお望次第ですよ！　停車場についたら降りて、肉入スープと肉饅頭を持つて來させませう。心配しなさんな。ラーゼル君、私がみんなやるから。」

も一つの車室には十二人か十五人の女ばかりの一行がゐて、太い、いかつい、黒い眉毛の、肥つた老婆が引率してゐた。この老婆は濁み聲で物を言ひ、そのでぶ〳〵した頤や寛やかな平常着に包まれた胸や腹は、汽車の震動に拍子を合はせて、まるで林檎のゼリーのやうに搖れてゐた。老婆も若い女達もその職業に就いては少しの疑念もなかつた。

女達は腰掛の上にごろ〳〵してゐて、煙草を吸つたり、カルタの「六十六」をしたり、ビールを飲んだりしてゐた。同車の男達がよく女達を揶揄つた。すると女達は、嗄れた聲で無遠慮な言葉でやり返してゐた。若い男達は女達に煙草や酒を奢つた。

こゝへ來るとゴリゾントの樣子はがらりと變つた。威張つたやうな風の無頓着を裝ひ、見下すやうな冗談を言つた。その代り、みんなの彼に對する一言一句には卑屈な媚が聞き取られた。彼は、すべての女——ルーマニヤ女、ユダヤ女、ポーランド女、ロシヤ女などの變な混合を、ずらりと見廻はして、別に異狀のないことを確かめ、肉饅頭の世話をやいてから、威張つて出て行つた。この瞬間の彼は、鐵道便で屠殺用の家畜を輸送し、停車場で、見廻りにやつて來て、餌を當てがふ家畜商人によく似てゐた。それから自分の車室に戻ると、又妻といちや付き始め、ユダヤの話を、まるで豆でも撒くやうに、べら〳〵喋り出した。

長らく停車してゐるその間に、彼は自分が引率してゐる女達の面倒を見てやる爲めに、停車場の食堂へ出掛けて行つた。彼は隣りの乘客に向つてかう言つた。

「私に取つてはですな、宗教上禁じたものでも許可されたものでも同じですよ。別に區別を認めません。しかし自分の胃袋はさうも行きませんからな！　こゝいらの停車場の食堂と來たら折々飛んでもない酷いものを食はせますよ。三四ルーブル拂つた揚句、醫者に百ルーブルもかゝります。ところで、と、サーロチカ、」と彼は妻の方に向いた。「お前何か食べに降車て行くかい？　それとも此處へ持つて來てやらうか？」

サーロチカは彼の心遣ひにすつかり幸福な氣持になり、顏を赤らめて、感謝の眼を輝かせながら彼を見て、斷つた。

「有難う、セーニャ、でもあたし欲しくないわ。滿腹なのよ。」

その時ゴリゾントは手提籠の中から鷄肉や、煮肉や、胡瓜やパレスチナ葡萄酒を一本取り出して、悠々と迫らず、

旨さうに食べて妻にも勸めた。彼女は、その艶やかな白い手の小指をぴんと突き出して、乙に澄まして食べた。食べてしまふと、殘りを丁寧に紙に包んで、ゆつくりと、籠の中にきちんと藏ひ込んだ。

機關車の前方遙かに、寺院の鐘樓の圓屋根が早や黄金色の焰のやうに輝き始めた。車室の側を車掌が通り過ぎて、何だか譯の分らない合圖をゴリゾントにした。で、ゴリゾントは直ぐさま車掌の後について昇降口へ出た。

「直ぐ檢札がやつて來ます」と車掌が言つた。「で、どうぞ暫くの間奥さんと一緒に、こゝの三等室の昇降口に立つてゐて下さい。」

「あ、よし、よし。」とゴリゾントは承知した。

「では、お約束のお金をお願ひしたいもんです。」

「幾ら欲しんだ？」

「お約束通り。割增金の半分、二ルーブルと八十カペイカでございます。」

「何だと?!」とゴリゾントは突然かつとなつた。「二ルーブル八十カペイカだ?!　飛んでもない！　さあ一ルーブルやる。有難く思へ！」

「失禮ですがあなた！　それぢや話が違ひます。お約束したぢやありませんか？」

「約束も糞もあるものか！　そら、もう五十カペイカ。もう遣らんぞ。何といふ厚かましい奴だ！　ぐづ〳〵言ふと、切符なしで乘せてるつて監督に言ひつけるぞ。だがおい、心配せんでもいゝさ！　俺がそんな人間でなくてよかつたよ。」

車掌の眼は急に大きくなつて、血走つた。

「うぬ！　ユダヤ人め！」と彼は叫んだ。「汽車の下に突き落してやるぞ、畜生！」

だがゴリゾントは直ぐに鷄のやうに車掌に飛び掛つた。

「何だと?!　汽車の下へだと?!　おい、その言葉が何だか貴樣は知つてるか?!　脅迫行爲だぞ！　俺はすぐ飛んで行つて『助けてくれ！』と呶鳴つて、非常警報の紐を曳くぞ。」と、彼は色をかへて扉のハンドルに手をかけたので、車掌はたゞ手を振つて、唾を吐いたゞけだつた。

「俺の錢で窒息しやがれ、いやなユダヤ人め！」

ゴリゾントは車室から妻を呼び出した。

「サーロチカ！　昇降口へ出よう。あつちの方がよく見えるよ。實に綺麗だ——まるで繪を見るやうだ！」

サーラは彼の後から素直に跟いて來たが、恐らく初めて着たらしい新しい衣裳を無器用な手付でつまみ上げ、身を屈め、恰も扉や壁に觸るのを怖れてゐるやうだつた。

遙か彼方の、夕映の薔薇色をした氣持のいゝ靄の中に、

黄金色の圓屋根や十字架が照り映えてゐた。山の上に高々と聳えてゐる白い恰好のいゝ寺院は、まるでこの美しい夢のやうな蜃氣樓の中に浮んでゐるやうに思はれた。生ひ繁つた森や灌木林は上の方から駈け降りて、丁度谷の上まで迫つてゐた。裾を碧色の川で洗つてゐる白い、切り斷つたやうな斷崖は、丁度綠色の脈管か疣かのやうに、處々若木の叢で斑になつてゐた。お伽噺のやうな美しい古い都が、まるで自ら汽車を出迎へにやつて來るやうに見えた。

汽車が停まると、ゴリゾントは手荷物を一等室に運ぶやうに赤帽に言ひつけて、妻に向つて自分の後について來るように言つた。そして自分は出口の處に突つ立つて二ヶ所に分れてゐる自分の一行が通り過ぎるやうに計つた。彼は十二人の女達を看視してゐる老婆に向つて、歩きながら簡單に言ひ棄てた。

「ぢや好いかね、ペルマンさん！『アメリカ』旅館、イワニュコーヴスカヤ街、二十二番だよ。」

それから黒い髯の男にはかう云つた。

「忘れちやいけないよ、ラーゼル、女達に晝飯を喰べさせて、それから何處か活動寫眞でも引つぱつて行き給へ。夜の十一時には、私を待つてゐ給へ。話があるから。それから私に急用のある者が見えたら、君は私の住所を知つてるだらう。『エルミタージ』だから電話をかけてくれ。もし何かの都合で私が居なかつたらカフェー・レイマンか、でなければア向ひ側のユダヤ人食堂へ來てくれ給へ。私は彼處へ魚を食べに行く積りだから。ぢや、御機嫌よう！」

三

ゴリゾントの行商に關する話は一つ殘らず、岡々しい眞赤な嘘だつた。洋服地の見本やグルアルのズボン吊りや、ヘリオスの釦や義齒義眼などは、彼の本當の仕事、つまり女身賣買を蔽ひ隱す楯に過ぎなかつた。尤もいつか、もう十年も前の話だが、彼はとある名も知れぬ商會の如何がはしい酒の代理人としてロシヤ中を經巡つたことがある。そしてその職業が、旅商人に附き物の出鱈目を彼の舌に植ゑ附けたのだつた。この昔の仕事が彼を今の商賣へ追ひやつたのである。何時だつたか、ドン地方のロストフを旅行してゐる時、或る若い裁縫女を引掛けたことがある。この女はまだ警察の名簿に載るまでには行つてゐなかつたものゝ、戀や自分の肉體については何等高尚な考へを持つてゐなかつた。當時まるで靑二才だつたゴリゾントは惚つぼくて輕率で、事件や波瀾に富んだ自分の放浪生活にこの裁縫女を引つ張り込んだのだつた。だが半年も經つとこの女が怖ろ

しく鼻について來た。女は、まるで重い荷物のやうに、磨臼のやうに、この精力と活動と進取の氣象に富んだ男の頸つ玉にぶら下つた。その上はてしのない嫉妬騒ぎ、疑心暗鬼絶え間ない見張り、それから愁歎場……と言ふやうな永い同棲生活にはどうしても免れないことが起つた。……その時から彼は自分の配偶者を引つぱたき始めた。最初の程は女も吃驚したが、二度目からは靜かになり、素直になつた。誰も知つてゐるやうに、「戀してゐる女」は戀愛關係に於いて中庸を知らない。さういふ女は、ヒステリカルな嘘吐き、詐僞者、僞善者で、冷やかで荒んだ頭とねじけた暗い心を持つてゐるか、或は、際限もなく獻身的で、盲目的に從順で無智で、無邪氣な動物で、讓歩するにしても自分の品位を失ふにしても、その程度といふものを知らない。この裁縫女は後者に屬してゐた。で、間もなくゴリゾントはこの女が街頭へ出て自分の肉を賣るやうに口說き落すのに大した手數もかゝらずに濟んだ。だがこの女が彼の言葉に從つて、最初の稼ぎの五ルーブルを家へ持つて歸つたその晩から、ゴリゾントはこの女に對して胸糞の悪くなるやうな嫌惡を感じた。奇妙なことには、ゴリゾントはその後幾多の女に出會つても——實際彼の手を經た女は何百となくあつたが——女といふものに對する男の侮蔑と嫌惡の情とは決して

彼の心から離れなかつたことだ。彼はこの哀れな女をあれやこれやと嘲弄したり、一番痛い所を搜し出しては道德的に責め苛んだ。彼女の方では唯默つたまゝ溜息をついて泣いたり、彼の前に膝まづいてその手に接吻するだけだつた。だがこの無言の從順がゴリゾントを餘計に苛立たせた。で彼は女を追ひ出した。女は去らなかつた。街路へ突き出したが、一時間か二時間も經つと、帽子はずぶ濡れになつて、端折つたスカートの裾からは樋から流れるやうに雨水が滴つて、寒さにぶる〳〵震へながら戻つて來るのだつた。最後に、或る悪い友人がゴリゾントに殘忍な、悪辣な入智慧をしたのだが、それはその後の彼の一生に痕を留めることになつた入智慧で、自分の戀人を娼家へ賣るといふことだつた。

實を言ふと、ゴリゾントはこの企みに取りかゝつたものの、心の中では眞逆成功すまいと信じてゐたのだつた。ところが案外上々首尾で捗つた。娼家の女將は（これはハリコフでの話だが）喜んで彼の申し出に應じた。この女將は、ゴリゾントが面白くピアノを彈くことや、鮮かにダンスすることや、自分の身振りで廣間中を笑はせることや、取分け、どんな磨れつからしの連中でも「財布の底を叩せる」點では、實に鮮やかな人を喰つた凄腕を持つてゐることを前々から知つてゐた。そこで殘つた問題は、二世を契つた

女を納得させることだが、さてこいつが一番面倒だつた。女は戀人からどうしても離れようとはしなかつた。自殺してやると威して見たり、屹度お前さんの眼玉に硫酸を打つ掛けてやると放言したり、警察署長の處へ訴へるからと言つたりした。――事實ゴリゾントの過去に犯罪の匂ひのする汚れたことがあるのを彼女は幾つも知つてゐたのだ。そこでゴリゾントは手を變へた。彼は打つて變つて優しい思ひやりのある友となり、疲れも知らぬ戀人となつた。それから急に暗いメランコリイに陷つた。女が心配さうに訊ねると、彼はたゞ默つてゐるだけであつたが、初めはふとしたことで口を滑らした態で、何やら一生涯の失敗をちよつぴりほのめかし、その後では、絶望し感動した樣子で嘘を吐き始めた。その筋で自分をつけ覘つてゐること、どうせ監獄行きだらうし、悪くすると流罪か死刑かも知れないこと、だから四五ヶ月外國に身を匿さなければならないことなど話した。特に彼が力を罩めて話したのは、數十萬留の儲けが手に入るといふ夢みたいな大事業の事だつた。ところが裁縫女はそれを本氣にして慾得のない、女らしい、神聖なと言つてもいゝ程の心配をもつて案じ出した。女といふものは大抵かうした母性愛じみた處があるものだ。さてかうなると、女がゴリゾントと一緒に外國へ出發することは彼の身にとつて危險千萬であること、それよりも彼女は此處に止つてゐて戀人の仕事が旨く行く時期を待つのが上分別だといふことを、彼女に呑み込ませるのには大した手數もかゝらなかつた。その後で、最も安全な隱れ家は娼家で、そこに居さへすれば警察や探偵の眼が屆かず、安全に暮すことが出來るから娼家に匿れるやうに納得させるのも譯ないことだつた。或る朝、ゴリゾントは女に言ひつけて、平常より服裝を良くさせ、頭髮にアイロンをかけさせ、白粉をつけ、頰に少し頰紅をつけさせ、知り合の女の魔窟へつれて行つた。彼女はそこで好い印象を與へたので、その日に彼女の旅券は所謂黄色い鑑札と警察で取り換へられた。長い間女を抱擁し、涙を流し合つてから、ゴリゾントは女に別れ、女將の部屋に立寄り（二百ルーブルと吹かけたけれども）、五十ルーブルの身代金を受け取つた。だが彼は別に身代金の少いのには悲觀しなかつた。肝腎なことは、彼が遂に自分といふもの、自分の使命といふものを發見して、將來の幸福に對して礎石を据ゑたといふことだつた。

無論、賣り飛ばされた女は娼家の手に捉まつたまゝ、何時までも出られなかつた。それから一年經つと彼女の顔立ちを思ひ浮べることが出來ない位、彼はすつかり忘れてしまつた。尤も……自己を僞つてゐるのかどうか……それは

分らない。

今日では彼は南ロシヤ全體でも指折りの女身賣買者の一人だつた。コンスタンチノープルやアルゼンチンにも取引があり、大勢の女を一纏めにしてオデッサの娼家からキエフへ船で送り、キエフの女達をハリコフへ、ハリコフの女達をオデッサへ送つたりした。また、大きな都會では客の眼を惹かない代物や選り殘りの女を、あちこちの第二流の縣の都會や金廻りのいゝ郡の都會へばら撒いた。彼にはまた素晴しく澤山のお得意先きがあつた。その得意先の中でも、社會的地位を持つたお歴々を少からず數へ上げることが出來た。例へば副知事、憲兵大佐、知名の辯護士、有名な醫者、金持の地主、放蕩の商人など。そして、あらゆる暗の世界、つまり娼家の女將、多情の獨身女、媒介婆、媾曳宿の女主人、淫賣宿の親方、舞臺を退いた女優やコーラス・ガールなどといふ手合は、天文學者が天の星を知つてゐるやうに、みんな彼の馴染だつた。驚くべきその記憶力のおかげで、彼は備忘錄など作る必要もなく、數千の名前、苗字、綽名、住所、性格などがちやんと頭にはいつてゐた。そして地位の高い得意客の好みを隅々まで呑み込んでゐた。或る者は異常な怪奇な淫蕩が好きだつた。或る者は無垢な未通女に對しては大金を惜まなかつた。或る者には年の行かない小娘を捜してやらなければならなかつた。彼は自分の得意客のサディズム（殘忍性々慾）やマゾヒズム（變態性々慾）の傾向まで滿足させてやらなければならないこともあつた。時とすると、全く不自然な性的倒錯の御用も承らなければならなかつた。尤もこの場合は、餘程の利益があると確かに見込みが附いた時だけ引受けるのだつた。そして彼は二三度臭い飯を大分長く食はなければならぬ羽目になつたが、その入獄も彼の役に立つた。それがため、彼は仕事する上に猛獸のやうな鐵面皮と粘り強いエネルギイを失はないばかりか、年を追うていよ〳〵大膽に、いよ〳〵思ひ付きよく、仕事好きになつた。そして年一年と彼一流の破廉恥な突進に世間並の素晴しい商賣上の聰明さが加はつて來た。

この間に彼は十五度ぐらゐ妻を持つたが、いつも言葉巧みに可なりの額の持參金を手に入れることが出來た。妻の金を自分のものにして終ふと、折を見て行方を晦ます。もし出來るやうならまんまと妻を淫賣宿か立派な娼家に賣り飛ばす、といふ風だつた。瞞された犧牲者の親達が警察の手を借りて彼の行方を捜したことがあつた。けれどもシペルリングといふ名で捜索の照會を方々へ出してゐる時分は彼はすでにローゼンブリュームといふ名で町から町へ飛び廻つてゐた。活躍する際には色々と名前を變へるので、羨ま

しいほどの記憶力を持ち乍ら、どの年にナタナエリゾンで何時パカリャルだつたか、それを忘れてゐるばかりか、自分の本名ですら變名の一つのやうに思はれるやうになつた。

こゝに注意すべきことは、この男、自分の商賣にいくらかでも犯罪めいたものや非難すべき點があらうなどとは斷じて信じてゐないことである。彼は恰も餅、石灰、麥粉、牛肉、或は材木などでも賣買してゐるやうな氣持で自分の商賣をやつてゐた。それに彼は自己流ながら信心深かつた。時間の都合がつき次第、金曜日毎に禮拜堂にお詣りした。運命によつて何處へ追ひやられてゐようとも、その場所で必らず、最後の審判節と、踰越節と、荒野節は恭々しく取り行つた。オデッサには老母と傴僂の妹とが殘つてゐた。で彼は、或る時は纏まつた金を、或る時は少しばかり、何れにしろ必ず金を送つてゐた。それも日をきめて送つてゐたのではないが、クールスクからオデッサまで、ワルシャワからサマーラまでの殆んとすべての町々から可なり屢々送つてゐたのだつた。それにリオン銀行には可なり纏まつた金を預けてゐたが、利息には決して手を着けず、段々と預金を增してゐた。それも決して貪慾や吝嗇のせゐではなかつた。寧ろ彼は仕事の上の機智、冒險、職業的自尊心といふものに惹きつけられてゐた。彼は女を理解もし尊敬もしてはゐたが、女そのものにはてんで興味を感じなかつた。丁度料理に掛けては微細な點まで心得てゐる腕利きの料理人が慢性の食慾減退に陷つてゐるやうなものだつた。女を口說落し、誘惑し、自分の思ふ通りにさせるのは彼にとつては何の造作もなかつた。彼が呼ぶと女達は自分からやつて來て彼の掌中にはいり、從順で逆ひもせず、彼の言ひなり放題になるのだつた。女達に對する彼の態度のうちには何だか根强い、ぐら附かない、確りした自信が具つてゐた。女達はその自信に會ふと、丁度癖のある馬が熟練した騎手の聲や眼差や愛撫に會つて本能的に服從するやうに服從した。

酒の方は適度に飮つてゐたが、それも相手がないと少しも飮まなかつた。食べ物となるとまるで選り好みしなかつた。だが、誰でも弱點といふものがあるが、勿論彼にもあつた。それは自分の身の裝飾に少からぬ金を使ふのが酷く好きだつた。ありとあらゆる流行のカラー、ネクタイ、ダイヤモンド入りのカフスボタン、時計のメタル、意氣なワイシャツ、ハイカラな靴——これが彼の欲しがる主なものだつた。

* * * *

彼は停車場から眞直ぐ『エルミタージ』旅館へ行つた。青い上衣を着て、制帽を被つた旅館の荷物持が、彼の荷物を玄關に運び込んだ。その後から彼は妻と腕を組んではいつたが、二人とも立派な身裝、立派な容貌で、取り分け彼は鈎鐘のやうな恰好のイギリス風の外套を着込み、綠の廣い新しいパナマ帽を被つて、裸體美人の形をした銀の握手のついたステッキを鷹揚に握つて、實に堂々たる有樣だつた。

「居住權がなけれあ駄目です、」と大きな身體の肥つた門番が、彼の頭から足先までじろ〳〵眺めながら、眠さうなじつと動かない、冷淡な表情を浮べながら言つた。

「おい、おい、ザハール、また『駄目です』かね！」とゴリゾントは愉快さうに言つて大男の肩を輕く叩いた。「駄目です』とは何のこつだね？　わしには始終その『駄目です』を使ふんだね。わしは三日間しか居ないよ。イパチエフ伯爵と借地契約を結んだら直ぐ出て行くんだ。好い加減にしろよ！　さうなつたらお前一人で宿屋中勝手にするがいゝさ。だが、一寸御覽よ、ザハール。お前にやらうと思つてオデッサから玩具を持つて來たよ。どうだ、惡くなからう！」

ゴリゾントは用心深い、巧みな、馴れた手付で、門番の手に金貨を摑ませた。門番はまた後の方で手を小舟のやうな形にすぼめて、ちやんと待つてゐたのである。

ゴリゾントが寢室附の大きな廣々とした部屋に腰を落ち付けて、第一にやつたことは、部屋の扉の外の廊下に立派な編上靴を六足出して、やがて呼鈴を聞いて飛んで來た廊下ボーイにかう言つたことである。

「こいつをみんな直ぐ磨いてくれ！　鏡のやうに光らすんだぞ！　お前は確かチモフェイと言つたね？　ぢやわしを憶えて居るがいゝ。わしの爲め骨を折つたら、無駄にはならないからな。鏡のやうに光らすんだよ！」

四

ゴリゾントは『エルミタージ』旅館には三晝夜以上は滯在しなかつた。けれどもその間に三百人の人間と會ふことが出來た。彼がやつて來たお蔭で、この大きな陽氣な港街は急に活氣づいたやうだつた。雇人周旋所の女主人や、貸間の女將や、女の賣買ばかりして年を取り經驗を積んで、白髮交りとなつた媒介婆などが彼を訪ねて來た。貪慾からではなかつたが、職業上の誇りから、ゴリゾントはどういふことがあらうと、出來る限りうんと歩合を儲け、出來るだけ女を安く買ふやうに骨折つた。といつても十ルーブルや十五ルーブルも餘計に儲ける心算はなかつた。しかし競爭相手のヤムボーリスキイが賣却に際して彼よりも餘計に儲けるといふ考へが、彼を躍起にさせたのだつた。

彼は到着した翌日、髪みたいな頭髪をしたペーラといふ娘を拉れてメーゼル寫眞館へ出かけた。そしてこの娘の色色な姿態の寫眞を撮つて、種板一枚につき三ルーブルづつ受取つて、娘には一ルーブルづゝ與れてやつた。撮つたのは二十枚だつた。それがすんで、バルスコーワの處へ出掛けたのである。

この女は、といふよりも老孃と言つた方が適切だが、かういふたぐひの女は南ロシヤにだけ住んでゐるもので、ポーランド女でもなく、小ロシヤ女でもない。もう餘程年は取つてゐるが、男振りの好いポーランド人の優男を亭主に抱へる(その男とカフエ・シャンタンも經營してゐる)などゝいふ贅澤な眞似の出來る位の金は持つてゐた。ゴリゾントとバルスコーワは古い馴染として會つた。そしてこの二人が話し合つてゐる際はお互ひに恐怖もなく、羞恥心もなく、良心もないやうに見受けられた。

「バルスコーワさん！　あんたに飛び切り上玉をお目にかけませうか。三人ですがね、一人は大柄で、ブリューネットで、極く溫和しい娘です。も一人は體の小さいブロンドの娘で、お分りでせうな、何でもやれる娘ですよ。三人目の娘は――謎のやうな女で、たゞ微笑つてばかり居て無口ですが、これはなか〳〵有望で、それに――別嬪ですよ！」

マダム・バルスコーワは彼を眺めてゐたが、どうだかねえ、といふ風に頭を振つた。

「ゴリゾントさん！　隨分あたしを馬鹿にしてらつしやいますね。この前と同じ事をまたしようとなさるんですか？」

「どう致しまして、あなたを瞞さうなんて飛んでもない！　だが肝腎なのはそんな事ぢやない。その外に、立派に教育を受けた娘をお目に掛けませう。その娘をお好きなやうになさい。多分あなたの手でお客が見つかるでせうよ。」

バルスコーワは微妙なほゝ笑みを浮べて訊ねた。

「また奥さんですか？」

「いゝえ。でも貴族生れの娘でしてね」

「すると、また警察と一悶着ですね？」

「なアに！　そんな馬鹿なこと！　でね、私は大した金を頂くつもりぢやありません。四人で〆め、ざつと千ルーブルの目腐れ金で手を打ちませう。」

「まア一つ、底を割つて話さうぢやありませんか。先づ五百ルーブル。何しろ私は袋にはいつた猫を買ふ氣はありませんもの。」

「バルスコーワさん。私達が取引するのはこれが最初といふぢやなし、瞞したりなんかするもんですか。すぐに當人をつれて來ますよ。たゞお忘れないやうに願ひたいのは、

あなたは私の伯母さんといふことにして置きますからね、一つそのお積りで。それから私はこの都會には三日以上は滯在しません。」

マダム・バルスコーワは自分の胸や腹や頤を愉快さうに搖ぶつて笑つた。

「下らないことの懸引は止しませうね。それにお互ひに瞞し合ひつこはやめませう。今のところ、女はどし〳〵捌けて行くんです。ゴリゾントさん、赤い葡萄酒は如何です？」

「有難う存じます、バルスコーワさん。喜んで頂きます。」

「古馴染みの氣持でお話ししませうよ。あなたは一年にどの位收入がございまして？」

「さうですなア、奥さん、一萬二千、二萬、といふ處でせうな。ですがね、始終旅してるんで、その入費も大變ですよ！」

「幾らか貯金なさいまして？」

「いや、問題になりません。まア年に二三千見當ですよ。」

「あたし、一萬か二萬かと思つてましたが……」

ゴリゾントは警戒した。俺に搜りを入れ出したな、と感づいたので、そつと訊ねた。

「どうしてそんな事に興味をもつてらつしやるんです？」

マダム・バルスコーワは電鈴の釦を押して、立派な服裝をした女中に、コーヒと、沸かしたクリームと、シャムペルテンを一壜持つて來るやうに言ひつけた。彼女はゴリゾントの嗜好を知つてゐたのである。それからゴリゾントに訊ねた。

「あなたはシェプシェローウィチさんを御存じですか？」

ゴリゾントは叫ばんばかりに言つた。

「えゝツ！　シェプシェローウィチを知らない奴は居ませんよ！　あの男は――神ですよ、天才ですよ！」

それから彼は元氣づいて、陷穽にずる〳〵引かれることなどは忘れて了つて、昂奮しながら言ひ出した。

「シェプシェローウィチが昨年やつたことを考へて見て下さい！　コフノやウィリノやジトミルあたりから三十人の女をアルゼンチンへ拉れて行つたんです。一人千ルーブルの割で、賣つたんですから――合計は、どうです、三萬ですよ！　シェプシェローウィチがこれで止めたと思ひますか？　どうして〳〵、汽船の入費を取返さうといふので、この金で數名の黒ん坊女を買つて、モスクワ、ペテルブルグ、キエフ、オデッサ、ハリコフあたりへ賣り捌いたのですよ。あれは、マダム、人間ぢやありません、鷲ですよ。あんな眞似は誰も出來ますまい！」

バルスコーワは優しく自分の手を彼の膝に置いた。彼女はこの機會を待つてゐたので、親しさうに言つた。

「ではあたし、折入つてお話があるんですが……時にあなたは只今、何といふお名前でいらしつて？……」
「ゴリゾントで行きませう……」
「そこでお話しつていふのは、ゴリゾントさん、あなたの方に生娘は居りませんかね？　唯今大變申し込みが多いんですよ。洗ひざらしの處を申しませう。お錢のことは兎や角申しますまい。近頃の流行なのですよ。ねえ、ゴリゾントさん、あなたの拉れて來ていらつしやる女達はそつくり元のまゝであなたの手へ戻されますよ。これは、お分りでせうね——一寸した色好みからでせうが……あたしにはさつぱり譯が分りませんけれどね……」
ゴリゾントは首を垂れて、頭を撫でながら言つた。
「實は、私に妻がありまして……大方御推量でせう。」
「さう。ですけど、どうして大方なんですの？」
「いや、泥を吐くのも極りが悪いですが、何と言ひませうか……彼女は私の許嫁でして……」
バルスコーワは陽氣に笑つた。
「まア呆れた。あなたがそんな惡黨だらうとは思ひ掛けないことでしたよ、ゴリゾントさん！　まアどちらでもいゝですが、その奥さんを讓つて下さい。ですが、あなたは本當に我慢していらしつたの？」

「子ぢや如何です？」とゴリゾントは眞顏で訊ねた。
「何んだ、つまらない！　ぢや千ルーブルとしませう。ですが、あたし、その方と旨く話がつけられますかね？」
「造作はありません！」と自信ありげにゴリゾントは言つた。「さつき申した通り、あなたがつまり——私の伯母さんて譯です。で私は女房をあなたの處に殘しときます。ところでバルスコーワさん、その女つてのが、まるで猫みたいに私にぞつこん參つてるんですよ。だから、私の幸福のためには斯樣しか〳〵しなけやいけない、といふ工合にあなたの口から仰しやつて貰へば——それで屹がつきますよ！」
二人はもう外に何も話すことはないらしかつた。マダム・バルスコーワは約束手形を取り出して、どうかかうか名前と父稱と苗字を書いた。手形は勿論本物ではなかつたが、でもそれ〳〵關係や聯絡や惡黨としての良心はある。こんな事では詐欺はやらない。やつた日には生命が危いから。これは監獄や街頭や娼家などでも同じことだ。
それがすむと間もなく、この女の親密な友人が、まるで船底から出て來た幽靈のやうに姿を現はした。口髭をぴんと捻り上げた若いポーランド人で、カフェー・シャンタンの主人である。三人は葡萄酒を飲んだり、市場や博覽會のことを話したり、不景氣を一寸こぼし合つたりした。それがすんでゴリゾントは旅館の自分の部屋に電話を掛けて妻を呼び寄せた。そして妻をこの伯母と伯母の從弟とに紹介してさて、祕密な政治上の用件でどうしてもこの町を去らなければならないと言つてきかせた。そして優しくサーラを抱いて涙を流し、そのまゝ出て行つたのである。

五

ゴリゾントが到着すると共に（尤もこの男の名前が、ゴロレヴィチか、ギダレヴィチか、オクーネフか、ロズミタリスキイか、どつちになつてゐたのかそれは分らぬが）とにかく、この男が到着すると共にヤムスカヤ街は悉皆一變した。大更迭が行はれた。ツレッペリ樓から抱女をアンナ・マルコーヴナ樓へ移し、アンナ・マルコーヴナ樓から一ルーブル店へ一ルーブル店から五十カペイカ店へといふ風に移された。昇進はなくて下落ばかりだつた。ゴリゾントは抱女の入れ換へ毎に五ルーブルから百ルーブルまで儲けた。實際この男はイマートラの瀑布のやうな精力を持つてゐた。
晝間のことであるが、彼はアンナ・マルコーヴナ樓に腰をおちつけて、煙草の煙で眼をしかめながら、組んだ脚を搖りながら言つた。
「一體あのソーニカつて女は、何だつて此處に置いとくんですね？　彼女は上店の代物ぢやありませんぜ。もし彼女を鞍替させたら、あんたの懷に百ルーブル、私が二十五ルーブル儲かるといふ譯ですが。打明けた處を云つて下さい。どうです、あの女には客はつかないでせうな？」
「まあ、シャツキイさん！　いつもお口はお上手ですねえ！でもあなた、あの女があたし可哀さうでね。それアほんとにしをらしい娘でしてねえ……」
ゴリゾントはほんの暫く思案した。そして旨く當嵌まるやうな引用句を捜してゐたが、突然口を切つた。
「倒れかゝつてゐる者を突け！　つてことを云ひますね。私はね、シャイベスさん、あの女には客がつかないことを斷言しますよ。」
小柄で、病的で、邪推深い、だが必要な場合には思ひきつた事をやる老人のイサイ・サヴィチは、ゴリゾントの肩をもつた。
「それは分り切つてまさアね、實際あの女にア客はつきません。考へるがいゝよ、アーネチカ、あのやくざものが五十ルーブルするんです。その內、シャツキイさんが二十五ルーブルお取りになる。五十ルーブルが私達の手に殘るんだよ。それに幸ひ私達はあの娘との關係が切れる！　少くもあの娘は此家の惡口は言はないでせうよ。」

まアかういふ次第で、鼻のソーニカは一ルーブル店を經て、半ルーブル店へ移されたのだが、そこと來たら、あらゆる下司共が夜通し抱女を思ふ存分に苛めるのだつた。だから頑丈な體格と太い神經の力が必要だつた。或る時、夜だつたが、フョークラといふ二十五六貫もあらうといふ肥つた女が、厠へ行かうと庭へ飛び出した折、側を通り掛つた鵜母に向つて、

「をばさん！　いゝですか、卅六人目ですよ！……忘れないで頂戴。」と叫んだ時、ソーニカは怖しくなつて身震ひした。

幸なことに、ソーニカにとつては思つたほどではなかつた。といふのは、こんな娼家でさへ彼女は不器量の方だつたからである。誰も彼女の素晴しい眼に注意を拂ふものはなく、たゞ身體の空いた女がなかつた場合だけ客がついた。例の藥劑師は彼女を捜しあてゝ、毎晩やつて來た。然し臆病なせゐか、ユダヤ人特有の小心からか、それとも事によると生理的潔癖からか、彼は女を身受けしてこの家から連れ去ることが出來なかつた。夜通し女の傍に坐り續けて、彼女が一時客から戻つて來るのを、例によつて例の如く辛抱強く待ち受け、嫉妬喧嘩を始めるのだつたが、やはり女を愛してゐた。そして晝間は藥屋で臺を前にして何かの臭い丸藥を丸めながら、彼女のことを考へ續けては惱んでゐたのである。

六

街外れのカフェー・シャンタンをはいると直ぐそこから、花の代りに豆電燈を點けた造花壇が、五色の光で輝いてゐた。そして先きへ行けば行く程狹くなつた廣い半圓形のアーチから出來た、同じやうな豆電燈の並木道が庭の奥の方へ續いてゐた。その道が盡きた處は、黄色い砂利を敷いた、廣々とした廣場で、左側には野天芝居、劇場、射的場があり、正面には——貝殻の形をした軍樂隊の演奏場、花やビールのある掛小屋があつて、右側は料理店の細長い露臺になつてゐた。高い柱の上から大きな電燈が煌々と、死のやうに蒼白く廣場を照らしてゐた。針金の網で包まれたその光澤消しの硝子には蛾の群がぶつつかり、漠然とした大きなその影は下の地べたで飛び交はしてゐた。立派な、輕い、洒落れた身裝の女達が、屈託のない陽氣な表情か、或は高慢ちきな親しみがたい表情を浮べて、空腹な、疲れた曳きずるやうな足取で、一對づゝ行つたり來たりしてゐた。

レストランはどの卓子も滿員だつた——そしてそれら卓子の上を、皿に打ちあてるナイフの斷え間ない響や、波のやうに躍るがや〳〵した話し聲などが流れてゐた。料理

場からは食物のむつと息詰るやうな匂がして來た。レストランの中央にある演奏壇の上には、揃ひも揃つてこつてりとポマードで頭髪を撫で付けた、色の黑い、齒の白い、口髭を生やした、猿のやうな顏付のルーマニヤ人達が、赤い帽子をかぶつて演奏してゐた。樂長は、前に身を屈めて、氣取つた恰好に身體を搖ぶりながらヴァイオリンを彈いてゐたが、客に向つて厭らしい、甘たるい眼付——男淫賣のやうな眼付をしてゐた。そしてすべてのものが一しよくたに——この煩さいほどの數で輝いてゐる電燈の光、婦人達のけばゞゝしい極彩色の化粧、今流行の芳烈な香水の匂ひ、この鳴り響く音樂、その音樂のテンポの氣儘な緩やかさ、その途絶える時の淫蕩な滅入るやうな感じ、高調に達した時の物狂ほしい緊張——こんなものが馬鹿々々しくも愚かしい贅澤な一般的な光景、陽氣で猥らな饗宴まがひの雰圍氣を醸し出しながら互ひに一つに融け合つて行つた。

上の方には、この廣間を取卷くやうにして廻廊があつた。別室の扉は丁度バルコニーに通じるやうにその廻廊へ通じてゐた。これらの別室の一つに四人の客が——二人の婦人に二人の男が——陣取つてゐた。一人はロシヤ全體にその名を知られた歌劇女優ロヴィンスカヤで、大柄な美人である。その眼はエジプト式で、細長く、綠色をして居り、唇は長くて、眞赤で、官能的で、兩端がきりつと下がつてゐた。も一人は男爵夫人テフティングといふ小柄な、優雅な、青白い女で——何處へ行くにも女優と一緒である。男は有名な辯護士リャザーノフと、ウォローヂャ・チャプリンスキイといふ上流社會の金持の青年である。この青年は素人作曲家で、二三の戀愛小唄と多くの時事的な諷刺小唄をうんと市ぢゆうに流行させた男である。

別室の壁は赤い色で、金色の模樣がはいつてゐた。卓子の上には火の點つた燭臺が二つあつて、その間に置いてある銀鍍金の容器は寒さのために汗をかいて居り、白い瀝青を塗つた瓶の口が二本その容器の中から突き出してゐた。灯影は水々しい金色をして震へながら、葡萄酒を一杯注いだ扁平なコップに映つてゐた。扉々の外側には給仕が壁に凭れながら附いて居て、いつも伸ばしてゐる右の小指に大粒のダイヤモンドを光らせてゐる肥つて脊の高い勿體ぶつた物腰の給仕頭は、ちよい〳〵別室の扉の傍に足を止めて、片方の耳でじつと中の樣子に聽耳を立てるのだつた。

退屈したやうな青白い顏の男爵夫人は、柄付眼鏡を通して、下の方のがや〳〵とむしや〳〵食べてゐる群衆の蠢めきを物憂げに見下した。赤や白や碧や黄色の女の衣裳の中に混つてゐる男の單調な姿は、大きなづんぐりした黑い甲

蟲のやうだつた。ロウィンスカヤはぼんやりと、それでも眼を放さずに、下の方の演奏壇や見物人を眺めてゐた。彼女の顏には疲勞と倦怠と、それから恐らく有名な人に共通したところの、すべての光景に見倦いたといふやうな表情が浮んでゐた。彼女の左手の美しい細長い指は、棧敷の欄干の深紅な色をした天鵞絨の上に置かれてあつたが、珍しい綺麗なエメラルドは今にも轉がり落ちるかと思はれる位無造作に、指に嵌つてゐた。と、突然彼女は笑ひ出した。

「御覽なさいな、」と彼女は言つた。「まあ何んて可笑しな恰好、といふより、何て可笑しな職業なんでせう、ほうら、あの七管笛を吹いてる人よ。」

みんなは彼女の指さす方を見た。見ると、成程可笑しな光景だつた。ルーマニヤ人のオーケストラの後の方で、大方大勢の家族をもつた父親か、祖父かとさへ思はれる、でつぷりとした髭の男が座を占めて、一しよにくつつけた七つの木製の笛を、一生懸命に吹いてゐた。恐らくこの樂器を唇の間で動かすことが、この男には出來ないらしく、そのため物凄い速さで頭を右や左に搖つてゐた。

「奇異な仕事ですわね、」とロウィンスカヤは言つた。「ねえチャプリンスキイさん、あんた、あゝやつて頭を振つて御覽なさいな。」

心密かにこの女優に片戀してゐるウォローヂャ・チャプリンスキイは、言はれるまゝに、直ぐ一生懸命眞似して見たが、半分も經つと止めてしまつた。

「駄目ですよ、」と彼は言つた。「こいつは長い間の練習か、それとも親讓りの腕前が必要ですよ。眼が廻ります。」

この時男爵夫人は薔薇の花瓣を摘つては杯の中へ抛り込んでゐたが、やがて、欠伸をやつと噛み殺して、心持ち顏をしかめながら言つた。

「だけど、あんた達のこのK市ぢや隨分退屈な氣晴しをしてゐるんですのね！　御覽なさいよ、笑ひ聲も歌も聞かれないし、ダンスだつてありませんわ。愉快さうな振りをするやうに追ひ込まれた家畜の群みたいですわ！」

リャザーノフは物憂げに臺付コップを手にして一寸啜り、朗らかな聲で落着いて言つた。

「では、あなたにお馴染みのパリーやニースはもつと愉快でせうかしら？　ですが、愉快とか若々しさとか笑ひとかいふものは、永遠に人生から消え失せたと思ひますよ。しかもそんなものは何時になつたら戻つて來るか當にならないんです。人に對する時はもつと辛抱强くならなければならないと、私は思ひますね。彼處の、下の方に腰かけてゐる連中にして見れア、今晩は、休息や、お祭であるかも分らないぢやありませんか？」

「辯護演說ですね。」と落着いた風で、チャプリンスキイが口を入れた。

ロウィンスカヤはくるりと、、、男達の方へ振向いた。その長い綠玉色のやうな眼は細くなつた。これは彼女が激怒する前兆であつて、其爲には時として××も馬鹿を仕出かしたことがある。だが彼女は直樣自己を制して、物憂げに續けた。

「あんた達の仰しやることは、あたしには分りませんわ。何しにあたし達は此處へ來たのか、それさへ分りません。ほんとに氣持のいゝ觀物つて世の中にはまるで無いぢやありませんか。例へば、あたし、セヴィラやマドリッドやマルセイユで鬪牛を見ましたけど——たゞもう胸が惡くなるだけで何の興味も惹きませんよ。拳鬪や相撲も見ましたがー下品な亂暴といふだけです。また虎狩のお仲間へはいつて、その時、大きな、賢い、白い象の背中に取りつけてある天蓋の中に坐つたこともありますが……つまり、あんた方はよく御存知でせう。それにあたしの大きな、複雜な、騷々しい生活のために、あたしは段々と年を取つて……」

「まア、あなた何を仰しやるんです。エレナ・ヴィクトローヴナ！」とチャプリンスキイが優しく咎めるやうに言つた。

「止して頂戴！　ウォローヂャさん、お世辭なんか！　さういふあたしだつて、自分の身體がまだ若々しくて綺麗だ位は知つてますわ。だけど、ほんとに、折々は九十にもなつたやうな氣のすることがありますよ。それほど心が荒んでしまつたんですわね。それからね、生れてこのかた、たつた三つの强い印象が心に刻みつけられてますの。第一は子供の時分で、猫が雀を覗つてゐるのを目つけて、怖しいながらも興味をもつて、猫の動作と雀の敏捷つこい眼差を見てゐた時です。一體何方に同情してゐたのか、今になつても自分ながら分りません。猫の機敏なのにか、雀の逃げ足の速いのにか。ですが雀の方が猫より機敏なことが分りました。あつといふ間に雀は木の上へ跳び上つて、若しあたしが一と言でも意味が分つたら恥かしくて顏を赤らめるだらうと思はれるやうな、惡口を猫に浴せかけました。猫は憤つて尻尾をまるく上にあげ、さも何もなかつたやうな風を致しました。もう一度は、或る名優と二部合唱を歌劇でやることになりました時……」

「誰とですの？」と男爵夫人が早口に訊ねた。

「誰だつて構はないぢやありませんか？　名前には用はないでせう？　そこであたしがその人と一緒に歌つた時は、あたしの全身が天才の威力に押しつゝまれてゐるのを感じましたよ。あたし達の聲がどんなに素敵に、どんなに素晴

しいハーモニイに融け合つたことでせう！　あゝ！　あの時の印象をお傳へすることは出來ませんわ。こんなことは一生の中に二度とないだらうと思ひますわ。あたしは役の上で泣かなけやならなかつたので、本當の、眞實の涙を流して泣いたんですのよ。それから幕が降りてからその人はあたしの側へ寄つて來て、その大きな暖かい手で、あたしの頭髪を撫でゝ、魅するやうな明るい微笑を浮べて仰しやつたのです。『素敵だつた！　こんなに歌へたのは生れて始めてだつた』つてね。で、あたしは——あたしは氣位の高い女ですけれど——その方の手に接吻いたしましたわ。するとまた眼に涙が浮ぶ始末で……」

「で三度目は？」男爵夫人は訊ねたが、その眼には意地悪い嫉妬の火花が閃めいた。

「あゝ、三度目ですか、」と女優は哀しげに答へた。「三度目のは至つて平凡ですわ。去年のシーズンはニースに居たんですが、その時、セシール・ケッテンが加入してゐるカルメンを、フレヂュスの野外劇で見ました。あの方はもう」と女優は心から十字を切つた。「歿くなりましたが……あの方に取つてはほんとに幸か不幸か、存じませんけれど……」

不圖、一瞬間、彼女の双の眼は涙でいつぱいになつて、丁度夏の暖い黄昏に宵の明星が放つやうな、蠱惑的な絲色の光をもつて輝き出した。と彼女はオーケストラの方へ顔を外らし、その細長い神經質の指は痙攣るやうにしばらくはボックスの欄干の上張りを握つてゐた。やがて再び友達の方へ振向いた時は、その眼はもはや乾いて、謎のやうな咎めるやうな、威のある唇には我ともなく微笑が輝いてゐた。

その時リャザーノフは優しい、けれどもわざと落着いた調子で、丁寧に訊ねた。

「ですが、エレナ・ヴィクトローヴナ、あなたの素晴しい名聲、崇拜者、公衆の喝采、花束、華やかな贈物……それにあなたが顧客に與へる歡喜——こんなものにあなたの心は動かないでせうか？」

「いゝえ、リャザーノフさん、」と彼女は疲れた聲で答へた。「それがどんな値打ちのものか、あたしよりかあなたの方が好く御存じでせう。厚かましい訪問記者がやつて來る。その知人に入場券をやらなければやならないし、序にその男に二十五ルーブル包んでやらなければやならない。中學生、女學生、大學生、女子大學生などが署名入りの寫眞をねだる。將官の位をもつた老ぼれが、あたしの獨唱の時に後をつけて大聲で歌ふ。歩いてゐると後でいつもお定りの私語がきこえる。『あれだよ、あの女さ、有名な！』つてね。それから匿名の手紙、樂屋へ入りびたりの常連の圖々しさ……一々數へたら際限がありませんわ……あなただつて多分時々裁判氣狂ひの人達に取巻かれておいでゝせう？」

「さうです」とリャザーノフはきつぱり答へた。

「それなんですよ。それに一番怖ろしいのは、本當の感興が涌いて來るたんびに、自分は群衆の前で感情を伴り、心を歪めてゐるといふ自覺が、苦しくなる程起ることなんです？……おまけに競爭者が成功するといふ心配があるでせう？　それから聲を失くしたり、傷めたり、風邪をひきはしまいかといふ斷えることのない恐怖！　聲帶についてのいつもながらの苦しい心遣ひ。どうしてなか〳〵、名聲を負ふといふことは、まつたく苦しいものですわ。」

「然し、俳優としての名譽は？」と辯護士は言葉を返した。「天才の威力はどうなのです？　この世の如何なる帝王の威力よりも偉大なる眞の精神的威力ぢやありませんか！」

「えゝ、えゝ、それは無論さうです。ですけれどね、名譽とか名聲とかいふものは遠くの方から空想してゐる時だけが樂しいものですわ。さてそんなものを獲て見ると——その刺だけが感じられるんですわ。それでゐて、それが少しづゝ無くなつて行くのがどのやうに苦しいことでせう。それからお話しするのを忘れてゐましたが、あたし達藝術家はまるで懲役のやうな勞働をしてゐるんです。朝は練習、晝間は下稽古、それから食事する時間も碌にない位ですぐ出演時間です。ですから一寸本でも讀んだり、かうやつてあなた方と氣晴ししたりする一時間の暇でも作り出すといふのは不思議なぐらゐですわ。それだつて……氣晴しと言つた處で、ほんの中位……」

彼女は、欄干の上にのせてゐた手の指を、無頓着に倦るさうに輕く振つた。

今の話に動かされたウォローヂャ・チャプリンスキイは突然訊ねた。

「では、エレナ・ヴィクトローヴナ、あなたの空想を充たし退屈を紛らすには、どんなことがお望みなんです？」

彼女はその謎のやうな眼で彼を見たが、いくらか遠慮氣味かとも思はれる風で、靜かに答へた。

「昔は人々がもつと愉快に暮してゐて、偏見なんてものは少しも持つてゐなかつたんですわねえ。あたし、その時代に生れて充實した生活をしてゐたらと思ひますよ。あゝ昔のローマ！」

この言葉の意味は誰にも分らなかつた。ひとり、リャザーノフだけは、彼女の方を見ないで、誰も知つてゐる古典的なラテン語を、滑らかな俳優のやうな聲で、ゆるりと口ずさんだ。

「Ave, Caesar, morituri te salutant!」(皇帝陛下萬歳、將に死に就くローマの武士が戰ひに出る前の言葉。)

「それ〳〵！　あたし、あなたが大好きですわ、リャザーノフさん。あなたは聰明ですから。いつもみんな迄言はなくともすつかりお察しですもの。尤もそんなことは別に知識の最高の本質ぢやありませんけどね。でもねえ、まつたくの話が、昨日までは毎日顔を合はせた親友で、話し合つたり、一緒に卓子を圍んで食事をした二人の人間が、今日は何方か一人は死ななければならないんです。おわかりでせう。永遠にこの世から去らなければならない。でも、この二人の間には、憎しみも怖れもない。これが、あたしが想像することの出來る、ほんたうの、最も美しい觀物なんですよ！」

「あなた、隨分殘忍性がおありですのね。」と男爵夫人が、躊躇しながら言つた。

「さう。でも仕方はありませんわ！　だつてあたし達の先祖は騎手で强盜だつたんですもの。それはさうと、皆さんそろ〳〵歸らうぢやありませんか？」

みんなは庭から出て行つた。ウォローヂャ・チャプリンスキイは自動車を呼んでくれるやうに命じた。エレナ・ヴィクトローヴナは彼の腕に縋つてゐた。と、ふと彼女が訊ねた。

「ねえ、ウォローヂャさん。あんたはね、いはゆる堅氣な女と別れてから、大抵何處へいらつしやるの？」

ウォローヂャは口吃つた。それでもロヴィンスカヤの前では出鱈目は言へないといふことはよく知り抜いてゐた。

「うむ……お耳に入れるのも何んですが……えゝと、その、ジプシイの處へね、例へば……夜の酒場へ……」

「それから、まだ何か？　も少し下等な？」

「いやどうも。僕に極りの悪い思ひをさせるんですか。僕はこんなに我を忘れてあなたを愛する樣になつてから……」

「ロマンチックはお止しなさい！」

「ぢや、何と申しますか……」とウォローヂャは顏だけでなく體中、背中まで紅くなるのを覺えながら吃るやうに囁いた。「その、無論、女の處ですが、今では、僕一個としては、そんな處へは、無論、斷じて足踏みしないですが……」

ロヴィンスカヤは意地惡くチャプリンスキイの肱を自分の方へ緊めつけた。

「娼家へでせう？」

ウォローヂャは何とも答へなかつた。すると彼女は言つた。

「ぢやね、すぐこれから自動車で其處へ案内して、あたしには全く緣のないその生活を見せて下さらないこと。でもね、あたしはあなたの保護を賴りにしてることを忘れないで頂戴。」

後の二人もこれに同意した。恐らく、餘り氣も進まなかつたらうが、エレナ・ヴィクトローヴナに反對するのはどうしても出來なかつたのである。彼女はいつでも自分の我を通してゐたから。そして、後になつてからだつたが、ペテルブルグでは社交界の淫蕩な婦人や娘たちでさへ、流行かぶれのえらがりから、ロヴィンスカヤが今言ひ出した處よりずつと惡い處へ出入りしてゐるといふことを彼等は聞き知つたのである。

七

ロヴィンスカヤは、ヤムスカヤ街へ向ふ途中で、ウォローヂャに言つた。

「最初は一番上等な家へ、次ぎに中處の家へ、それから一番汚らしい家へ、連れて行つて頂戴。」

「エレナ・ヴィクトローヴナ！」と熱心にチャプリンスキイは言葉を返した。「僕はあなたの爲めなら、どんな事でもする積りです。決して誇張ではなく、あなたの命令ならば生命でも差上げますし、あなたの合圖一つで自分の出世も地位も放棄致しませう。……けれどもあゝいふ家へ御案内する勇氣はありません。ロシヤの風習と來たら——亂暴で、

でなけりや、たゞもう非人間的なんですよ。あなたを亂暴な失禮な言葉で侮辱したり、それとも居合せた客が、あなたの眼の前で、何か不都合な振舞をしやしないか、それが氣懸りです……」

「まア驚いた、」とロヴィンスカヤは堪へ切れぬといふ風で遮つた。「あたしがロンドンで歌つてゐた時、此時分は大勢の最眞客がありましたが、或る上流の仲間と一緒に一番汚らしいワイチェップルの魔窟を平氣で見物致しましたよ。その魔窟では大變氣を付けて親切に扱つてくれましたよ。それにね、その時行つた連中の中に、二人のイギリスの貴族が居ましたが、二人とも卿で、遊獵家で、肉體的にも道德的にも並外れた强い人で、この人達は、勿論、女を侮辱するなんて事は決して容赦しない人達でしたわ。ですけど、ウォローヂャさん、あなたは弱蟲のお仲間なんですの？」

チャプリンスキイはばつと顏を赤らめた。

「いゝえ、いゝえ。エレナ・ヴィクトローヴナ。僕はたゞあなたの身を心配して用心から申上げたんです。あなたが行けとおつしやる處なら何處へなりとも行きます。あんな如何はしい處ばかりか、死に向つてゞもね。」

この時、一行ははや、ヤムキ中で一番立派なツレッペリ樓へ着いた。辯護士リャザーノフは例の持前の皮肉な微笑を

浮べて言つた。

「ぢや、いよ〳〵動物園の見物が始まるんですな。」

彼等は別室に通されたが、その部屋の壁紙は眞紅で、その上に小さな月桂冠の形をした金色の模様が『王朝時代』式に描かれてあつた。ロウィンスカヤは鋭敏な俳優獨特の記憶で、この壁紙と全然同樣の模樣が、先刻迄四人の居たレストランの別室の壁にも貼つてあつたことに氣がついた。

バルチック地方生れのドイツ種の女が四人やつて來た。何れも肥り肉の胸の張つたブロンドで、白粉をこて〳〵と附け、非常に勿體ぶつて、丁寧な女達だつた。初めの中は話も途切れ勝ちだつた。女達は一生懸命に上品な婦人を氣取るために、石の彫刻みたいに身動きもせず腰を掛けてゐた。リヤザーノフが註文した三鞭酒さへ氣分を引き立てなかつた。ロウィンスカヤは、最も純粹のブロンド女で、一番肥つて麵麭に似た感じのドイツ女の方へ向いて、最初に話の緒口をつけた。丁寧にドイツ語で訊ねたのである。

「失禮ですが——何方のお生れなんですの？　ドイツぢやありませんか？」

「いゝえ、奥さん、わたしはリガでございます。」

「で、一體どんなことがもとで此處にお勤めにならなけやなりませんの？　多分——貧乏のせゐぢやないでせう？」

「無論でございますよ、奥さん、かうなんでございます。わたしの許婚のハンスは、料理店の給仕を致して居りますが、今結婚するにはわたしもあの人も餘り貧乏でございます。ですからわたしも貯金して銀行へ預ける。あの人もさうする。そして必要なだけの一萬ルーブル貯まつたら、二人で自分のビヤホールを開くつもりなんです。そして神樣のお思召次第で、子供も持てるやうにならうといふのでございます。二人の子供をね、男の子と女の子と。」

「でも、お聞きなさい、娘さん、」とロウィンスカヤは驚いた。「あなたは若くてお綺麗で、二ヶ國語も知つておいでです。」

「三つでございます、奥さん、」とドイツ女は誇らしげに口を入れた。「エストニア語も存じて居ります。わたしは市立の小學校を出て、女學校の三年迄あがりました。」

「それ、御覽なさい……」とロウィンスカヤは熱くなり始めた。「それだけの教育があれば、いつだつて月三十ルーブル位の就職口が見つかるぢやありませんか。まア、言つて見れば、家政婦とか、保姆とか、立派な店の店員監督とか、會計係とかいふものがね……もしあなたの將來の花婿の……フリッツさんとやらが……」

「ハンスでございます、奥さん。」

「もしそのハンスさんが勤勉家で、儉約家でしたら、三四年も經つて御覽なさい。一本立ちになるのはちつとも難かしいことぢやありませんよ。どう思ひます？」

「あら、奥さん、少しお考へ違ひですわ。一番割の好い仕事でも、何もかもあきらめて貯めましても月々十五ルーブルか二十ルーブル以上にはどうしてもならないといふ事をあなたはお見落しのやうですわ。ところが此處では旨く節約さへすれば百ルーブル儲けて、直ぐにそれを貯金局に預けることが出來ます。そればかりか、まア考へて見て下さいませ、奥さん。他人の家で女中をするなんて賤しいではございませんか！　いつも主人達の我儘や機嫌次第ですもの！　それに主人はいつも何んだかんだと附き纏つて、厭なこつた！……それに主婦さんは燒餅をやく、言ひ掛りをつける、惡口をいふ、さういふ譯ですわ。」

「いゝえ……わたしには分りません……」とロウィンスカヤはドイツ女の顔を見ないで伏眼勝ちに、物思はしげにゆつくり言つた。「あなた方の生活については、色々と承つてゐます。こゝの、……何んと申しますか……こんな家の事をね、何やら怖ろしいことがあるのを耳にしてゐます。ほんとに厭な、年取つた片輪の男を無理矢理に愛させるとか、隨分慘たらしい方法で搾り取られ、卷き上げられてゐるとかつて……」

「まあ、そんなことはありませんわ、奥さん……この娼家では各自勤定帳をもつてますもの。それに自分の收入と支出とを几帳面に書き入れます。先月なんかわたしは五百ルーブルと少し稼ぎましたよ。いつもの通り、その三分の二を食費、部屋代、燈火代、燃料代、下着代として女將さんに拂ひました。でもわたしの手許に百五十ルーブル以上殘ります。さうではありませんか？　其內五十ルーブルは衣裳やその他のお小遣です。百ルーブルは貯金致します……で、これで何處が捲き上げられたり搾り取られて居るんでございます？　お伺ひ致しますわ。もし男がどうしても氣に入らないときは——ほんとに嫌らしい胸の惡くなる人が參りますよ——そんな時はいつも病氣だと言つて、代りに他の新參の娘を出してやるんですの……」

「だつてあなた……あの失禮ですけど、お名前を存じませんので……」

「エリザつて申しますの。」

「エリザさん。噂によると、大變亂暴な扱ひを受けてゐらつしやるさうぢやありませんの。……時には、打つたり、あなた方の氣の進まないことや、厭で仕方のないことを無理強ひするつて言ふぢやありませんの？」

「そんなことありませんわ、奥樣！」とエリザは鷹揚に言

つた。「わたし達は娼家で仲の好い家族同様の生活をしてゐるんです。みんな郷里が同じだつたり、親類だつたりですの。ほんとにねえ、他の人達も自分の家庭で、わたし達のやうに仲よく暮して行けばいゝんですけど。それはね、ヤムスカヤ街ではいろんな騒ぎや喧嘩沙汰や、ごた〳〵はありますよ。だけどそれは向うの……あの……一ルーブル店ですわ。ロシヤ女は大酒は飲むし、いつも情夫を一人持つてゐるしそれで自分の將來のことは何も考へないんですから。」

「あなたは悧巧な方です、エリザさん。」とロウィンスカヤは重苦しい調子で言つた。「それはみんな好いとしても、思ひ掛けない病氣はどうなんですの？　傳染病は？　それは死も同樣ぢやありませんか！　どうしてそれを見抜くことが出來ます？」

「そんなこともありませんわ、奥さん。病氣の有り無しを檢査してからでないと、わたし客を自分の寢臺へ寄せつけませんわ……わたしは、少くとも七十五パーセントは保證されてゐますの。」

「まア呆れた！」と突然ロウィンスカヤは熱くなつて叫ぶと拳で卓子を叩いた。「でも、あなたのアルベルトさんは……」

「ハンスでございます……」とドイツ女は溫和しく訂正した。

「御免なさい……そのハンスさんは、あなたがこんな處にゐて毎日不義を働いてゐるのを、餘り喜んではいらつしやらないでせうがね！」

エリザは眞面目な、活々した驚きを以て彼女を眺めた。

「いゝえ、奥さん……わたしは何もあの人に對して不義は致して居りませんわ！　それは他の墮落した女、殊にロシヤ女の事ですわ。さういふ女は情夫を何人も持つて、せち辛いお金を情夫の爲に使つてるんですから。わたしがそんな厭らしい眞似を何時したんでございます？　まア厭な！」

「わたしはこれほどの墮落とは想像もしなかつた！」ロウィンスカヤは立上りながら、胸が悪いといふ風で叫んだ。「勘定して下さい、皆さん。次ぎへ參りませう。」

みんな街路へ出た時、ウォローヂャは彼女の腕を執つたが、懇願するやうな聲で言つた。

「お願ひです。一つの經驗で澤山ぢやありませんか！」

「まあ、何といふ下劣、何といふ淺ましい話でせう！」

「ですから申上げてるんです。こんな試みは止しませう。」

「いゝえ、とにかく、最後までやりませう。さ、何處か中流處を、もつとあつさりと見せて下さい。」

エレナ・ヴィクトローヴナのために心を痛め通しのウォローヂャ・チャプリンスキイは、つい鼻の先の——僅か十歩の距離しかないアンナ・マルコーヴナ樓へ立寄る事を提議した。

こゝでは強い印象が彼等を待ち受けてゐたのである。初めの中はシメオンが入れようとしなかつたが、リャザーノフが四五ルーブル摑ませたのでやつと通してくれた。それから別室へ案內されたが、そこはツレッペリ樓のそれと大體同じで、たゞ少しばかり餘計に破れたり變色したりしてゐるだけだつた。抱女達はエンマ・エドゥアルドヴナの言ひつけで別室へ追ひ込まれた。けれどもそれは曹達と酸を混ぜるやうなものだつた。だが、主な過失はそこへ——眼に狂暴な炎をたゝへてゐる意地の悪い、氣の立つてゐるヂェーニャを入れてしまつたことである。最後に、モナ・リザの內氣で淫蕩な微笑みを浮べた、溫和しくて物靜かなタマーラが入つて來た。結局、この別室には殆んど家中の人間がみな集まつてしまつた。ロウィンスカヤは「どうして女達はかういふ生活をするやうになつたか？」といふことは最早敢て訊ねなかつた。が、家中の人々が、外面だけでも丁寧に迎へたことは言つて置かなければならない。エレナ・ヴィクトローヴナは、抱女達がいつも口吟む唄を歌つてくれるやうに賴んだ。すると女達は快く歌つた。

月曜が來りや
檢査に行きます、行けば
厭な畜生！
その先はかうだ。
いとし可哀や、可哀やあたし——
酒場はしまつて
頭が痛む——

＊

盜人の戀は
火のよに熱い、
賣女の胸は
氷のやうにつめたい、
はつはつは！

＊

牛は牛づれ
似合ひの相手、
女は——賣女で
男は——掏摸さ、
はつはつは！

＊

朝が來りや
盜みの思案、
お醫者のクラソフ奴が放さない——

女は寢臺に
寢てゐて笑ふ、
はつはつは！

*

明けりや小僧を
拘局へ連れて行く、
賣女も一しよに、
仲間がお待兼ね、
はつはつは！……

その先きは曳かれ者の歌である。

小僧の俺も最後の時だ、
これが年貢の納め時、
年一年と——
年が經つ。
それから又——
泣くな、マルーシャ
お前は俺のもの、
放免されたら
夫婦にならう。

然しこの時、いつも無口な肥つちよのカーチャが不意に聲を立てゝ笑ひ出したので皆は吃驚した。この女はオデッサの生れだつた。

「あたしにも一つ歌はして頂戴な。この唄はあたしの國のモルダワンカやペレスィピの唄で、泥棒や莫連女が酒場で歌ふんですわ。」

彼女は怖しく馬鹿げた身振りをしながら——これはどうやら見たことのある三流どころの寄席の唄ひ女の眞似に違ひないが——恐ろしい最低音の、錆ついて、なだらかでない聲で、唄ひ始めた。

俺は酒場へ行つて、
卓子の傍に腰をかけ、
卓子の下に帽子を投げ、
いとし女に訊ねて云うた——
お前は何を飲むんだね？
女が俺に言ふことにや、
あたし頭が痛いのよ。
何處が痛いか
俺は訊きやせぬ、
何を飲むかと訊いたのさ、
ビールか酒かフィアルカか？
それとも何も飲まぬのか？

さて、この儘だつたら別に何事もなく濟んだかも知れな

いが、突然、肌着一枚、白いレースの上猿股一枚の白いマーニカがこの別室へ飛び込んで來たのである。前の晩、極樂の夜を演じた商人が彼女を相手に散財し、彼女にいつもダイナマイトのやうな速さで働きかける性質の悪いベネヂクチン酒が、彼女をお定りの喧嘩氣分へ導いてゐた。もうかうなると「小さなマーニカ」でもなく、「白いマーニカ」でもなく、「喧嘩のマーニカ」だつた。別室へ飛び込んだと思ふと、思ひ掛けもなく床にぱつたり倒れて、仰向けになつて、本氣で笑ひ聲を立てたので、みんなも大笑ひした。だが、この笑ひも長くは續かなかつた……マーニカは不意に床の上に坐つて叫んだ。

「萬歲！　新しい仲間が出來たのね！」

これはまつたく思ひがけぬ事だつた。いや、これよりも大きな不始末を男爵夫人が仕出かした。彼女は言つた。

「わたしは——淪落婦人ホームの保護者です。ですから職務上の義務から皆さんに就ての報告を集めてるんです。」

するとこの時忽ちヂェーニャが激昂した。

「さ、すぐ出て行け、糞婆！　襤褸つ屑！　雜巾！……お前さん達のマグダレナ・ホームは監獄より悪いよ。お前さんとこの書記の奴等は犬の死骸か何ぞのやうに、あたし達を利用してるんだよ。お前さん達の親爺や亭主や兄弟が此處へやつて來たらね、いろんな病氣を感染してやるんだ……わざとさ！……すると奴等が今度はお前さん達に感染すのさ。お前さん達のホームの監督女は賄者や門番や巡査とくつついてやがる癖に、あたし達が笑つたとか戲けたとかつていつては、座敷牢に入れるんぢやないか。さうやつて若しお前さん達が芝居にでも行く氣でやつて來たんだつたら、面と向つて本當のことを聞かなけれやならんよ。」

するとタマーラは落着き拂つて彼女を止めた。

「お止し、ヂェーニャ、わたしが言ひます……男爵夫人、あなたは本當に、わたし達がいはゆる堅氣の女よりも墮落してゐるとお考へなんですか？　成程わたしの處へ男がやつて來て、一時間なら二ルーブル、夜通しなら五ルーブル拂ひます。別にわたしは誰にだつて置し立ては致しません……けれどもね、男爵夫人、家族があり夫のある奥さんで、情慾のために若い男に、またはお金のために老人に、そつと身を委さない方をせめて一人でも御存じですか？　わたしはよく知つて居ますが、あなた方の五割は戀人の情婦になつてゐるし、殘りの少々年を取つた五割は若い男妾を持つてゐるんです。それからまだ知つてますが、あなた方の中の大勢は——ずゐぶん大勢な人數ですが——自分のお父さんや兄弟や息子とさへも通じてるぢやありませんか。でもあ

なた方はこんな祕密を祕密箱の中に藏つてるんです。こゝがわたし達とあなた方と違ふところです。わたし達は——成程淪落の女ではあります。ですけど嘘を吐いたり、匿しだてをしたりはしません。だのにあなた方はみんな墮落すると同時に嘘までついていらつしやるんです。自分でよく考へたがいゝでせう——この違ひはどちらが尤もか？」

「うまい、タマーロチカ、うんとこいつらをね！」とマーニカは床から起き上らずに、ブロンドの縮れ髪を振り亂して、もう今では十三の女の子のやうな恰好で叫んだ。

「さ、それから！」とヂェーニカは燃え立つ瞳を輝かしながら肱でつゝいた。

「言はなくてさ、ヂェーネチカ！　わたしはもつと言ひますよ。わたし達の中で墮胎する者は千人に一人もありませんよ。だが、あなた方はみんな何度もやつてゐます。どうです？　それとも嘘だとおつしやいますの？　それに、そんなことをなさる人達は酷い貧乏や絶望からではなく、たゞ御自身の姿や標緻を損ねるのを心配してなのです——これがあなた方の唯一の資本ですものねえ！　でなけれや、あなた方は畜生のやうな情慾ばかり求めていらつしやるんで、そのためには姙娠や子供の養育が邪魔なんでせうよ。」

ロウィンスカヤは當惑して早口に囁いた。

「Faites attention, baronne, que dans sa position cette demoiselle est instruite.」（氣を付けて御覽なさい、男爵夫人。この娘はその境遇に似合はず餘程の教育がございます。）

「Figurez-vous, que moi, j'ai aussi remarqué cet étrange visage. Comme si je l'ai déjà vu…… est-ce en vève?……En demidelire? Ou dans sa petite enfance?」（わたしもこの不思議な顏に氣がついてゐるんですの。何處かで見たやうな……夢だつたか、現だつたか？　それともごく小さな子供の時分だつたか？……）

「Ne vous donnez das la peine de chercher dans vos souvenirs, baronne」（思ひ出さうとお骨折りなさらないでも）と突然タマーラが粗々しく彼女達の話の邪魔をした。「Je puis de suite vous venir en aide. Rappelez-vous seulement Kharkoff, et le ténor di grazzia……A ce moment vous n'etiez pas encore m-me la baronne de……（わたしがすぐお手傳ひしてあげます。たゞハリコフとコニャーヒン旅館と、ソロヴェイチック劇場の座主と、或る抒情曲のテノールとを思ひ出しなさい。あの時分、あなたはまだ男爵夫人ではなくて……）でもフランス語は止しませう……あなたは唯のコーラスガールで、わたしと一緒に勤めておいでした。」

「Mais, dites-moi, au nom de Dieu, comment vous trouvez

vous ici, mademioselle Marguerite」（では、どうぞお聞かせ下さい、どうして此處においでになるんですの、マドムアゼル・マルガリータさん。）

「あゝ、毎日のやうに私達はそんなことを訊かれます。ただ、やつて來たゞけのことですわ……」

そして彼女は實に何とも言へぬ皮肉な調子で言つた。

「あなた方はわたしたちと一緒にお過しになつた時間の代價をお拂ひ下さるでせうね？」

「いゝえ、とつとゝ出て行きあがれ！」と不意に白いマーニカがすつくと絨毯から起き上つて叫んだ。

そしていきなり靴下から二枚の金貨を取り出して卓子の上に叩き付けた。

「さあ！……これを馬車代に呉れてやる。さつさと歸つて行け。でないと、こゝいら中の鏡から壜からみんな叩き毀しちまふよ……」

ロウィンスカヤは立ち上つて、双の眼に心からなる溫かい涙を浮べて言つた。

「きつと歸りますわ。マドムアゼル・マルガリータさんの敎訓はわたし達の爲めになるでせう。あなた方に費さした時間の代價はお拂ひ致しますから——宜しくお願ひしますわ、ウォローヂャさん。ですけど、あなた方は色々と唄を歌つてくれましたから、あたしにもあなた方のために歌はせて下さい。」

ロウィンスカヤはピアノに近づいて、數音掻き鳴らしてから、突然、ダルゴムイジュスキイの美しい小唄を歌ひ始めた。

心つよくも我等別れぬ、
吐息もらさず言葉にも
嫉妬のうらみ君にのべざりき。
我等とはに別れぬ、されどもし
君と逢ふことをだに得しならば！……
せめてひとたび逢はまほし！

＊

うらみもあらず、涙なく
運命のまへにひれふしぬ……
かくも惱みのかず〳〵を
わが身にのこし飛び去れる
君にして、なほ、このわれを
げに愛せしや、われしらず、されどもし
君と逢ふことをだに得しならば！……
せめてひとたび逢はまほし！

偉大なる女優によつて歌はれたこの優しくも熱情的な戀の歌は、忽ちみんなの胸をさま〴〵な追憶で一ぱいにした。

初戀、最初の墮落、春の曙の草が白く露を含んで赤い空が白樺の梢を薔薇色に染める朝の冷たさの中の遲くなつた別離、ひしと抱き合つた最後の抱擁、敏感で確かな心臟が「いや、こんなことはもう無い、もう二度とない！」と悲しげに囁いたことなどの思ひ出で胸が一ぱいになつた。その時みんなの唇は冷やかに乾いて、濕つぽい朝靄が頭髪に宿つてゐたのだつた。

タマーラは默つた。喧嘩のマーニカも默つた。この娼家で一番利かぬ氣のヂェーニャは突如女優の傍に縋け寄り、その足許にがばと身を投げて慟哭し始めた。

自分でもいたく感動したロウィンスカヤは彼女の頭を抱いて言つた。

「わたしの妹、接吻させて下さい！」

ヂェーニャは彼女の耳に何ごとか囁いた。

「そんなこと——何でもありませんわ」とロウィンスカヤは言つた。「三四ヶ月も治療したらすつかり良くなりますよ。」

「いゝえ、いゝえ、……あたし、奴等を片つ端から病氣にしてやりたいんです。みんな腐つて斃ばるがいゝんです。」

「まあ、あなた、」とロウィンスカヤは言つた。「わたしでしたら、そんな事しませんわ。」

するとヂェーニャは、この傲慢なヂェーニャは、女優の膝や手に接吻して、そして言つた。

「何んだつてみんなは、あたしをこんなに苛めるんでせう？……何んだつてこんなに辱しめるんでせう？　何故でせう？　何故？」

天才の力はこの通りである！　人間の賤しい理性に訴へず、人間の暖い魂をその美しい手で摑む唯一の力よ！　自尊心の強いヂェーニャはロウィンスカヤのスカートにその顏を埋め、白いマーニカはハンケチで顏を蔽ひながら、しをしをと椅子に腰掛け、タマーラは膝に肱をつき、掌で頰を支へてぢつと床に眼を落してゐた。萬一を氣づかつて戸口から覗いてゐた門番のシメオンは、呆氣にとられて眼を丸くしてゐた。

ロウィンスカヤはヂェーニャに耳打ちした。

「決して自棄になつちやいけませんよ。それはね、時には首でも縊りたい位に、何もかも喰ひ違ふことがあるものです。でもね——明日にでもなればがらりと生活が變つてしまふことがあるんですよ。ねえ、あなた。わたしは今でこそ世間に知られてゐます。けれどもどの位、屈辱や侮蔑の中をくぐつて來なければならなかつたでせう、ほんとに！　お達者でいらつしやいね、あなた、自分の運命の星を信じてね。」

彼女は身をかゞめてヂェーニャの額に接吻した。息詰まるほどの緊張した氣持でこの光景を眺めてゐたウォローヂャ・チャプリンスキイは、この瞬間に女優の細長くて綠色をしたエジプト式の眼に燃えてゐる、あの暖かい美しい輝きを、後になつても忘れることが出來なかつた。

この一行は憂鬱さうに出て行つた。が、リャザーノフは一寸居殘つた。

彼はタマーラに近づいて、丁寧に、優しく彼女の手に接吻して言つた。

「もし出來ることでしたら、私達のこの無禮をお許し下さい……こんな眞似は、無論、二度としませんから。そしてもし、いつかお役にでも立つ時がありましたら、喜んで盡力致します。覺えてゐて下さい。こゝに私の名刺がありますす。簞笥の上などに置きつ放しにしないで下さい。いゝですか、今晚から私は——あなたの親友ですよ。」

彼は再びタマーラの手に接吻して、みんなの後から階段を降りて行つた。

八

木曜日は、朝早くから小止みなく細い雨が降つて、雨に洗はれた栗や、アカシヤや、白楊などの葉は忽ち靑々としてゐた。すると、俄かに何だかかう夢見るやうに靜かな、のんびりとした淋しい氣持になつて來た。氣の滅入るやうな、單調な氣分だつた。

この時女達はいつものやうにヂェーニャの部屋に集つた。だがヂェーニャは少々變だつた。洒落も飛ばさないし、笑ひもしないし、例の三文小說も讀まなかつた。その小說は今は徒らに彼女の胸か腹の上にのつてゐた。そして彼女の樣子は意地惡さうで、思ひ詰めたやうに悲しげで、その眼には憎惡を語る黃色い炎が燃えてゐた。彼女を尊敬してゐる白いマーニカ、喧嘩のマーニカは、自分の方へ彼女の注意を向けさせようと一生懸命だつたが、結局無駄で——ヂェーニャはまるでそれに氣が附かないらしく、話はちつとも旨くはずまなかつた。沈鬱だつた。こゝ數日間降り續いた執拗こい八月の雨が女全體に影響してゐたせゐかも知れない。

タマーラはヂェーニャの寢臺の端に腰をかけ、優しく彼女を抱いて、耳元に口を寄せて囁いた。

「どうしたのヂェーネチカ？　あたし以前からどうもあんたの樣子が變だと思つてたんだけど。マーニカも感づいてるわ。御覽よ、お前さんが優しくしてやらないから、あんなに悄げてるぢやないの。打明けて頂戴。何かあたしでも力になれるかも分らないから。」

ヂェーニャは眼を閉つて否定するやうに頭を振つた。でタマーラは少し遠退いたが、やはり優しく彼女の肩を撫でてゐた。

「それはお前さんの一身上のことだからね、ヂェーネチカ。お前さんの心に立ち入る積りはないよ。だからたゞ訊ねたのさ。お前さんはほんとに唯一人の……」

突然ヂェーニャは決然として寢臺から飛び降りて、タマーラの手を握り、斷々の言葉で命令するやうに言つた。

「いゝわ！　一寸部屋の外に出てくれない？　お前さんに何もかも打明けるから。みなさん、暫く待つてて頂戴な。」

明るい廊下に出ると、ヂェーニャはタマーラの肩に兩手を掛けて、急に蒼ざめた、歪んだ顏をしながら言つた。

「あのね、實は、誰かゞあたしに黴毒を感染したの。」

「まあ、可哀さうに。もうずつと前のこと？」

「前のことよ。あの學生達が來たのを覺えてて？　プラトーノフと喧嘩を始めさうだつたぢやないの？　あの時始めて氣が付いたの。晝間ね。」

「あのね、」とタマーラが小聲で言つた。「さうぢやないかつて、大凡見當はついてたわ。殊にお前さんが女優の前に跪いて何やらそつと耳打ちしてた時にね。でもね、ヂェーネチカ、やはりどうしても癒さなけやね。」

ヂェーニャは腹立たしげに地團駄ふんで、兩手にくしやくしやに握りしめてゐた麻のハンケチをぴりつと引裂いた。

「いゝえ、癒すもんですか！　でもお前さん達には誰にも感染しやしません。お前さんだつて氣が付いてるでせうが、この頃あたし、みんなと一緒の卓子で食事をしないし、食器は自分で洗つたり拭いたりしてますよ。だからさ、お前さんも知つてる通り、あたしが心から眞劍に愛してゐるマーニカだつて成るべく遠ざけようとしてるの。だけどあの二本足の畜生共には××××××してやるんです。毎晩××、××××××してやるんです。奴等××ちまふが好いわ。××××××××に、××に、××××××してやるが好い。さうよ、さうよ。××にも、××にも、家庭敎師にも、なんなら×××さんにも××すがいゝ。みんな斃つちまふがいゝ、馬鹿正直な畜生共ッ！」

タマーラは注意深く、優しくヂェーニャの頭を撫でた。

「お前さん、本當に最後までやつゝける氣なの？　ヂェーニカ……」

「さうよ。容赦なんかするもんですか。だけど何も劍呑がらなくても好いわ。男を選んでやるから。一番薄野呂で、一番綺麗で、一番金持で、一番身分のある奴等を選るんだけど、その後ぢやそいつらをお前さん達の處へは決してやらないからね。あゝ！　あたしは彼奴等の前ぢや、お前さん達が見たら大笑ひするやうな熱烈な風をするのよ。氣狂ひみたいに噛みついたり、引掻いたり、叫んだり、震へたりさ。馬鹿な奴等はそれを本氣にしてやがる。」

「それアお前さんの勝手だけど、ヂェーネチカ」とタマーラは眼を伏せて物思はしげに囁いた。「或は、お前さんのする事が正しいのかも知れないわ。さうかも分らないわ。でもどうしてお醫者の眼を逃れたの？」

ヂェーニャは不意に横を向いて、窓枠の隅に顏を押し付けながら、突然辛い熱い涙——憤怒と復讐の涙を流して泣いた。と同時に息を寒らせ、身を震はせながら言つた。

「それは……それは……神樣が、特別のお惠みを掛けて下すつたの。それは、あたし、どんな醫者も、多分、眼の屆かない處が悪いんですから。それにうちの醫者と來たら、舊式で、馬鹿だから……」

それから突如ヂェーニャはきつと氣を取り直して、丁度泣き出したのが突然だつたやうに、矢張り突然涙をとめた。

「あたしの部屋へ行きませう、タマーラ」と彼女は言つた。「勿論お前さんは餘計なお饒舌はしないでせう？」

「勿論だわ。」

そして兩人は落着いて自己を制して、ヂェーニャの部屋へ戻つた。

＊　＊　＊

部屋の中へシメオンがはいつて來た。この男は元來が粗暴な性質だが、ヂェーニャに對しては、いつも尊敬の態度を取つてゐた。シメオンは言つた。

「あのね、ヂェーネチカさん。ワンダに會ひに閣下がお出でになりましたから、十分ほど失禮させてやつて下さい。」

ワンダといふのは空色の眼の、明るいブロンド娘で、口は大きくて赤く、顏立は典型的なリトヴ生れの女だつた。彼女は哀願するやうにヂェーニカを見た。もしヂェーニャが『駄目』と言つたら部屋に止つてゐたであらうが、ヂェーニャは何も言はず、しかも殊更らしく眼を閉つたので、ワンダは從順しく出て行つた。

この將軍は月に二回、二週間おきにきちんとやつて來た。（丁度ゾーヤの處へ、この家では社長と綽名をつけられてゐる立派な客が毎日通つて來るのと同樣だつた。）

突然ヂェーニャは古ぼけた、ぼろ〳〵の小說本を拋り出した。その褐色の瞳は本當の黃金色の炎のやうに輝いた。

「お前さん達はあの將軍を矢鱈に毛嫌ひしてるけどね、」と彼女が言つた。「あたしはもつと惡い奴を知つてますわ。あ

たしの處へ或る客がつきましたが——本當の馬鹿野郎さ。その男はあたしをまともに愛することが……つまり……分りよく言へば、あたしの胸に針を刺さなけや愛することが出來なかつたんですよ。それからウィリノに居た時分はボーランドのカトリック坊主が通つて來ましたが、その野郎はあたしに白裝束をさせて、白粉をつけさせ、××××××××かすんですよ。それからあたしの周圍に蠟燭を三本立てゝ、あたしがすつかり死人のやうに見えた時分、××××××××んです。」

白いマーニカが不意に叫んだ。

「それはほんとだわ、ヂェーニカ！　あたしの處にも一人の××がやつて來たのよ。そいつと來たらいつもあたしに××の眞似をさせて、××××××××たりしたの。だけどねえヂェーネチカ、お前さんはみんなの中で一番悧巧だけど、そいつが誰だか分らないでせう……」

「典獄？」

「消防頭なのよ。」

カーチャがだし抜けに低音ではつはと笑つた。

「あたしんとこへも或る先生が來たのよ。何でも算術を教へてたんだけど、どんな算術だか忘れちやつた。そいつはしよつちゆう、あたしが男でそいつが女のやうになつてさ、あたしがそいつを……××にするやうに……あたしにさう思ひ込ませたのよ。まあ何て馬鹿でせう！　考へて御覽な、そいつはいつもかう叫ぶのさ、『あたしはあんたのものよ！　みんなあんたのものよ！　好きなやうにして頂戴！　好きなやうにして頂戴！』つてね。」

「氣狂えだわ！」と思ひがけなく中音で、空色の眼のすばしつこいウェールカがきつぱりと言つた。「氣狂えだわよ。」

「いゝえ、さうぢやないわ、何故さうなの？」と突然、優しくて控へ目なタマーラが反對した。「氣狂ひでも何でもないの。やつぱり他の男同樣、淫亂なのよ。自分の家ぢや退屈だけど、此處ならお金を拂つて好き勝手な滿足が得られるからですわ。さうでせう？」

この時まで默つてゐたヂェーニャは突如ひらりと寢臺に腰掛けた。

「あんた方は揃ひも揃つて馬鹿ね！」と彼女は叫んだ。「何だつてそんな勝手な眞似をさしとくのさ？　あたしも以前は馬鹿だつたが、今ぢや奴等を四つん這ひにさせたり、あたしの踵に接吻させたりするわ。また奴等も喜んでさうするのよ……お前さん達も知つてる通り、あたしはお金なんか欲しかないが、男の奴等を出來るだけ絞り上げてやるのさ。あん畜生共、自分の女房や許嫁や母親や娘の寫眞を見れるのよ……だがあんなもの、此家の便所で見たことがあるでせう。だけど、皆さん考へて御覽なさい……女は一度愛したらそれが永遠に續くんです。ところが男と來たら牡犬同然ですよ……それア男が裏切るのは何でもないけど、奴等は古い戀人にも新しい戀人にも、只の感謝の氣持さへないんですからね。近頃では若い青年の中に隨分純潔な子供が居るつてことを聞きました。あたしはそんな子供を見たことも會つたこともないけど、本當だらうと信じてゐます。だがあたしの見た奴は揃ひも揃つて破廉恥漢で、下司野郎で、でれ助なんです。つい先達ても、あたし達の不幸な生活を書いた小說を讀みましたが、あたしが今言つたと同じやうなことが書いてありましたよ。」

＊　＊　＊

ワンダが戻つて來た。彼女はのろ〳〵と、氣を配りながらヂェーニャの寢臺の端に腰かけたが、其處には電燈の傘の影が落ちてゐた。死の宣告を受けた人々や徒刑囚達や娼婦達やに特有な、たとへ畸形なものにしろ深い優しい思ひ遣りからして、彼女が今の一時間半をどうして過ごしたか、誰も訊くものはなかつた。と、突然彼女は卓子の上に二十五ルーブルを投げ出して言つた。

「白葡萄酒と西瓜を持つて來て頂戴。」

そして、卓子の上に落した兩手の中にがつくり顏を埋めながら、聲を呑んで泣き始めた。この時もまた、誰一人として問ひ掛けようとする者がなかつた。たゞヂェーニャは憎惡の餘り青ざめて、きりつと强く下唇を咬んだので、後になつても白い齒形が殘つたほどだつた。

「さうだわ、」と彼女は言つた。「今になつてタマーラの氣持が分りましたわ。ねえ、タマーラ、お前さんにお詫するわ。あたしはね、お前さんが泥棒のセーニカに惚れてるのをよく笑つたわね。でも今こそあたしは言ひますわ。あらゆる男の中で一番眞面目なのは——泥棒か人殺しです。この人達は女を愛してることを置しもしないし、いざとなれア女の爲めにどんな罪でも——泥棒でも人殺しでもやる。ところが、他の奴と來たら！　何奴も此奴も、嘘、僞り、けちな狡猾、匿れた淫亂ばかりです。今の畜生には三つの家族や妻や五人の子供があるんです。家庭教師と二人の子供は外國に、一番上の娘は女房の連れ子で、この娘にも子供を一人產ましてゐます。こんなことは奴の小さい子供らの外は、市中みんな知つてますよ。その子供らだつて薄々感づいてゐてこそ〳〵話してるかも知れないわ。まア考へて御覽、これで世間に知られてゐて、尊敬されてゐる人間な

んですよ……ねえみなさん。今まで身の上を打明けて話し合ふ折はつひぞなかつたわねえ。今、あたし打明けて言ふがね、あたしが十歳と六ヶ月の時、生みの母親があたしをジトミール市のタラブキンつて醫者に賣渡したのよ。でもあたしはその人の手に接吻してどうぞ勘忍してくれと賴んで、『あたしは小さいから！』と叫びました。でもその男は『なアに、心配するな、今に大きくなるから』つて言ふんですの。それからは勿論、苦痛と、嫌惡と、汚辱です……しかもその男は後でそのことを、世間話のやうに喋り散らすんですよ。あたしの魂の絶望的な叫びをね。」

「さア、かうなりやアあたしだつて話すわ」とゾーヤが突然穩かに言つて我知らず悲しげにほゝ笑んだ。「あたしの貞操を奪つたのは公立小學校の先生でイワン・ペトローヴィチ・スースつていふ男でした。用もないのにあたしを自分の家へ呼びつけたんですが、その時女房は仔豚を買ひに市場へ行つた留守で——クリスマスでしたわ。あたしに糖菓を御馳走してくれて、その後で、何でも言ふことを聽くか、それとも操行が悪いといふ咎ですぐに學校を出されるか、二つに一つだぞつて言ふんですの。ところが、ほら、女の子に取つちや先生が怖しいんですわねえ。こゝに居れや先生なんて此方の自由にしてやれるから怖くも何ともないけど、あの時分はねえ！　あの時分は先生なんてそれこそ王樣や神樣以上に思はれてたんですもの。」

「あたしんのは大學生なのよ。あたしが居た邸の坊つちやんに教へに來てたのさ。あたしが奉公してた邸は……」

「いえ、あたしんのは……」とニューラが叫んだが、ふと後の扉の方を振返つて、そのまゝ、口を開けたつきりだつた。

ヂェーニャはその眼差の方向を見て兩手を拍つた。戸口には痩せ衰へて眼の下に黑い隈の出來てゐるリューブカが突つ立つてゐたが、まるで夢遊病者のやうで、身體を支へるために扉の把手を手探りしてゐた。

「リューブカ、このお馬鹿さん、まア、どうしたの？」とヂェーニャは聲をあげて叫んだ。「どうしたのさ？」

「わかり切つてるわ、あの男はあたしを受け出してゐながら追ん出したのさ。」

みんな聲を呑んだ。ヂェーニカは兩手で眼を覆うて、息を嗚ました。彼女の頰の皮膚の下で、引緊まつた筋肉がぴく附いてゐるのが見えた。

「ヂェーネチカ、賴りに思ふのはお前さんばかりよ、」とリューブカは悲しい心細さを沁々と籠めて言つた。「みんなお前さんには一目置いてるからねえ。どうかアンナ・マルコーヴナか、シメオンに話して見て……また引き取つてくれるやうに賴んでくれない？」

ヂェーニカは寢臺からすつくと腰をあげ、乾いて燃えるやうな、然し何だか泣いてゐるやうな眼で、じつとリューブカを視詰め、切れ〴〵に訊ねた。

「お前さん、今日、何か、喰べたの？」

「いゝえ。昨日も今日も、何も。」

「あのう、ヂェーネチカ、」とワンダがそつと訊ねた。「あの娘に白葡萄酒をやつちやどう？　その間にウェールカは臺所へ肉を取りに行くやうにして。えゝ？」

「それがいゝわ。まつたく、それがいゝ。まア御覽、あんなにずぶ濡れぢやないの。馬鹿だねえ！　さア！　早く！　着物を脫いで！　白いマーニカ、それともタマーロチカ、お前さんでもいゝ。乾いた猿股と、暖い靴下と、スリッパをこの娘にやつて頂戴な。さあ、」と彼女はリューブカの方へ向いた。「一體どうしたのか、譯を話して御覽！」

九

リホーニンがあんなに突然、多分自分自身にすら思ひがけなかつた位突然に、リューブカを妓樓アンナ・マルコーヴナ樓から連れて歸つたあの朝は夏も終り頃だつた。樹々はまだ綠色をして立つてはゐたものゝ、間近かに近づいた秋の優しいメランコリックな、同時に魅するやうな匂ひが、空氣や、樹々の葉や、草の香の中に、恰も遠くから嗅いでゐるやうに微かに感じられた。リホーニンは驚きの眼を以てこの樹々を眺めた。それは清淨で、純潔で、靜寂で、丁度夜の間に神が人に知れないやうに此處に植ゑ並べたやうだつた。そしてその樹々も亦驚きの眼で、周圍を見廻はし、水溜りや溝渠の中やせゝらぎに架かつた木橋などの下にまだ假睡んでゐるやうな青い水を眺めたり、洗ひ淸めたばかりのやうな高い蒼穹が今眼を醒して、朝映の中で半ば夢心地ながら、眞赤に燃えてゐる太陽を迎へ、薔薇色の倦るさうな歡びの微笑を浮べてゐる有樣を眺めたりしてゐた。

リホーニンの心臟は寞やかになつて、どき〳〵躍つた。それはこの惠まれた朝の美しさからであり、生きることの歡びからであり、またあの煙草の煙でむん〳〵してゐた狹い部屋の中に徹夜した後の肺臟をすが〳〵しい空氣が爽やかにしたからだつた。けれども、もつと彼を感動させたのは、自分の美しい皎潔な行爲だつた。

「さうだ。彼は人間として、最も高められた意味に於ける本當の人間としての行ひをしたのだ。今でも彼は自分のやつたことを後悔してはゐない。彼等はあれでもよからう。（この彼等といふのは誰を指したのか、リホーニンにもはつ

きりしてゐなかつた。)彼等は靈春の怖るべきことを語り、茶を飲み、パンや腸詰を食ひながら、純潔な發達した娘達の面前で談ずるもよからう。然し、同窓の中で、あの女達を滅亡から救ひ出すことに向つて何等か實際的な一歩を踏み出した者が果してあるだらうか？　どうだ？　然るにかういふ人間がゐるにはゐる。それは、例のソーネチカ・マルメラードワのやうな女の處へやつて來て、下らない事を喋り、あらゆる恐るべきことを並べ立て、女の氣持にまで立ち入り、女が涙を流す迄はやめない。そして女が涙を流すと、直ちに自身も涙を流し、女を慰め、抱擁し、頭を撫で、先づ頬に接吻し、次に唇を接吻し、それから先きは分つてゐる！　ちえツ！　だが、彼、リホーニンは、言葉と行爲とがいつでも一致してゐるのだ。」

彼はリューブカの體を抱いて、優しい戀人のやうな眼付で見た。その癖自分では、今俺は父親か兄として見てゐるのだと思つてゐたのであるが。

リューブカは眠くて仕方がなかつた。ともすれば眼瞼がくつゝきさうなのを、眠らないようにと一生懸命で見開いてゐた。リホーニンがあの別室で早くも氣付いてゐた、純眞な、子供らしい、疲れたやうな微笑が、彼女の口元に浮んでゐた。そして口の片隅から少しばかり涎が出てゐた。

「リューバ、君も隨分苦勞した女だね！　どうだ、素晴しい景色ぢやないか！　まつたく、僕はもう五年も日の出を見たことがなかつた。カルタ遊びや、酒や、また學校へ急がなければやならなかつたりでね。御覽よ、あの朝映を。間もなく太陽が出るだらう！　これア——君の朝映だよ、リューブカ！　この朝映から君の新しい生活が始まるんだ。君は僕の力强い腕にしつかり縋るがいゝ。僕は君を、正しい勞働の道へ、人生と顔を向き合はして勇敢に奮闘して行く道へ導いてあげよう！」

リューブカは横目で彼を眺めた。「まだこの人は醉つてるのかしら、」と彼女は優しく考へた。「まアいゝわ。——親切で好い方らしい。たゞ男つ振りが少し悪いけど。」そして彼女は半ば夢心地の微笑を浮べながら、駄々を捏ねるやうな調子で言つた。

「さうね！　お瞞しになるんぢやない？　男つて、みんなさうなんだもの。あんた方は御自分の思ふものが手にはいつて、滿足しちまうと、後ではてんで見向きもしないんですわ！」

「僕がかい?!　何を言ふんだ！　そんな馬鹿な！」とリホーニンは熱くなつて叫んで、空いてる方の手で自分の胸をとんと叩いた。「君は僕といふ人間をよく知らないんだ！

僕は正直な人間で、手嬲りない娘を瞞したりすることは出來ない。斷じて出來ないよ！　僕はね、全力をつくして全精神を打込んで、君の知識を向上させ、君の眼を開いてやり、君の哀れな苦しんだ心が、今迄の生活から受けた傷手や屈辱を忘れてしまふように努力する積りだ！　僕は君の父親ともなり兄ともならう！　僕は君の一歩々々を見守つてやらう！　そしてもし君が、純眞で神聖な愛をもつて誰かを愛するやうになつたら、僕はあのダンテの地獄から君を救ひ出したその日とその時とを祝福しよう。」

この燃えるやうな長い文句が續いてゐる間、年寄りの馭者は何も言はなかつたが、意味あり氣な笑を洩してゐた。轡に出さないその笑の爲に彼の背は震へてゐた。この老馭者は色々な話をうんと耳にしてゐる。何故かと云ふと車の前の方に掛けてゐる馭者には、乘客の話してゐることが意外にはつきりと聞えるからである。それで老馭者は人々の間に起る事件を色々と聞いて知つてゐるのだ。恐らく彼はこれ迄にリホーニンの話よりも更にしどろもどろな、もつと昂奮した文句を幾度となく耳にしたかも知れない。

リューブカには、どうしてだかリホーニンが自分に腹を立てて、假想の競爭者に對して今から嫉妬を燒いてゐるやうに思はれた。それ程彼は大聲で昂奮して喋り立てたのである。

彼女はすつかり眼が覺めてしまひ、大きく見開いた、合點の行かない、けれども從順な眼をした顔をリホーニンに向け、自分の腰にかゝつてゐる彼の右腕に輕く指を觸れた。

「怒らないで頂戴な。あたしあなたを他の人に見替へたりなんぞしませんから。誓ひますわ！　ほんとに、決して！　あなたがあたしの身を安全にして下さらうといふそのお心を何うして感じないでゐられますか？　それがあたしに解らないとお思ひなすつて？　あなたはこんなに親切で、若い綺麗なお方ですもの。もし年寄りで、醜い人なら何ですけど……」

「あゝ！　そんなこつちやない！」とリホーニンは叫んだ。そして又もや難解な文句で、男女同權、勞働の神聖、人道、自由、社會を支配してゐる惡に對する爭闘、そんなことを彼女に話し出した。

ところで彼の言ふことは一と言もリューブカには解らなかつた。それでも彼女は何だか自分が悪いのだといふ氣がして、身體を圓くして、悄げ返つて、頸垂れて、默つてゐた。そして、もう少しのことで、彼女は街路の眞中で泣き出したかも知れない。が、幸ひにこの時リホーニンが間借りしてゐる家に着いた。

「さア、こゝが自宅だ。」と學生が言つた。「止めてくれ、

馭者君！」

馬車代を拂つた時彼は何か感傷的な事を言はずに居れなかつたので片手をお芝居みたいに眞直差延べて言つた。

さらば吾が家に心おきなく

女主人として這入り給へ！

すると、老馭者の老けた赤銅色の顏に、又もや謎のやうな豫言するやうな微笑が浮んだのである。

十

リホーニンの住んでゐる部屋といふのは、五階半にあつた。半といふのは可笑しいが、五六階、七階建ての貸間向きの家で、無暗と間借人を詰め込んでゐるさうした安直な家がよくあるものだ。そしてその一番上にスレートの下になつてゐる慘めな南京蟲部屋があつて、こいつは屋根裏部屋といふより、椋鳥の巢といつた方が當つてゐる。多になると恐しく寒く、夏が來ると熱帶地方のやうに暑苦しい部屋だ。リューブカはやつとの思ひで登つて行つた。もう二足ほど登つたら階段の上にばつたり倒れて、そのまゝぐつすり寢込みさうな氣がした。で、リホーニンは言つた。

「君！　君は疲れたらしいね。なに大丈夫さ。僕につかまつたがいゝ。まだ上だよ。もつと上へ、上へ行くんだ。これは人間の向上の象徴ぢやないかね？　ねえ君、妹、僕の手にお縋り！」

そこで、可哀さうにリューブカはいよ〳〵苦しくなつて來た。自分一人でさへやつとの思ひで登つてゐたのに、今度は、ひどく重たくなつたリホーニンを曳つぱり上げなければならなくなつた。それに、彼が重荷だといふだけなら未だしも、彼のお喋りが少々煩くなつて來たのだ。それが丁度齒痛のやうな斷え間ない惱ましい乳呑兒の泣聲や、けたたましいカナリヤの囀りや、或はまた、隣りの部屋で口笛を吹く眞似を續けざまにやつてゐる時のやうに、彼女を焦立たせたのだ。

やうやくリホーニンの部屋まで辿りついた。扉には鍵が掛けてなかつた。いや、いつも鍵をかけたことはないのだ。リホーニンは扉を押して二人は中へはいつた。窓懸けが降りてゐるので薄暗かつた。石油、前日のスープ、汚れた寢臺の敷布、古い煙草の煙、鼠、こんなものゝ匂ひがした。誰だかよく判らないが薄暗がりの中でぐう〳〵と、さまざまな音を出して鼾をかいてゐた。

リホーニンは窓掛をあげた。貧乏な獨身の學生には有り勝ちの光景だつた。底の落ちた、片附いてゐない寢臺と押し丸めた夜具、片跛の卓子、その上には蠟燭のない蠟燭臺、

床や卓子の上の數册の本、あちこちに散ばつてゐる煙草の吸殼、そして寢臺の向うの古い壁際には怖ろしく古ぼけた長椅子があるといつた有樣。その長椅子の上に、黒い縮れ毛の、口髭の黒い、若い男が口をあんぐり開け、鼾をかいて寢てゐたのである。ルバーシカの襟の釦は外され、その劃目から、カラチャエフ産の黒羊に見るやうな濃い縮れた黒い毛と胸とが見えた。

「ニジェラッゼー　おい、ニジェラッゼ、起きろよ！」とリホーニンは叫んで、寢てゐる男の脇腹を小突いた。「公爵！」

「うゝゝ……」

「起きろつたら。コウカサスの驢馬、オセットの阿呆！」

「う——うん……」

「子々孫々呪はれるぞ！　美しいコウカサスの山からおん出されるぞ！　惠まれたグルジヤの土地も見られなくなるぞ！　起きろよ！　この兵六玉！　起きろつたら、アラビヤの駱駝奴！　とんちき！……」

ところが突然リホーニンに取つては意外だつたが、リューブカが干渉した。彼女は彼の手を執つて怖る〳〵言つた。

「あなた、何故この方をお苛めになるの？　この方は眠むたいんぢやないの？　お疲れなんぢやないの？　も少し寢かしておあげなさいな。いつそあたし娼家へ歸つたがいゝわ。あたしに馬車代半ルーブル下さつて？　また明日來て下さいな。それでいゝでせう？」

リホーニンは面喰つた。この無口な、何だか眠たさうな娘の干渉がひどく奇怪に思はれた。勿論、それは眠り足りない人間に對する本能的な無意識的な惻隱の情、他人の睡眠に對する商賣柄の尊重の念が言はせたのだとは、彼には想像も出來なかつたのである。しかしその驚きもほんの一瞬間だつた。彼は何となく腹立たしくなつて來た。で、指の間に消えた煙草を挾んだまゝ、床まで垂らして寢てゐる男の手を持上げると、それを強く振つて、眞劍な、嚴格といつてもいゝ位の聲で言つた。

「おい聞け、ニジェラッゼ、僕は眞面目に賴んでるんだぞ。氣をつけろ。おい、僕一人ぢやない、婦人がゐるんだ、豚め！」

まるで奇蹟に等しかつた。今まで寢てゐた男が、丁度非常な力の彈機が身體の下で撥ねあがつたかのやうにがばと起き上つた。そして長椅子の上に腰かけ、急いで掌で眼や額や顱頂をこすり、女の姿が眼に留ると、すつかり泡を喰つて、あわてゝ頸の釦をかけながら呟いた。

「君か、リホーニン？　僕は此處で君を待つてゐたが待ち草臥れて寢込んぢまつたんだ。あの女の方に暫く横を向いて頂くやうに言つて吳れ給へ。」

彼は急いで灰色の學生服を引掛け、兩手の指で、その見事な黒い縮髪を梳きあげた。リューブカは、幾歳になつてもどんな立場にあつても、あらゆる女から離れない特有の嬌態をしながら、頭髪を直ほすために、壁に掛つてゐる毀れた鏡の傍へ寄つて行つた。ニジェラッゼは横目でちらりと視線をリューブカに投げてリホーニンに訊ねるやうな眼をした。

「なアに氣兼ねしなくてもいゝよ、」と彼は聲を出して言つた。「だが兎に角、外へ出よう。委細は今話すから。おい、リューブカ、一寸失敬するよ。すぐ歸つて來る。そして君の始末をつけて、それから僕は煙のやうに消えるから。」

「いゝえ、どうぞお構ひなく、」とリューブカは答へた。「あたしこの長椅子の上で結構ですわ。あなた、どうぞ寢臺の上へお寢み下さい。」

「いや、さういふ譯には行かない。この家にクラスの奴がゐるから其處へ行つて泊るよ。今すぐ戻つて來るからね。」

二人の學生は廊下に出た。

「この夢の意味は一體何んだい?」とニジェラッゼはその東邦的な、何處か少し牡羊に似た眼を丸くしながら訊ねた。「あんな綺麗な娘を何處から引つぱつて來たんだ? あのスカートを穿いたお友達をさ?」

リホーニンは意味ありげに頭を振つて、顏を顰めた。馬車に乘つたことや、濶々しい空氣や、朝や、事務的な、日常の、見馴れた周圍の樣子や、そんなものゝお蔭で正氣に返つた今になつて見ると、彼は自分が突然やつた行爲が、しなくとも好いことだつたといふやうな、何だか氣拙い、漠とした感じがし始めたのだつた。それと同時に自分自身に對し、連れ出した女に對し、何だか無意識な怒りを感じてゐた。同棲生活の重荷、いろんな心勞、不愉快、費用、そして、二重の意味をもつた微笑、或は友人達の無遠慮な質問、はては國家試驗に際しての重大な障碍等を彼は早くも豫感してゐた。けれどもニジェラッゼと話し始めるが早いか、忽ち自分の小心さを恥ぢて、最初は元氣がなかつたが、しまひには再び得意然として話した。

「だが、おい公爵、」と彼は極り悪げに友人の服の卸を捻くり廻しながら、彼の顏も見ずに言つた。「君の鑑識違ひさ。あれはスカートを穿いた友人とはまるで違ふ。あれは……たゞ……僕はつい今迄仲間と一しよに居たんだ……つまりいや居たんぢやない、一寸立ち寄つたといふだけだが、ヤムキのアンナ・マルコーヴナ樓にさ。」

「誰と?」とニジェラッゼが元氣づいて訊ねた。

「誰とだつて好いぢやないか公爵? トルプイギンも居たし、ラムゼスも居たつけ。それに助教授が一人——ヤルチェンコさ。それからボーリヤ・ソバーシニコフに、それから……後は覺えてゐない。晩方ボートを乘り廻はして、それから酒場に潜り込んで、揚句の果が豚のやうにヤムキ行きさ。僕は、君も知つてる通りの堅造だらう。たゞ坐つてゐて海綿みたいにコニャークを呑つてゐたんだ、知り合ひの探訪記者相手にね。ところが、他の連中はみんな破戒したさ。それで夜明時分になると、いやもうぐつたりしちまつたよ。そしてだね、僕はあの不幸な女達を見ると憐れみを悲しみを感じたんだ。そこで、僕はかう考へた——僕等の姉妹は僕等の心遣ひと愛情と庇護を受けて居り、僕等の母親はみんなに尊敬されてゐる。もし誰か姉妹や母親に對して失敬なことを言ふか、突き飛ばすか、侮辱する者があるとすれば、僕等は相手嫌はず咽喉に喰ひ付くだらう! さうだらう?」

「むゝ……?」グルジヤ人は訊ねるやうな、先きを促すやうな調子で、かう曳つ張つて、脇へ眼を外らした。

「そこで僕、考へたんだ。どんな下司野郎だらうが、どんな鼻垂小僧だらうが、どんなよぼ〳〵爺だらうが、一時の欲望のために、一寸の間か一晩中彼女達を專有し、平氣にしやア〳〵と彼女達の持つてゐる人間としての最も貴いもの——卽ち愛を汚すことが出來るんだとね……どうだ君、侮辱したり、踏みにじり、代金を拂つたりして、ズボンに手を突つ込んで口笛を吹きながら涼しい顏をして歸つて行くんだぜ。しかも最も怖ろしいことは、もうすつかり馴れつこになつちまつてゐることなんだ。女にとつても、男にとつても、どうだつていゝ、となつてゐることなんだ。感情は鈍り、魂は死んでるんだ。さうだらうぢやないか? 彼女らの一人々々に於て美しい姉妹や聖なる慈親が滅びつゝあるんだ。どうだ? 違ふかね?」

「で……?」とニジェラッゼは口の中で言つて、又もや眼を外らした。

「僕はまた考へた。理窟や餘計な絮叫が、何の役に立たうか? 集會に於ける表面だけを取繕つた演說が何になる。廢娼問題、取締規則(ふと、さつきの探訪記者の云つた言葉がはからずも頭に浮んだ)娼家への聖書分配、マグダレナ・ホーム、こんなものが何だ! そこでだ、僕は敢然として、眞に正しい人間としての行ひをしよう、泥沼から女を救ひ出し、彼女達を眞實の確乎たる土臺の上に立たせ、落着かせ、勇氣づけ、慰めてやらう、と決心したのだ。」

「ふん!」とニジェラッゼは鼻で笑つた。

「おい、公爵! 君の頭はいつも汚れてるぞ。僕の言つてるのは女のことぢやなくて、人間のことなんだ。肉のこと

でなく魂のことだぐらゐは君だつて分つてるだらう」
「よし、分つた分つた、それから！」
「それからは、思ひ付いた通りのことを實行したんだ。今日あの女をアンナ・マルコーヴナ樓から連れ出して當分引取つたのさ。これからどうなるか分らないが、最初讀み書きを教へ、それから小さな食堂か食料品店を開くやうにしてやらう。恐らく友人達は援助を辭さないだらうと思ふ。人間の心といふものは、ねえおい、公爵、すべての人間の心は溫かさ、優しさを求めてゐるんだ。おい、見て居給へ。一年か二年經つたら、僕はどんな偉大なことでも出來る處女の魂をもつた善良な、有用な、優れた一員を社會へ寄與してやるから……あの女は肉體こそ人に委したが、魂は清淨無垢だよ」
「ちえ、ちえ、ちえ！」と公爵は舌打ちした。
「それア何のこつた？　チフリスの驢馬！」
「あの女にミシンを買つてやるんだらう？」
「何故殊更ミシンを買ふんだ？　分らないな。」
「いや君、小說だといつもさう來るからさ。主人公が哀れな墮落した女を救ふと、早速ミシンをやらせるぢやないか。」
「下らん事は止せよ！」とリホーニンは腹を立てゝ彼から手を振り拂つた。「インチキ野郎！」

グルジヤ人は突如激して、黒い眼をぎら〳〵輝かせ、話し出した聲には、早速コウカサス訛が出た。
「いや、下らんことぢやないよ、君！　こんな場合には道は二つに一つで、しかも結果は同じになるんだ。一つは、君があの女と關係して五ヶ月も經つてから女を路傍に捨てて、女は又候娼家へ舞戻るか乃至は鋪道に現はれるかだ。これは事實だ！　或はまた君が女と關係せず、手先の仕事か頭の仕事を押しつける、そして女の愚鈍な蒙昧な頭腦を啓發しようと努める。だが女の方で厭氣が差して君の手許から逃げ出して、やはり又鋪道に現はれるか娼家へ舞ひ戻るかだ。これもまた事實だ！　處でこゝにまだ第三の場合がある。それは君が兄のやうに騎士ランセロットのやうに女の面倒を見てやつても、女の方では君に匿れて他の男を愛するんだ。君、僕の言ふことを信じ給へ。あの女が女である間は、やつぱり女に違ひないんだ。して見れア愛なしでは生きて行けないよ。君に匿れて他の男を愛したら、あの女は君の處から逃げ出してその男の許へ行く。その男は女の體を暫く弄んで、物の三ヶ月もしたら、路傍か娼家へ捨てちまふんだ。」
リホーニンは深い溜息をついた。何處か奥深い、それは理性ではなく、殆んど捉へることの出來ない隱れた意識の

奥底で、ニジェラッゼの言葉は正しいといふ考へに似た何物かゞ閃めいた。けれども彼は直ちに氣を持ち直して、頭を振り、公爵の方へ片手を差し出して凛然と言つた。
「僕は君に約束する。半年も經つたら、おい、アルマヴィルの案山子！　君は今の言葉を取り消し、謝罪の印として、カヘチンスクの酒を一打も僕に寄越すんだぞ。」
「馬鹿な！　よし！」と公爵は大袈裟に手を振つてリホーニンの手を叩いた。「承知の助だ！　だが僕の言ふ通りになつたら——君がさうするんだぞ。」
「よろしい、その時は僕だ。處で、失敬するぜ、公爵。君は誰んとこへ泊るんだい？」
「僕は此處さ。この廊下のソロウィヨフの處だ。だが君は、勿論、中世紀の騎士のやうに兩刃の劍を美しきロザモンドと自分の間に置くんだらうな？　どうだ？」
「止せよ、僕も實はソロウィヨフのとこへ泊る積りだつたんだ。ぢやこれから街路を少しぶらついて誰かの處へ行くとしよう。ザイツェウィチか、シュトルンプの處へ。ぢや失敬、公爵！」
「おい、ちよつと〳〵！」とニジェラッゼはリネーニンが二足三足歩いた時呼び止めた。「肝腎のことを忘れてゐた。パルツァンがやられたよ！」

「あ、さうか？」とリホーニンは吃驚したが、すぐ、長く、深く、氣持よく欠伸をした。
「うむ。だが何も恐れることはない。パンフレットを所有して居つたといふだけだからな。一年以内で放免だらう。」
「なに大丈夫。奴は頑丈だから參るやうなこたアないさ。」
「頑丈だとも。」と公爵が合槌を打つた。
「さよなら！」
「ぢや失敬！　騎士グリュンワルドウス！」
「ぢや失敬！　カバルダの種馬！」

十一

リホーニンは獨りになつた。薄暗い廊下には石油の盡きたブリキランプの油煙の匂ひや、潰んだ安煙草の匂がしてゐた。日光は廊下の屋根にあけた小さな硝子窓の二つから僅かにぼんやり射してゐるだけだつた。
リホーニンは、長い間眠れなかつた人なら誰でも知つてゐるやうな、あのぐつたりした、それでゐて興奮した氣分に包まれてゐた。そしてまるで平凡な人間生活の埒外へ飛び出したかのやうであり、彼に取つてはこの人間生活が自己とかけ離れた、どうでも好いものとなつたやうな氣がした。それと同時に彼の想念や感情は何だか落着いた明瞭さ

と冷靜な鋭敏さを具へて來た。そしてこの水晶のやうな無我の境には、淋しい、氣の滅入るやうな魅力があつた。

彼は自分の部屋近くの壁に靠れて立つてゐた。そして自分の周圍や下の方には數十人の人間が、口をあけ、正確な間を置いて深い呼吸をし、睡眠の爲めてか〳〵に光つた顏には疲れた靑白さを浮べて、最後の深い朝の睡眠を貪つてゐる有樣が、感じられもし、見えもし、聞えもするかのやうだつた。そして眠つてゐる人間は怖ろしい——死人よりもずつと怖ろしいといふ、子供の時分からよく知つてゐる考へが頭の中に閃めいた。

それから彼はリューブカのことを思ひ浮べた。そして何處か地下室の奥に隱れてゐる祕密な『自我』が「部屋に立寄つて娘の居心地はどうか見てやらなければならない、朝のお茶について、二三の指圖をしなければならない。」と早口で囁いた。けれども彼は、そんなことなどは考へもしなかつたかのやうな風で、街路へ出て行つたのである。

彼は、自分に取つては初めての、細心な、物憂い好奇心をもつて、眼に觸れるすべてのものを眺めながら歩いて行つた。そしてすべてのものが、まるで手で觸つて見るんぢやないかと思はれる位、はつきりと描き出されるのだつた……そこへ田舍女が通りかゝる。肩には天秤棒を擔いでゐる。その兩端には牛乳の入つた大きな桶がぶら下がつてゐる。女の顏は若い方ではない。顳顬には小皺が網のやうに寄つて、鼻孔から口の兩端へかけて二本の深い溝が刻まれてゐる。しかし頰には赤味が差して、手で觸つたら硬さうに見える。茶色の眼は生々とした小ロシヤ人らしい微笑で輝いてゐる。重い天秤棒の動きと波に搖られるやうな歩き振りで女の臀は右や左へ拍子をとりながら搖れてゐる。その波のやうに搖れる處に、粗野な官能的な美しさがある。

「したゝかものだな。大分世の中を渡つて來てるな。」とリホーニンは考へた。と、思ひがけなく、この全然見も知らぬ女、美しくもなく若くもなく、恐らく汚らしい野卑なこの女、けれども彼の想像した如く、アントーノフカ種の林檎（甘美にして大なる林檎）——地べたに落ちた果實で、少々蝕んでゐて新鮮ではなからうが、それでもまだ艶々しい色と香りのいい酒のやうな匂ひの殘つてゐる林檎に似たこの女に、堪らなく欲望を感じた。

からつぽの黑い葬儀馬車が彼を追ひ越して疾走した。二頭の馬が轅に取り附けてあつて、外に二頭がその後の柱にくゝりつけてある。朝からもう醉つ拂つて赤い野獸のやうな顏をした炬火持や棺擔ぎは、頭に赤ちやけたシルク・ハットを被つて、自分の役服や格子縞の馬覆ひや葬式燈の上に

ごた〳〵と腰かけ、錆びた嗄れ聲で、斷々の唄を呶鳴つてゐた。「屹度棺を受け取りに急ぐのだらう。それとも濟んだところかな。」リホーニンは考へた。「陽氣な奴等だ！」彼は並木路で足を止めて、綠色に塗つた低い木製のベンチに腰を下した。幾百年も經つた巨大な栗の木は二列になつて遠くまで續き、何處か遙か向うの方で、綠色をした一本の眞直な幹になつて融け合つてゐる。樹の上にはもはや刺だらけの大きないが栗がなつてゐた。リホーニンはふと、この春の初め、同じ並木路の、しかもこのベンチに腰をかけてゐたことを思ひ出した。その時は、穩かな、和かな、紫色に烟つた、恰も疲れて微笑んでゐる少女を想はせるやうな、靜かに眠つたやうな黃昏だつた。そして下ほど廣く、上へ行くほど細い葉をした栗の大木は房々した花ですつかり蔽はれてゐた。その明るい薔薇色の細い花房は空に向つて眞直ぐ咲いてゐて、丁度、誰かゞ間違つて、クリスマス・ツリーの薔薇色の蠟燭を、シャンデリアに立てるやうな工合に、栗の木に立てたやうだつた。すると突如としてリホーニンの頭にこんな考がぴんと浮んだ。『人間は誰でもかういふ內面的感情の境地を、遲かれ早かれ一度は通らざるを得ないのだ——今では栗の實がなつてゐるが、あの時分は薔薇色の蠟燭のやうな花盛りだつた。これからも幾度となく春が廻つて來て、花が咲くだらう。けれども過ぎ去つたものは何人も何物も昔に返すことは出來ない』と。遠くまで續いてゐるこんもり繁つた並木のはてを物悲しい氣持で眺めてゐると、ふと自分の眼が、センチメンタルな涙でちく〳〵するのに氣が付いた。

彼は立ち上つて先きへ歩きながら、銳敏な、疲れも知らぬ、と同時に、落着いた注意をもつて、出逢ふものすべてを眺めたが、神の創造したこの世界を見るのは今が始めてだといふ風だつた。敷石路で石工の一組が彼の傍を通り過ぎた。彼等はみな暗箱の艶消し硝子に映るやうに、擴大されてはつきりと綺麗に、彼の心に映つた。赤い髯が片方にかたまつて、靑色の險しい眼付をした老職工、左の眼が充血して、額から頰骨へ、鼻から顳顬へかけて靑黑い痣がひろがつてゐる體の大きな若者、朴訥な田舍臭い顏付をして、雛鳥のやうにぽかんと濕めつた口を開けてゐる小僧、仲間に後れて後から、可笑しな山羊のやうな步調で走つて行く老人、石灰で汚れた彼等の衣服、前掛、石鑿——こんなものがみんな生氣のない行列を作つて——色のついた、樣々な、しかし生命のない、活動寫眞のフィルムのやうに彼の眼前に閃いた。

彼はノウォ・キシニェフスキイ市場を橫切らなければなら

なかつた。と、何だか肉でも焼いてゐるらしい、脂つこい、旨さうな匂ひが不意に彼の鼻の孔を脹らました。リホーニンは昨日の晝から何も口にしなかつたことを思ひ出して、忽ち空腹を感じ出した。で、彼は右側へ折れて市場の奥へはいつて行つた。

空腹の日には——幾度もそんな目に遭つたが——彼はこの市場へやつて來て、やつと手に入れた慘めな銅貨で、パンと煮込みの腸詰を買つたことがある。そんなことは多の間によくあつた。しこたま着込んだ店女が、炭火を入れた壺の上に腰かけて暖を取つてゐたが、その前には鐵鍋が掛つてゐて、その中で長さ六寸ほどづつに切つて、蒜でたつぷり味を付けた、太い、自家製の腸詰が、びち〳〵と音を立てゝゐた。腸詰の一片が大抵十カペイカ、パンが二カペイカだつた。

今日の市場は大變な人出だつた。リホーニンは顔馴染みの氣に入つた露店の方へ群衆の間を縫つて行きながら、耳敏くも遠い處でやつてゐる音樂の響を聞いた。或る一つの露店を黒山のやうに取卷いてゐる群衆を押し分けて行くと、惠まれた南ロシヤだけに見ることの出來る素朴で可憐な光景が眼にはいつた。十人か十五人の露店の女主人達が、平生だつたら口の悪い饒舌家の揃ひで、饒舌ることにかけては止め度もない、盡きることを知らない惡口屋ばかりだが、今日はお世辭たつぷりな親切な友達になつて、どうやら昨日の夕方から騒ぎ始め、一晩中遊び明かして、今はその陽氣などんちやん騒ぎを市場まで持越してゐるらしい。雇はれた樂隊は——第一、第二のヴァイオリン二挺にタンバリン一個の單調な、それでも活氣のある、放膽な、陽氣な曲を盛んにやつてゐた。女達は、互ひにウオーッカを注ぎ合ひコップを觸れ合つては接吻する者もあり、或はウオーッカをコップや、卓子にこぼしたりする者もあり、中には音樂に合はせて手を叩きながら拍子をとり、唸つたり喚いたりして、その場に崩れる者もゐた。圓陣の眞中では、敷石の上で、肥つちよの女がくる〳〵廻つて、一つ所で小刻みに足踏みしてゐた。それは四十五歳位の、まだ〳〵綺麗な女で、赤い厚い唇をして、醉つたために潤んで、まるで油でも塗つたやうな眼は、小ロシヤ風の黒くて整つた張りのある弓形の眉毛の下で、きら〳〵と快活に輝いてゐた。この女の舞踏の魅力、技巧と言へばまづ頭を下に垂れて、からかふやうに上眼を使つて邊りを見たり、または突如頭を後に反らして睫毛を垂れ、兩手をさつと擴げたり、或は踊りにつれて赤い更紗の衣服の下で、大きな胸がゆら〳〵動く處などだつた。そして彼女は踊りながら山羊皮の靴の踵や

先きを動かしながら唄つた。

——戸外ぢや胡弓が鳴つてゐる、
低音がそつと呼んでゐる。
母さんはあたしを放さない、
いとし男は待つてゐる。

これはリホーニンの顔馴染みのグリーバといふ女で、彼が懐工合の悪い時は、この女の客になるばかりでなく金の融通までして貰つたこともある。彼女はふつとリホーニンを認めると飛んで來て、抱きついてきゆつと締めつけ、濕めつた熱い肥えた唇をぢかに彼の唇に押し付けて接吻した。それから兩手を振つて掌と掌とを打ち合はせ、指を組み合はせて、ボドリスク地方の女だけに出來る甘つたるい調子で言ひ出した。

「若旦那、あたしの大事なお方、この醉つ拂ひ女を勘忍して頂戴ね。どうですの、あたし醉つ拂つたのよ！」と彼の手に接吻しようと飛びついた。「あんたが他の旦那方みたいに威張らないのを、あたし知つてゝよ。さア、あんたのお手々に接吻するわよ！　ね、ね、いゝでせう！……」

「馬鹿々々しい、グリーバ、」と傍かに活氣づいてリホーニンは女を遮つた。「それぢや、いつそのこと接吻し合つたがいゝよ。お前の唇は馬鹿に甘いからね！」

「まア大事の大事のあなた！　あたしの美しいお天道さま、天國のお林檎さん！」とグリーバは他愛もなく蕩けた。「あんたのお唇をお貸し！　あんたの可愛いお唇をお貸し！」

彼女は彼を自分の大きな胸に抱き締めて、又もや濡れた熱つぽい、ホッテントットのやうな唇でべろ〳〵舐めた。それから彼の袖を摑んで圓陣の眞中へ引張り込み、種を蒔くやうな輕快な足どりで彼の周圍を廻り、色つぽく體を曲げながら、作り聲で唄つた。

おい、人はどこへ行かうと
わたしやパラスカの許へ行く。
わたしにや金がない、
彼女にや下着がない。

その後で樂師達に助勢されて、大浮かれの小ロシヤの一人ダンスに移つた。

おい、お前は、前垂れを
矢鱈に破いた、ずた〳〵に、
泣くのはお止し、ブルイスコ、
これ、濡れたお目々をお拭き！
　トラリャリャ、トラリャリャ……

寢てゐるヒーマのその傍に
コザックがそつと寢てござる、

ヒーマはそれを知らぬ顔、
嘘よ、ヒーマはちやんと知つてはゐるが
知らぬ顔して寝たふりさ、
タイ、タイ、トラリャイ……

リホーニンはすつかり愉快になつて、自分にも思ひがけなかつたことだが、突然、恰も走つてゐる遊星の周圍を廻る衛星のやうに、彼女の周圍を四つん這ひになつて、手足の長い、猫脊の、いやもう不恰好な様子で跳ね廻り出した。彼の飛び入りは全體に歡迎せられ、好意をもつた喊聲が揚つた。そして、テーブルの傍に据ゑられ、ウォーッカや腸詰を御馳走された。彼は又彼で、見知越しの立ん坊をビールを買ひに走らせ、コップを手にして、馬鹿げた演説を三つやつた。一つはウクライナの獨立に就いて、もう一つは、小ロシヤの女の美と家庭的であることに關聯して小ロシヤの腸詰の價値に就いて、最後には、どういふ譯か、南露の商工業に就いてだつた。彼はグリーバと並んで腰掛けてゐたが、絶えず彼女の腰を抱へようとしてゐた。女はこれを拒まなかつた。だが女の驚くほどの大きな胴體は流石に長い彼の腕でも抱へきれなかつた。しかしながら彼女はテーブルの下で彼の手を、自分の大きな、火のやうに熱い、柔らかい手で、痛くなる程ぎゆつと握りしめた。

この時、今まで優しく接吻し合つてゐた店女達の間で、まだ後始末のついてなかつた古い口論と罵詈が再燃したのである。二人の女が、鶏か何ぞのやうに顔を突きつけ合ひ、兩手を兩脇に構へて、いざといへば摑み合ひの氣勢を示し、お互ひに下司つぽい悪態を吐いてゐた。

「間抜け、賣女、おたんちん！」と一人の女が呶鳴つた。

「ふん、お前なんざア、あたしの此處にだつて接吻する資格はないんだよ、」と相手にくるりと背を向けて、背中のずつと下の方をぴしやりと叩いた。「こゝんとこさ！」

すると相手の女は猛り立つて金切り聲をあげた。

「嘘吐け、賣女！　手前こそ、それに相當してるよ。」

リホーニンはこの機を利用して、何か思ひ出したといふ態で、急いで腰掛から立上つて言つた。

「一寸失敬するよ、グリーバ、三分もしたら又くるから。」

そして見物人の環を拔けた。

「若旦那！　若旦那！」と女が後から呶鳴つた。「早く戻つていらつしやいな！　一言お話しすることがあるから。」

彼は隅の方に寄つて、今、この瞬間に自分がすべき筈のことを思ひ出さうと、やゝ暫く腐心した。そしてこの時も心の奥底では果して何をすべきか、それが分つてゐたのだが、それを認めるのをわざと逡巡つてゐたのである。もう

すつかり晴れた明るい晝で、九時か十時頃だつたらう。庭番はゴムの管で水を道路に撒いてゐた。花賣娘は廣場や並木路の入口に陣取つて、薔薇やあらせいとうや水仙を並べてゐた。明るくて陽氣で富裕な南國の都會は活氣づいた。様々な毛色と種類と年齢の犬がうよ〳〵通つて行つた。馭者臺の上には二人の犬殺し――本人達が勿體ぶつて呼んでる所によれば『野良犬狩』――が腰かけてゐた。今日の朝の獲物を携へて歸るところだつた。

『彼女はもう眼を覺ましたらう。』とう〳〵リホーニンは隱れてゐた考へをはつきりさせた。『だが若し覺めてゐなかつたら、俺はそつと長椅子に横になつて少し寢るとしよう。』

廊下には依然として、消えかゝつた石油ランプがぼんやり點つて、油煙がくすぶつてゐた。泥水のやうな薄明りは狹くて長い箱のやうな廊下に射すか射さないほどだつた。部屋の扉は鍵を掛けないまゝだつた。リホーニンは音をさせずに扉を開けてはいつた。

弱々しい、青い、淡い明りが窓と窓掛の隙間から流れ込んでゐた。リホーニンは部屋の眞中に立ち止つて、貪るやうにリューブカの穩やかな寢息に耳を澄ました。彼の唇は斷えず舐め廻はさなければならないほど火照つて乾いて來た。膝がわな〳〵震へた。

『この女は何か要らないのか、訊ねて見よう。』と突然こんなことが思ひ浮かんだ。

醉つ拂ひみたいに、開けた口から苦しい息をしながら、震へる足で、ふら〳〵と寢臺の方へよろめき寄つた。

リューバは仰向けに寢てゐたが、素肌の片手はうんと横へ延ばし、片方は胸にのせてゐた。リホーニンは女の顔につゝく位に身をかゞめた。彼女の寢息は規則正しく、深かつた。女の若々しい健康な體の呼吸は、寢てはゐても、清らかで、香はしいものだつた。彼は注意深く素肌の腕に自分の手先きを觸れて、鎖骨の少し下の胸をそつと撫でた。『俺は何をしてるんだ？』と、心の中で理智が恐怖をもつて叫んだが、何ものか他のものがリホーニンに代つてから答へた。『俺は何もしてやしないさ。寢心地は好いか、お茶は飲みたくないか、たゞそれを訊きたいだけだ。』

ところがリューブカは不意に眼を覺まして瞼を開いたが、また閉ぢて、間もなく再び眼を開いた。そして長く〳〵伸びをして、意味のない微笑を浮べて、火照つた健康さうな腕を、リホーニンの首に巻きつけた。

「あんた！」と女は、眼が覺めたばかりで幾らか嗄れた、甘えた聲で言つた。「あたし待つて〳〵、しまひには腹が立

ちましたわ。そして寢ちまつてから、「晩中あんたの夢を見續けよ。こゝへいらつしやい。ね、あんた！」彼女は彼の胸を自分の胸へ引き寄せたのである。

リホーニンは大して抵抗はなかつた。そして全身を、まるで惡寒にでも襲はれたかのやうに、わな〳〵と震はせ、齒をがた〳〵させながら、疾驅するやうな囁き聲を無意味に繰り返した。

「いけない、リューバ、いけない……ほんとに、いけない、リューバ、そんな……あゝ、こんなことは止さうね、リューバ……苦しめないでくれ……僕は自分のことが保證出來ない……放してくれ、リューバ、賴むから！……」

「お馬鹿さん！」と彼女は愉快な笑聲で叫んだ。「此處へいらつしやいよ、あんた！」そして彼の最後の微弱な抵抗を押し切つて、彼女は彼の唇を自分の唇にぴつたり押しつけて、强い、熱い接吻をしたが、この接吻は眞情の溢れたもので、リューバに取つては生涯の中で最初のものであつたらうし、恐らく最後のものだつたかも知れない。

『おゝ畜生！　俺は何といふ事をしてるんだ？』とリホーニンの心の中で或る正しい賢い聲の何者かゞ叫んだ。

「どう？　氣が少しは輕くなつて？」とリューブカはリホーニンの唇に最後の接吻をしながら優しく訊ねた。「あゝ、あんた、あたしの學生さん！……」

十二

リホーニンは、精神的苦痛と、自己に對しリューブカに對し、そして恐らくは全世界に對する憎惡と嫌惡の情を抱いて、服も脫がずに、歪んだ使ひ古した木製の長椅子にばつたり横はり、燒け付くやうな羞しさから齒咬みさへした。彼はどうしても寢つかれず、自分でリューブカの身請を名付けて言つた如くこの馬鹿げた行爲、深刻な悲劇と嶮らはしい喜劇とが忌々しくも絡み合つてゐるこの行爲の周圍を彼の想念は斷えずくる〳〵廻はつてゐた。「どうだつて好い」と彼は頑强に自分自身を說得した。「一旦約束した以上、最後までやり拔くんだ。勿論さつきのやうな眞似は以後斷じて二度とは繰り返さない！　あゝ誰が、神經の一時弛緩した隙に乘じて罪を犯さない者があらう？　或る哲學者は深遠な注意すべき眞理を表明して、人間の魂の價値は、その墮落のどん底と、その向上の絕頂に於て認識することが出來ると斷言した。だが何と言つても、今日といふ馬鹿げた一日や、あの曖昧な理論家——探訪記者のブラトーノフや、自分自身の馬鹿げ切つた俠氣の感激、こんなものは糞でも喰へだ！　實際こんなものはみんな現實の出來事でなく、

チェルヌイシェーフスキイの小說『何を爲すべきか』の中の出來事そつくりだ。これで俺は明日、どんな眼であの女を見ることつたらう？」

彼の頭は火照り、眼は燒けるやうで、唇は乾いてしまつた。苛々した氣持で煙草を續けざまに吸ひ幾度も長椅子から身を起してはテーブルの上のフラスコを取つて、がぶがぶとラッパ飮みに水を飮んだ。それから、ふとした意志の努力によつて前後の事を腦裡から拂ひ除けることが出來た。すると忽ち夢も幻も見ない重苦しい眠りが、黑い綿か何ぞのやうに彼を押し包んだ。

彼が眼を覺したのは疾うの昔に正午も過ぎて二時か三時頃だつた。最初は暫くの間我に返ることが出來ず、口をもぐ〳〵させて、どんよりした重たい眼で部屋の中を見廻した。昨夜以來のことはすつかり忘れてゐたのである。ところが、寢臺の上にぢつとして靜かに腰をかけ、俯向きながら兩手を膝にのせてゐるリューブカの姿が眼に留ると、彼は情なさと困惑の餘り唸り出した。今は何もかも思ひ出した。この瞬間、彼は自分が昨夜爲した愚かな行爲の結果を、今朝眼のあたりまざ〳〵と見ることの如何に苦しいものであるかを自ら經驗した。

「お眼覺めになつたの？」とリューブカは優しく訊ねた。

彼女は寢臺から腰をあげて長椅子に近づき、リホーニンの足許に腰かけ、彼の脚を夜具の上から用心深く撫でた。

「あたし先程から眼が覺めて、ずつと坐つてましたの。あんたを起してはいけないと思つて。ほんとにぐつすりお寢みでしたわ。」

そして彼女は體を延ばして彼の頰に接吻した。リホーニンは一寸顏を顰めて輕く彼女を押し退けた。

「お待ち、リューボチカ！　待つてくれ。そんなことはいけないよ。いゝかい。決してしちやいけないよ。今朝のことは、あれは、一時の間違ひだ。ねえ、僕の弱點なんだよ。或は一時の汚らはしい出來心かも知れない。だがねえ、信じておくれ、僕は君を戀人にしようなんて思つちやゐなかつたんだ。親友か友達か妹としてゐたかつたんだ……いやなアに何でもない。すつかり旨く行つて、最後まで潰ぎつけるさ。唯、氣を落す必要なんかないよ。ぢや暫く窓の處へ行つて外でも眺めておいで。僕は直ぐに身支度をするからね。」

リューブカは一寸唇を脹らませ、其處を離れて窓際へ近づき、リホーニンに背を向けてゐた。親友とか友達とか妹とか、そんな言葉はみんな、彼女の牝鷄みたいな頭腦や、百姓女式の單純な心ではその意味を呑み込むことが出來なか

つた。そんなことよりずつと強く彼女の想像を唆つたのは、大學生——兎も角、餘人ならぬ教育のある人間で、醫者か辯護士か裁判官になれる人間——が自分を妾にしてくれたといふことだつた……ところが今彼は、自分の氣紛れを仕遂げて自分に必要なものを得てしまふと、もう尻込みしてゐる有樣だ。凡て男といふものはみんなそんなものだ！

リホーニンは急いで立ち上り、兩手に水を五六度掬つて顏を洗ひ、古いナフキンで拭いた。それから窓掛けをあげて兩方の窓の二つの鎧戸を明け放した。金色の太陽の光、瑠璃色の大空、都會の騷音、生ひ茂つた菩提樹と栗の木の青葉、馬車鐵道のベルの音、むん〳〵する埃つぽい街路の干乾びた匂ひ——こんなものが一ぺんに小さな屋根裏の部屋へ流れ込んで來た。リホーニンは、リューブカの傍へやつて來て親しげに肩を叩いた。

「何でもないよ、リューバ……出來たことは仕方がない、今後の戒めだよ。君はまだお茶も飮まないんだね、リューバ？」

「えゝ。あたし、ずつとあんたを待つてましたの。それに、誰に言つて好いか分らないんですもの、あたし。あんたも好い氣なのね。あたし聞いてましたわ。お友達と出て行つてから、又歸つていらしつて、扉ん處に立つておいでしたわね。それだのにあたしに挨拶もなさらないで。それで一體好いんですか？」

『最初の夫婦喧嘩か。』とリホーニンは考へたが、別に惡意もなく、たゞ冗談半分にさう考へたのだつた。

顏を洗つたこと、金色を浴びた南國の紺碧の空の美しさ、半ば從順で半ば不服さうな、あどけないリューバの顏、それから自分がとに角男であり、蒔いた種を刈取る責任は彼女にあるのではなく自分にあるのだといふ意識——かうしたものが一緒になつて彼の神經をかき亂し、彼の決心の臍を固めさせた。で、彼はドアを開けて、むつとした臭ひのする廊下の暗がりに向つて呶鳴つた。

「アレクサンドラ！　サモワールだ！　麵麭二ア つ、バター に腸詰！　それから、ウオーッカの小壜を！」

廊下でスリッパのばた〳〵する音がして、遠くの方からもう年寄のぶつ〳〵いふ聲がした。

「何を喚いてるんだね？　何を喚いてるんだね？　ごうごう、ごう〳〵！　まるで使ひ古しの種馬みたいに。子供ぢやあるまいしな。いゝ年をして餓鬼みたいに何ぢやな。何の用かね？」

小柄な老婆が部屋へはいつて來た。この老婆は、眼が何かの割れ目のやうに細くて眼瞼が赤く、呆れる位み羊皮紙に似た顏付で、長くて鋭い鼻が氣難しさうに、薄氣味惡く、下の方へ突き出てゐた。これはアレクサンドラといつて、餘程以前からこの學生下宿にゐる召使ひで、學生全體の親友であり債權者であつた。六十五かそこらの齡で、理窟つぽい、口八ヶ間しい老婆だつた。

リホーニンはもう一度欲しい品を言つて、一ルーブル紙幣を渡した。しかし老婆は出て行かうとはしないで、一つ處でうろ〳〵して鼻を鳴らし、口をもぐ〳〵させて、明りを背にして腰掛けてゐる娘を敵意のある眼で眺めてゐた。

「おい、どうしたいアレクサンドラ、體が癪痺でもしたのか？」とリホーニンは笑ひながら訊ねた。「それとも見惚れてるんかい？　何、これはね、僕のカズン、つまり從妹でね、リュボーウィ……」と彼はほんの一瞬間まごついたが咄嗟の氣轉で言つた。「リュボーウィ・ワシーリエヴナといふんだが、僕に取つちやたゞリューボチカさ。僕は此娘がこんな時分から知つてるんだよ」とテーブルから、八寸ぐらゐの高さを示した。「耳を引つぱつたり、惡戲の罰に尻つぺたを叩いてやつたりしたもんだよ。それから又……いろんな甲蟲なんか捕つてやつたりな……だが、とにかく……とにかく、早く持つて來てくれ。さア行つた、行つた。エジプトのミイラ、前世紀の遺物！　大急ぎで一と走りたのむ！」

それでも老婆はぐづ〳〵してゐた。そこいらで足踏みをしながら、やうやく扉口の方へ體を向け、鋭い毒々しい眼差をリューバから離さなかつた。そして、同時に落ち窪んだ口で呟いた。

「從妹！　そんな從妹ならよう知つとりますよ！　カシタノーワヤ街を大勢歩いとりますわい。食ひしんぼうの犬奴！」

「何言つてやがる、ぼろ舟！　ぐづ〳〵言はずに、早く行け！」とリホーニンは呶鳴つた。「さもないとお前の友達の大學生トリャーソフみたいに、お前を二十四時間も便所に閉め込むぞ！」

アレクサンドラは出て行つたが、年寄のよた〳〵した足音と何だか分らない呟きが、廊下でしばらくの間聞えてゐた。この老婆は嚴格な口やかましいお人好で、もう四十年も世話して來てゐる若い學生のやることは大抵大目に見てゐた。醉拂はうがカルタに耽らうが喧嘩をやらうが、大聲で歌はうが借金しようが、それは大目に見てゐたが、何しろこの婆さんは童貞だつたので、その純潔な心は、或る一事だけ、つまり放蕩ばかりは我慢してやることが出來なかつたのである。

十三

「これですつかり大出來だ……あゝ、よかつた、」とリホーニンは片跛のテーブルの傍で何やかやと世話をやいたり、要もないのに茶道具を置き換へたりしながら言つた。「僕は、この老いぼれ鰐の僕は大分久しく、クリスト教的に家族的にお茶を飲んだことがなかつた。掛け給へ、リューバ、お掛け、ほら、その長椅子に。お世話を願むよ。君は毎朝ウオーッカなんか飲らないだらうが、僕は御免蒙つて飲るよ……これで直ぐ元氣がつくんだ。濟まないが僕には少し濃くして、レモンを一片抛りこんでくれ給へ。まつたく何だね、可愛らしい女の手で注がれた熱い茶より旨いものはないね！」

いくらか不自然なと思はれる位、少々喧ましい彼のお喋りをリューブカは聽いてゐた。そして最初の信じ兼ねたやうな警戒するやうな微笑も柔らいで來て晴々しくなつた。だがお茶を出すことは特別上手ではなかつた。彼女の生れた田舍ではお茶などは先づ貴重品扱ひで、裕福な家庭で愛用される贅澤品と考へられてゐた。そして唯大切な客が見えた時か大祭日だけ出したもので——一家の最年長者が恭々しく茶を立てゝゐたものである。その後リューブカは郡の小さな郷會で「何でも勤める」奉公人になつて、最初は僧侶の家、後には保險代理業者——この男が彼女を賣春の道へ突き落した最初の男だが——の處に居た時分は、痩せ削けた、癇癪持の、陰險な妻や、肥つた、年寄りの、皺だらけで、脂ぎつた顏の、意地の惡い、嫉妬深い、吝嗇女の主婦などが、薄い飲み滓の生溫るい茶と、砂糖の屑を彼女に殘すのが普通だつた。だから彼女に取つては、茶をいれるといふ何でもない事が難かしいのだつた。まるで我々が子供の時分右手と左手とを區別したり、繩を蝶結びにすることを覺えるのが難かしかつたやうなものだ。おせつかいなリホーニンは、彼女の邪魔をして當惑させるばかりだつた。

「ねえ、茶を煎れる技術は——偉大な技術だよ。モスクワで習はなけやならん。先づだね、乾いた急須を少々溫める、次ぎに茶を入れて直ぐ沸え湯を注ぐ。最初の茶はすぐ茶こぼしに空けなけやならんよ。——さうすると茶はずつと綺麗になつて香ばしくなつて來る。序だが支那人つて奴は誰でも知つてる通り——邪教徒で、隨分汚ないことをして茶の葉を拵へるからな。で、それから更めて急須に四分目程湯を差して、盆の上に置いて布巾をかけて置く。そのまゝ三分半放つとくんだ。それから熱湯を充滿注いでまた布巾をかけて一寸の間置いておけば、香ばしい味のいゝ、元氣のつく立派な飲み物が出來上るんだよ。」

美人ではないが、愛嬌のある、まるで杜鵑の卵のやうに雀斑がいつぱい出來てゐるリューブカの顏はやゝ不興氣に、蒼白くなつた。

「あの、どうぞあたしを怒らないで頂戴……ワシーリ・ワシーリッチ……さう呼ぶんですわね？……怒らないでね、ワシーリ・ワシーリッチ。あたし直ぐ覺えますから、ほんとに。あたし器用なんですもの。それに、どうしてあたしをやつぱり——君、君つて呼ぶんですの？　もう今ぢや他人ぢやないんでせう？」

彼女は優しく彼を眺めた。まつたくの處、彼女は今朝、自分の小さな損はれた生涯で初めて——たとへそれは悦んでといふよりも寧ろ感謝といとしさの情からだつたとしても——金錢づくや、無理强ひや、また勘定や騷動の脅威からではなく、自分から進んで男に身を委したのだつた。だから今は、向日葵が日光へ向ふやうに、いつも愛に向つて行く、凋れることのない彼女の女心は、純で、しをらしくなつてゐた。

しかしリホーニンはふと刺すやうな恥かしさと極り惡さを覺え、昨日までは見も知らぬ女で、今では自分の偶然の戀人になつてゐるこの女に敵意めいたものを感じた。「和氣藹々たる家庭生活が始まつたのだ」と彼は仕方なしに思つた。それでも椅子から腰をあげて、リューブカに近より、その手を執つて引寄せ、頭を撫でゝ言つた。

「ねえ、大事な妹、」と彼は感動したやうに、取つてつけたやうに言つた。「今日みたいなあんな眞似は二度と繰り返しちやならないんだ。みんな僕一個の罪なんだ。お前が望むんなら、僕は跪づいてお前の許しでも乞はう。好いかい、ねえ、あれは僕の意志以外に、本能的に、不意打ちに、思ひ掛けなく起つたことなんだ。あんな風にならうとは僕も思ひがけなかつたよ！　あのね、僕は長い間……女といふものに近づかなかつた……が、今朝、野獸が、煩惱の犬が眼を覺したんだ……それを……抑へることが出來なかつた。だが、あゝ、僕の罪はそれほど大きいのか知らん？　聖人、隱者、遁世者、苦行僧、杜行者、修道士、受難者など——心の堅固な點では僕などは比較にもならないこんな人々も——惡魔のやうな肉の誘惑と戰つて負けたのだ。その代り、どんな誓ひでもするが、これからは決して繰り返さないよ。……さうだらう？」

リューブカは無理に自分の手を振り放した。そして唇を少し尖らせ、伏眼になつた眼をしばたゝいた。

「えゝえ、」と彼女は言つたが、仲直りしようと强情を張つてゐる子供のやうに言葉を曳つぱつた。「あたしはあんたの